飯山市埋蔵文化財調査報告　第42集

小泉弥生時代遺跡

KOIZUMI YAYOI AGE SITE

1995・1

長野県飯山市教育委員会
飯山市土地開発公社

飯山市埋蔵文化財調査報告　第42集

小泉弥生時代遺跡

KOIZUMI YAYOI AGE SITE

1995・1

長野県飯山市教育委員会
飯山市土地開発公社

序

飯山市教育委員会
教育長　岩　﨑　　彌

飯山盆地のほぼ中央を南北に走る長峰丘陵上には、数多くの埋蔵文化財包蔵地が知られており、古くから多くの学者によって調査・研究されてきたところであります。

昭和63年より開始された長峰工業団地・南原工業団地造成に伴う小泉遺跡の発掘調査は、その対象面積が115,000平米という膨大な面積でありました。飯山市にとってもかつてない大調査となりました。幸いにも、高橋桂調査団長・田村調査主任を中心として、多くの地元の皆様のご尽力をいただいて調査を完了させることができました。

ここに正式な報告書を刊行するにあたり、発掘調査から報告書作成作業にご協力・ご指導頂きました皆様に心から敬意を表するとともに、感謝申し上げる次第であります。

最後となりましたが、本報告書が埋蔵文化財保護に対する理解を一層深める上で役立つことを祈念して序といたします。

平成7年1月

例 言・凡 例

1　本書は、長野県飯山市が計画した長峰工業団地・南原工業団地造成に伴う小泉遺跡の発掘調査報告書である。調査は、飯山市土地開発公社より依頼を受けた飯山市教育委員会が調査会を設立して実施した。

2　本調査は昭和63年・平成２年・同３年度にわたって調査されており、すでに下記の概要が発刊されている。

１）『小泉遺跡群調査概要―長峰工業団地造成に伴う埋蔵文化財調査―』　飯山市埋蔵文化財調査報告第20集　1990

２）『小泉遺跡群調査概要Ⅱ』　飯山市埋蔵文化財調査報告第31集　1992

概要報告書と今回の報告書で相違する点もあるが、本報告書をもって正式報告とする。

3　各年度における発掘調査期間・面積は以下のとおりである。

昭和63年度　７月11日～11月10日（実質調査期間　約80日）・面積 12,000 m²

平成２年度　５月29日～10月26日（実質調査期間　約85日）・面積 14,900 m²

平成３年度　７月11日～９月30日（実質調査期間　約50日）・面積　4,600 m²

4　調査にかかる組織は第Ⅰ章に掲載した。

5　本書の作成は、飯山市遺跡調査団(高橋桂団長)が行った。作図・作表・トレースについては、桃井伊都子・常盤井智行・小川ちか子・小林新治・川口学実・望月静雄が、写真については現場写真は望月、遺物写真は田村況城が主にその任にあたった。文責は望月にある。

6　調査から報告書作成に至るまでに下記の諸氏・機関よりご指導・ご協力をいただいた。記して御礼申し上げる。（順不同・敬称略）

佐原眞　工楽善通　河内八郎(故人)　桐原健　関雅之　金子拓男　光谷拓実　肥塚隆保　早津賢二　小島正巳　笹沢浩　宮下健司　坂井秀弥　宮崎博　中島庄一　大原正義　太田文雄　黒岩隆

長野県埋蔵文化財センター　長野市立博物館　新潟県考古学会

㈱パスコ　㈲写真測図研究所

7　本書中に使用した略号は以下のとおりである。

ＳＩ＝竪穴住居址　ＳＢ＝掘立柱建物址　ＳＥ＝井戸　ＳＫ＝土坑　ＳＫＢ＝土壙墓（木棺墓）　ＴＰ＝溝状土坑

なお、調査時において竪穴住居址と掘立柱建物址は小泉遺跡全体の連番とし、土壙墓・溝状土坑は地区毎に連番、井戸・土坑についてはグリット毎に付番した。欠番が生じた場合には基本的には欠番として処理、変更したものもある。その場合には当該遺構説明のおりに記してある。

また、そのほかの呼称等においても、調査時と相違する箇所もあるが、そのつど説明している。

目　　次

序
例言・凡例
目次

序　章　小泉遺跡発掘調査の概要 …… 1
　1　調査リスト …… 3
　2　調査成果の概要 …… 3

第Ⅰ章　経　　過 …… 7
　1　調査に至る経過 …… 9
　2　調査経過 …… 10
　　a　昭和63年の発掘調査　　b　平成２年の発掘調査　　c　平成３年の発掘調査

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 17
　1　遺跡の位置 …… 19
　2　周辺の遺跡 …… 21
　3　周辺の弥生時代遺跡 …… 24

第Ⅲ章　調　　査 …… 25
　1　Ⅰ地区の概要 …… 27
　　a　概　要　　b　遺　構
　2　Ⅱ地区の概要 …… 37
　　a　概　要　　b　遺　構
　3　Ⅲ地区の概要 …… 57
　　a　概　要　　b　遺　構
　4　Ⅳ地区の概要 …… 73
　　a　概　要　　b　遺　構
　5　Ⅴ地区の概要 …… 97
　　a　概　要　　b　遺　構
　6　Ⅵ地区の概要 …… 116
　　a　概　要　　b　遺　構
　7　Ⅶ地区の概要 …… 120
　　a　概　要　　b　遺　構
　8　出土遺物 …… 143
　　a　Ⅰ地区出土遺物　　b　Ⅱ地区出土遺物　　c　Ⅲ地区出土遺物　　d　Ⅳ地区出土遺物
　　e　Ⅴ地区出土遺物　　f　Ⅵ地区出土遺物　　g　Ⅶ地区防土遺物

第Ⅳ章　ま と め …… 189

写真図版

序章　概　　要

1　調査リスト　弥生時代中期から後期を主体とした集落と木棺墓群

所　在　地：飯山市大字常盤字長峰越ほか
調 査 期 間：昭和63年７月13日～同年11月25日
　　平成２年５月29日～同年10月26日
　　平成３年７月11日～同年９月30日
調 査 面 積：31,500㎡
調 査 主 体：飯山市教育委員会
時代と時期：旧石器時代・弥生時代中期～後期
遺跡の立地：飯山盆地の中央に位置する長峰丘陵上
遺跡の特徴：弥生時代中期から後期を主体とした集落と木棺墓群

遺跡小単位	竪穴住居址		掘立柱建物址	土壙墓 木棺墓	その他の特筆すべき遺構	特　記　遺　物	調査面積 (㎡)	調査年
	弥中	弥後						
Ⅰ	3	0	16	6	旧石器土坑		3,000	S63
Ⅱ	3	11	22	13	井戸址１基	流水紋のある木器	7,700	63･2
Ⅲ	3	11	11	0	井戸址１基		2,800	63･2
Ⅳ	7	1	32	94		管玉・勾玉	8,800	63･2
Ⅴ	8	4	41	0			3,600	H2
Ⅵ	0	0	3	0	土器集中箇所	ミニチュア土器	1,000	2
Ⅶ	2	0	4	40	Ｔピット131	ミニチュア土器	4,600	3
計	26	27	129	153			31,500	

表１　主な検出遺構と遺物一覧表

2　調査成果の概要

a　遺跡の概要

小泉遺跡は、飯山盆地の中央に位置する長峰丘陵に所在する。丘陵の西側に広がる通称外様平の低湿地に接したなだらかな斜面に立地している。一帯には、東長峰遺跡・柳町遺跡など弥生時代や古墳時代前期の著名な遺跡が存在している。広義にはそれらを含めて長峰遺跡群と呼称しており、一帯が弥生～古墳時代の居住地であったことがすでに明らかにされている。

発掘地は長峰丘陵が分岐する地点にあたり、ほぼ平坦な地貌を呈している。仔細に観察するといくつかの湧水によって沢状の谷が形成され、台地が掌状に低地に向かって伸びている。このため調査にあたっては、それぞれの台地ごとに別名称とする事としⅠ～Ⅶ地区とした。ただし、この名称は小泉遺跡群Ⅰ遺跡とするのか、小泉遺跡Ⅰ地区とすべきであるのか「遺跡」の捉え方によって大きく左右される問題であるが、ムラの中の最小単位のブロックであるとの考えから「地区」的なものとして報告する。

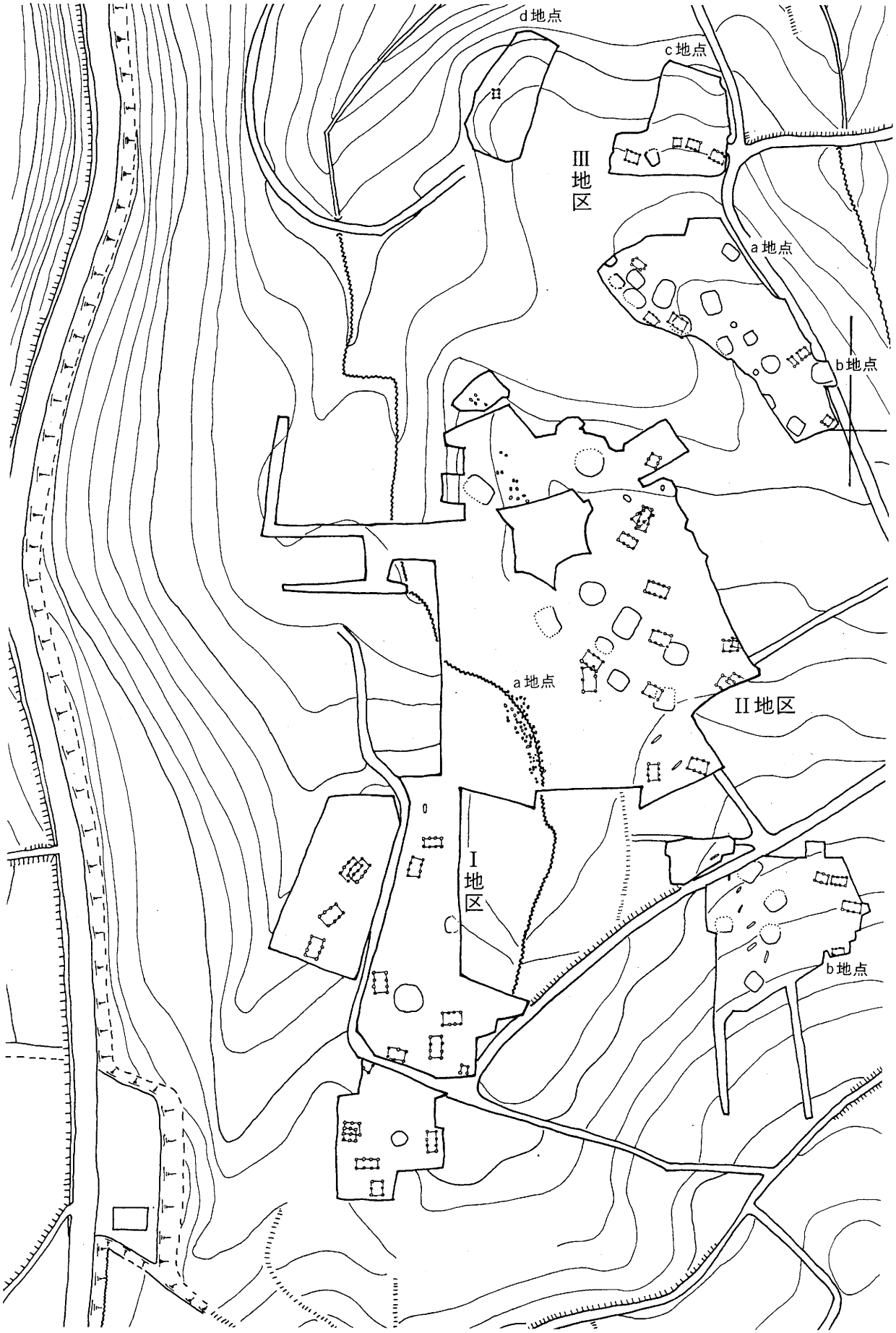


図1　小泉遺跡全体図 (1) (1:1,000)

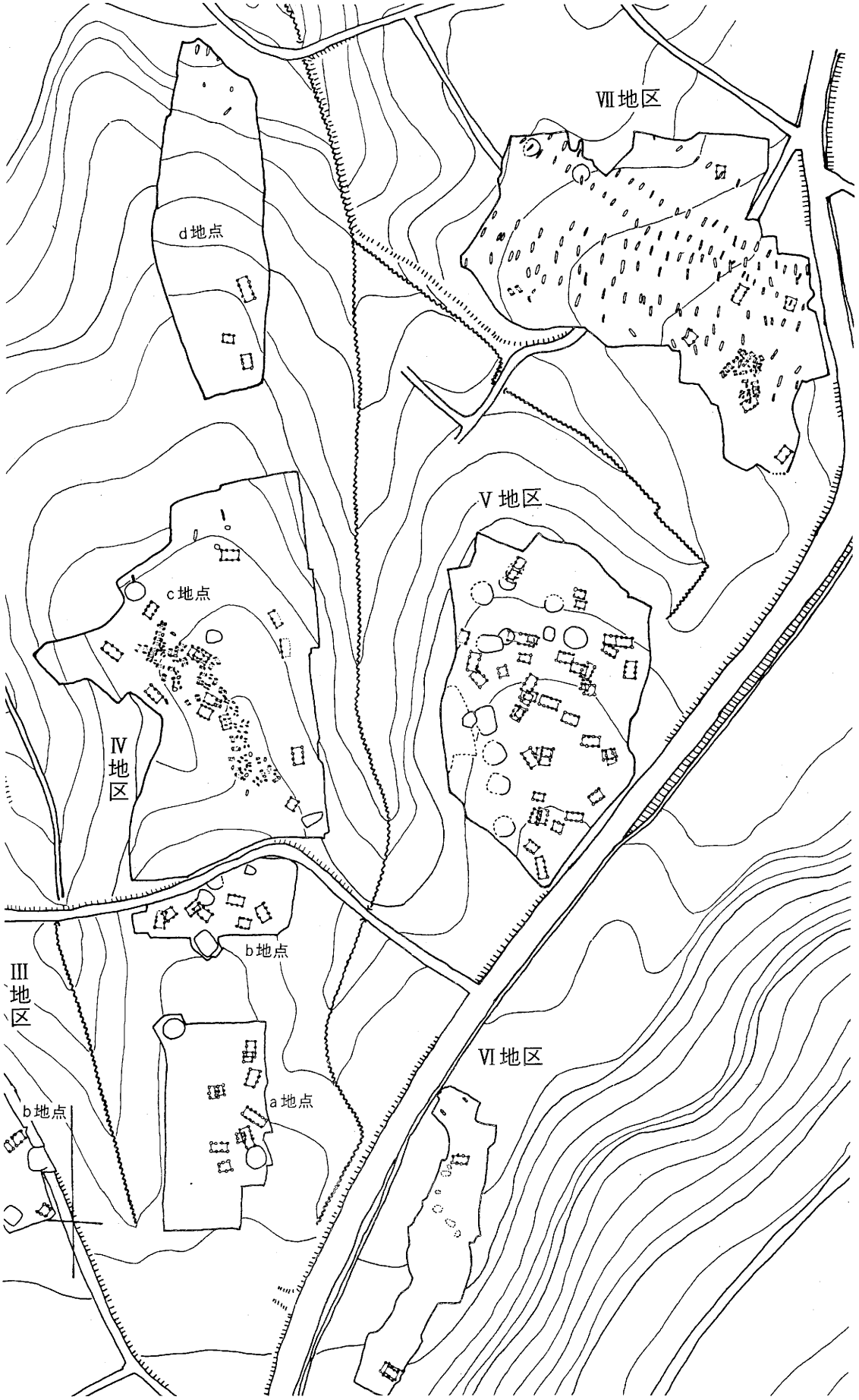


図２　小泉遺跡全体図 (2)（1:1,000）

b　遺構・遺物の概要

小泉遺跡は弥生時代中期から後期末にかけての集落跡で、その中心遺構は竪穴住居址と掘立柱建物址であるが、台地（地区）によっては木棺墓などの墓域が広く占拠している場所もある。

竪穴住居址は、中期・後期・後期末以降に平面形態が分類される。おおまかには、円形(中期)→小判形(後期初頭)→隅丸長方形(後期)→長方形→方形(後期末～)と変化するものと考えられる。

中期のプランは、円形で一条ないし二条の周溝がめぐるのが一般的である。中央には径60cm、深さ50cmほどのいわゆる中央土坑が掘り込まれ、一般的には炉として考えられているようであるが、覆土には炭化物が含まれるものの、焼土等はほとんど認められない。石器のフレイク・チップが多量に出土するのが一般的である。焼土は円形ピットの外側に１～３か所認められる。床面を掘り込んだ形跡はないが、床面から数センチが焼けている。炉と判断している。

後期の竪穴住居址は、小判形のプランと隅丸長方形のプランに細分される。ただし、柱配列などの構造に相違は認められない。主柱穴は４本を基本とし、より大型になると奥に１本、および長軸にそれぞれ１本加わる。炉は奥の２本のほぼ中間の軸上に設置される。また、出入口とみられる短辺側には間隔の短い２本の柱穴が認められる。さらに出入り口と推定される右の壁下には貯蔵穴と思われる土坑が構築されるのも一般的である。この構造は後期末以降はみられなくなり、プランも正方形に近くなる。

弥生時代中期から後期末にかけての竪穴住居構造は、掘り込みの浅い円形プランからより深い小判形のプランになりさらに隅丸長方形のプランに、そして方形のプランにと変化して行くことが小泉遺跡での傾向として伺える。

掘立柱建物址は、竪穴住居址の年代と同様に弥生時代中期から後期末までに構築されたもので、ほとんどが弥生時代の建物址と考えて差し支えない。中にはピット内に中期栗林式土器が埋納されたピットも数棟検出されているので、中期段階からかなりの数の建物があったと推定される。

土壙墓・木棺墓については、表１に掲げたようにいくつかの地区でまとまって出土している。このうち最も多く発見されたのはⅣ地区である。一部に掘立柱建物址と切り合い関係がある周辺エリア内で検出されたのは中期土器のみであることから、所属時期は中期栗林式期であると考えられる。

土壙墓・木棺墓の多くは、木口痕のみの検出であった。表土から耕作土20cmで地山面となり、遺存状態が不良のためもあったがもともと掘り込み面が極端に浅かった可能性もある。なお、５基からは管玉が出土し、そのうちの１基からは勾玉も１点出土している。他の地区においても管玉が出土しているがその遺構数は少ない。また、土器の埋納などは一切検出されていない。おそらく耕作などによってすでに失われてしまったと考えられる。

遺物は、数量的には多くはないが各竪穴住居を中心として床面出土の復元可能な土器がセットで出土している。中期後半からの土器様式の変化が大まかに促えられると考えられる。

第I章　経　　過

1　調査に至る経過　工業団地造成に先立つ文字通りの緊急調査

昭和63年、飯山市は工場誘致対策の一環として長峰工場団地の造成を企画し、市土地開発公社が施行する計画を立てた。それによれば、造成面積約80,000㎡で平成２年５月を完成予定としていた。

この計画地は、小泉遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地に登録されていたが、工場団地造成構想そのものは昭和40年代から計画されており、その時点において遺跡の存在は必ずしも明確であったとは言えなかった。

この計画を市教育委員会が把握したのは昭和62年であったが、具体的に協議がもたれたのは昭和63年５月であった。単年度で用地買収と並行して進め、発掘調査が済み次第工事に移行するという極めてハードな工程であった。つまり数万平米における発掘調査の期間は考慮されていなかったのである。昭和63年度にはやはり４月に入って国道117号線小沼・湯滝バイパス建設にともない日焼・南原・屋株・大倉崎館の４遺跡の発掘調査が急遽行われることになり、この事業だけでも手一杯の状況であった。しかし、当該地域の造成を行わないと新規計画に移れないという市行政の理由もあり、依頼を受けた市教育委員会は膨大な面積であったが、緊急の発掘調査を受託することになった。このため市教委担当職員１名のほか３名を調査員として雇用し、二現場分担して実施することになった。

小泉遺跡の調査は、昭和63年７月13日から行われた。用地買収と並行して行われたため、作付の行われている土地については用地買収が済んでも着手できない箇所も存在し、遺跡を虫食い状態で発掘することになった。また、そのうちの一部は土地未買収・代替用地の問題もあって翌年度以降に調査を実施する計画として、同年11月25日に終了した(飯山市教委　1989)。

平成元年、未調査地区の調査を予定したが前記交渉が難航したため発掘調査を実施することができなかった。

その後、平成２年２月になり新たに北側に拡張する計画が浮上した(二次分　南原工業団地)。このため、前回の未調査地区と二次造成地の箇所約六万平米が新たに調査対象となった。このうち遺跡の範囲にかかり、さらに削土によって消滅が予想される部分は、平成２年度で約二万五千平米、三年度が約一万平米であった。

平成２年度は、第一次分（長峰工業団地）の未調査地区と新たに計画された第二次分の発掘調査が行われた。この時点においても作付の関係で第１次対象地区において発掘調査に入れない地区も存在した。遺跡の内容究明にとって重要な地域も存在した。土地開発公社とも協議を行ったが、結局発掘調査を実施する時間を取ることができなかった。

平成３年度は、調査対象地区の最北部分の調査を実施した。

このように調査は幾度か変更・増加することとなったが、飯山市にとってかつてない膨大な面積の発掘調査が実施された。すでに触れてきたように、工事も緊急であったし、その工事を実施するために埋蔵文化財調査をクリアーしなければならないという流れの中での今回の調査は、文化財保護行政について大きな課題を残したといえる。

2　調査の方法と経過　昭和から平成にまたがる大規模調査

a　調査の方法

対象地区全体に５ｍグリットを設定することとし、基準点の設置には平面直角座標を用いた。設定は㈱パスコに委託し、50ｍ間隔のＸ軸・Ｙ軸各３本を設定した。その交点はII地区のＬ－31北東杭で、Ｘ＝99.0、Ｙ＝－10.75である（図３）。長野県の平面直角座標系の第Ⅷ系に属している。（Ｘ軸 130°30′　Ｙ軸36°0′）。番号はＸ軸が算用数字、Ｙ軸をアルファベットとした。

表土除去は効率を考えバックホーで行うこととしたが、作物の関係で部分的に行わざるを得なかった。遺構確認については、竪穴住居址、掘立柱建物址については全地区を通して連番とし、溝状土坑・木棺墓（土壙墓）地区毎の連番、土坑・その他についてはグリット毎に付番した。また、遺物の取り上げについては、遺構内出土遺物についてはドットもしくは微細図を作成した。遺構平面図については、平板により実測したが、Ⅳ区木棺墓群区域ならびにⅤ区全域については、㈲写真測図研究所に委託してコーデックにより測量した。なお写真撮影については、調査員が一眼レフカメラによりモノクロとリバーサルを中心として撮影した。

b　昭和63年度の調査経過

月	日	調査内容
7	1	飯山市土地開発公社と発掘調査委託契約書締結
	4～	基準杭設置（株式会社パスコ）
	6～	表土除去（重機）
	8	遺跡調査会開催
	12	発掘機材搬入
	13	調査開始（開始式開催）　II区Ａ地点より（旧称長峰越東丘陵Ｉ地区）
	16	ＳＩ０１より炭化木製品出土
	28	Ｉ区（旧称長峰越西丘陵）旧石器出土
8	2	Ｉ区　旧石器時代土坑検出（ＰＳＫ１）
	4	飯山郷土史研究会見学
	11	中間報告会
	12～17	休　み
	23	市教育委員現地視察
	29	II区　谷状地写真撮影完了
	30	常盤公民館　学習会（茨城大学河内教授ほか視察）
9	1	II区Ａ地区全体測量完了
	7	Ｉ区拡張（Ｕ～Ｘ－47～52）
	17	ＳＩ10住遺物分布図作成作業開始
	22	II区Ｂ地点精査着手
10	15	Ｉ・II区調査完了
	17	III区Ａ地点調査着手
		市木鋪助役・浦野教育長視察
	26	Ⅳ区杭打ち作業
	29	（初雪）
11	10	発掘作業完了
	15	現地説明会開催
	17～25	信濃毎日新聞記事掲載・測量調査・残務整理

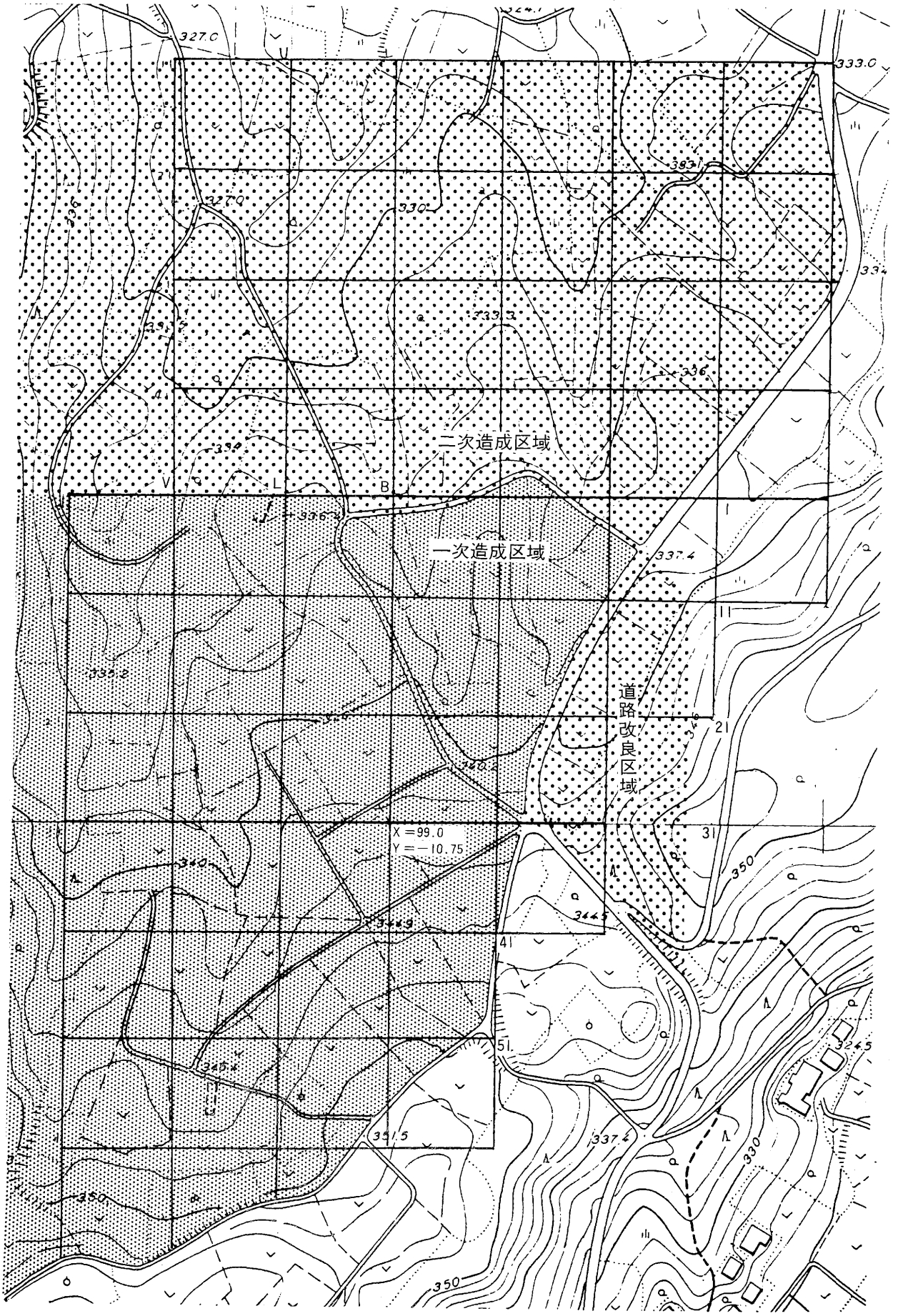


図3　調査地区グリット設定図(1:2,500)

c　平成２年度の調査経過

月	日	調　査　内　容
5	26	Ⅱ区Ａ地点・Ⅲ区　表土除去（重機）
	28	杭設定　発掘機材搬入
	29	調査開始（開始式開催）　Ⅱ区Ａ地点より
6	7	Ⅱ地区Ａ地点遺構検出状況写真撮影
	11	Ⅲ地区Ｂ地点着手
	13	Ⅱ地区　測量等完了　終了
	15	Ⅵ地区（旧称道路区）杭設定（道路センターポイントを利用し独自のグリット）
	19	Ⅵ地区着　手
	22	Ⅲ地区ＳＩ30.32.34遺物分布図作成　Ⅵ区土器多数出土
	26	Ⅵ区重機により表土除去（追加）
	30	Ⅲ地区Ｂ地点調査完了（Ⅲ地区６月末調査完了期限に間に合わせる）
7	～17	Ⅵ区完了
	12	第２次工事予定地の表土除去開始～14日（Ⅲ・Ⅳ区）
	17	Ⅲ区Ｃ地点より調査開始　住居跡検出（ＳＩ36）
	19	ＳＢ55ピットより弥生中期完形壺検出
	23	Ⅳ区Ｂ地点（旧称南原東丘陵）表土除去及び遺構検出作業
	26	Ⅲ区調査完了　Ⅳ区ＳＩ37・39・40掘り下げ
	31	Ⅳ区Ｃ地点着手　木棺墓検出ＳＫＢ92・93（当初ヌ－44ＳＫ１・２）
8	2	Ⅳ区Ｄ地点着手　Ⅳ区Ｃ地点掘立柱建物址ＳＢ67・68検出　Ⅳ区Ｂ地点完了
	7	Ⅲ区Ｃ・Ｄ地点着手　～21日完了
	11～16	休　み
	31	Ⅳ区Ｃ・Ｄ地点の調査可能部分調査完了
9	1	調査予定地が作物の関係で入れず一時発掘作業を中止
	14	Ⅶ区　表土除去　～21日完了
	19	Ⅳ区Ｃ地点拡張可能となり表土除去～21日
	26	遺構検出作業　木棺墓・掘立柱建物跡等確認
	28	木棺墓等の遺構発掘　ＳＫＢ43より管玉10点出土
10	2	県教委文化課指導・報道機関来跡　ＳＫＢ45･54･70･76･79より管玉出土
	3	コーディックによる平面測量（写真測図研究所）ＳＫＢ69より管玉出土
	8	県埋蔵文化財センター・長野市博物館職員視察　Ⅴ区（旧称南原２）表土除去
	9	コーディック測量終了（Ⅴ区完了）　Ⅴ区グリット杭打ち　調査着手ＳＩ43～47確認
	25	測図確認作業　器材等撤収
	26	測図確認作業（午前）完了

d　平成３年度の調査経過

月	日	調　査　内　容
7	8	Ⅶ区　表土除去～16日
	11	調査開始（開始式開催）　調査区南部分より着手　木棺墓等の遺構を確認
	31	木棺墓ＳＫＢ１より管玉約20点検出
8	2	本日までに木棺墓約15基、溝状土坑10基確認・完掘
	9	ＳＫＢ１より新たに石鏃１点検出
	12	西方寺住職による法要開催　13～18日まで休み
	23	本日までに溝状土坑（ＴＰ）68基確認
	26	木棺墓20基完掘　写真撮影完了　溝状土坑（78が79を切る）拡張のため表土除去
	27	溝状土坑合計82基
9	5	木棺墓区域２次分着手　～10日までにＳＫＢ21～34を確認し完掘
	12	Ｑ－18において住居址を確認（ＳＩ９）
	17	Ｏ－16・17において住居址を確認（ＳＩ26）
	25	本日までに木棺墓40基、溝状土坑133基を確認する。
	30	遺構平面図平板作成完了し、器材等の撤収を開始。調査完了。
		補遺測量を10月２・３日に行い、小泉遺跡群の発掘が全作業完了する。

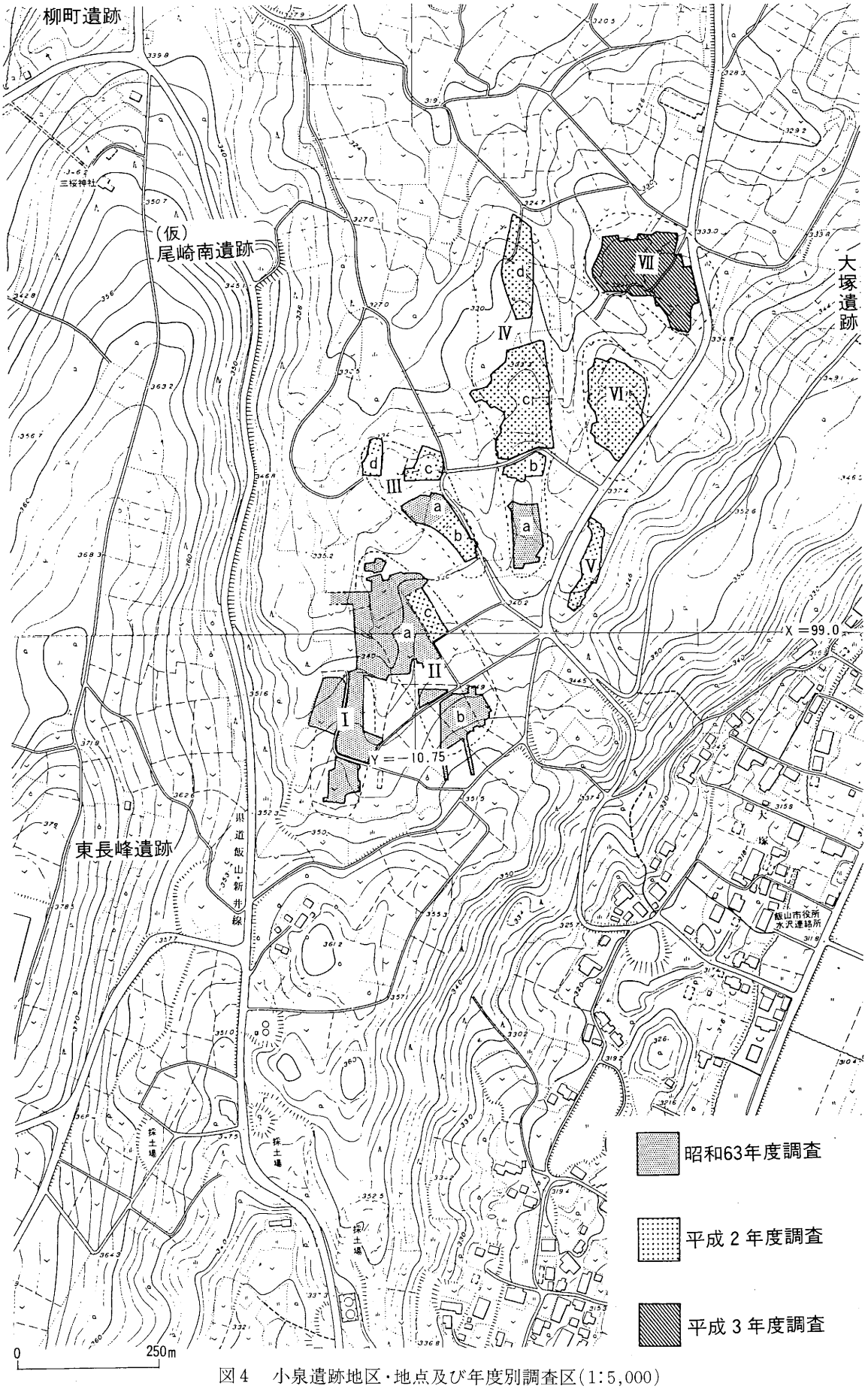


図4　小泉遺跡地区・地点及び年度別調査区(1:5,000)

小泉遺跡群調査会名簿（昭和63年度）

顧　　問	小野沢静夫	（飯山市長）
会　　長	浦野　昌夫	（飯山市教育長）
副会長	佐藤　清	（飯山市教育次長）
委　　員	高橋　桂	（日本考古学協会会員）
〃	宮沢　郁夫	（飯山市議会議員）
〃	栗岩　時雄	（　〃　）
〃	高橋　正治	（　〃　）
〃	高橋　広幸	（下水沢区長）
〃	井村　庄雄	（大　塚　〃　）
〃	丸山　富久	（小　泉　〃　）
〃	飯沢　澄男	（尾　崎　〃　）
〃	岸田　正	（市公民館常盤分館長）
〃	飛沢　五夫	（市商工観光課長）
〃	服部栄八郎	（市土地開発公社局長）
〃	市川　和夫	（　〃　次長）
〃	町井　和夫	（　〃　主査）
事務局	清水　宏	（市教委次長補佐兼社会教育係長）S63.10.1転出
〃	渡辺　博	（市教委社会教育係長）S63.10.1転入
〃	望月　静雄	（市教委社会教育係）
〃	森崎ツギ子	（市教委臨時職員）

調　査　団

団　　長	高橋　桂	（飯山南高校教諭）
調査主任	田村　況城	（市教委埋蔵文化財調査員）
調査員	望月　静雄	（市教委社会教育係）
〃	森山　茂夫	（市内太田小境）

調査参加者（順不同・敬称略）

高橋茂・小林新治・大塚一雄・丸山三二・達家わかの・藤沢昭・常田利夫・村松修司・岡田勤・丸山幸夫・藤沢信義・高橋昭二・高橋宗平・山崎豊治・宮本さか江・服部正子・服部こう・南久保まつ・西堀はつみ・吉越信一郎・大木あい・吉越まさの・島津千代・北山けさえ・丸山澄子・山岸正宣・栗岩義房・山田隆志・岸田義元

高橋雅弘・丸山学（以上大学生）

青木正行・岸田輝幸・足立智幸・富岡徹・藤沢徹・樋口史・藤沢英明・佐藤真也・津久井琢也・菊池泰隆・金井久江・市村正・阿部浩美・江尻裕二・渡辺孝・宮沢智博（以上高校生）

江尻昭二・中村昭三・藤沢澄夫・山本貞夫・東条寅雄（以上教育委員会事務局職員）

平成２・３年度飯山市遺跡調査会

顧　　問	小山　邦武	市長
会　　長	佐藤　春夫	市教育委員長
副 会 長	長谷川元一	市社会教育委員長
委　　員	滝沢藤三郎	市文化財保護審議会会長
	丸山　豊雄	市議会総務文教委員長
	中 村　敏	市公民館長
	高 橋　桂	日本考古学協会会員
	山崎美都技	市教育委員会委員長職務代理(平成３年10月７日退任)
	福沢　裕文	市教育委員会委員長職務代理(平成３年10月８日就任)
	岩 﨑　彌	市教育委員会教育長
事務局長	佐 藤　清	市教育委員会教育次長
事務局次長	渡 辺　博	市教育委員会社会教育係長
事務局員	望月　静雄	市教育委員会社会教育係
	樋山二二子	市教育委員会臨時職員

調 査 団

団　　長	高 橋　桂	飯山北高等学校教諭
担 当 者	望月　静雄	社会教育係
調 査 員	小林　新治	（飯山）
	常田　利夫	（飯山）
	丸山　三二	（飯山）
	常盤井智行	（常盤）
	田村　況城	（外様）
	桃井伊都子	（飯山・平成3年）

参 加 者（順不同・敬称略）

高橋右内・達家わかの・村松修司・芳川昭治・羽田たつ子・高橋コシノ・市村ますみ・常田レエ子・清水三名・猪瀬光治・桜井伊都子・小林則義・松永佳子（以上飯山）・服部こう・服部正子・南久保まつ・西堀はつみ（以上尾崎）・吉越信一郎・吉越まさの（以上大塚）・竹内大五郎・北条辰男・小林経雄・大森信衛・増山春夫・石沢悦次（以上戸狩）・清水隼人（柳新田）・富岡みえ子・万場キヨノ（以上上野）・米持元志・米持なつえ・樋口幸正・江口武雄・江口正二・斉藤小雪・村山亨・高橋ちよえ・村山くま・樋口栄（以上温井）・鷲野吉太郎（関沢）・吉田忠彦（其綿）・中島五昭・土屋久栄（伍位野）・高沢幸雄（野坂田）・三浦千佳（群馬県）

整理作業

小林みさを（柏尾）・北山けさえ（飯山）

図5 小泉遺跡全体図(1:3,000)

第II章　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置　飯山盆地内の外様平北部を望む長峰丘陵上に立地する

小泉遺跡は、長野県飯山市大字常盤字長峰越および大字照里字南原にかけて所在する。甲信国境の甲武信岳に源を発する千曲川が信濃に残す最後の平が飯山盆地である。飯山盆地を過ぎると千曲川は、信越国境の峡谷地帯を下刻曲流しつつ新潟県津南町に至り、ここで信濃川と名を改めていわゆる津南段丘群を形成し、やがて日本海に注ぐ(図６)。

飯山盆地西縁は黒岩山(938.6m)・鍋倉山(1288.8m) 等比較的低い関田山脈によって新潟県新井市等と画されている。ここには越後へ通ずる幾つかの峠道が存在している。一方、東縁は毛無山(1640.98) 等三国山脈の支脈によって、また、断層構造線の横走によって急峻な山地で画されている。

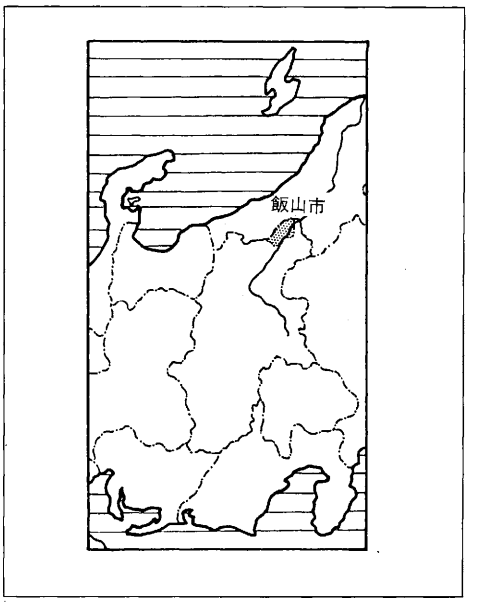


図６　飯山市の位置

そして盆地底には飯山盆地のほぼ中央を南北に延びる長峰丘陵によって東西に別れている。この丘陵は西側山地の褶曲による背斜部にあたるが、これに断層線が横走し常盤戸狩地区に至る丘陵と外様尾崎で収束する丘陵に分岐している。また、丘陵全体は東側に傾いており、西側がなだらかなのに対し東側は急傾斜で常盤の盆地底に接している。この丘陵の西側は外様平と呼ばれ広井川の肥沃な低湿地地帯である。一方東側は、上野・大倉崎丘陵などの一部を除き千曲川の氾濫源が広がっている。

小泉遺跡は、前記した長峰丘陵が尾崎で終る支脈と照里へ続く支脈の分岐点にあたり、外様平の低湿地帯が入り組んでいる地点に立地する（図５)。すなわち東西南をそれぞれ丘陵山地に囲まれ、北に向かって開口している。仔細にみれば尾崎側支脈の裾野を流れる小河川と、そこへ流れ込む照里側からの小河川に開析された丘陵状の台地が幾つか観察される。対象地区内には６か所の微高地があり、南から長峰越西丘陵・長峰越東丘陵・南原西丘陵・南原東丘陵・南原Ⅱ丘陵・南原Ⅲ丘陵と仮称していた(今回の報告では、Ⅰ地区～Ⅶ地区とする事とし、これを正式名称とする)。そして、これらの丘陵のすべてにわたって弥生時代中・後期の遺跡が存在している。

小泉遺跡が最初に注目されたのは、高橋桂が高井22号において『中期弥生式住居址の一例』と題して小泉遺跡の円形住居を報告したことによる。この地点は、今回の調査地点とは多少の距離をもっているが、小泉の低地を望む長峰丘陵の分岐点に立地することは同様であるので、この地点を含めて小泉遺跡と呼称することとした。

小泉遺跡の範囲は、南北に700m、東西300m、約210,000m²の面積を持つものと考えられるが、前記したように調査箇所では７地点に別れてまとまりがみられた。こうした地点分布の集合を小泉遺跡と呼称しているが、これらの有機的な関連については調査結果から明らかにしてゆかなければならないだろう。

なお、Ⅰ地区の西側の高位に東長峰遺跡がある。また、Ⅶ地区の東側には大塚遺跡があり、さらには北方には柳町遺跡等同時期の遺跡が近接している。したがって、これら遺跡を含めたより広い遺跡群として把握する必要に迫られている。

図7　小泉遺跡の位置(1:50,000)

2　周辺の遺跡　旧石器から中世まで―先人の足跡がいたるところに

飯山盆地の中心部に位置する小泉遺跡周辺の遺跡分布は、古くからの調査によって比較的密集していることがすでに判明している(図８)。

旧石器時代の遺跡としては、千曲川の段丘や丘陵に立地する日焼(12)・屋株(14)・上野(15)・瀬付遺跡(18)や長峰丘陵上の大塚遺跡(19)がある。日焼は黒曜石製のナイフ形石器や掻器に代表される石器群で、ナイフ形石器を指標とする時期の末期に位置付けられている。屋株では安山岩製の横倉型ポイントと製作に伴う剥片類が小範囲より発掘されている（飯山市教委　1989)。上野では玉髄製の掻器が多量に発見されこれにポイントが伴うものと考えられており、類例の少ない注目すべき石器群であるといえる。このような遺跡の石器群は、ナイフ形石器終末器から旧石器時代末期の石器群と考えられるが、各方面からの文化的影響を受けながら変遷していったことが特徴といえるのではあるまいか。

縄文時代になっても、千曲川沿いに分布する遺跡が多い。南原(13)・屋株(14)・大倉崎(17)・有尾(50)・須田ヶ峯遺跡(45)などが著名である。南原では前期諸磯ｃ式期の一群が発掘されている（飯山市教委　1994)。また、大倉崎では諸磯ｂ式期後半に比定した良好な土器群を検出している(金井･高橋･中島　1976)。有尾遺跡は、有尾式土器の標式遺跡として著名である。須田ヶ峯遺跡は全体が明らかにされていないが、中期初頭に位置付けられる土器がまとまっている（飯山市　1993)。

弥生時代の遺跡については次項で述べるが、それまでの立地と大きく異なる様相を見せ、長峰丘陵北半を中心とした地域に分布する。続いて古墳時代の遺跡や古墳も多い。上野遺跡では、前期の住居址が１軒発見され、北陸・新潟系の土器が一括して検出されている。また、方形周溝墓も４基発見されている。柳町遺跡(21)では前期住居址、須多ヶ峯遺跡でも同様に住居址が発見されている。一方、古墳は照里古墳群(53)や大塚古墳(53)、大塚古墳群(55)、上野古墳(58)、有尾古墳(57)があるが、いずれも発掘調査はなされていない。なお、有尾古墳は帆立貝式古墳と考えられてきたが、最近では前方後方墳とする意見が強くなっている（松沢　1983)。

奈良・平安時代の遺跡では、各所に遺跡が点在するようになるが、岡峰(2)、上野(15)、北原(40)が特に著名である。平安時代の鍛冶炉を多数検出した北原遺跡は、当時飯山地方が盛んに開拓されていった一端を語る資料として重要である。また、土壙墓(木棺墓)が岡峰、上野、小佐原(44)で発見されており、当時の墓制も明らかになりつつある。

中世では、集落遺跡として釜渕(34)がある。祭祀遺構より永仁四年の木簡が発見されている。また、城館跡としては尾崎館(28)、大倉崎館(59)がある。昭和63年に発掘調査を行った大倉崎館では、火災に遭ったと思われる館内より、青磁・白磁、越前系・珠洲系陶器、瓦器製火炉をはじめとする多くの遺物が発見されている。14世紀後半より15世紀前半の所産と考えられているが、館主については現在のところまだ明らかとなっていない。

以上、旧石器時代から平安時代までを簡単に触れてきた。縄文時代までは千曲川沿いの段丘や丘陵に占拠し、以降長峰丘陵や関田山麓、あるいは湧水帯の認められる上野の丘陵を中心として、低湿地に接した地域に占拠するようになる。このことは、飯山盆地が開拓されていった第一波は弥生時代中期後半に始まったが、極めて限定された区域にとどまった。飯山盆地が真に開拓されていったのは、平安時代に入って漸く広い区域が開拓されていったことを伺わせるのである。

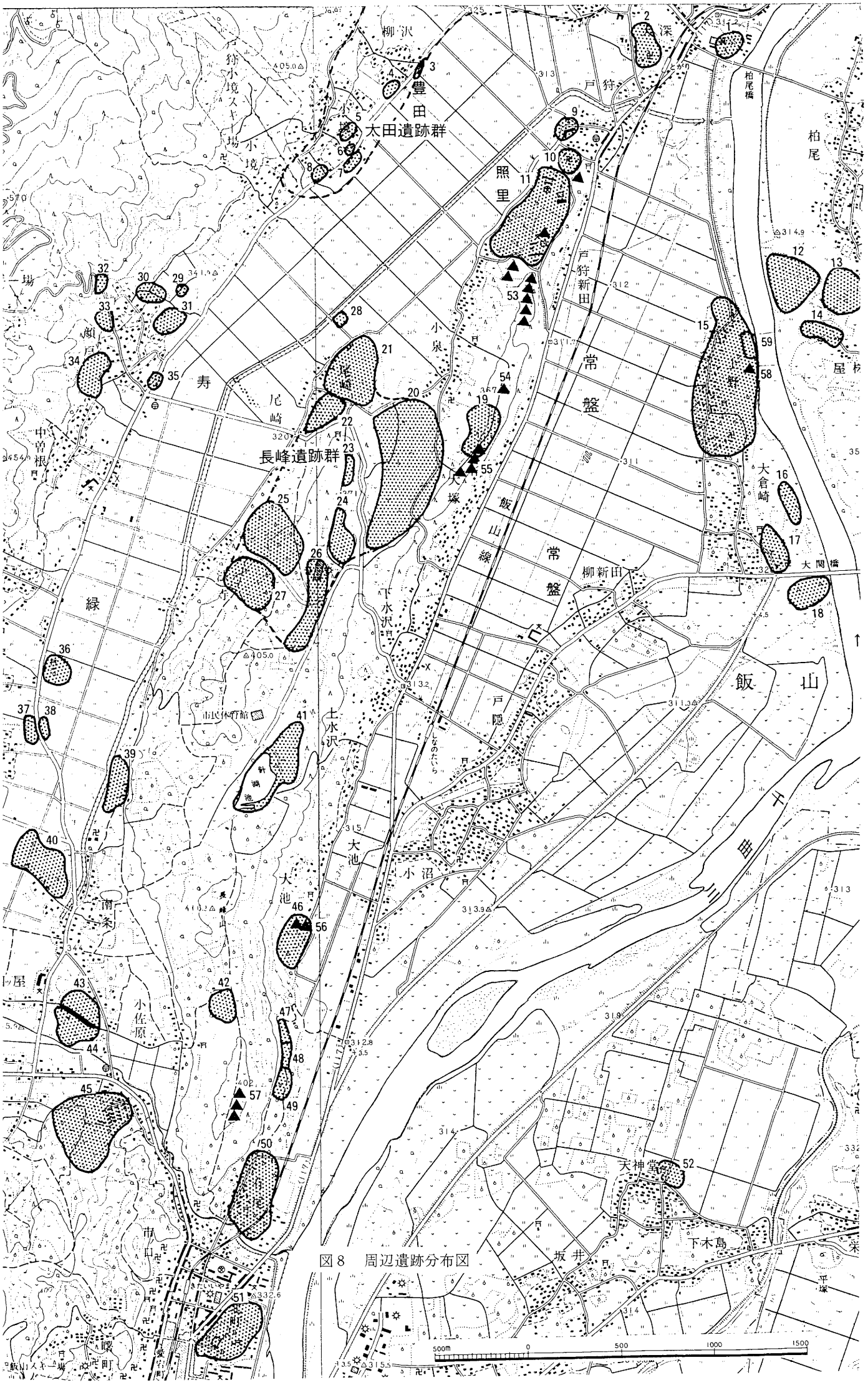

豊田太田遺跡群
長峰遺跡群
照里
戸狩新田
常盤
飯山線
柳新田
戸隠
飯山
柏尾
大倉崎
大関橋
柏尾橋
寿
尼崎
緑
小泉
大塚
下水沢
上水沢
大池
小沼
小佐原
南条
中曽根
天神堂
下木島
坂井
市民体育館
飯山スキー場
500m
0
500
1000
1500

図8　周辺遺跡分布図

番号	遺跡名	旧石器	縄文 草創期	縄文 早期	縄文 前期	縄文 中期	縄文 後期	縄文 晩期	弥生 中期	弥生 後期	古墳 前期	古墳 中期	古墳 後期	奈良・平安	中世	備考（発掘調査年・特記事項）
1	真宗寺裏	○			○									○		
2	岡峰				●				●					●		S50.51.H元調査・平安土坑墓
3	柳沢A					○	○					○	○			
4	柳沢B								○							
5	鶴屋敷									○						
6	桜沢													○		S49調査
7	小境								○	○				○		
8	押出								●		●					S24.29.48調査
9	旧照里小学校								○	○						
10	光明寺前								●							S54調査
11	照丘								●		●					S35.42.52. H2調査
12	日焼	●														H元調査・黒曜石石器群
13	南原				●	○	○									H元.5調査・諸磯c式土器群
14	屋株	●			●											H元調査・横倉型尖頭器
15	上野	●		●	●	●	●	●	●	●	●			●	●	S63. H元.2.4.6調査
16	大倉崎Ⅱ													○		
17	大倉崎	○			●									●	●	S45.48. H元調査
18	瀬付	○			●											S24調査
19	大塚	●							○	○				○		
20	小泉	●							●	●	●					本報告
21	柳町								●	●	●					S26.32. H6調査
22	山崎								●	●						S33調査
23	(仮)尾崎南	○								○						
24	東長峰								●	●						S25.30 調査
25	下林								○	○						
26	西長峰								●	●						S25調査
27	法寺								○	○						
28	尾崎館跡														○	
29	顔戸館跡														○	
30	顔戸第五							○								
31	顔戸北								●							S62調査
32	顔戸大天狗								○							
33	顔戸南木ノ下							○		○						
34	釜渕					●	●		●					●	●	S62調査・永仁四年呪符木簡
35	顔所道下					●										S27調査
36	布施田神社前													○		
37	別府原					●							●	●		S43調査
38	笹川					○										
39	正行寺北				○									○		
40	北原							●	●					●	●	S53.56.58.59 調査・平安期鍛冶炉
41	針尾池	○	○	○	○				○	○				○		
42	(仮)長峰	○														
43	鬼が峰															
44	小佐原		●						●	●						S44調査・表裏縄文・平安木棺墓
45	須多ヶ峰				●	●			●	●	●					S40.41.45. H6調査・方形周溝墓
46	お茶屋				○											
47	長者窪				○				○					○		
48	林子畑											○		○		
49	黄金石上													●		S38調査
50	有尾	●			●	●			●	●	●	●	●	●	●	S24.27.35.62 調査
51	飯山城跡	○													○	飯山藩主居城
52	鬼神堂														○	
53	照里古墳群													○		
54	大塚古墳												○			
55	大塚古墳群													○		
56	大池古墳群													○		
57	有尾古墳群											○		○		
58	上野古墳													○		
59	大倉崎館跡														●	S63調査・珠洲焼・青白磁・火炉

表2　周辺遺跡地名表

3　周辺の弥生時代遺跡

小泉遺跡を中心とした長峰丘陵の北半部には、弥生時代から古墳時代前期にかけての遺跡が密集していることで知られている。調査された遺跡では、小泉遺跡に隣接する東長峰(24)、柳町(21)、照丘(11)の各遺跡がある。

この丘陵上には弥生時代の遺跡として尾崎・東長峰・照里・下林などの遺跡が知られている。古くは北沢量平・栗岩英治両氏らによって弥生式土器・石器が長峰丘陵の尾崎や法寺から採集されていた。藤森栄一氏はこのうちの石器を『千曲川下流長峰、高丘の弥生式石器』と題して報告している（藤森　1937)。戦後、飯山北高等学校郷土研究会により次々に発掘調査が実施され、弥生期の住居址も多く発見された（森山　1950、清水　1950、森山　1951、東・清水・森山・寺崎　1951、飯沢　1954)。こうした一連の報告により長峰丘陵上の弥生遺跡が注目されるようになり、宮坂英弐氏（宮坂　1954）や桐原健氏（桐原 1955）によってその重要性が指摘された。昭和30年代にはいって、桐原健氏や高橋桂によって精力的に調査や踏査が行われた。その成果は、柳町遺跡の発掘調査（桐原　1957・1959）、照丘遺跡（高橋　1962・1968）などの調査報告で示されている。

近年に至り、開発に伴う緊急発掘調査が増加し、再び小泉遺跡の周辺の発掘調査が行われるようになってきた。昭和62年、農村総合モデル事業に伴う釜渕遺跡の発掘調査では住居址が発見され、関田山麓に多くの弥生時代遺跡が点在することを改めて証明した。また、平成元年に行われた上野遺跡の発掘調査では、弥生時代中期・後期の竪穴住居址が発見されたとともに、平成５年の調査では約40基の木棺墓群が発見されている。数次の発掘調査で、上野遺跡は大規模な弥生集落であることが判明してきた。さらに、照丘遺跡は平成２年に発掘調査が実施され、中期の竪穴住居址群が発見された。

太田文雄は、これまでに明らかにされた弥生時代遺跡の分布図を作成している（図９)。今後は各遺跡の遺物を詳細に分析し、弥生文化の流入・成立から古墳時代への変遷を究明する必要があり、当面の研究課題としておきたい。

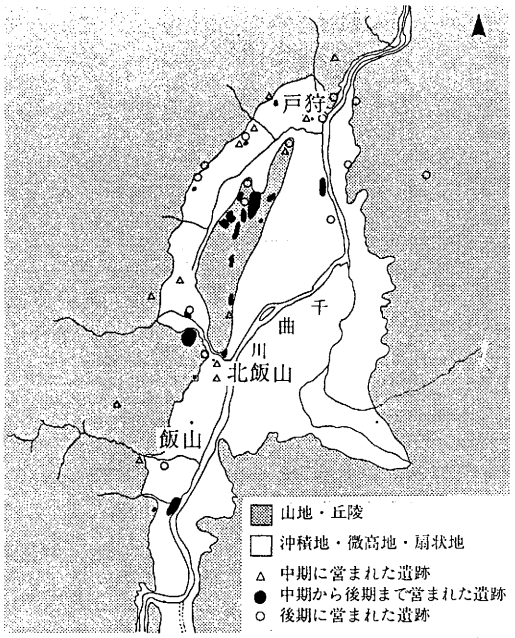


図9　弥生時代遺跡の分布図（太田　1993）

第III章　調　　査

1　Ⅰ地区の概要

a　概　　要

調査対象地区の最も南側の丘陵である。馬の背状台地で、平坦部分は少ない（図10)。西側には湧水があり、河川となって谷状に台地を侵食している。東側も同様に小河川があり、黒色土が厚く堆積している。畑耕作の関係で周囲に拡張して調査することはできなかった。この地区は、昭和63年の調査ですべて完了している。

b　遺　　構

発見された主な遺構は、弥生中期竪穴住居址３軒、掘立柱建物址16棟、木棺墓（土壙墓）６基である。後期の遺構は認められなく、また遺物もまったく検出されなかったことから、この地区は後期及び以降には居住地として使用されなかったと考えられる。したがって、伴出遺物の認められない掘立柱建物址もすべて中期と考えてさしつかえないと思われる。なお、この他旧石器時代の土坑１基が発見されているが、別の機会に報告する。

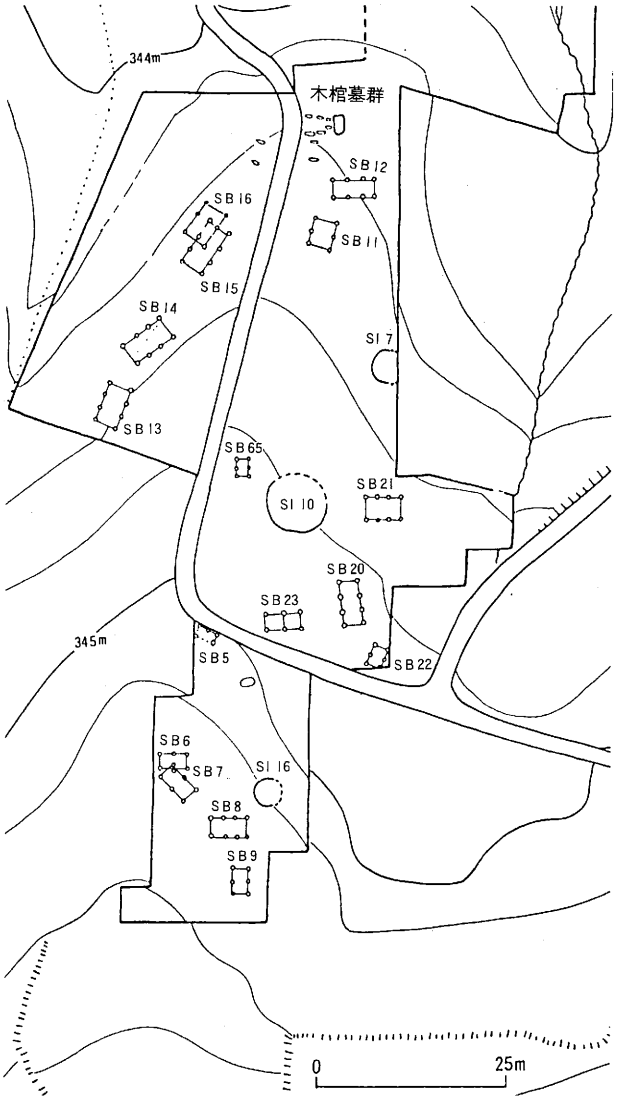


図10　Ⅰ地区主要遺構分布図(1:1,000)

竪穴住居址（図16・17）　３軒発見され、いずれも弥生中期に属する。すべて円形の周溝をもつものであるが、竪穴と呼べるほどの掘り方が確認できず、周溝により住居の規模を確認するにとどまっている。本地区の表土から確認面（テフラ層上面）までの層厚は15～20cmと薄く、当初より掘り込むことはほとんどなかったと考えられる。いずれも中央土坑をもつが、焼土は認められずチップ・炭化物等を含む。このうち10号住居は、径８ｍの大型住居で、建て替えのためか周溝が三重に巡っている。焼土は、中央土坑の周辺に３か所認められる。地床炉と考えられる。

掘立柱建物址（図18・19）　16棟発見された。本地区から旧石器時代土坑１基を除き、弥生時代中期以外の遺構は認められないので、すべて中期の掘立柱建物址の可能性が高い。ピット内より遺物は認められなかった。

木棺墓（土壙墓）（図13）　まとまって６基発見されている。道路が中央を走っているため、全体としてはもう少し多く造られていた可能性がある。なお、そのうちの１基は土壙墓であったと思われ(SKB1)、他は木口痕のみの検出であり、木棺墓であったと思われる。なお、遺物は発見されなかった。

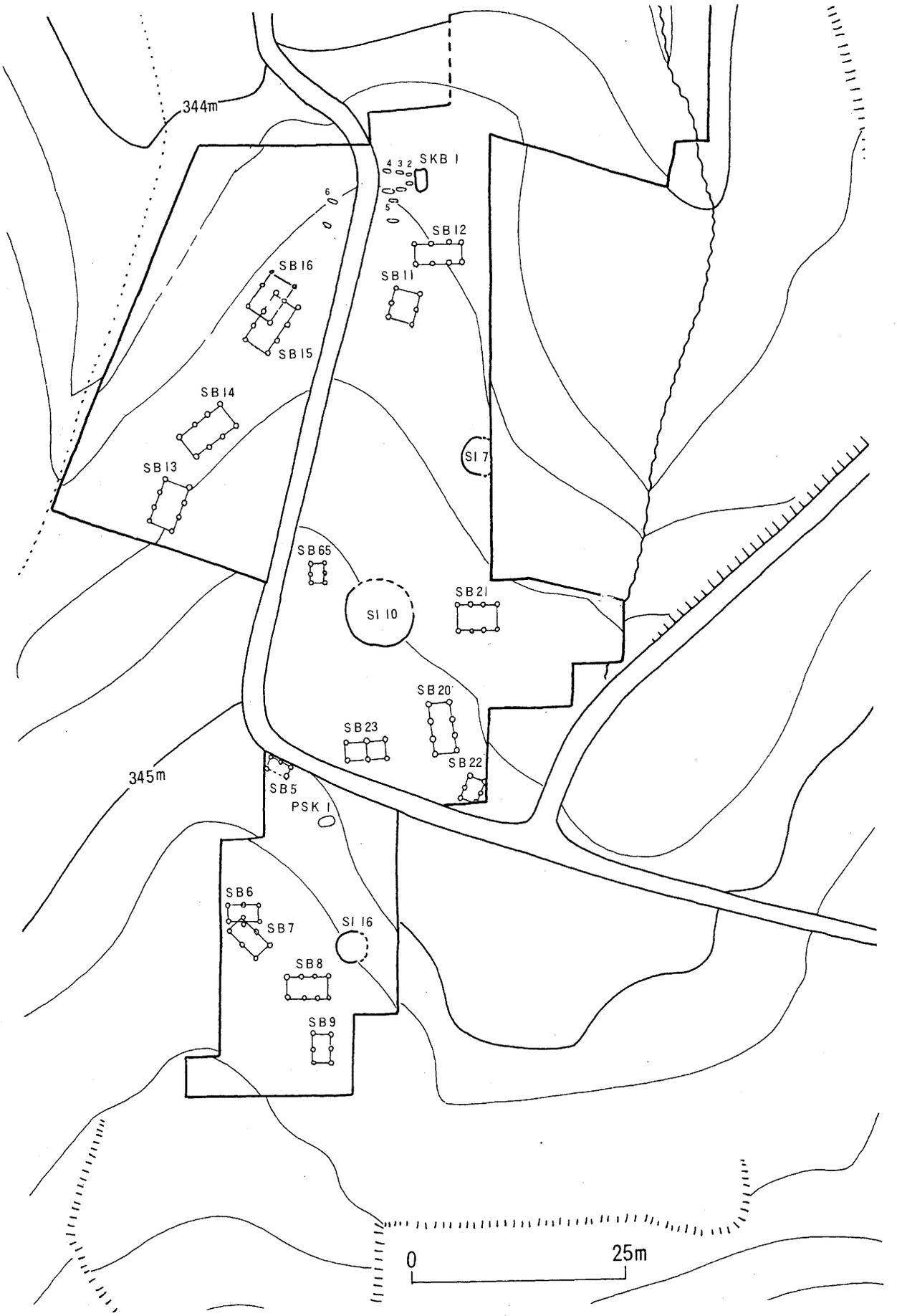


図11　Ⅰ地区全体図(1:600)

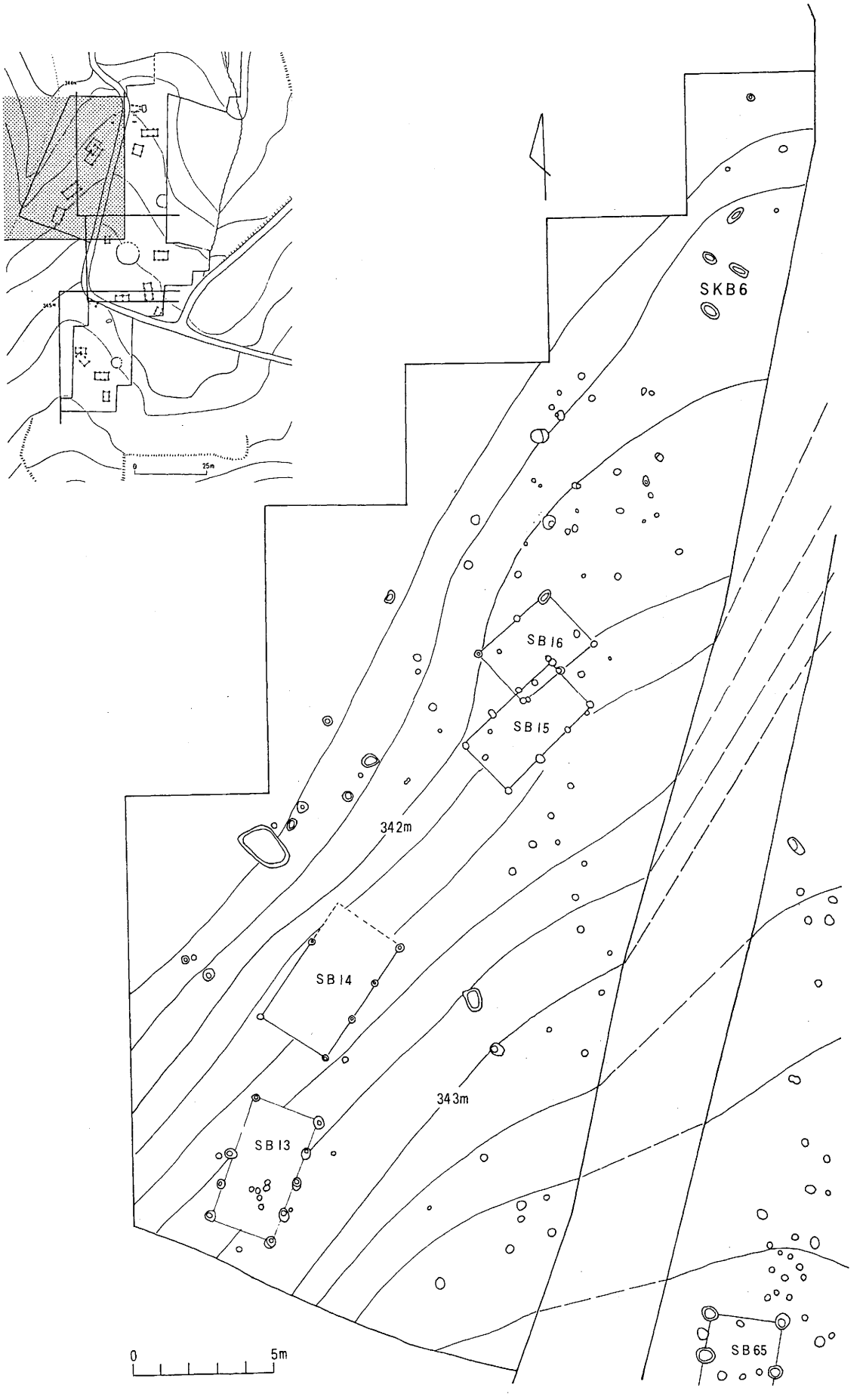


図12　Ⅰ地区遺構分布図(1)(1:200)

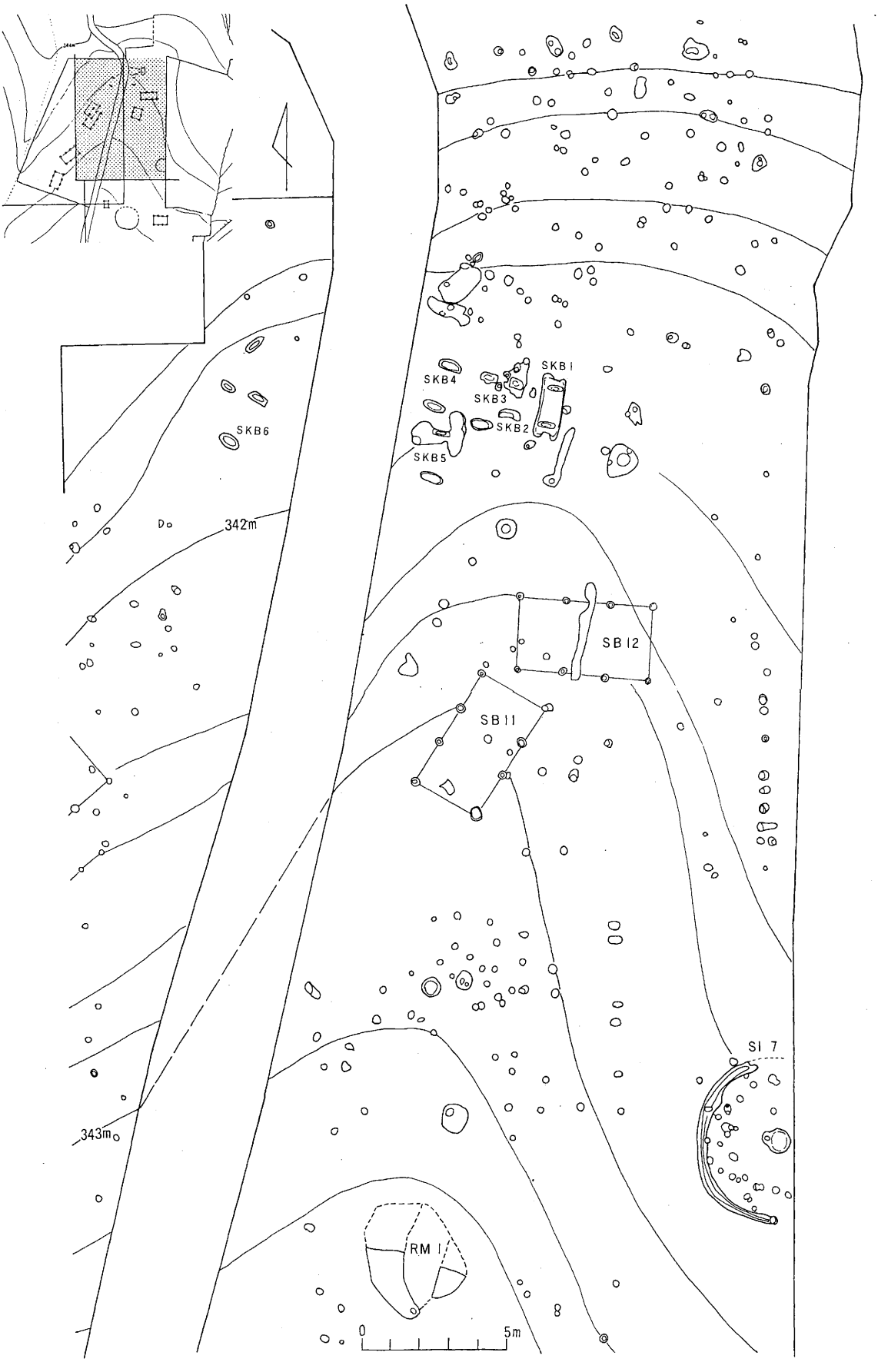


図13　Ⅰ地区遺構分布図(2)(1:200)

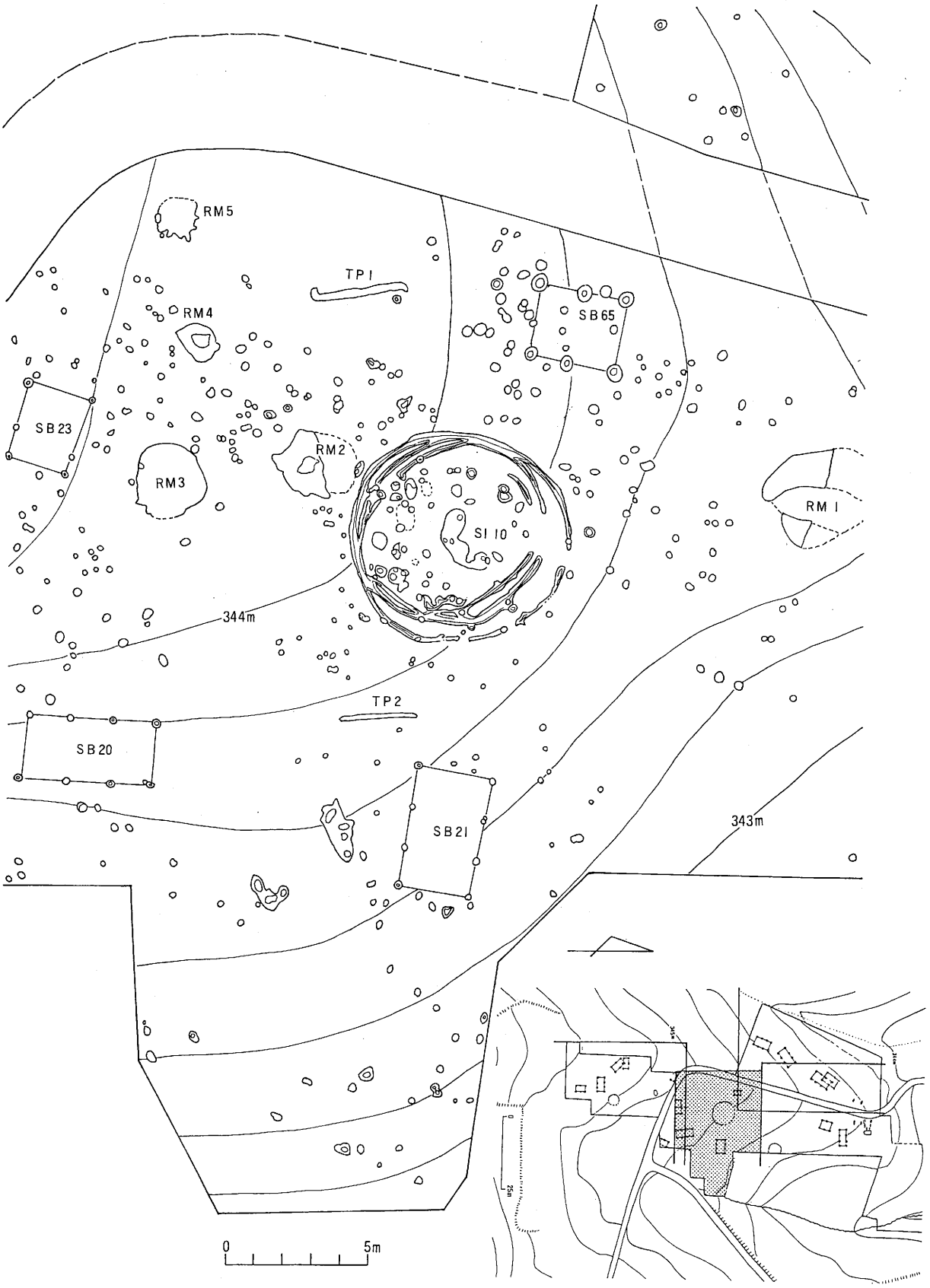


図14　Ⅰ地区遺構分布図(3)(1:200)

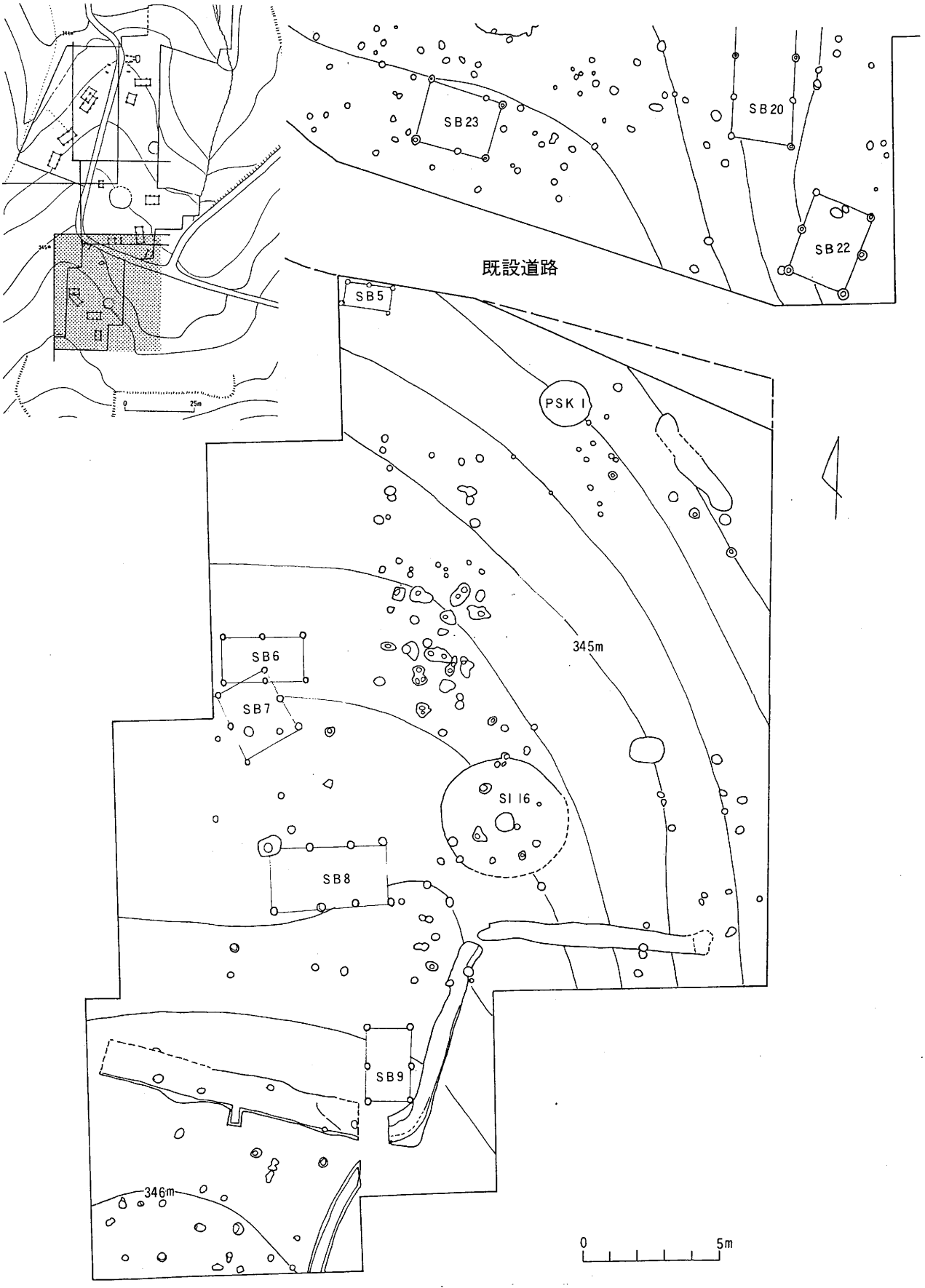


図15　Ⅰ地区遺構分布図(4)(1:200)

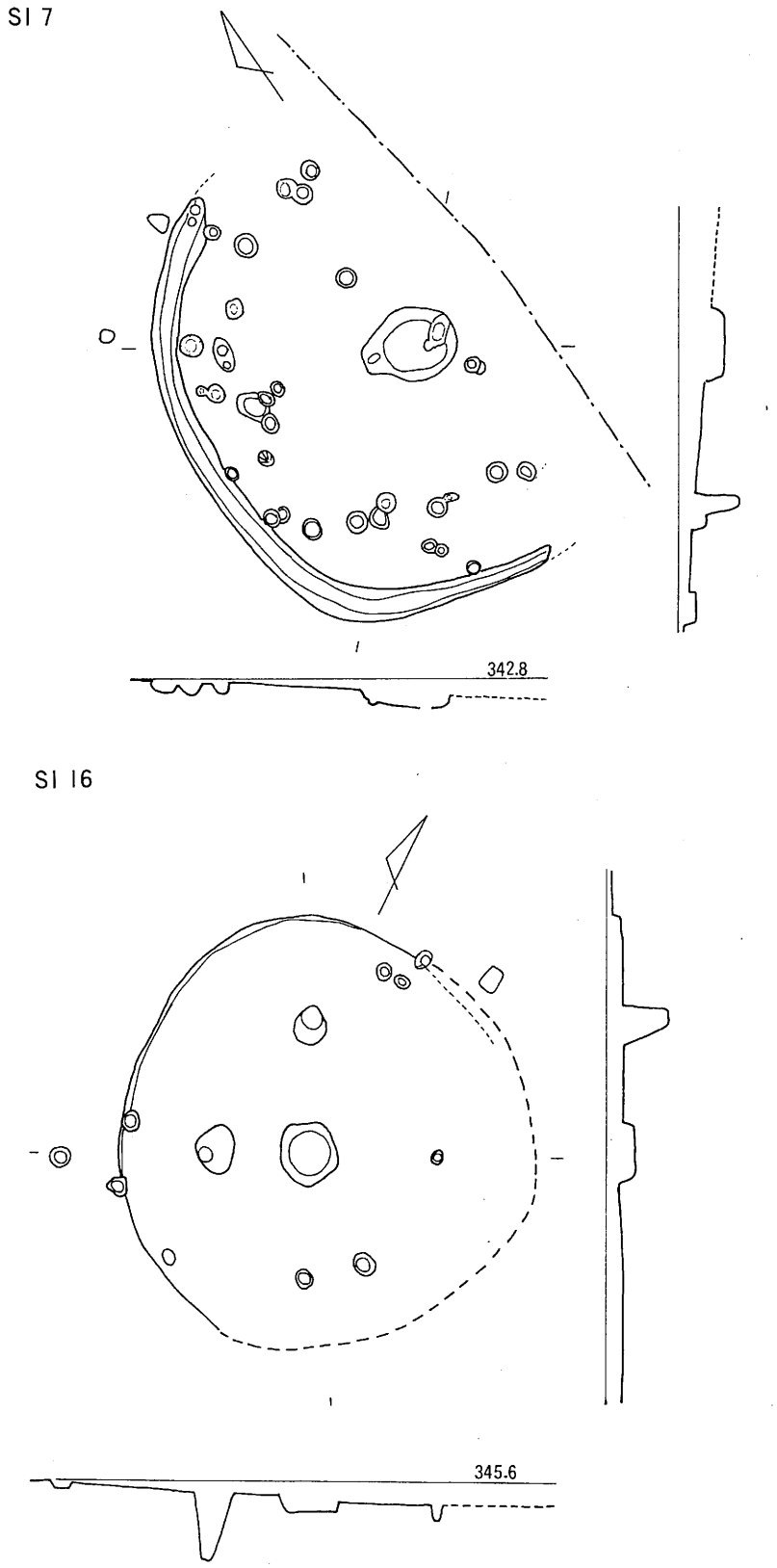


図16　Ⅰ地区ＳＩ７・ＳＩ16号住居址実測図(1:80)

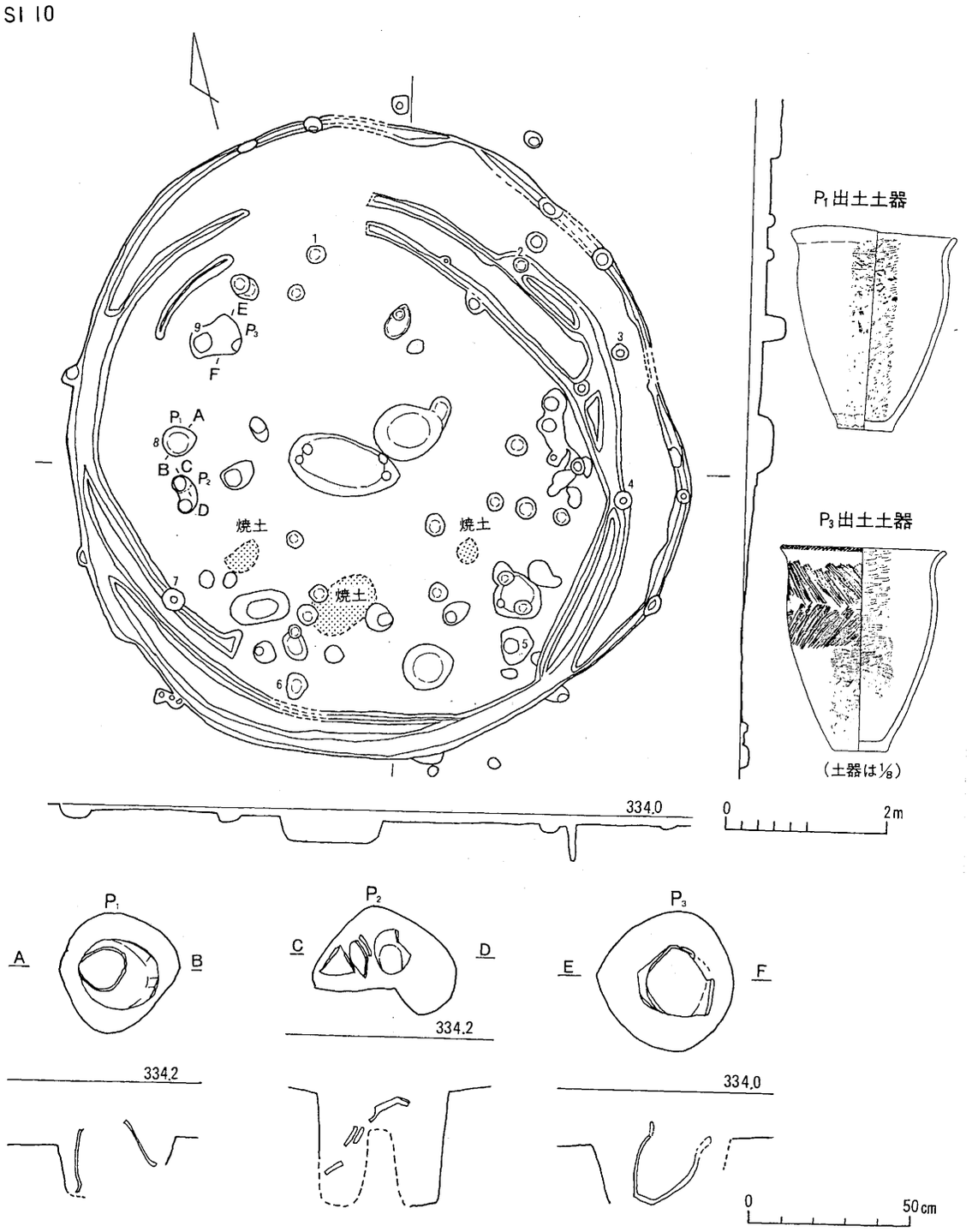


図17　Ⅰ地区ＳＩ10号住居址実測図(1:80・1:20)

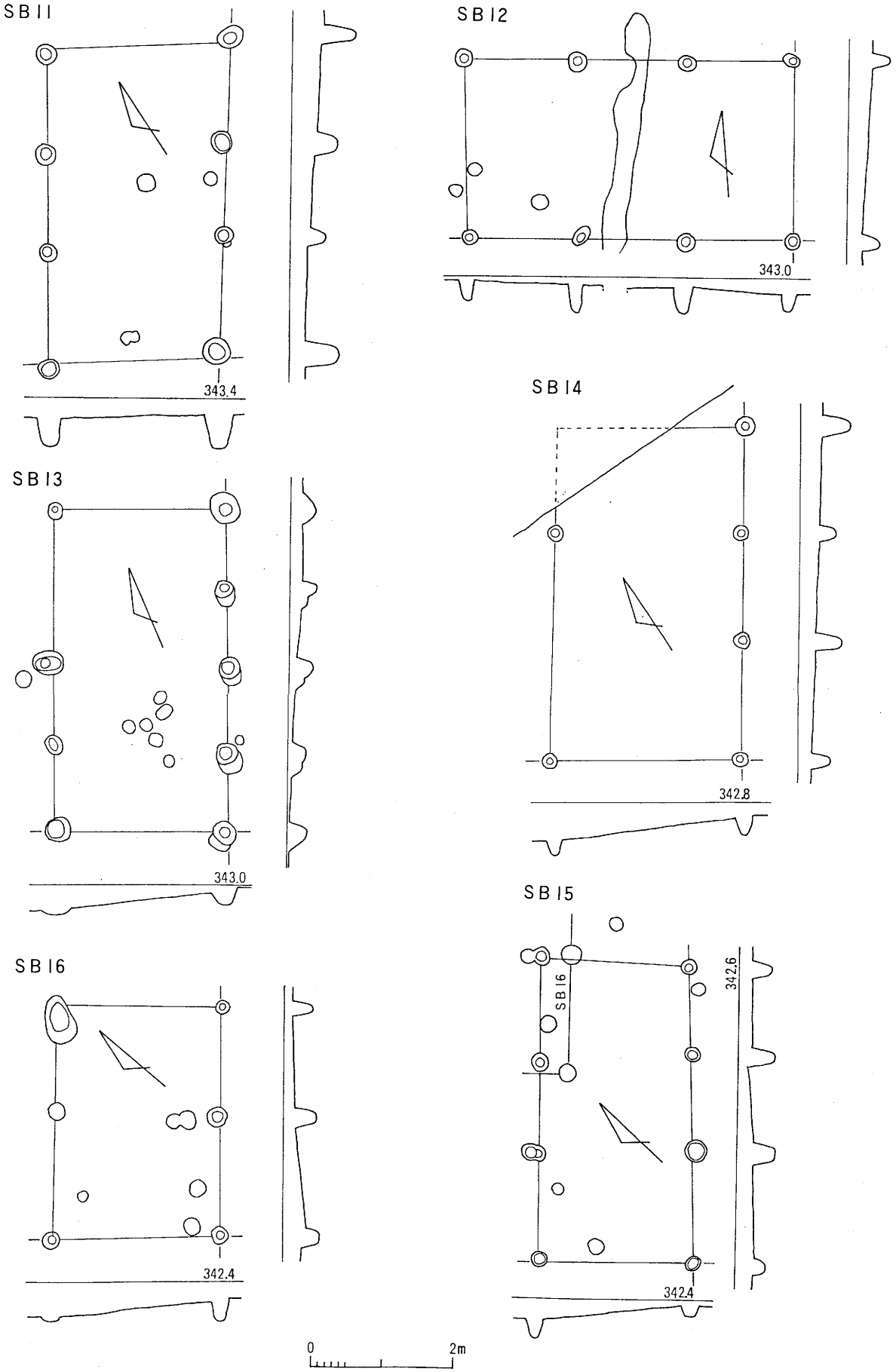


図18　Ⅰ地区ＳＢ11～16号掘立柱建物址実測図(1：80)

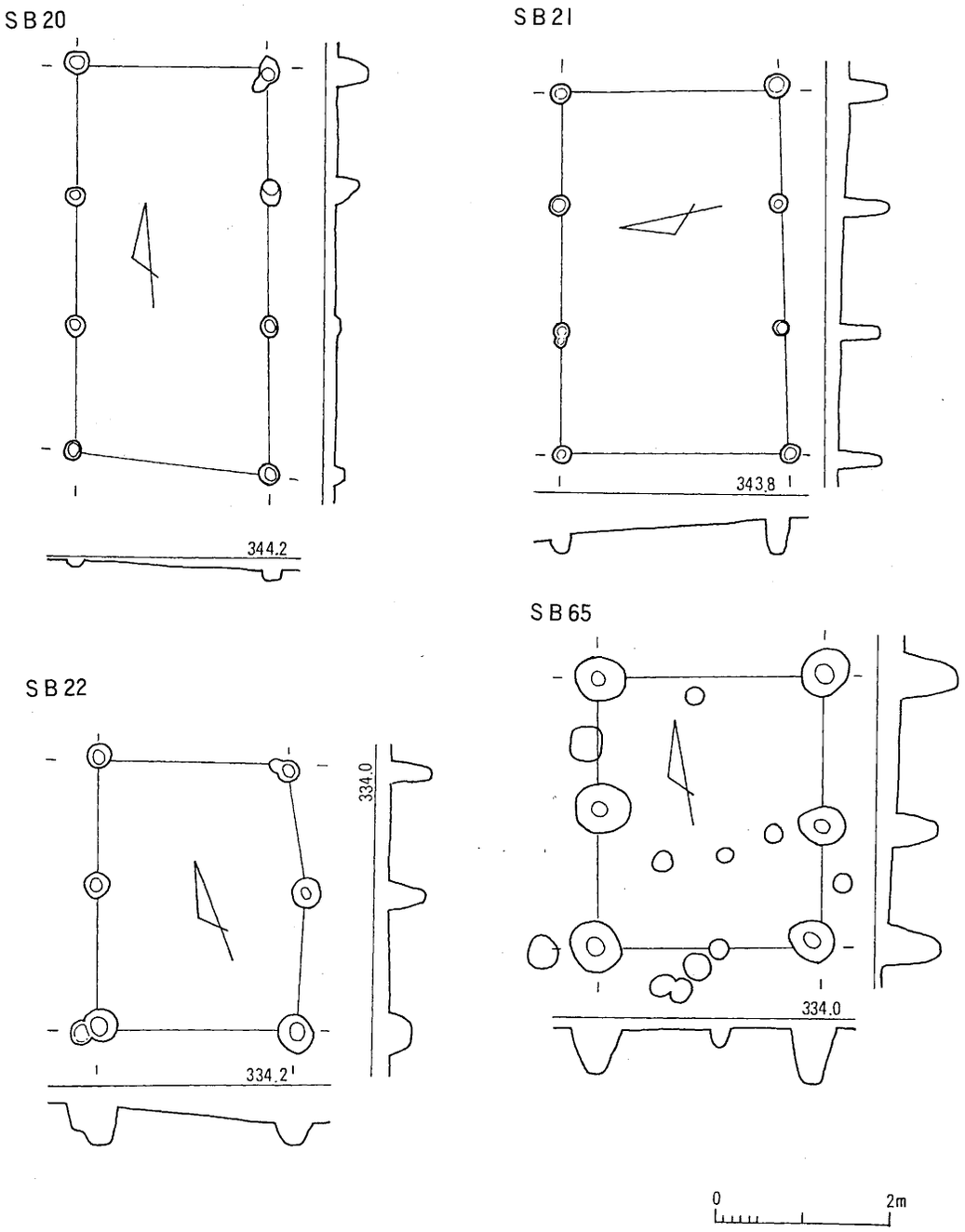


図19　Ⅰ地区ＳＢ20～22, 65号掘立柱建物址実測図(1：80)

2　II地区の概要

a　概　　要

本遺跡の中で最も広い平坦面を有する丘陵上に所在する。調査区が北と南に別れているので、北側をａ地点、南側をｂ地点と呼称した（図20)。昭和63年の調査ではａ地点平坦面から南傾斜面にかけて、およびｂ地点の調査を行い、平成２年度にはａ地点内の東部分というように２年度に分けて実施した。また、遺跡の広がりとしてはさらに東側に広がると予測されたが、花卉栽培が行われていたためついに調査することができなかった。なお、63年の調査区と平成２年の調査区の間には農道が存在しており、この道路によって南側が大字常盤字長峰越、北側が大字照里字南原となり字界であった。

b　遺　　構

竪穴住居址　本地区からは合計14軒検出されている。このうち中期に属するものはＳＩ８･12･17の３軒で、後期住居址が９軒(ＳＩ１～３・５・６･11･14･15･29)、後期末が２軒(ＳＩ４･13）となっている。中期の住居址ではＳＩ８(図28)が良好な遺存状態を示しており、掘り込みもしっかりしている。壁下を周溝がめぐり、径は5ｍ20cmの円形を呈する。ピットは不揃いであるが、ほぼ円形にめぐるようである。中央に約80cmの土坑があり、深さは68cmのすり鉢状を呈す。焼土は中央土坑の周辺に３か所認められ、いずれも床面まで焼けている。後期住居址ではｂ地点ＳＩ15(図37)が典型的である。一部は明確でないが、６ｍ30cm×約４ｍ80cmの長方形プランであると推定される。主柱穴はP_1～P_4の４本で、奥の主柱穴２本の間に炉が作られている。また、入口部分には、40cmの狭い間隔でピットが造られる。出入り口施設であろう。さらに、壁下には径40cmの貯蔵穴と推定される土坑もある。後期末以降の住居址はｂ地点ＳＩ13が北較的しっかりしている（図37)。炉は確認できていない。なお、ＳＩ１は出土遺物で明確なものがなく、赤彩された壺破片等を根拠に後期に位置付けているが、住居址そのものは小泉遺跡で典型的な隅丸長方形の後期住居址よりさらに方形に近い形を呈しており、後期末以降の形態と思われる(図26)。また、ＳＩ４は遺存状態が悪くプランは不明であるが、箱清水系の土器群がほとんどなく、北陸の月影系土器群が占める。

掘立柱建物址　多くについては時代判定する遺物に恵まれていないが、合計22棟検出されている。

なお、ＳＢ43号掘立柱建物址のピット(図30)から中期小型壺・甕が出土しており、その状態からも中期と考えられる。また、ＳＢ41・66号掘立柱建物址(図25)は後期住居址ＳＩ29を切っていることから後期のＳＩ29廃絶以降に建てられたものである。

木棺墓（ＳＫＢ）　昭和63年調査の終盤に調査可能となった地区において出土した(図22･23、32、表3)。合計13基発見されているが、調査区の端部であり調査不可能地区へ広がっている可能性がある。地形的には、II地区の遺跡が占拠する台地の末端面にある。方位は斜面に平行するものがほとんどである。このうち、ＳＫＢ10～13号木棺墓はＳＩ17号住居址内に構築されている。新旧関係では、住居址の床面を壊して構築しており、明らかに木棺墓の方が新しい。

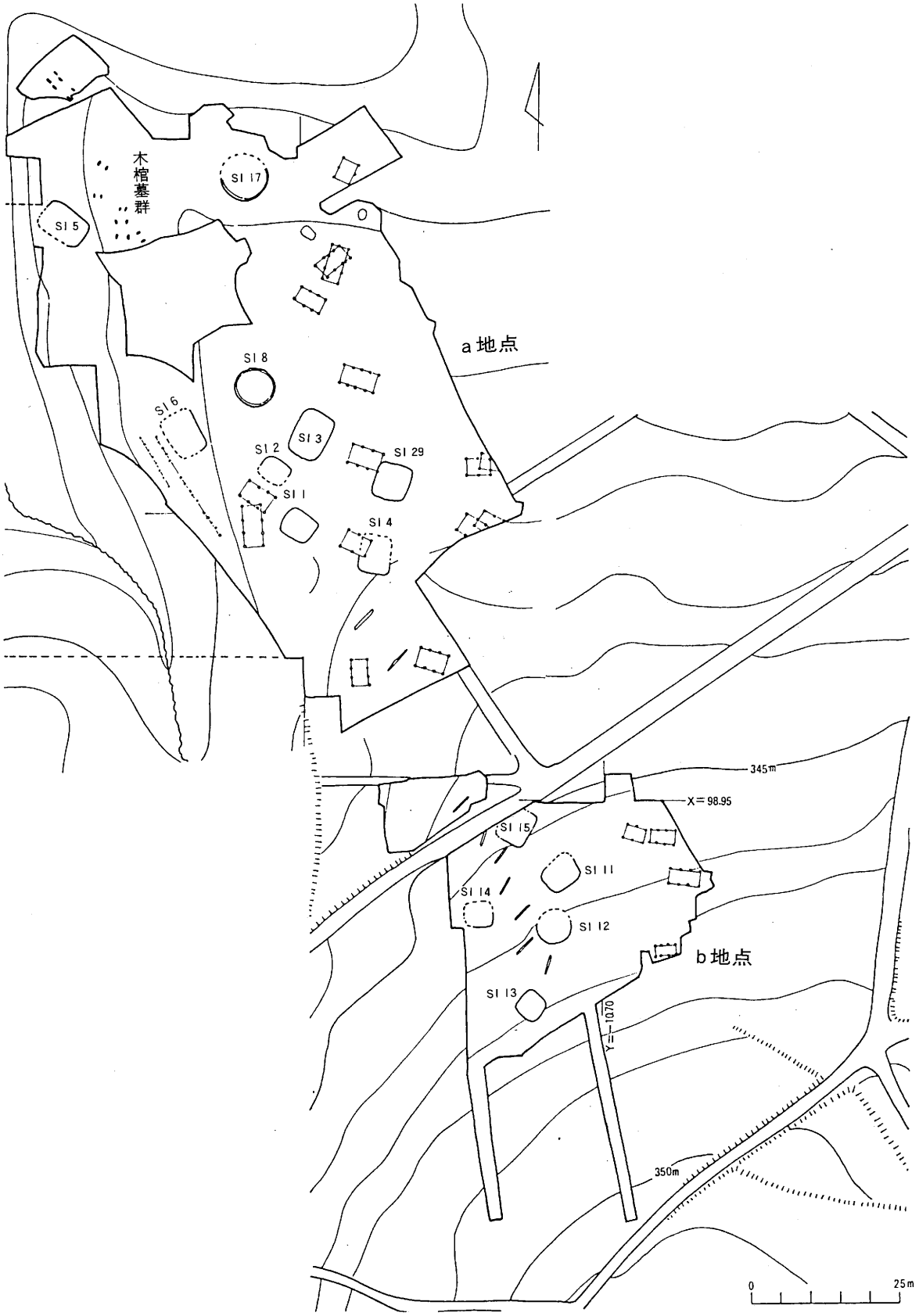


図20　II地区全体図(1:1,000)

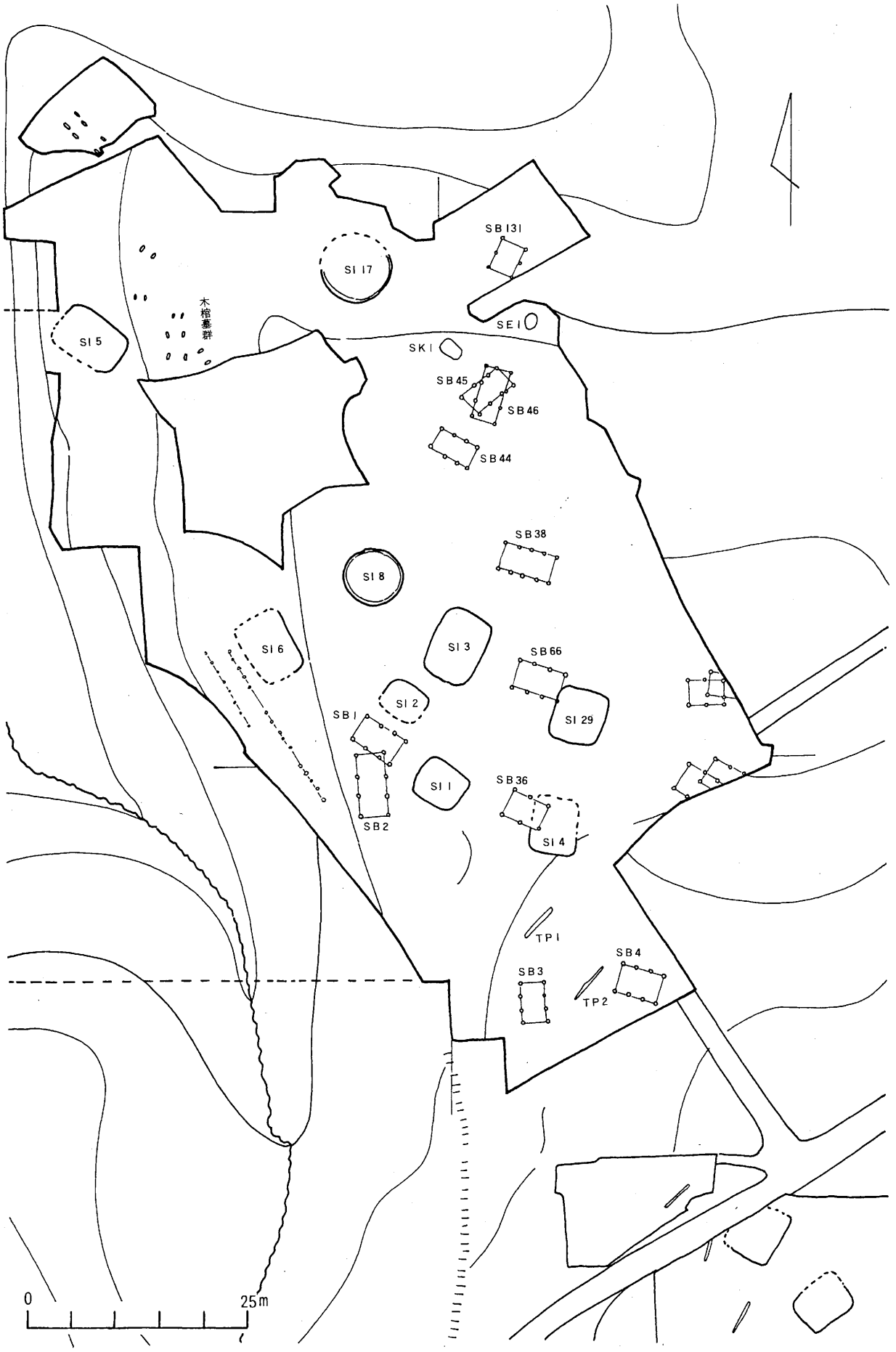


図21　II地区a地点全体図(1:600)

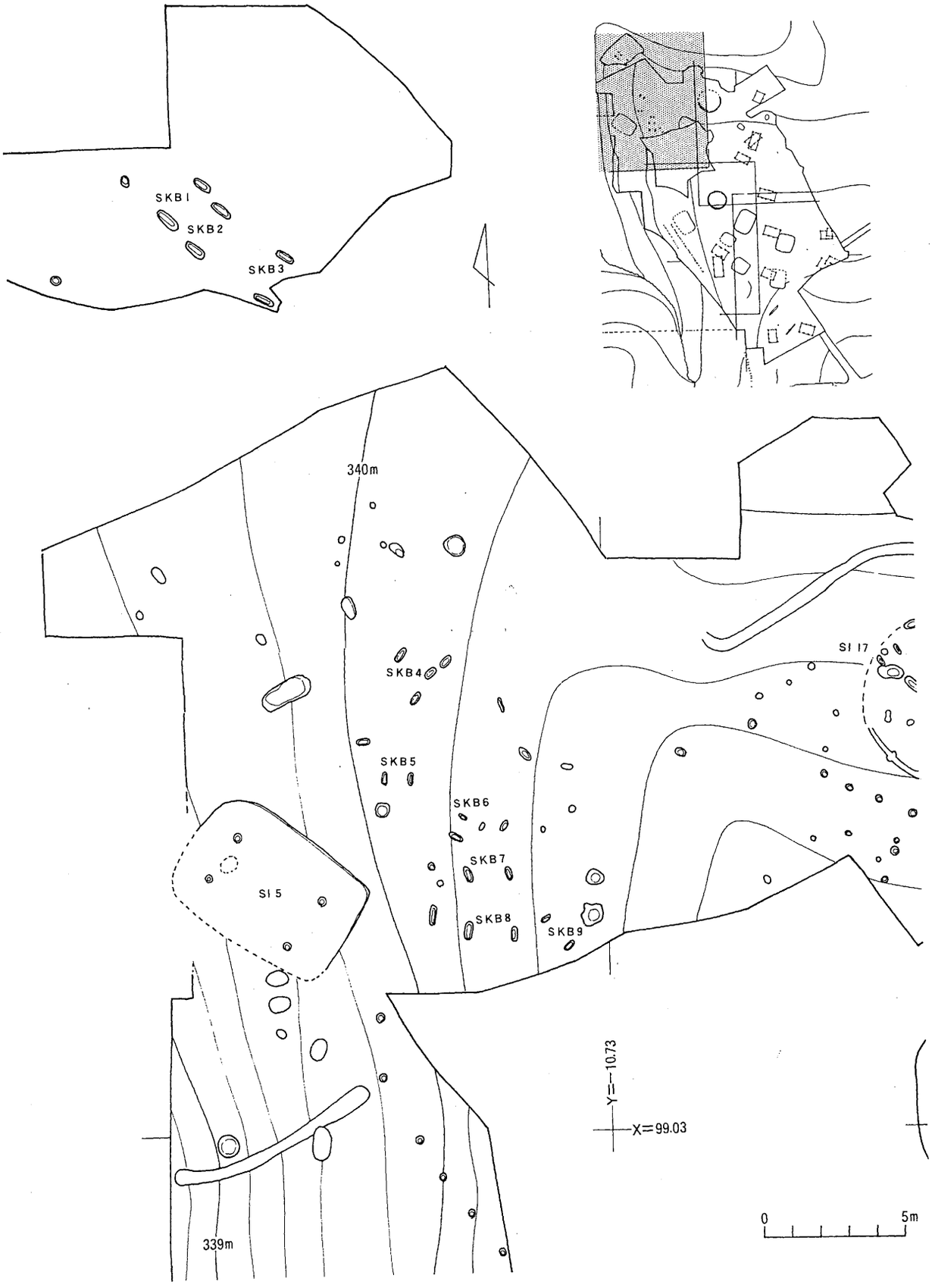


図22　II地区a地点遺構分布図(1)(1:200)

図23　II地区 a 地点遺構分布図(2)(1：200)

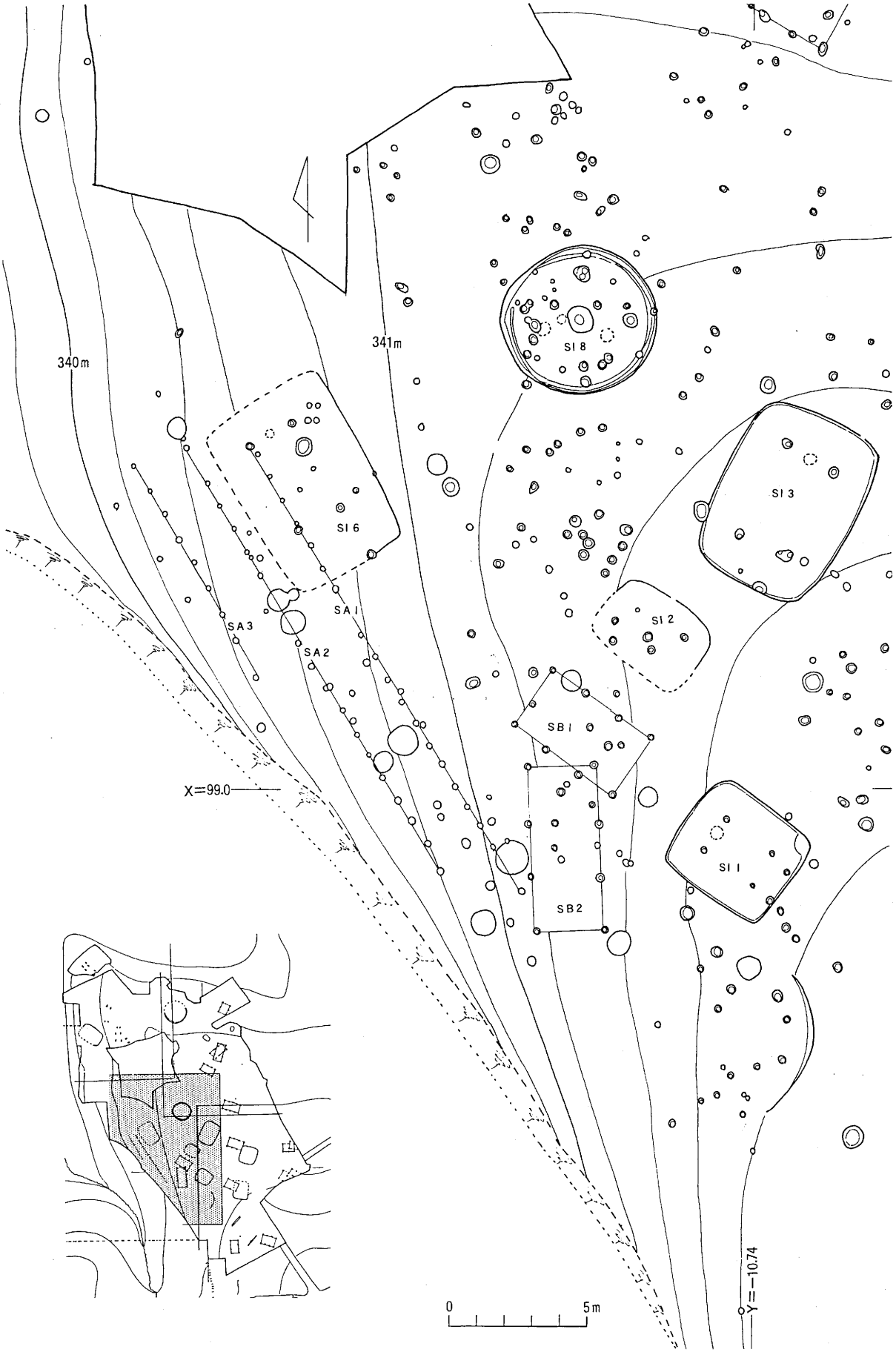


図24　II地区 a 地点遺構分布図(3)(1：200)

図25　II地区a地点遺構分布図(4)(1：200)

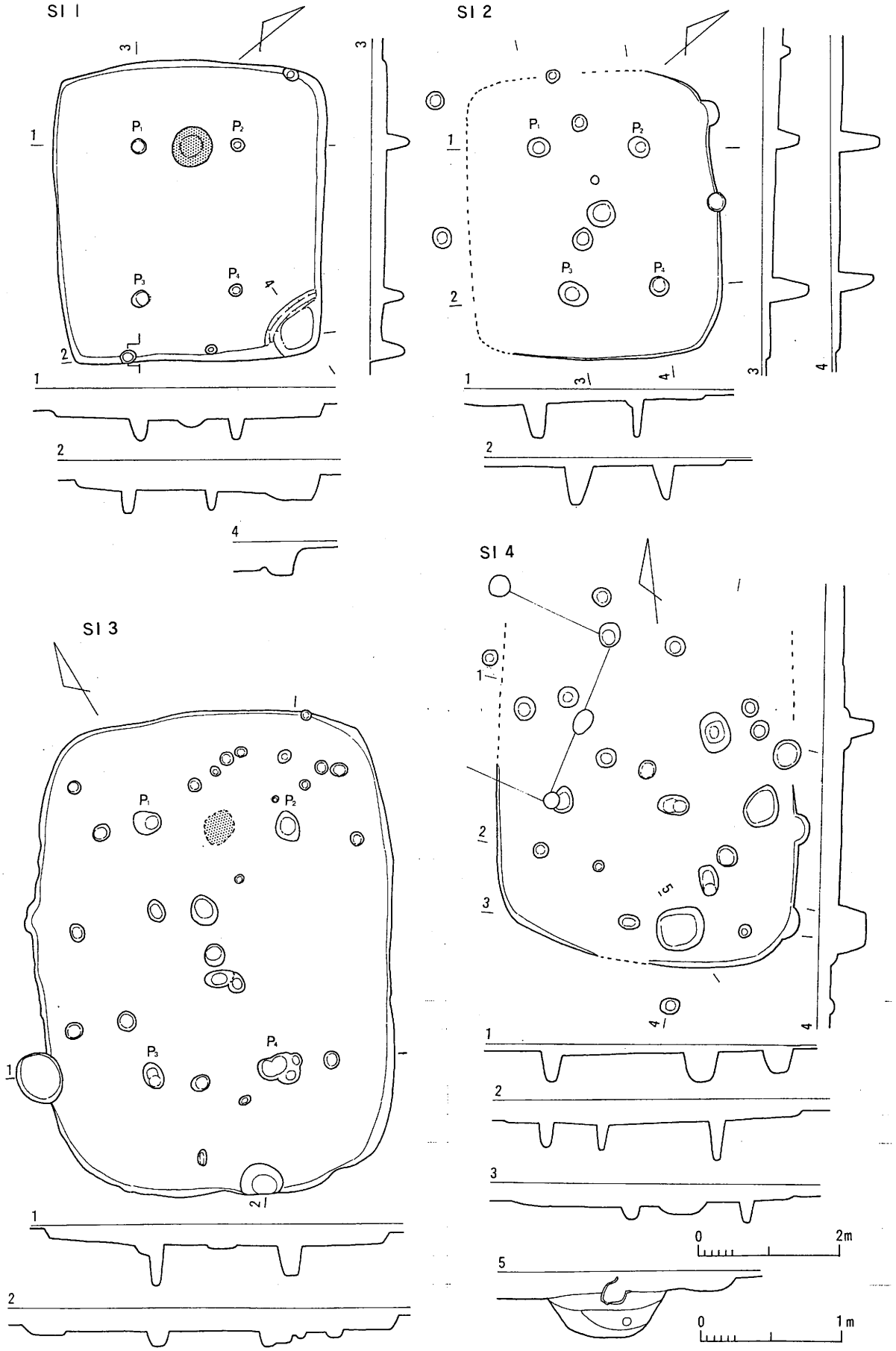


図26　II地区a地点ＳＩ１～４号住居址実測図(1：80)

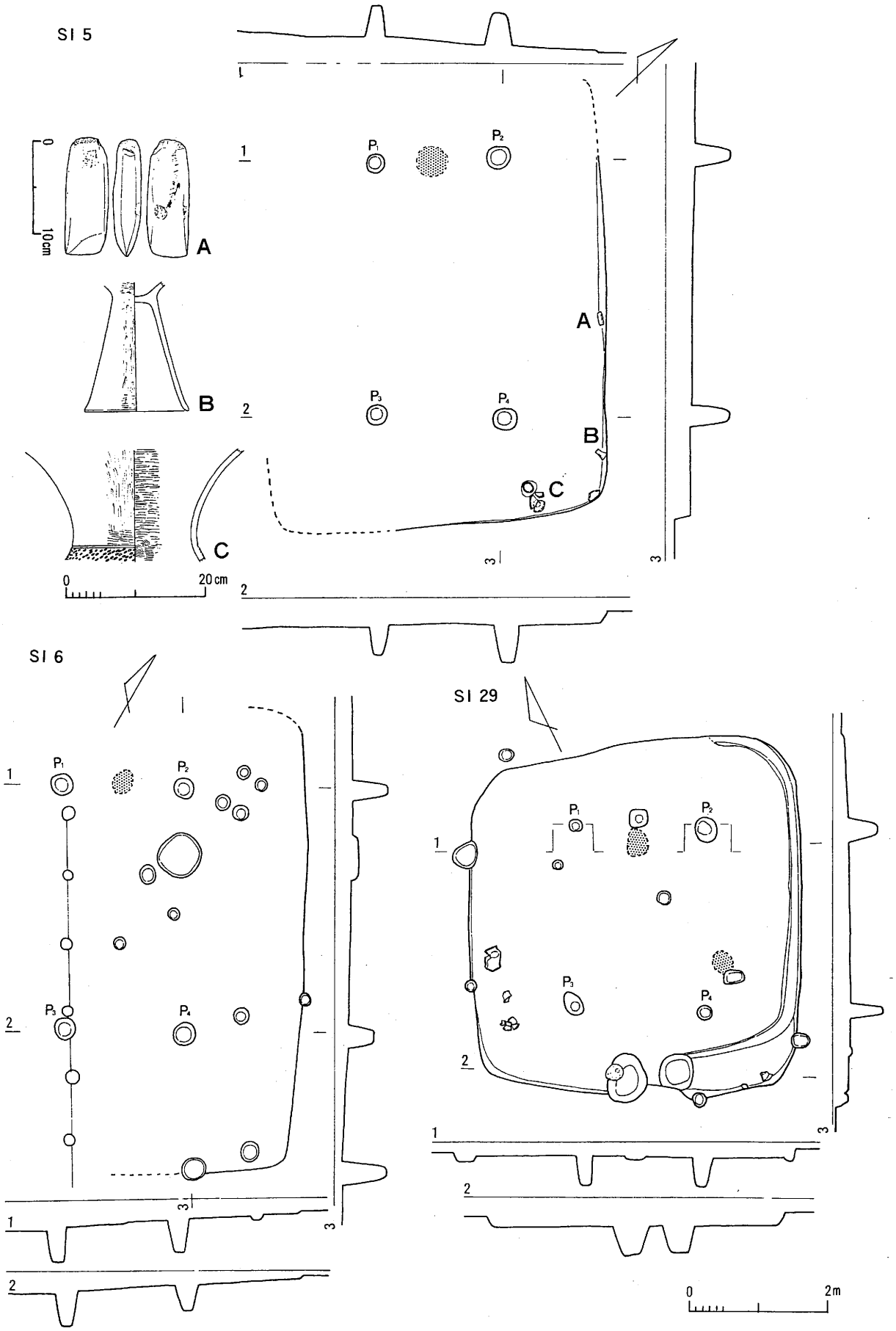


図27　Ⅱ地区a地点ＳＩ5，6，29号住居址実測図(1:80)

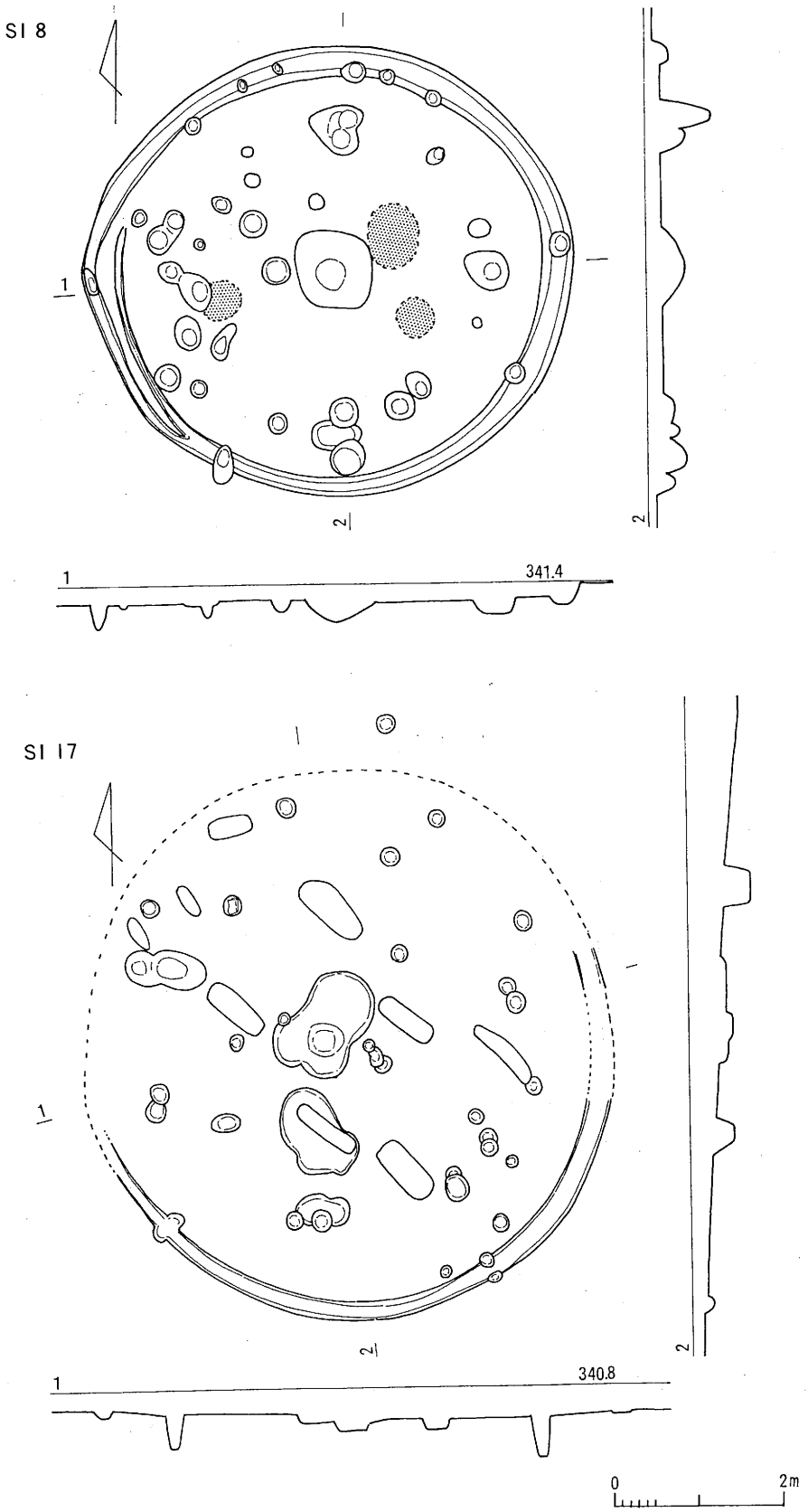


図28　II地区a地点ＳＩ８、17号住居址実測図（1：80）

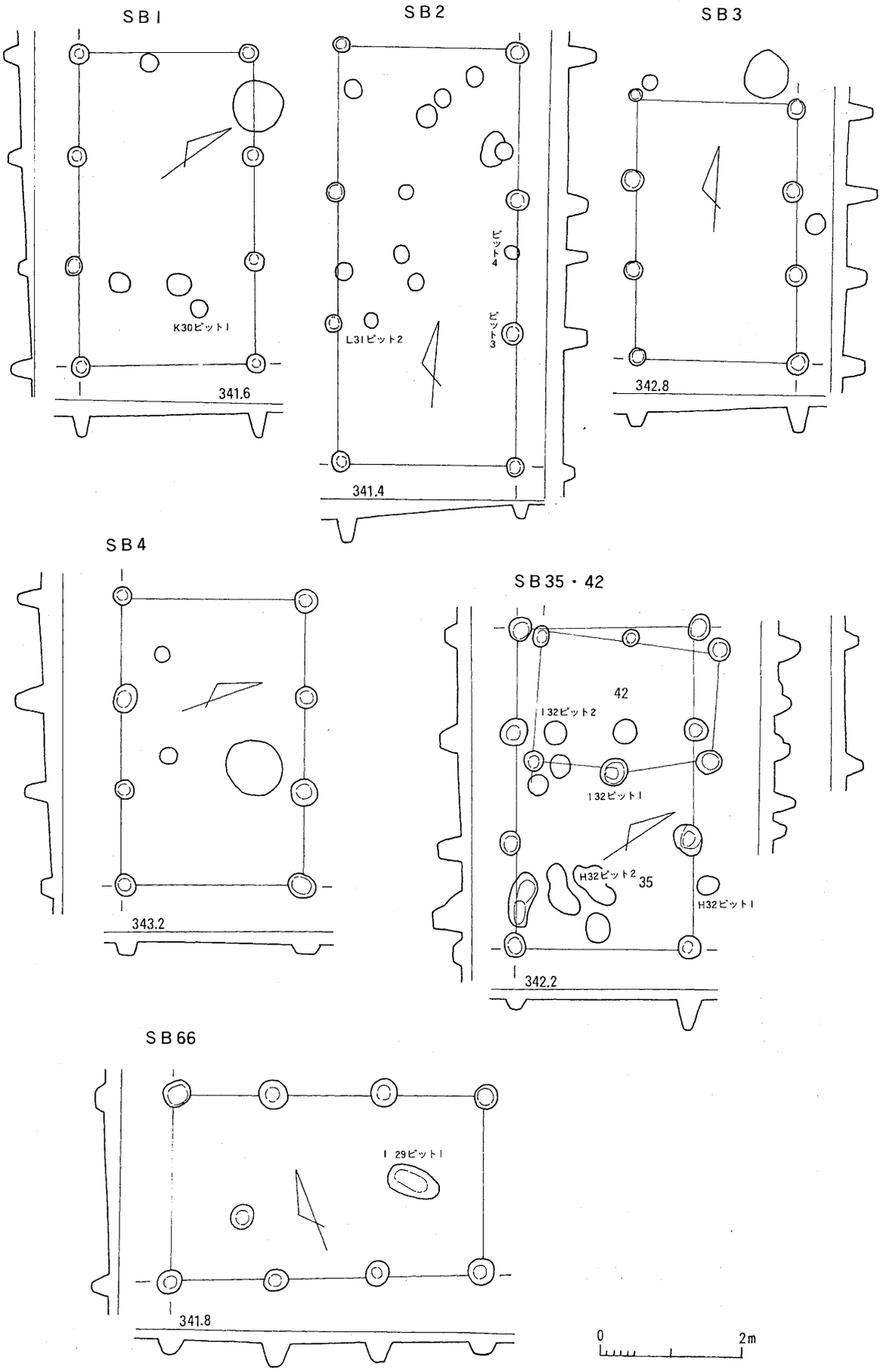


図29　II地区a地点SB1～4，35・42・36号掘立柱建物址実測図(1:80)

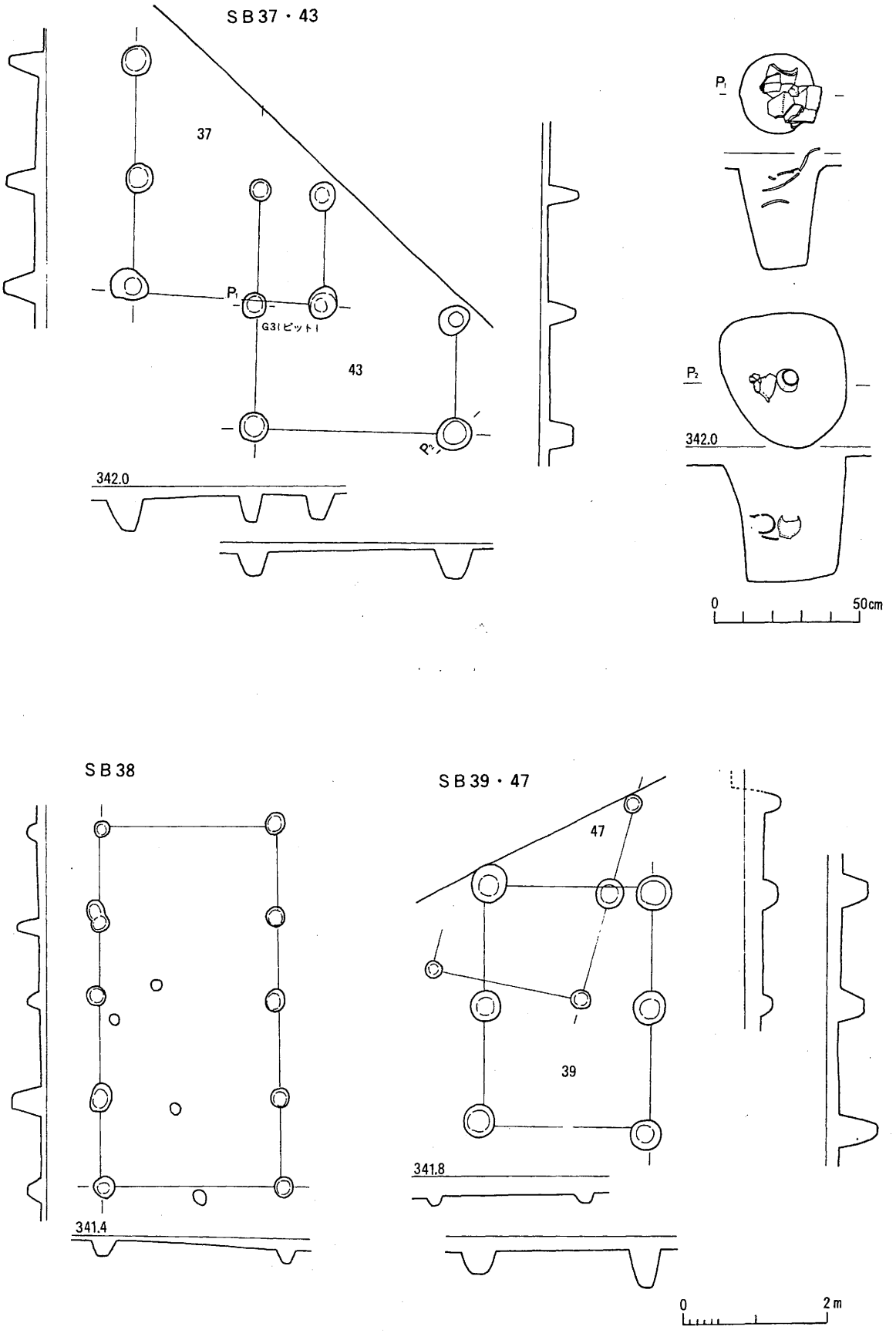


図30　II地区a地点SB37・43, 38, 39・47号掘立柱建物址実測図(1:80)

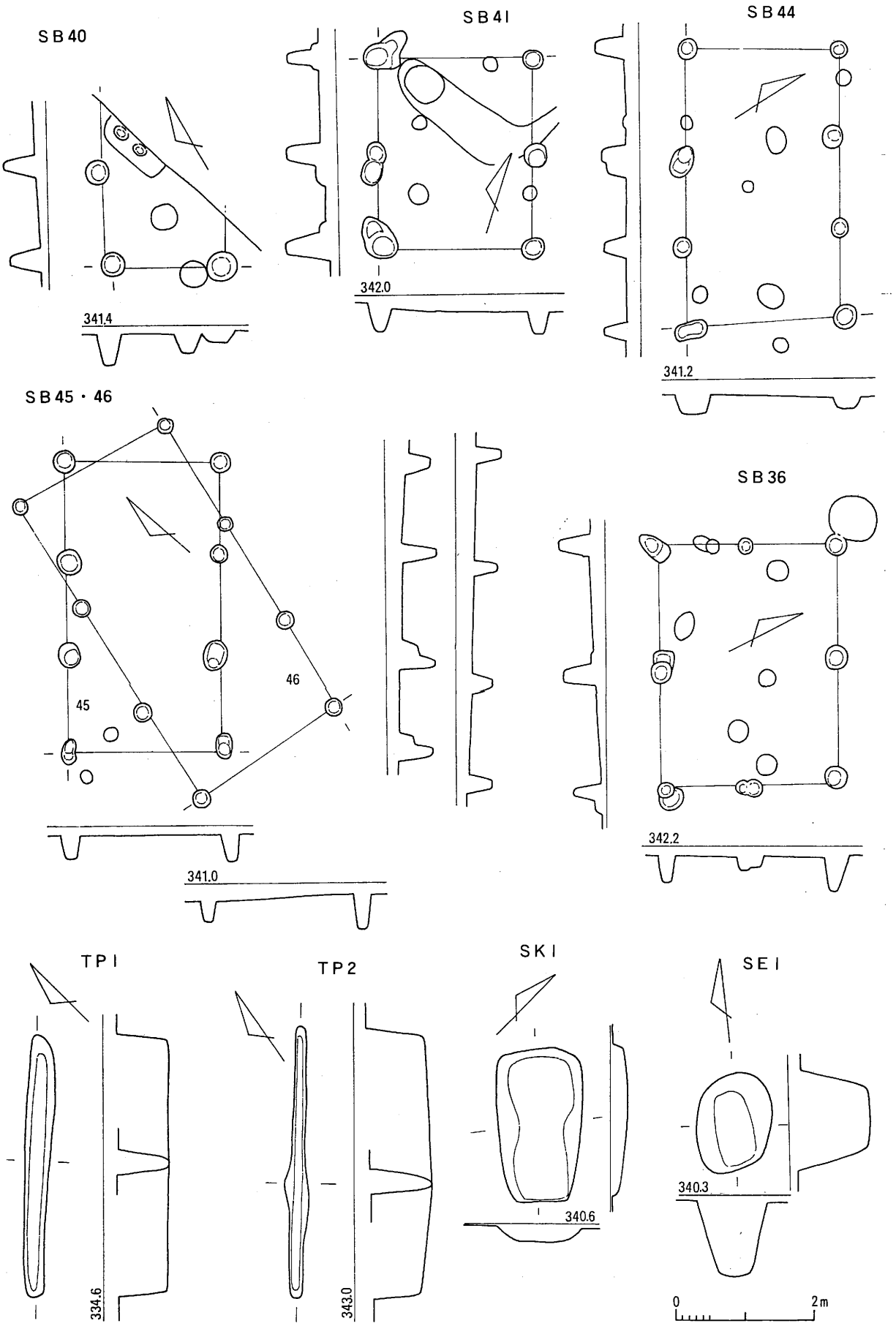


図31　II地区a地点SB49,41,44,45・46,36号掘立柱建物址
TP1，2号溝状土壙，SK1号土壙，SE1号井所址実測図(1：80)

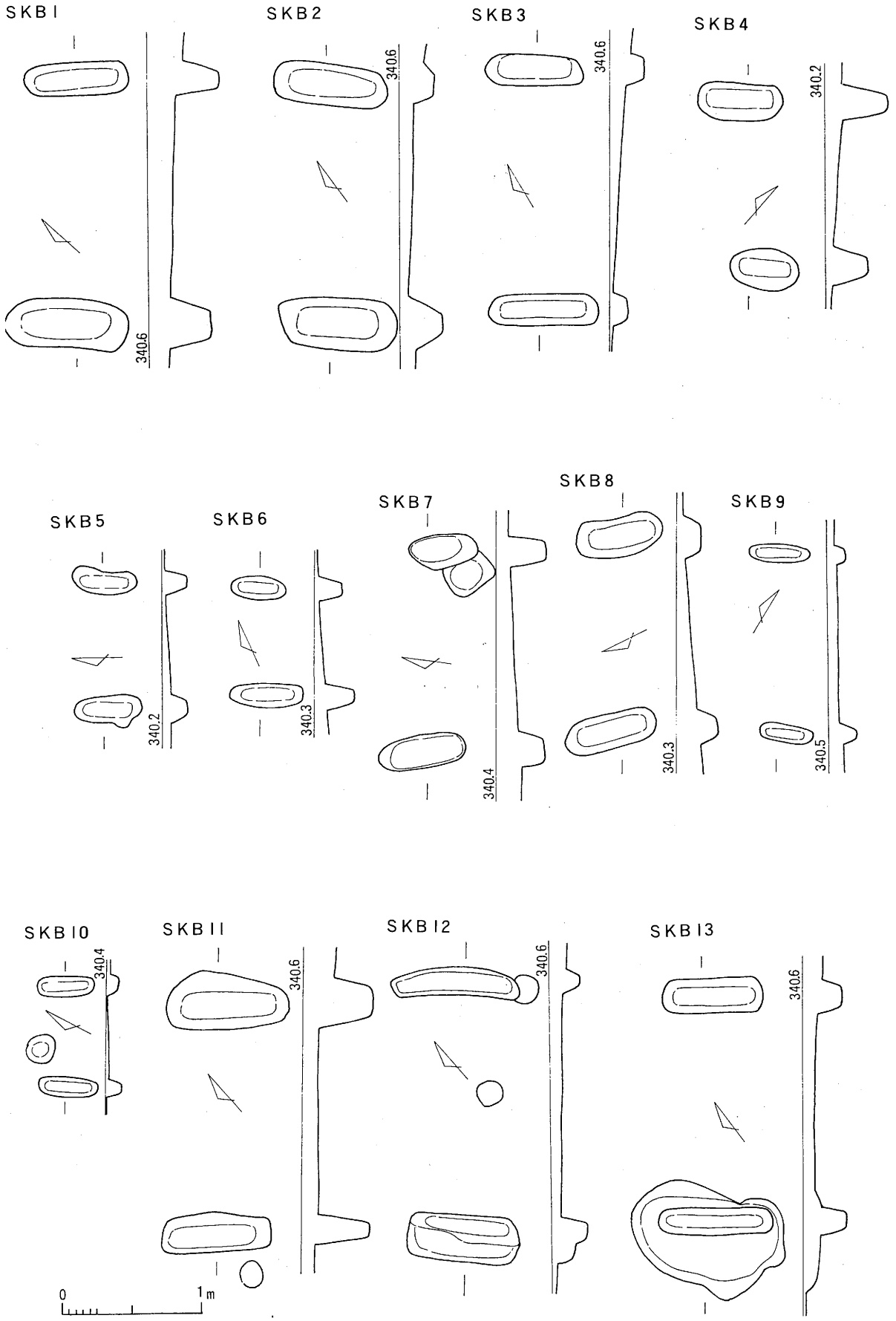


図32　II地区a地点ＳＫＢ１～13号木棺墓実測図(1：40)

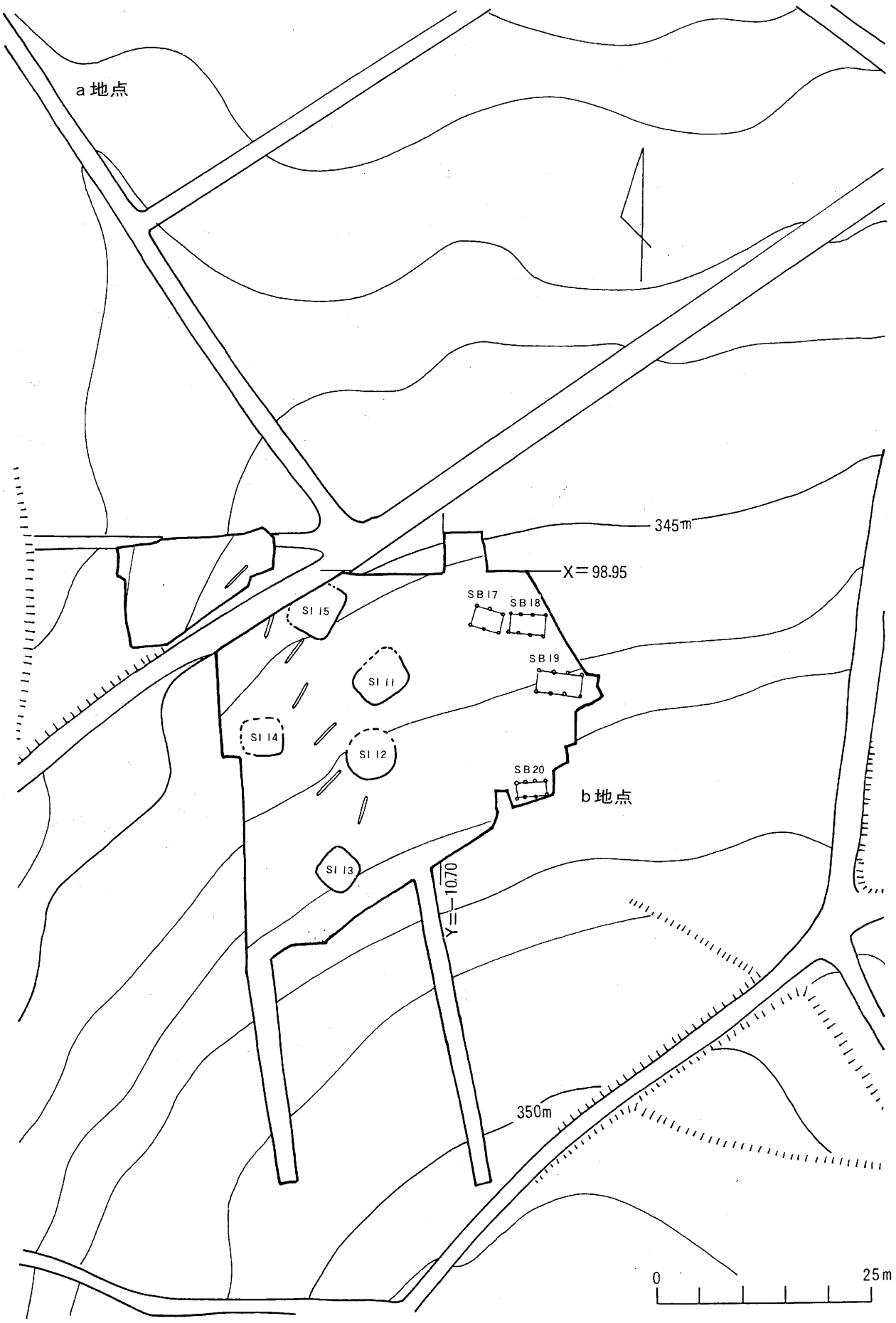


図33　II地区b地点遺構全体図(1：600)

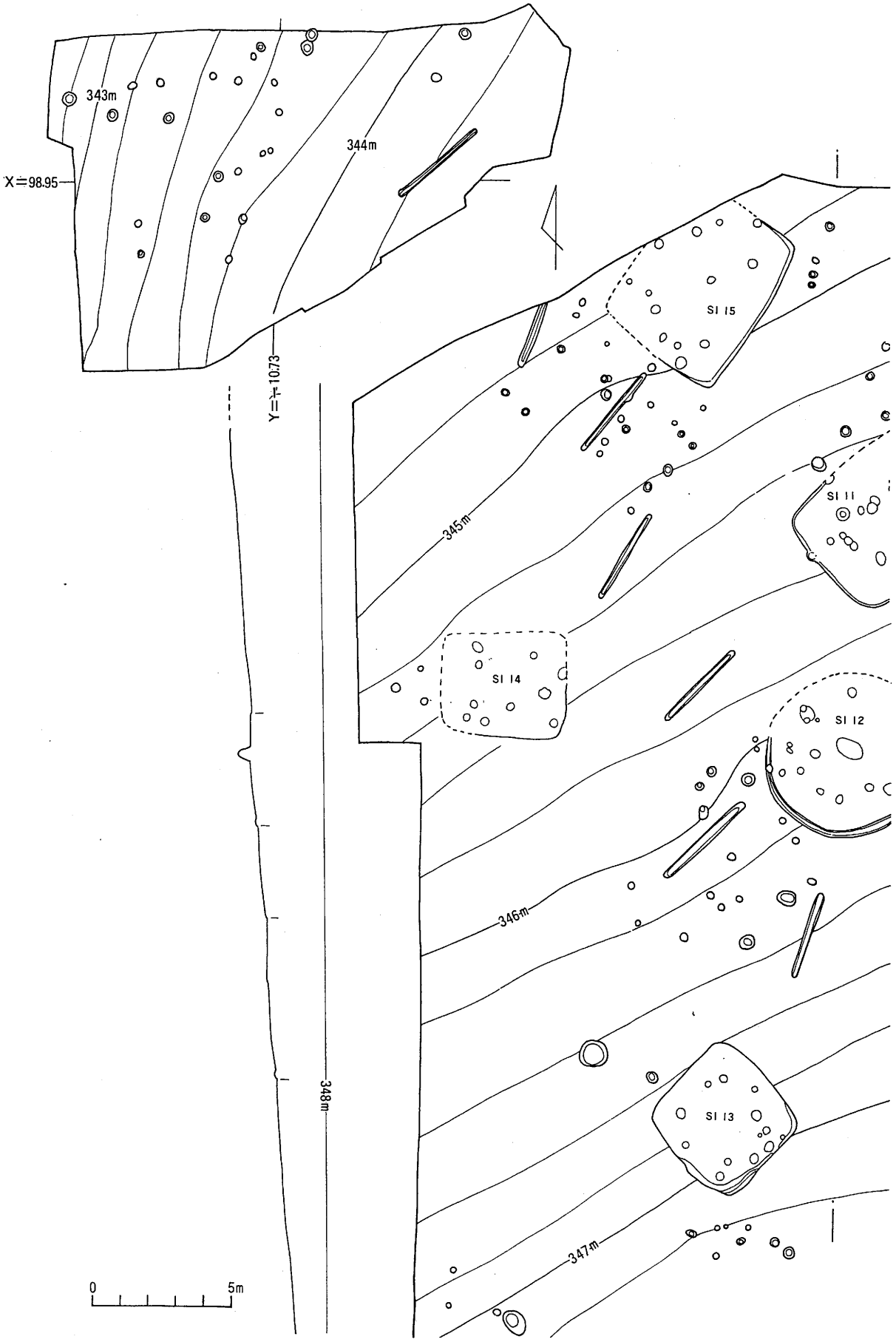


図34　II地区b地点遺構分布図(1)(1：200)

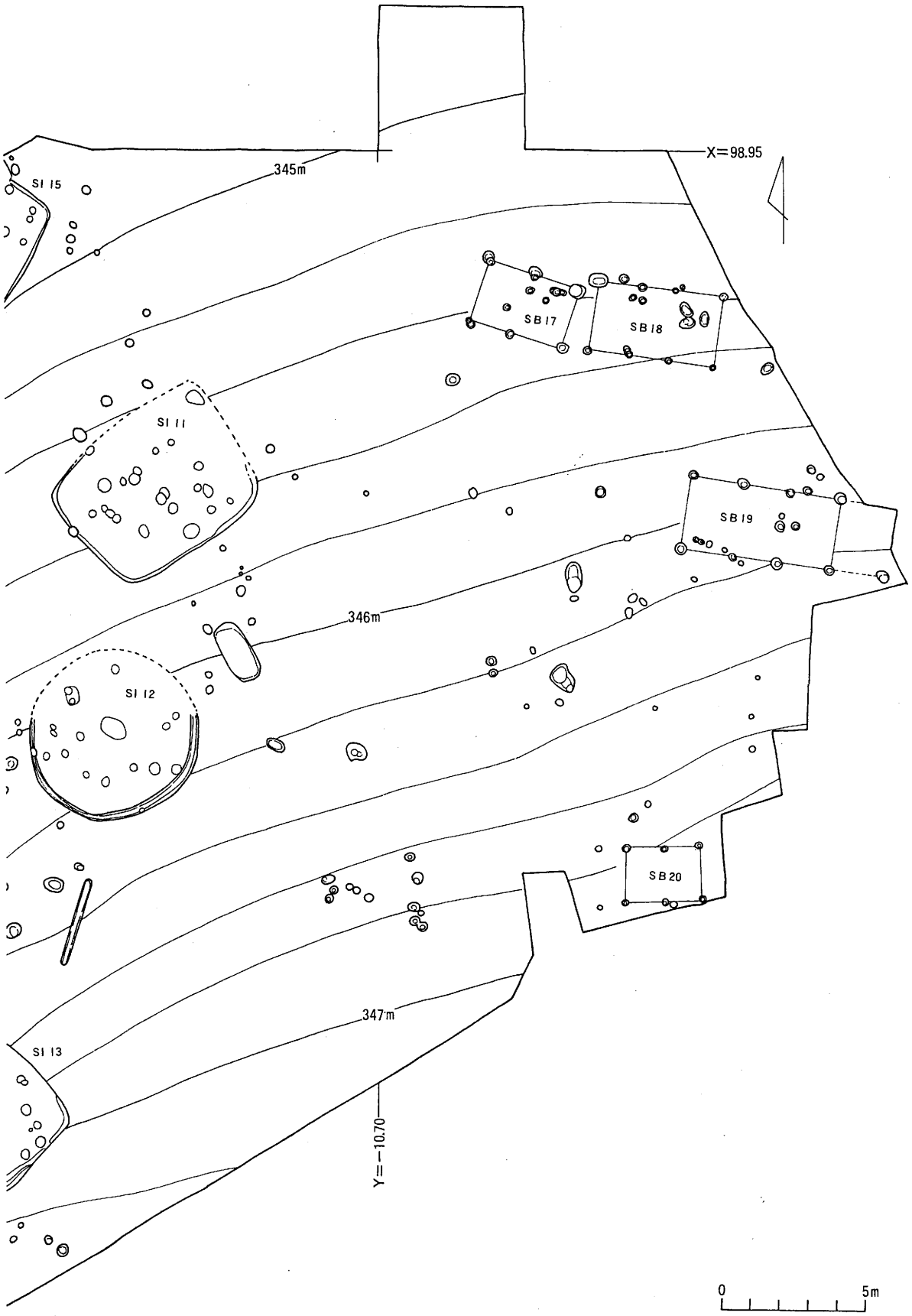


図35　II地区b地点遺構分布図(2)(1:200)

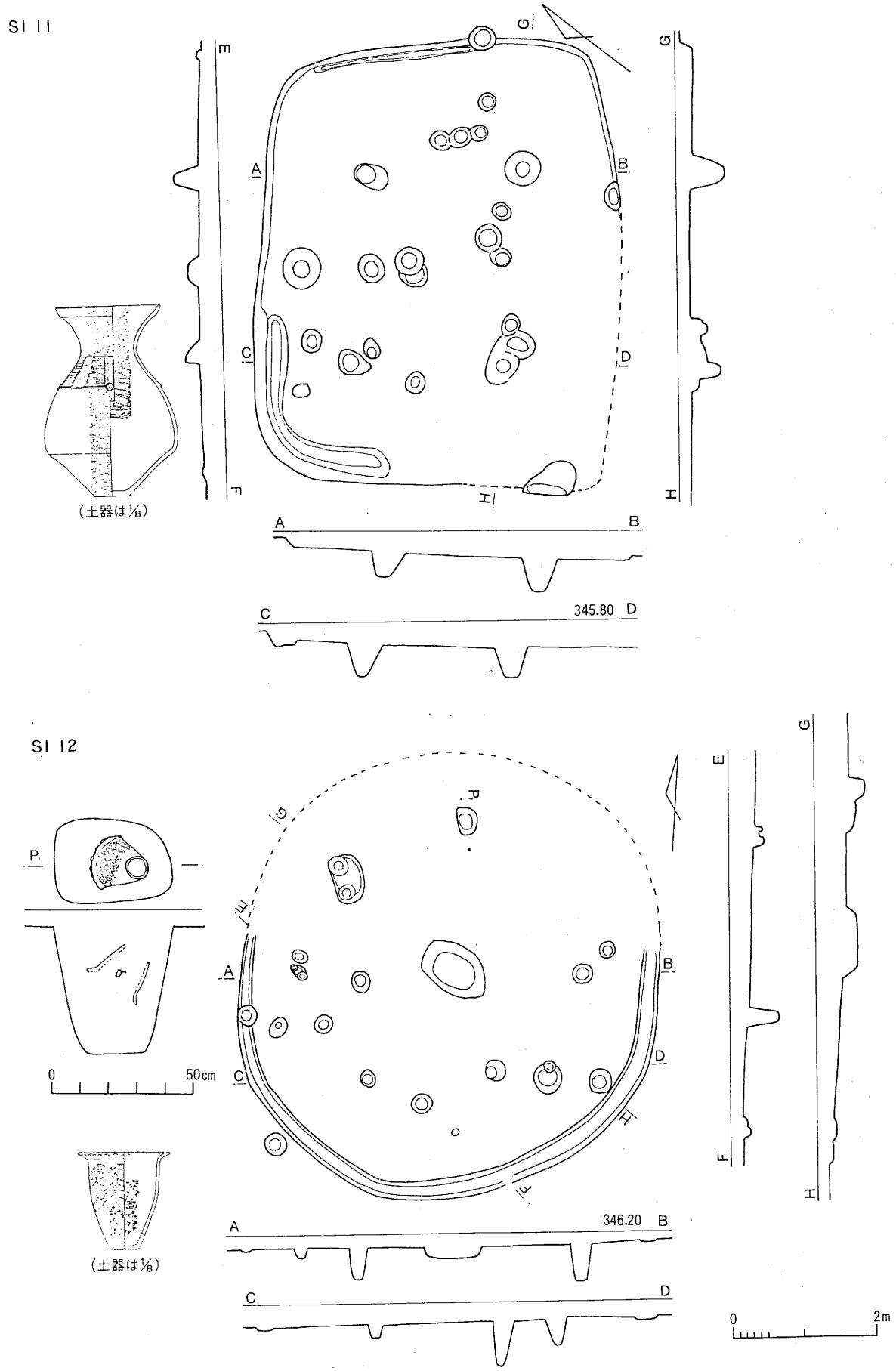


図36　II地区b地点ＳＩ11･12号住居址実測図(1:80)

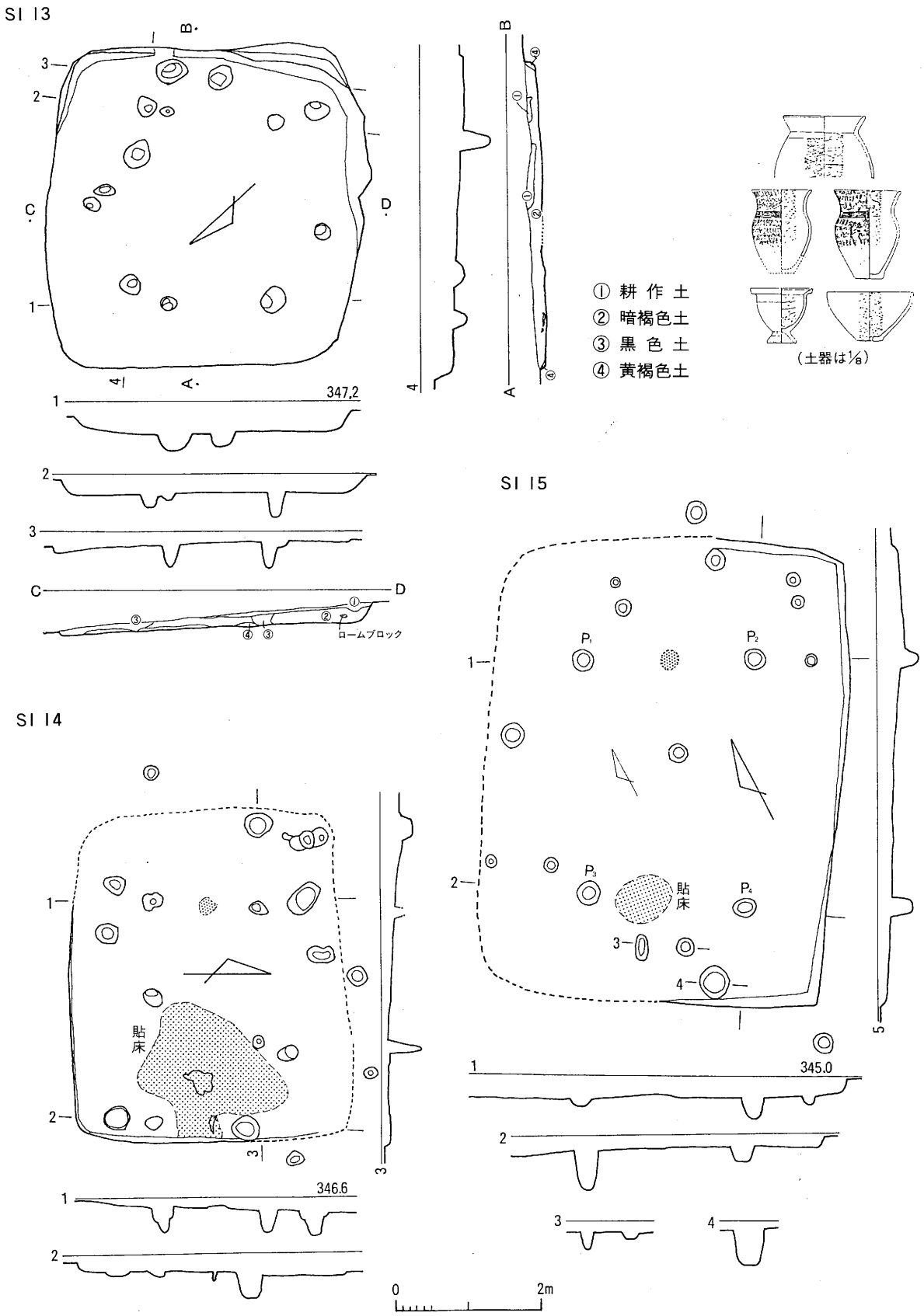


図37　II地区b地点ＳＩ13～15号住居址実測図(2：80)

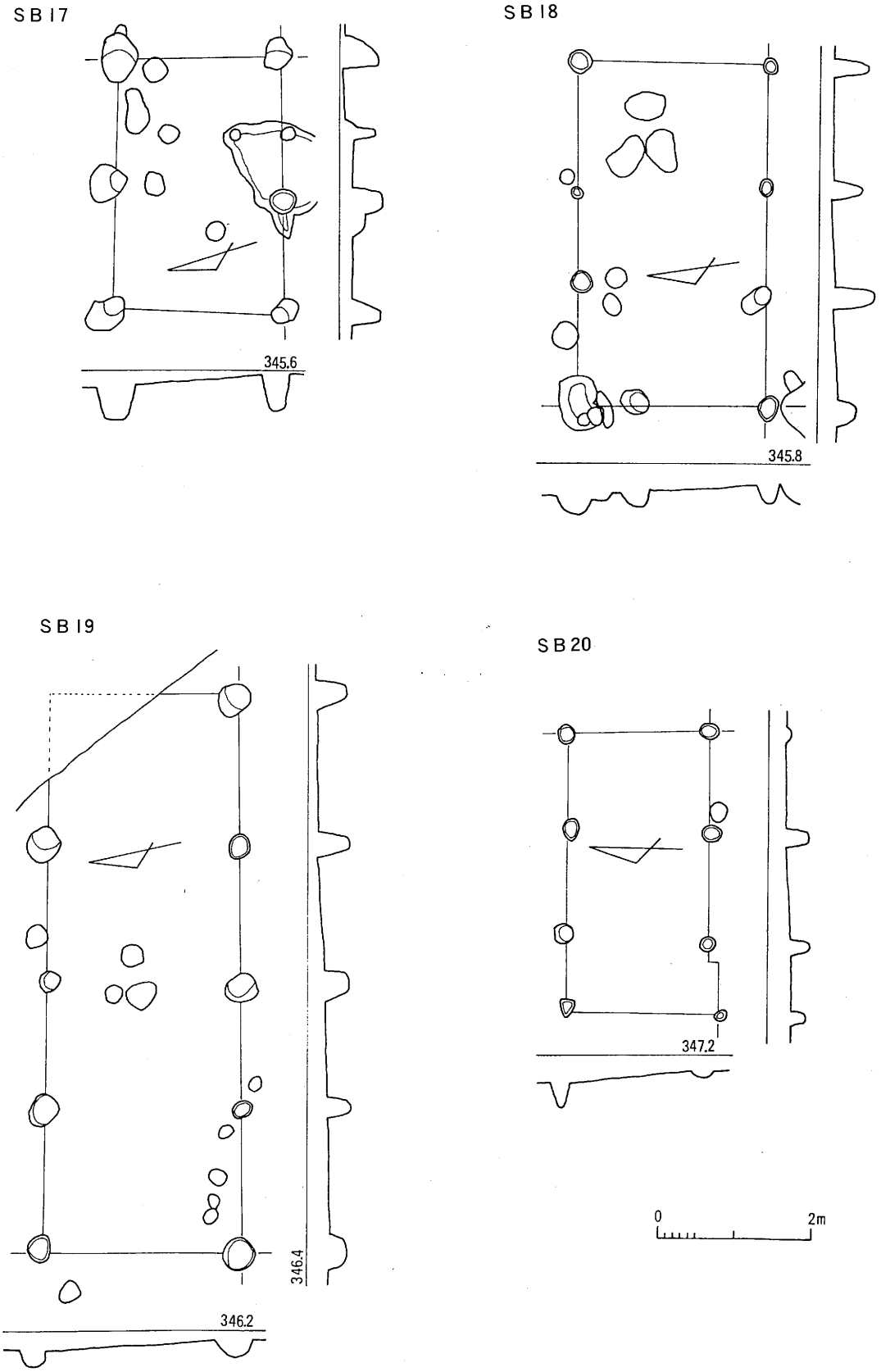


図38　II地区b地点SB17～19号掘立柱建物址実測図(1：80)

3　Ⅲ地区の概要

a　概　　要

旧南原西丘陵と呼称した地区で、舌状台地的な地形を呈している。

本地区は昭和63年および平成２年の２か年に分けて発掘調査した。63年調査地点(図39　ａ地点)は最も平坦な場所を調査して、弥生中期竪穴住居址１軒、同後期の住居址７軒を検出した。平成２年の調査では、それに接した東側部分(ｂ地点)の約700㎡および第二次造成にかかるｃ・ｄ地点のを調査した。なお、ａ地点とｃ・ｄ地点の間は作物の関係があり、結局最後まで調査することができなかった。

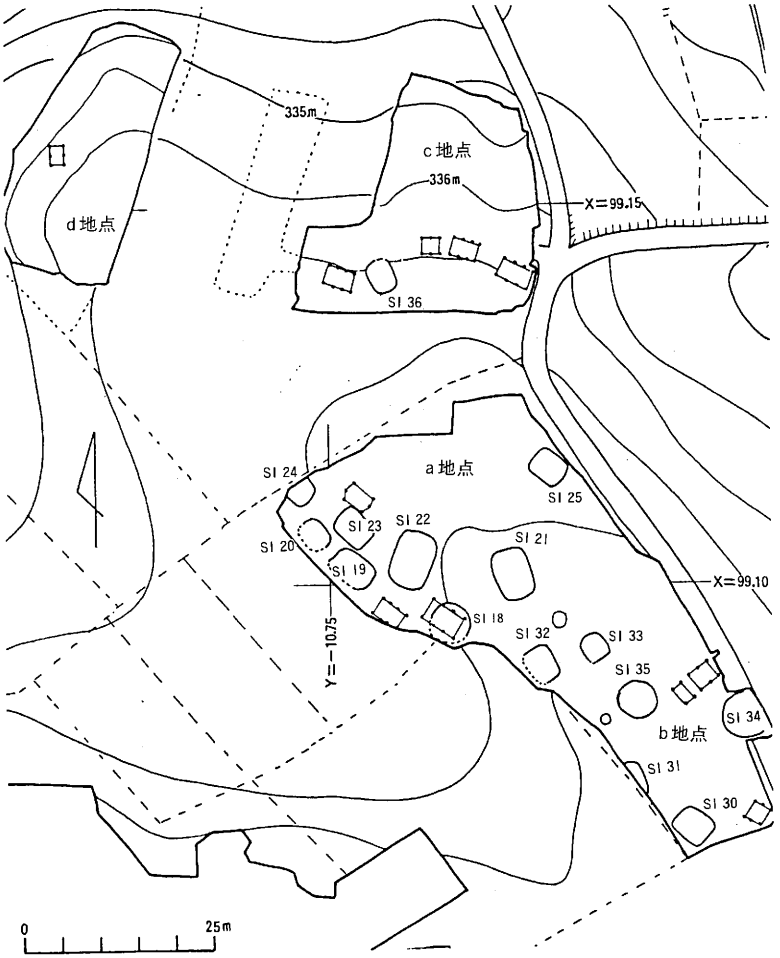


図39　Ⅲ地区主要遺構分布図(1：1,000)

b　遺　　構

発見された主な遺構は弥生中期竪穴住居址３軒、後期住居址11軒、掘立柱建物址11棟、井戸址１基である。

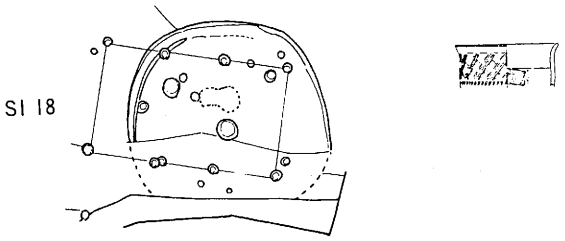
竪穴住居址　中期の住居址は他地区同様に円形プランである。後期は小判形及び隅丸長方形プランである。後期末から古墳時代初頭に位置付けられると推定される住居址は２軒あるが(ＳＩ32・33)、長方形ないし方形である。

弥生時代中期については遺存状態は良くないがＳＩ18について説明を加える(図46)。径530㎝のほぼ円形プランを呈すが、南側は破壊されて不明である。残存部には周溝がめぐる。ほぼ中央に径30㎝、深さ20㎝の土坑がある。柱穴数は不規則であり不明である。なお、掘立柱建物址ＳＢ21に床面の一部が壊されている。後期住居址は遺存状態が良好で、典型的なプランがある。ＳＩ21・22のプランは、短軸側が直線部分のない小判形を呈し、主柱穴５本、出入り口ピット１対、入口右側に貯蔵穴と推定される土坑など、規則的・企画的な配置である(図47・48)。また、ＳＩ23・25は小判形住居より長軸が短い、隅丸長方形のプランを呈する(図48・49)。小型化した分主柱穴も５本から４本となるが、出入り口ピットや貯蔵穴の配置は同様である。なお、ＳＩ32は方形のプランを呈している(図50)。以上、後期住居址は３タイプの形態が存在するが、甕型土器の球胴化や北陸系土器の流入などからほぼ説明した順に変遷していくものと考えられる(図40)。

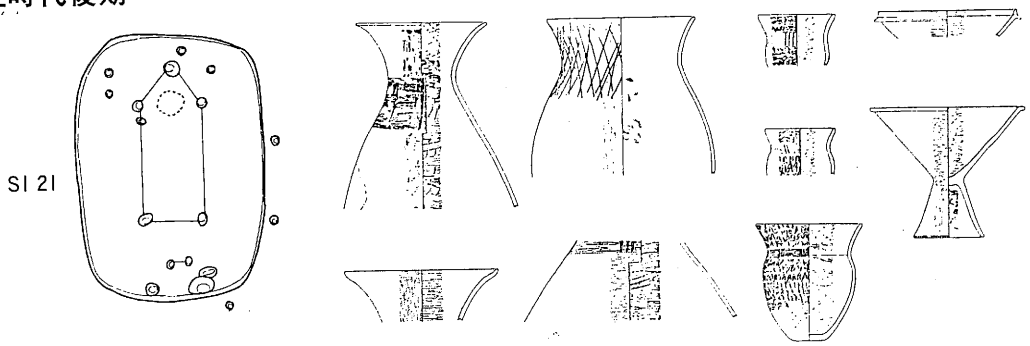
掘立柱建物址　所属時期が明確なものとして、ＳＢ55では中期壺が完形で出土している(図52)。

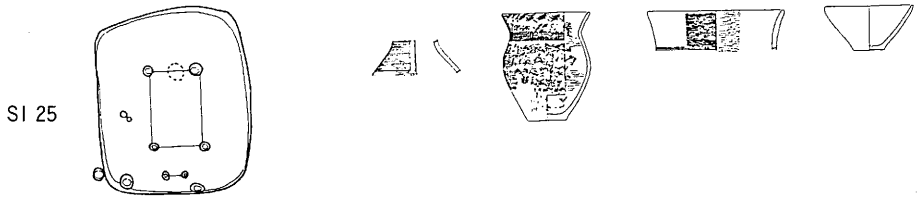
井戸址(図54・ＳＥ１)　径２ｍ、深さ2.4ｍを測る。覆土中より中期・後期の土器片が出土しているので、弥生後期もしくは後期以降に位置付けられると思われる。

弥生時代中期



弥生時代後期





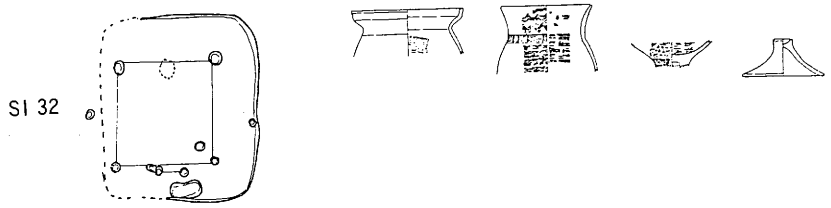


図40　Ⅲ地区遺構・甕の変遷

図41　III地区全体図(1：600)

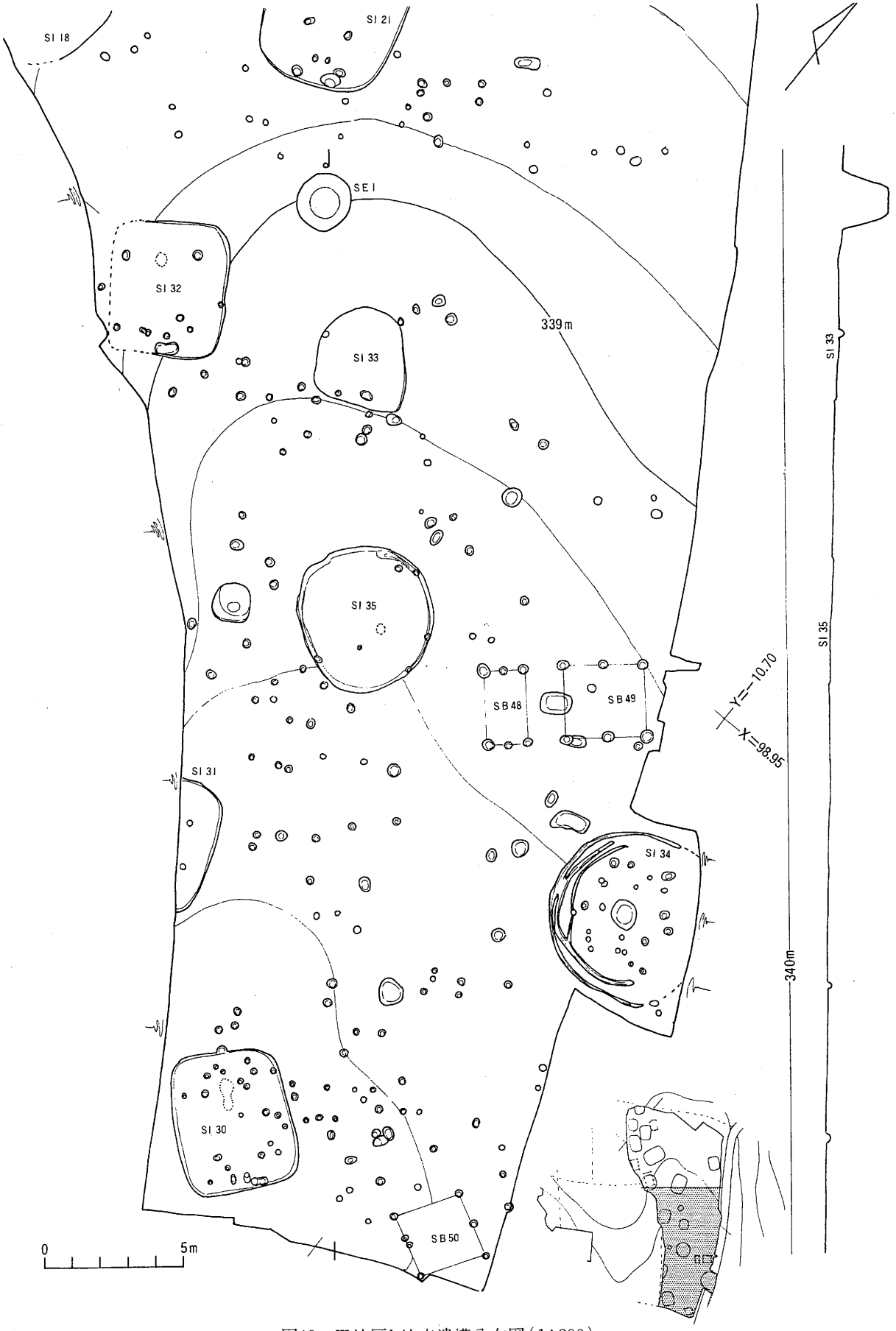


図42　Ⅲ地区b地点遺構分布図（1：200）

図43　Ⅲ地区a地点遺構分布図（1：200）

図44　Ⅲ地区c地点遺構分布図(1：200)

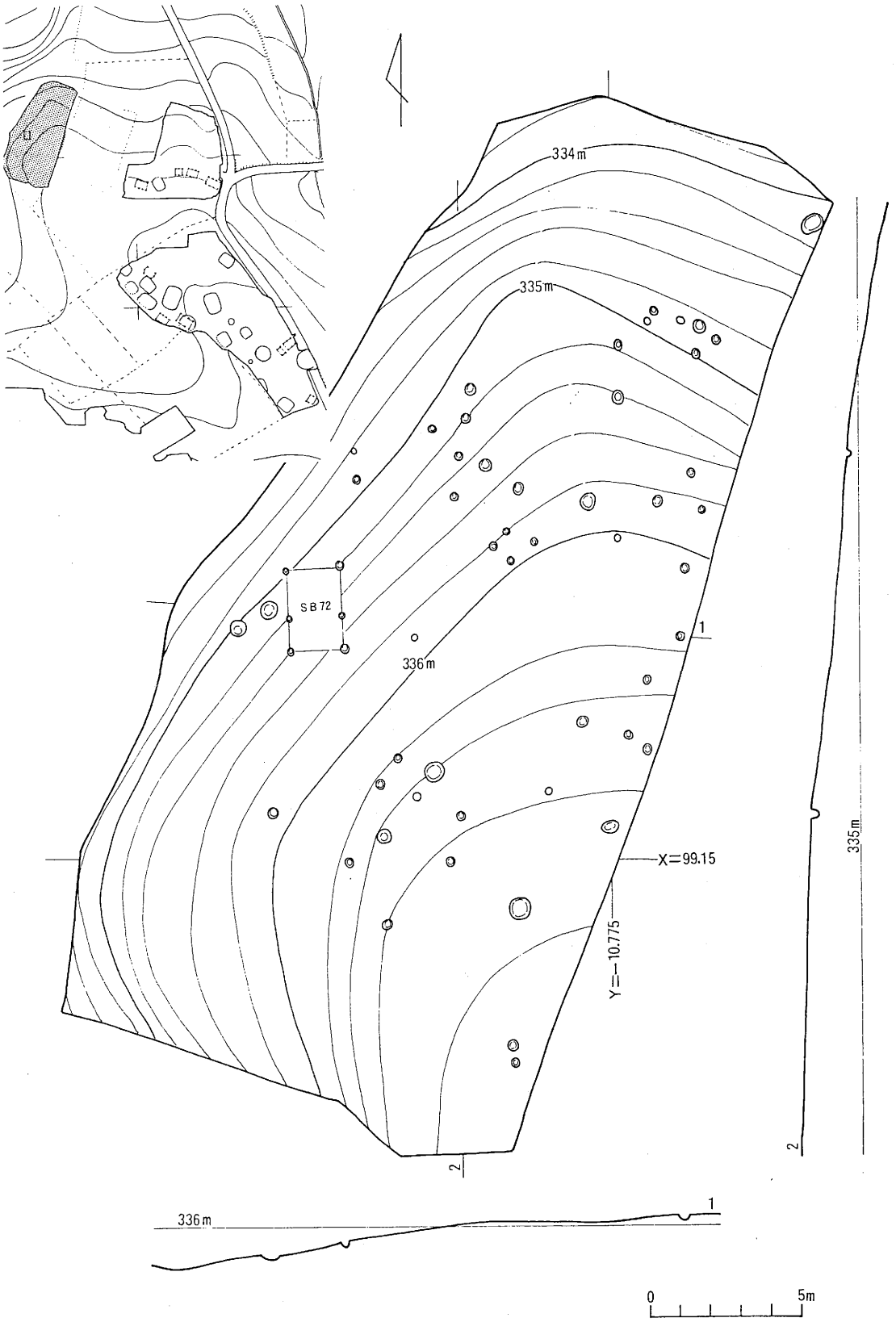


図45　Ⅲ地点d地点遺構分布図(1:200)

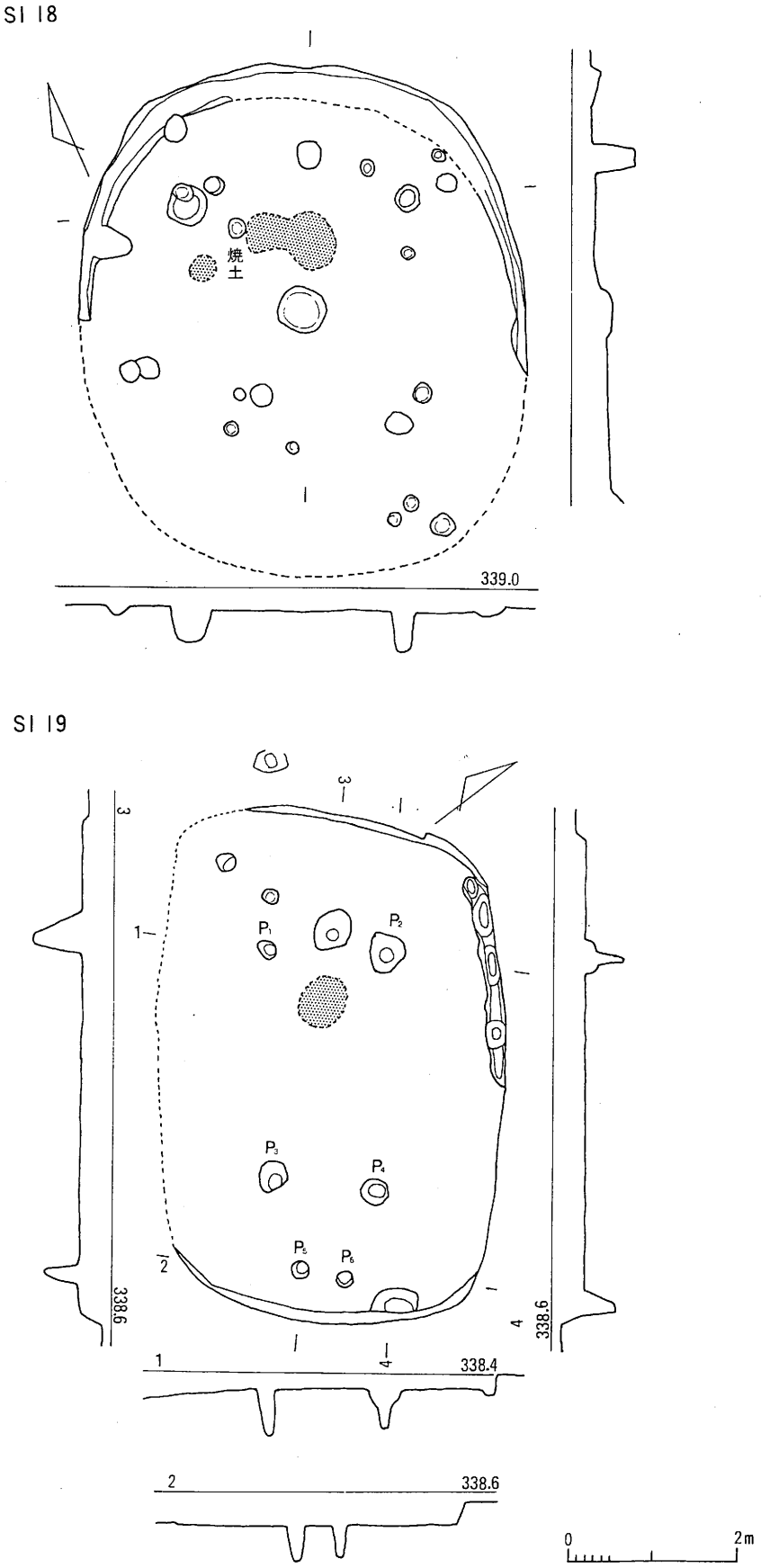


図46　Ⅲ地区ＳＩ18・19号位居址実測図（1：80）

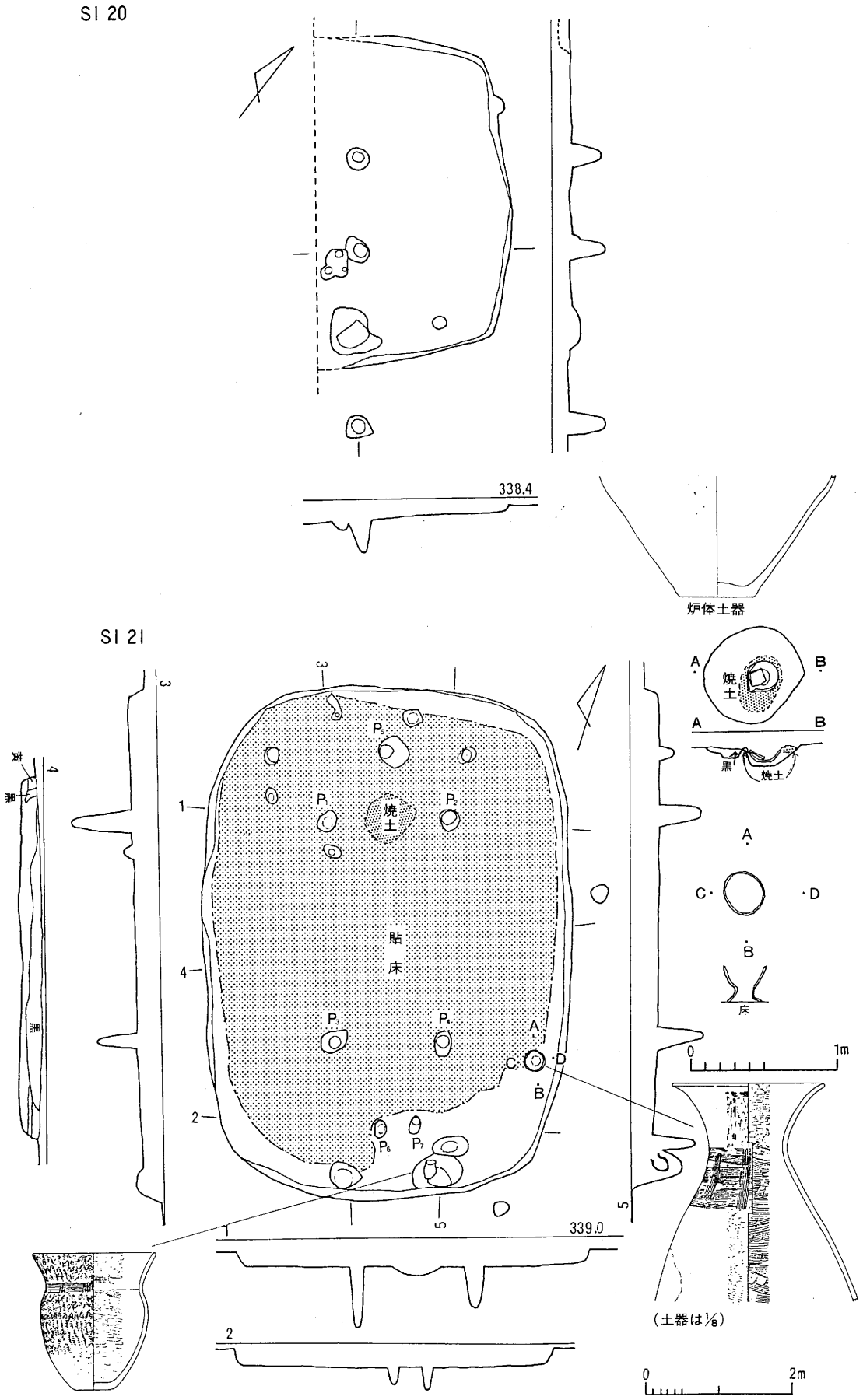
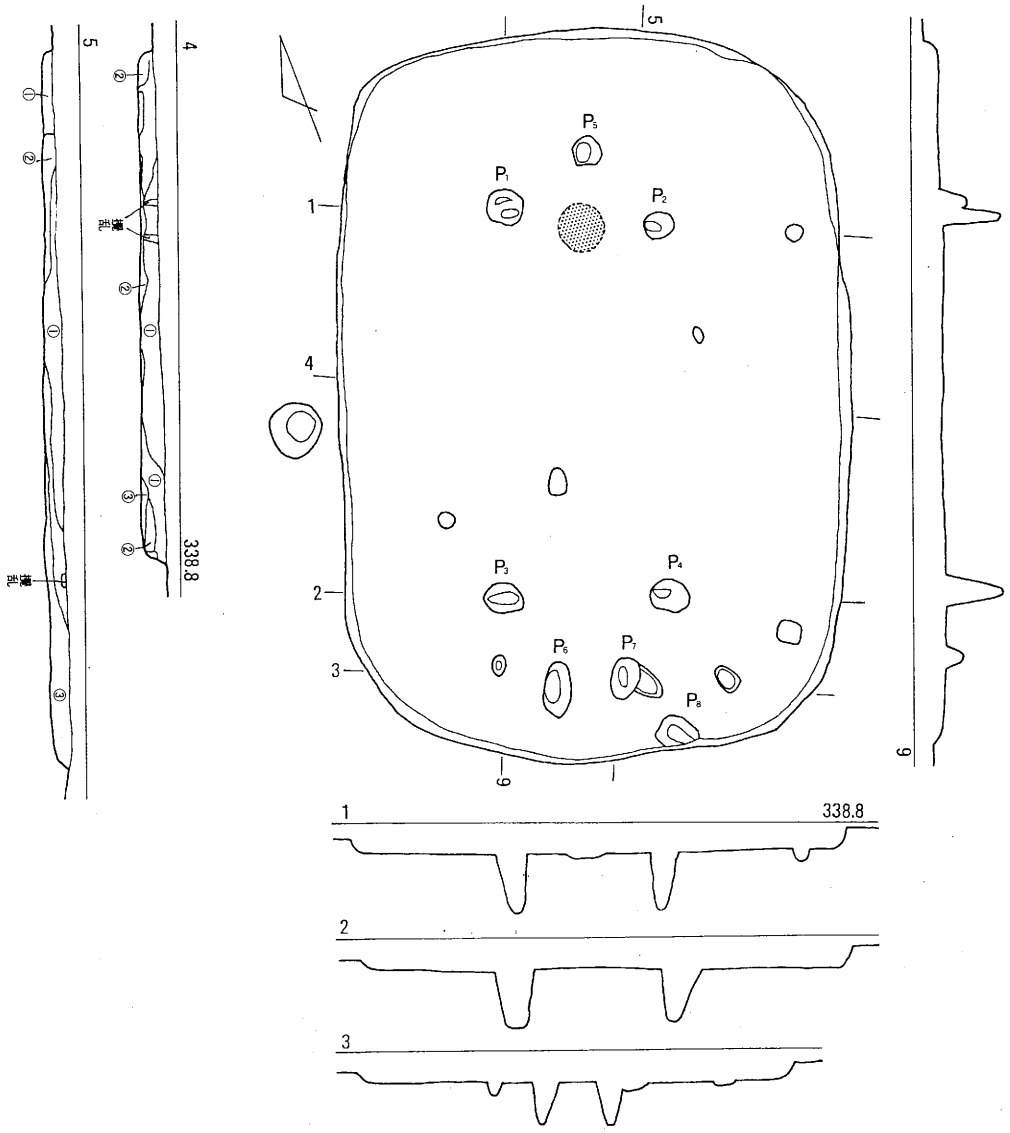


図47　Ⅲ地区ＳＩ20・21号住居址実測図(1：80)

SI 22



SI 23

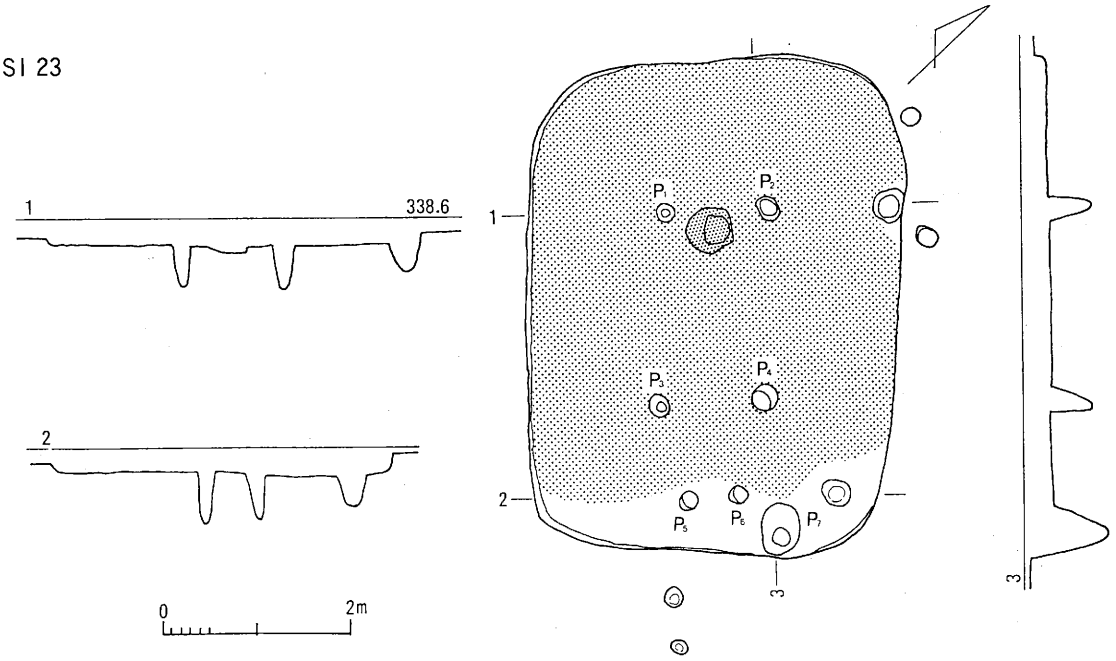


図48　Ⅲ地区ＳＩ22・23号住居址実測図（1：80）

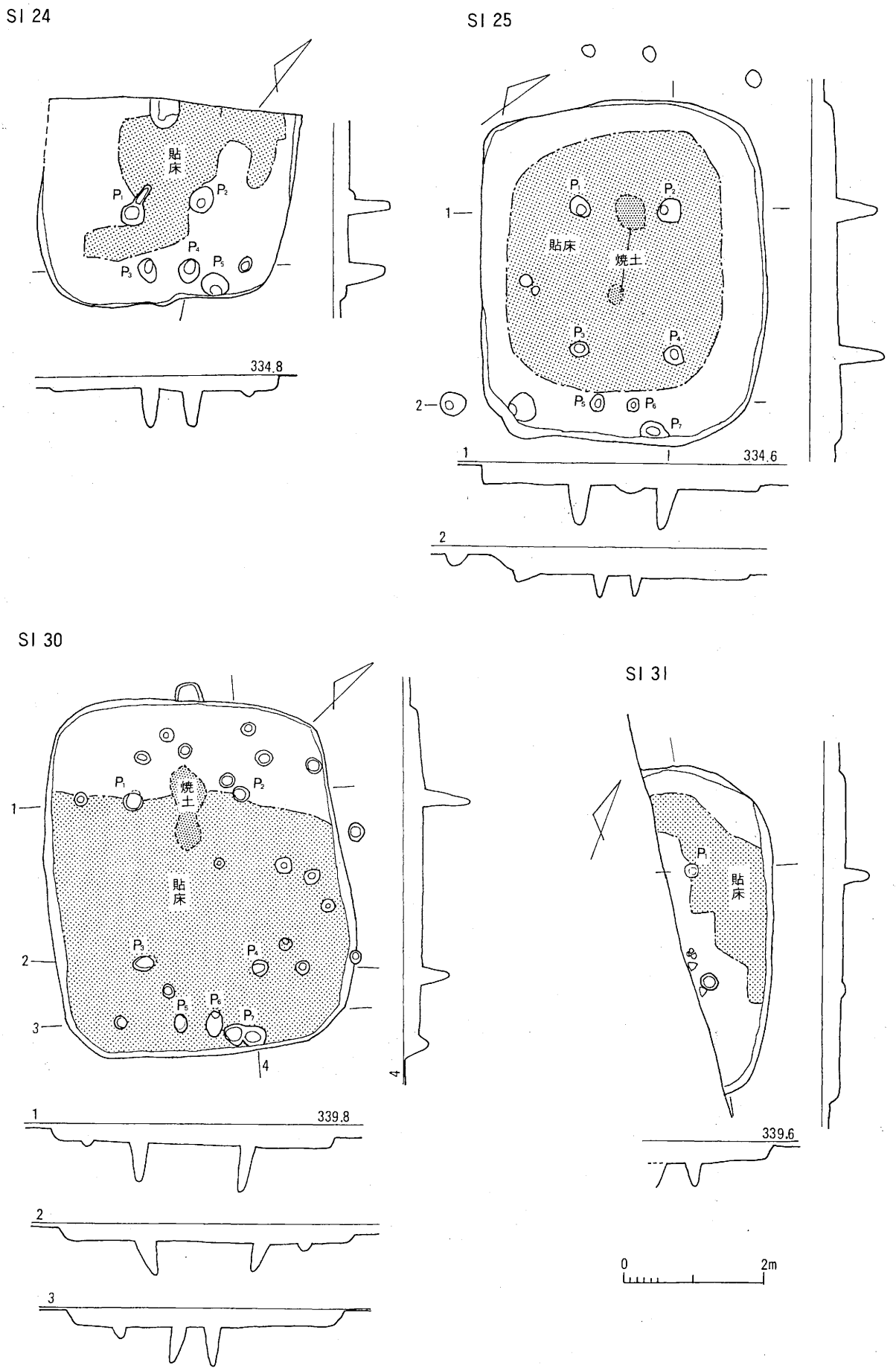


図49　Ⅲ地区ＳＩ24・25・30・31号住居址実測図(1：80)

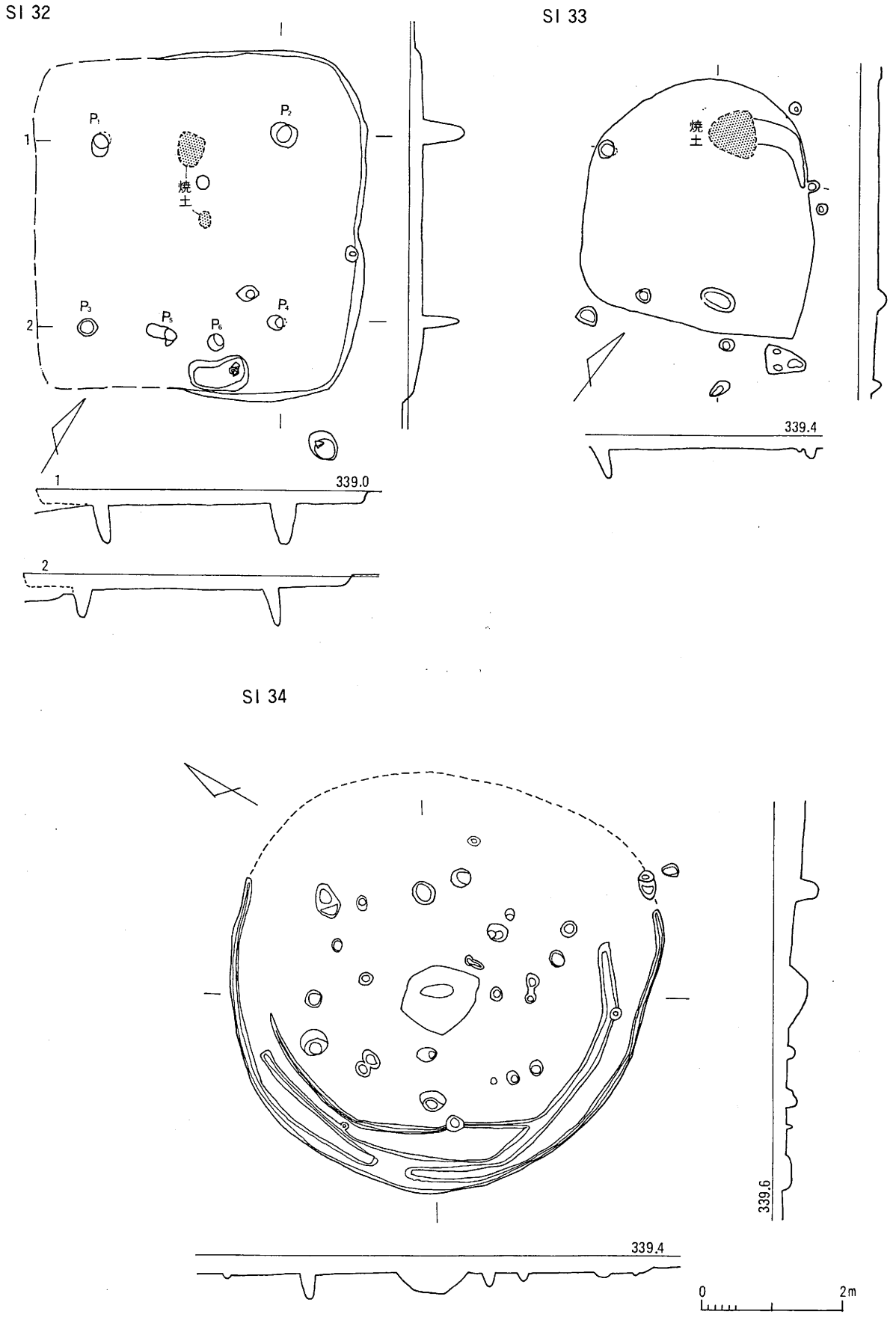
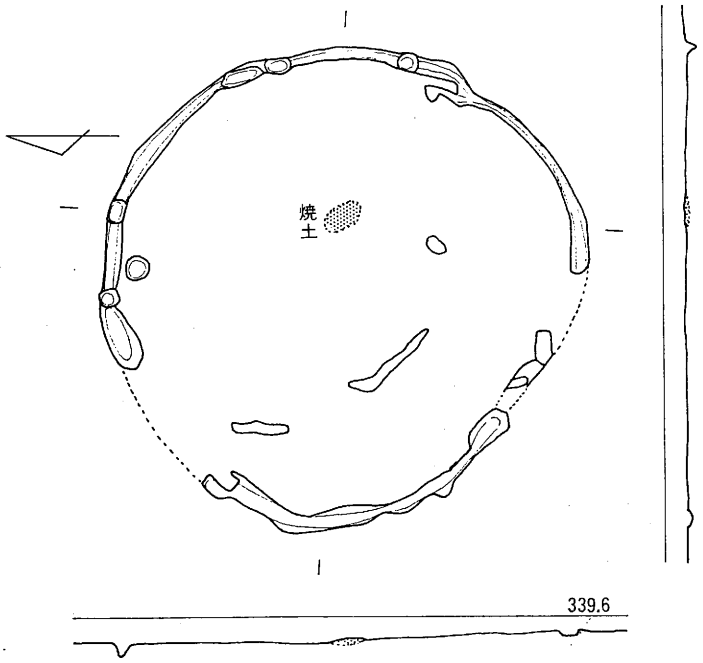


図50　Ⅲ地区ＳＩ32～34号住居址実測図（1：80）

SI 35



SI 36

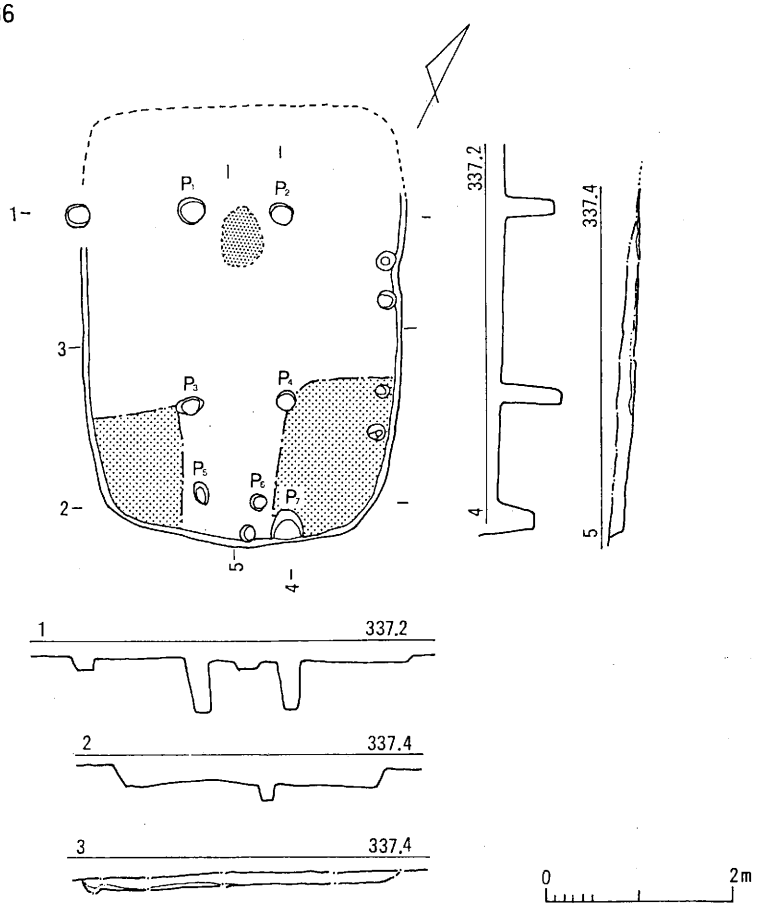


図51　Ⅲ地区ＳＩ35・36号住居址実測図(1：80)

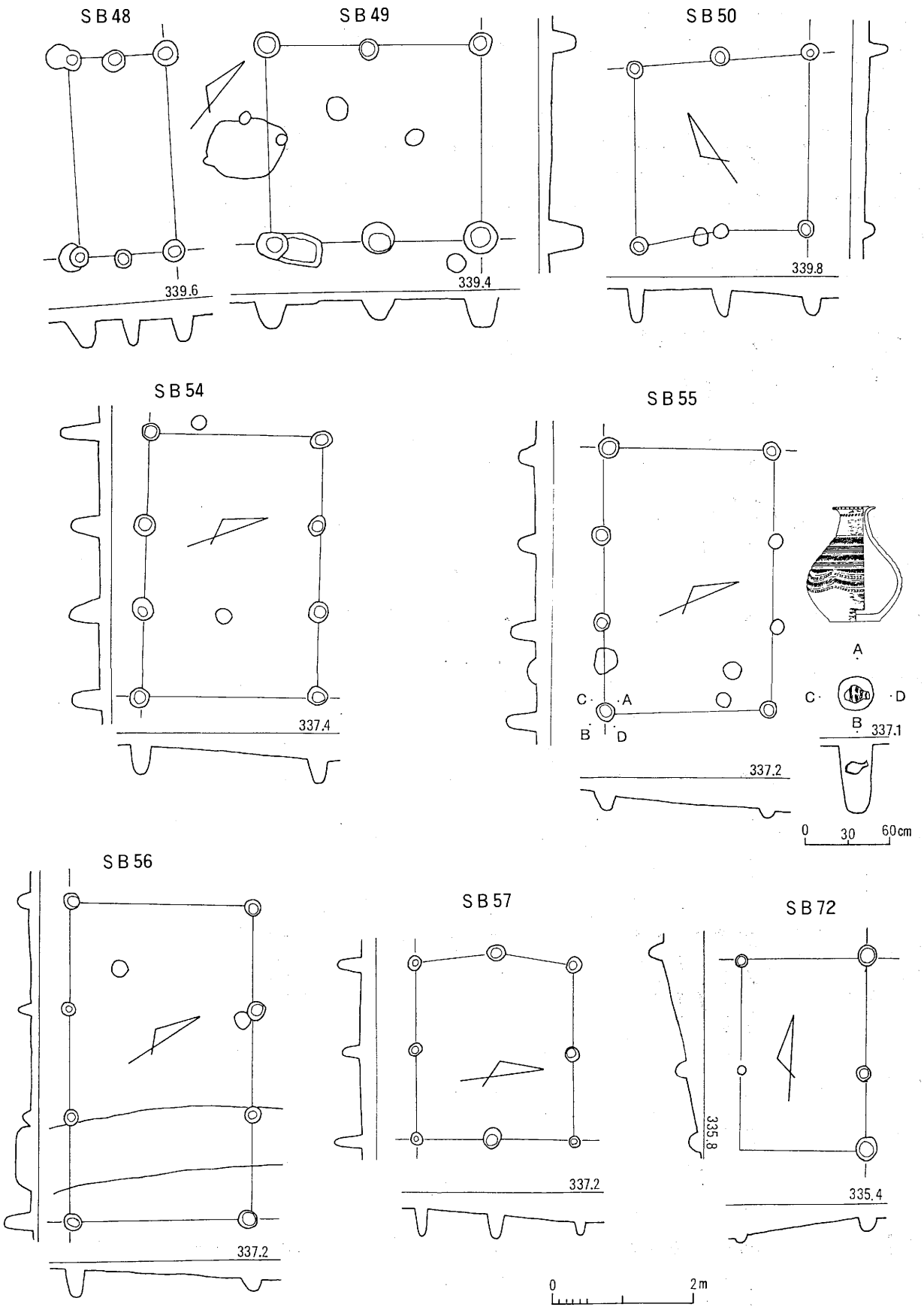


図52　Ⅲ地区ＳＢ48～50, 54～57, 72号掘立柱建物址実測図(1:80)

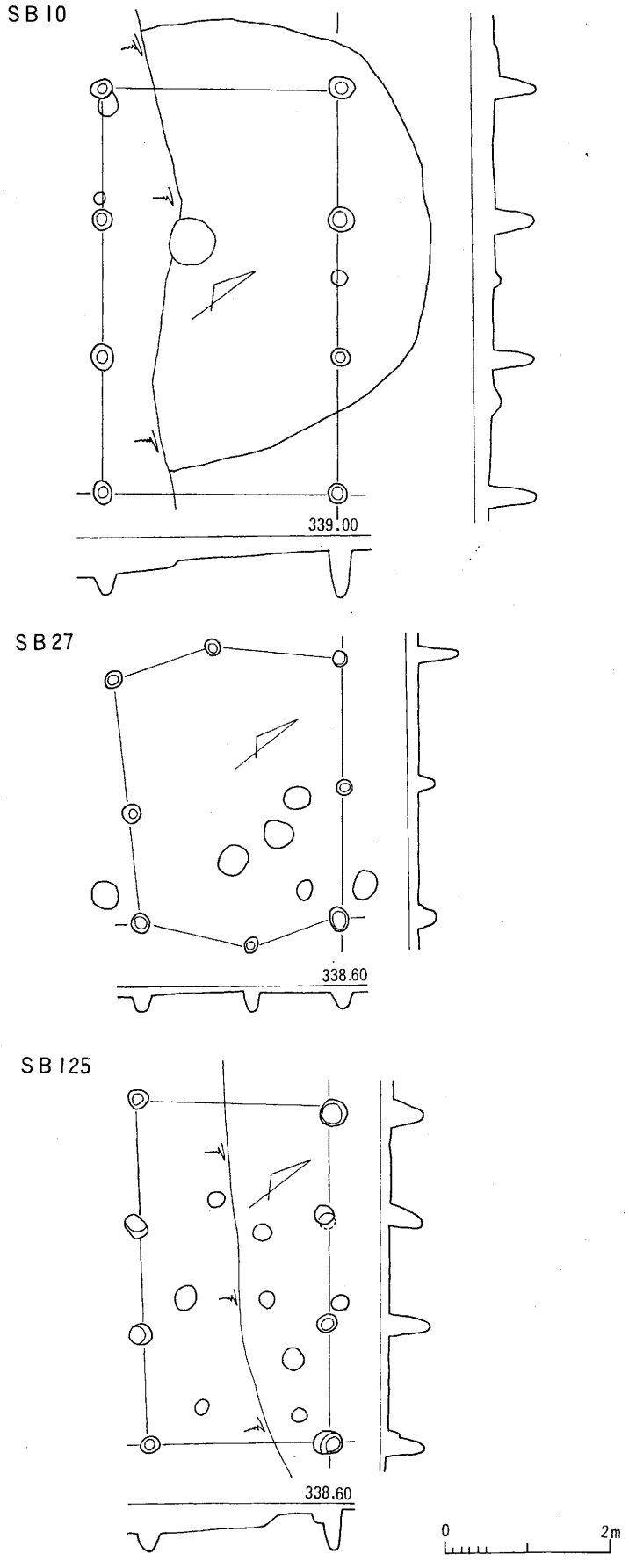


図53　Ⅲ地区ＳＢ10, 27, 127号掘立柱建物址実測図（1：80）

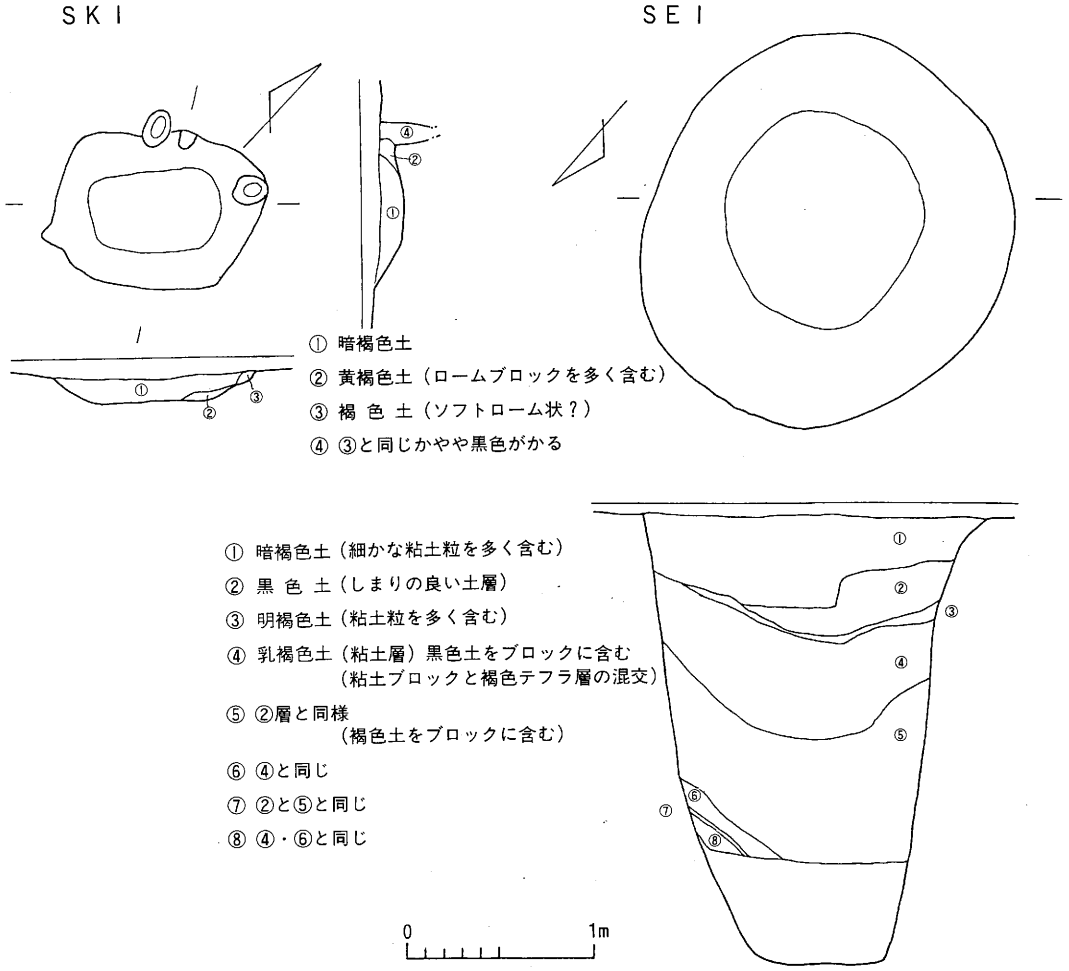


図54　Ⅲ地区ＳＫ１号土坑，ＳＥ１号井戸址実測図（1：40）

4　Ⅳ地区の概要

a　概　　要

平坦面が少ないものの馬の背状台地が長く続いている。昭和63年の調査地区は台地の高位で、第１次造成分の北端であったが(図55　ａ地点)、２次造成分で台地の中央から末端面までの大半が削平されることとなった(図55　ｂ、ｃ、ｄ地点)。

ａ地点では弥生時代中期の竪穴住居址２軒、及び掘立柱建物址10棟を検出した(図55)。

ｂ地点では竪穴住居址４軒、掘立柱建物址７棟が密集して検出されている(図57)。時代的にはＳＩ40号住居址のみ弥生時代後期であり、他の住居址は中期に比定される。

ｃ地点は約5,000㎡の広さを調査した。東西に小支谷が入り込み、平坦面は狭い。遺構では弥生時代中期の竪穴住居址２軒、掘立柱建物址14棟、木棺墓94基を確認している(図58～60)。

ｄ地点は、本地区の丘陵が低地に接する部分で、緩斜面となっている。かつて土地所有者が天地返しを行ったとのことであり、テフラ層まで破壊されている部分が多くあった。発見された遺構は掘立柱建物址３軒、土坑２基、溝状土坑３基となっている。

b　遺　　構

検出された遺構は、弥生時代中期住居址７軒、後期住居址１軒、掘立柱建物址32棟、土壙墓94基ほかである。

木棺墓　ここで注目されるのは94基確認された木棺墓である。大別して長軸が南北・東西の二方向があり、そのほかのものも斜面に直行乃至平行している。配置は南側の谷開口部に対して弧状に、ほぼ等高線にそってまとまりを有している。一部に木棺墓同士の切り合いがあり、さらに掘立柱建物址に切られている木棺墓もある。したがって、若干の時期差が存在しているものと考えられる。構造的には、木口痕のみを有するものが大半を占め、若干のくぼみを有した木棺墓は10基、そのほか木口痕の認められない土壙墓は５基存在している。木口痕のみのものは、約20cmの表土直下で露呈してしまうためで、表土の流出や耕作により壁が破壊されてしまったためと考えられる。しかし、確認面より壙底まで30cmある土壙墓も存在するところから、木棺墓は元来掘り方自体浅いものであったのかもしれない。規模は、木口痕間の距離が200cm、幅75cmの大型タイプと、同60cm幅40cmの小型タイプとがある。出土遺物は、管玉や勾玉の装飾品のみで土器は木口痕に小破片で混在的に出土したのみであった。管玉・勾玉は５基から出土している。そのうちの１基は土壙墓(ＳＫＢ43)で、計34点の管玉が出土した。他の４基からは１点から36点出土し、さらにそのうち１基(ＳＫ69)からは勾玉１点が管玉とともに出土している(図72)。なお、木棺墓の方位・規模計測表は図146に掲載してある。

竪穴住居址　中期の円形プランと後期の長方形乃至方形プランの形態が認められる。中期住居址はＳＩ27・28・37・38・39・41・42の７軒で、ＳＩ17・28・41・42号住居址は典型的な円形プランを呈する。規模は４ｍ～６ｍで、周溝がめぐっている。中央に径約60cmの土坑を持つことも共通している。主柱穴は明確な住居はないが、ＳＩ27号住居址（図61）ではP_1～P_5の５本と考えられる。また、ＳＩ37～39号住居址は周溝を一部に持つが、プランは隅丸長方形(図62　ＳＩ37・39)ないしは楕円形(ＳＩ38)である。

後期の竪穴住居址はＳＩ40号住居址の１軒のみである(図62)。長方形プランを呈し、670×510cmを測る大型の住居址である。主柱穴はP_1～P_5の５本で、P_6、P_7は出入り口施設の柱穴と思われる。また、P_8は貯

蔵穴であろう。炉は、奥の主柱穴３本に囲まれた中央に設置されている。床は明確な貼り床ではないが堅緻である。

掘立柱建物址は32棟を数える。所属時期は不明であるが、本台地で後期住居址が１軒のみであることを考慮すれば、その多くが弥生中期に属するものではないかと考えている。規模計測値は表２に掲げた。

図55　Ⅳ地区全体図(1)(1:600)

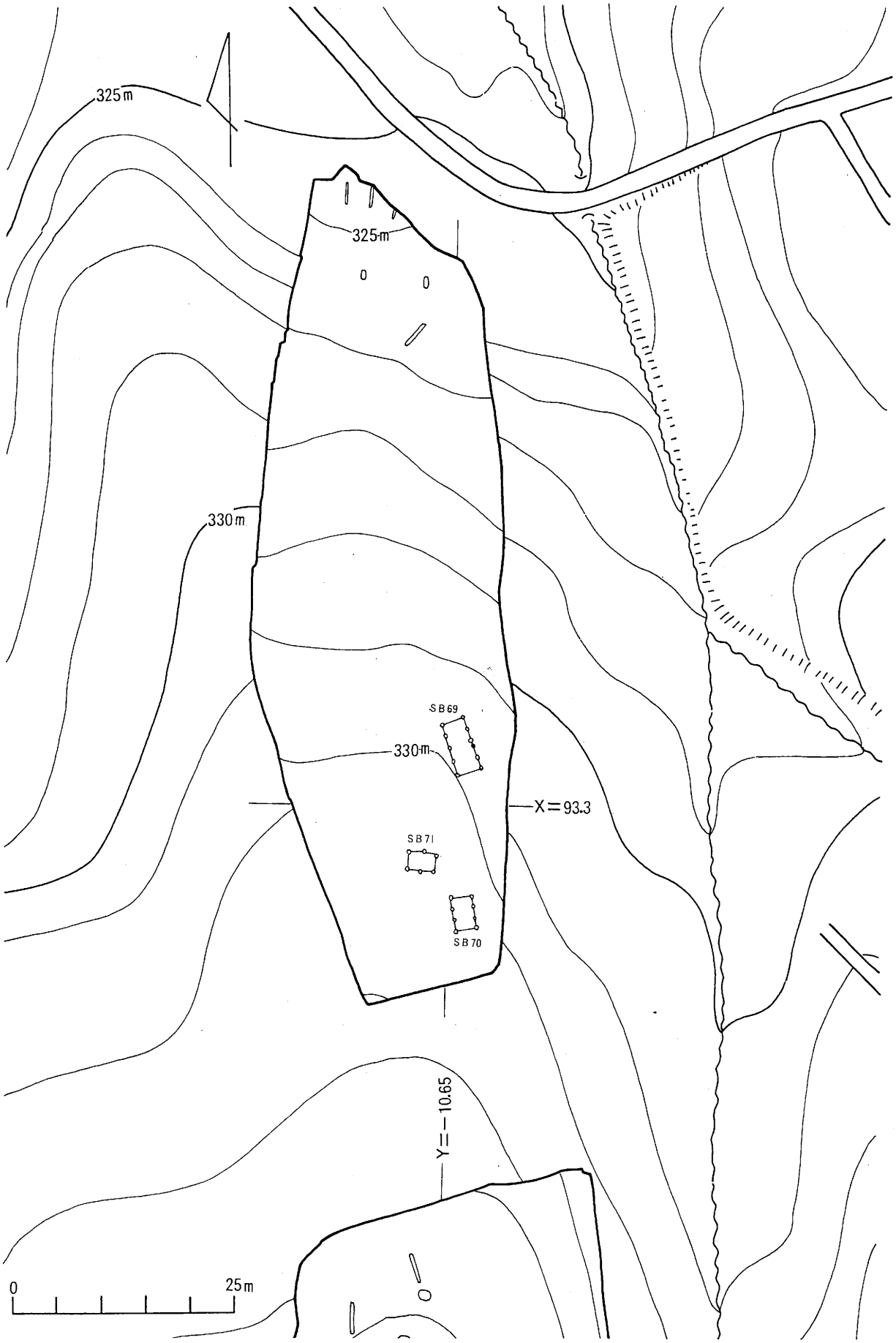


図56　Ⅳ地区全体図(2)(1:600)

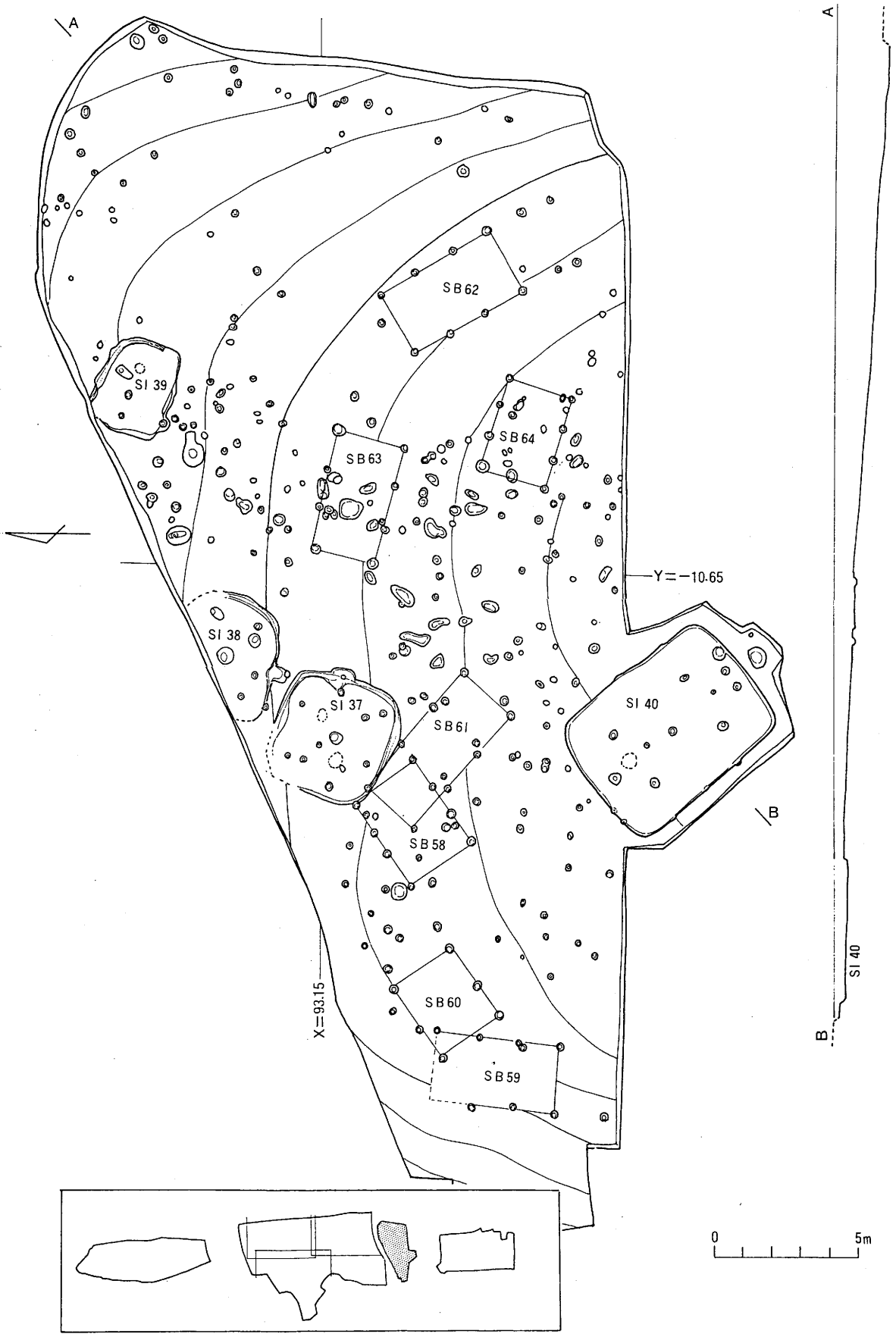


図57　Ⅳ地区b地点遺構分布図(1:200)

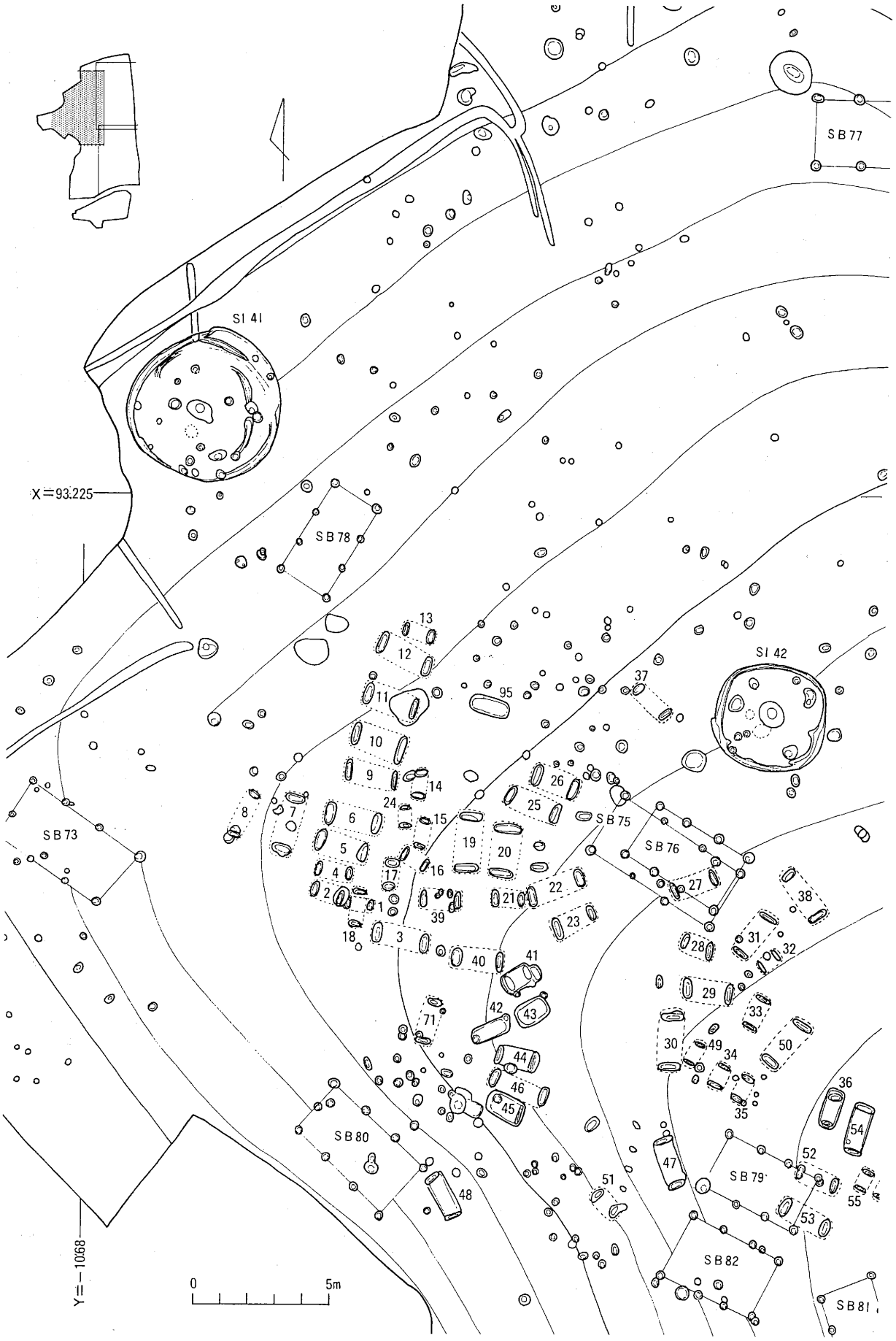


図58　Ⅳ地区c地点遺構分布図(1)(1：200)

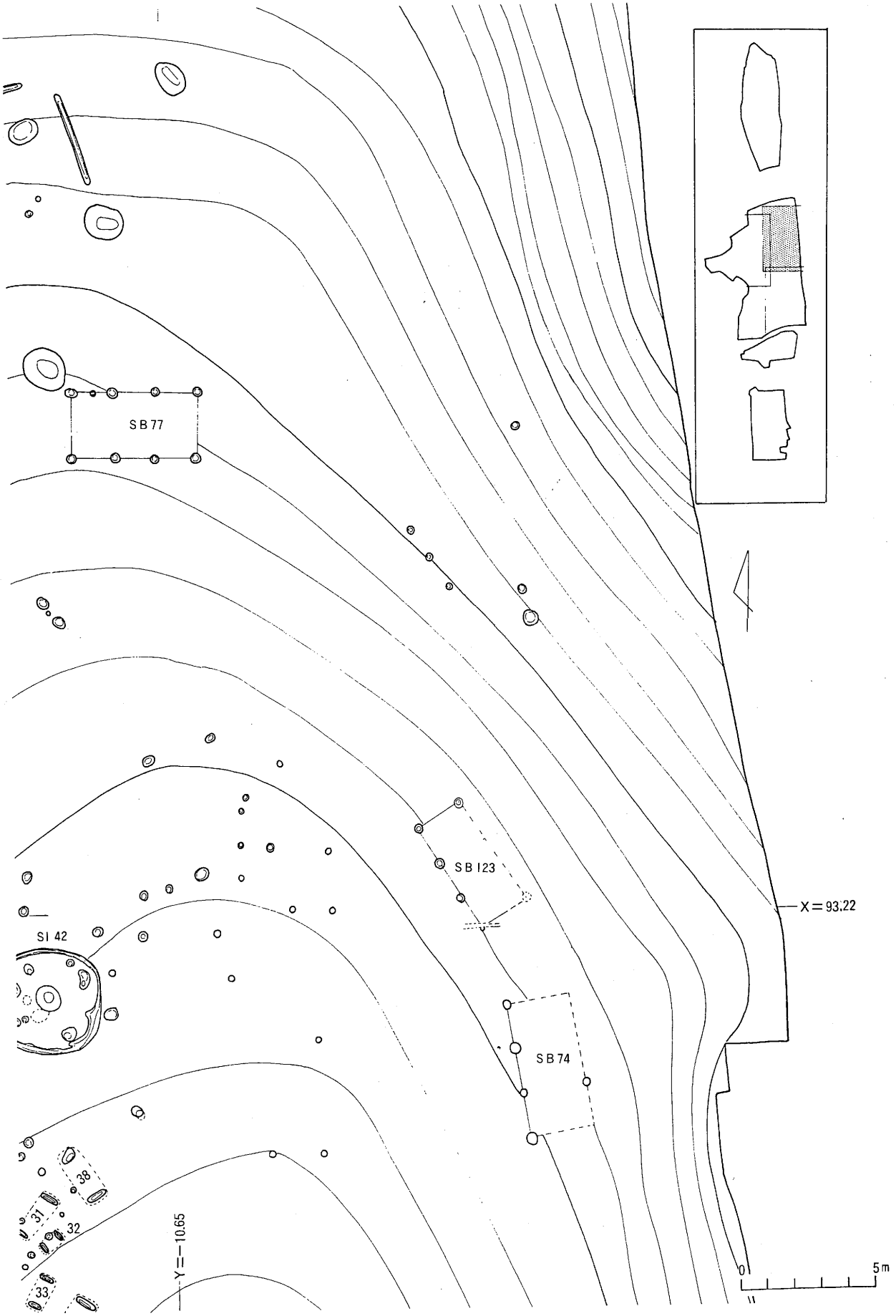


図59　Ⅳ地区c地点遺構分布図(2)(1:200)

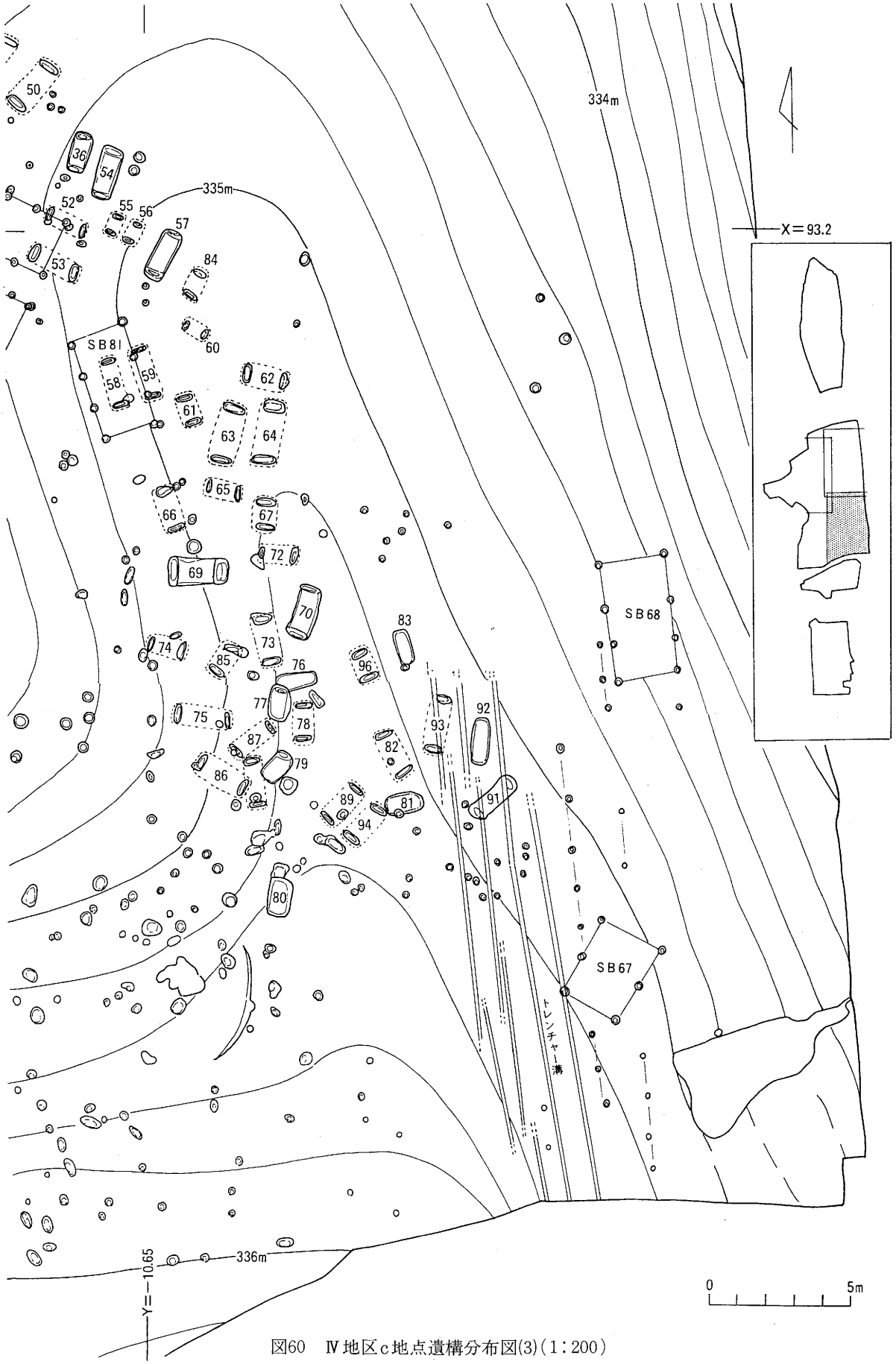


図60　Ⅳ地区c地点遺構分布図(3)(1：200)

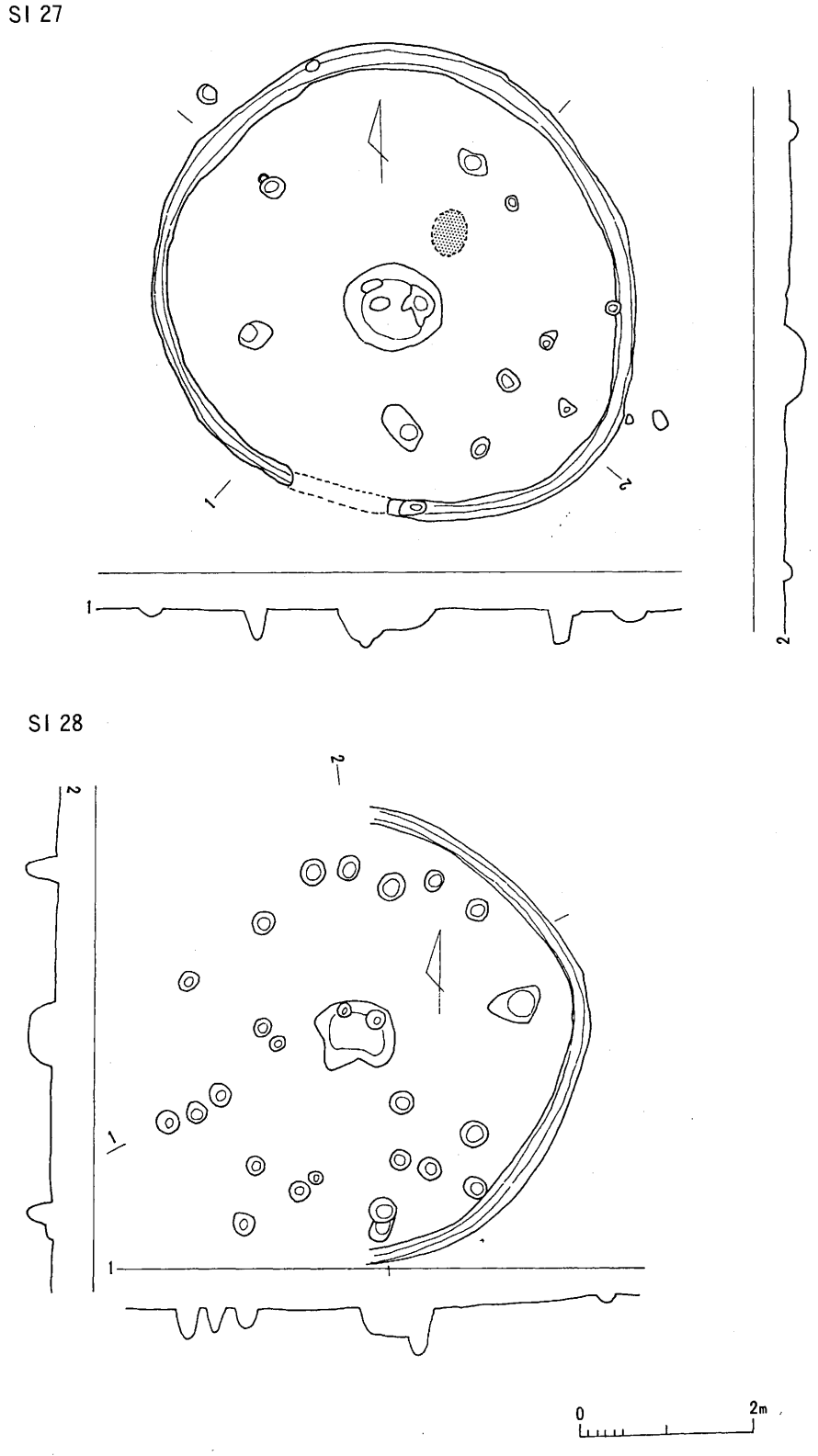


図61　Ⅳ地区ＳＩ27・28号住居址実測図(1：80)

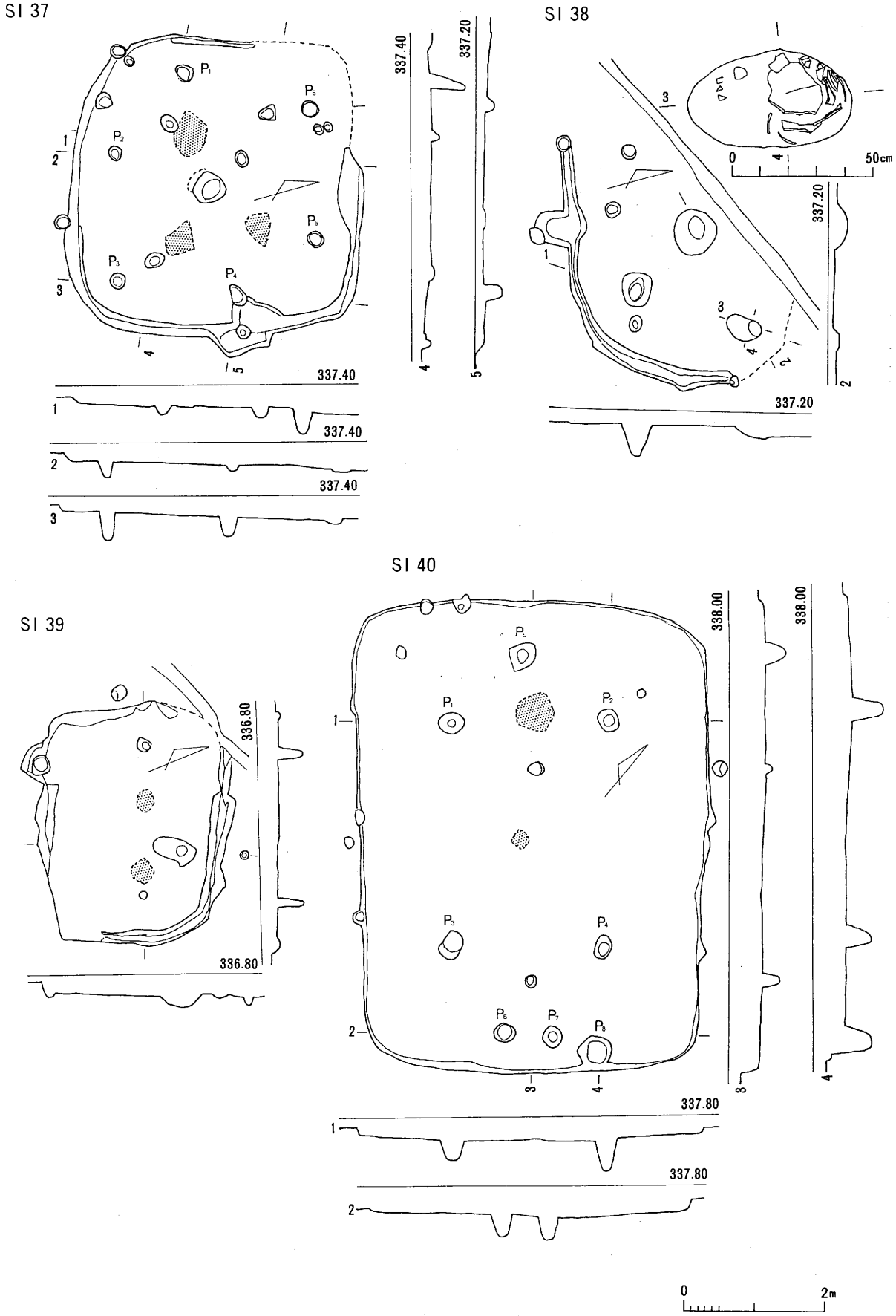
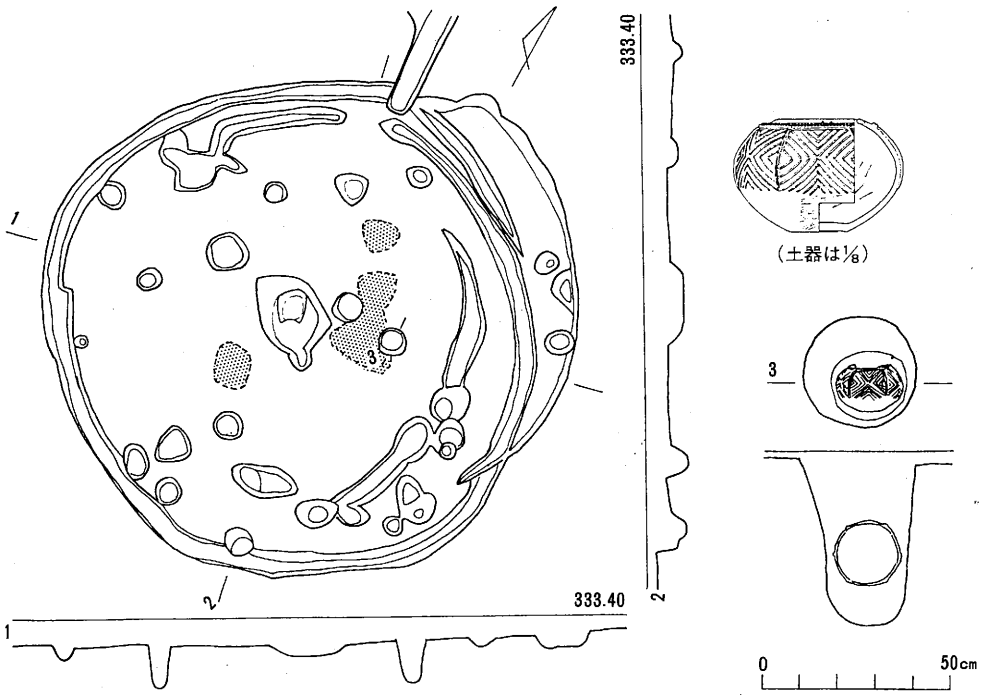


図62　Ⅳ地区ＳＩ37・38・39・40号住居址実測図（1：200）

SI 41



SI 42

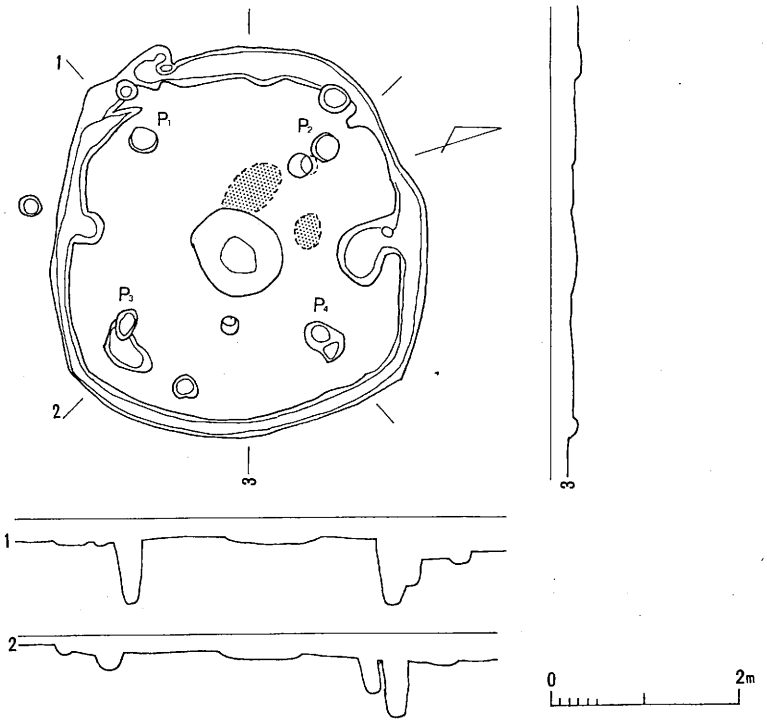


図63　Ⅳ地区ＳＩ41・42号住居址実測図(1:200)

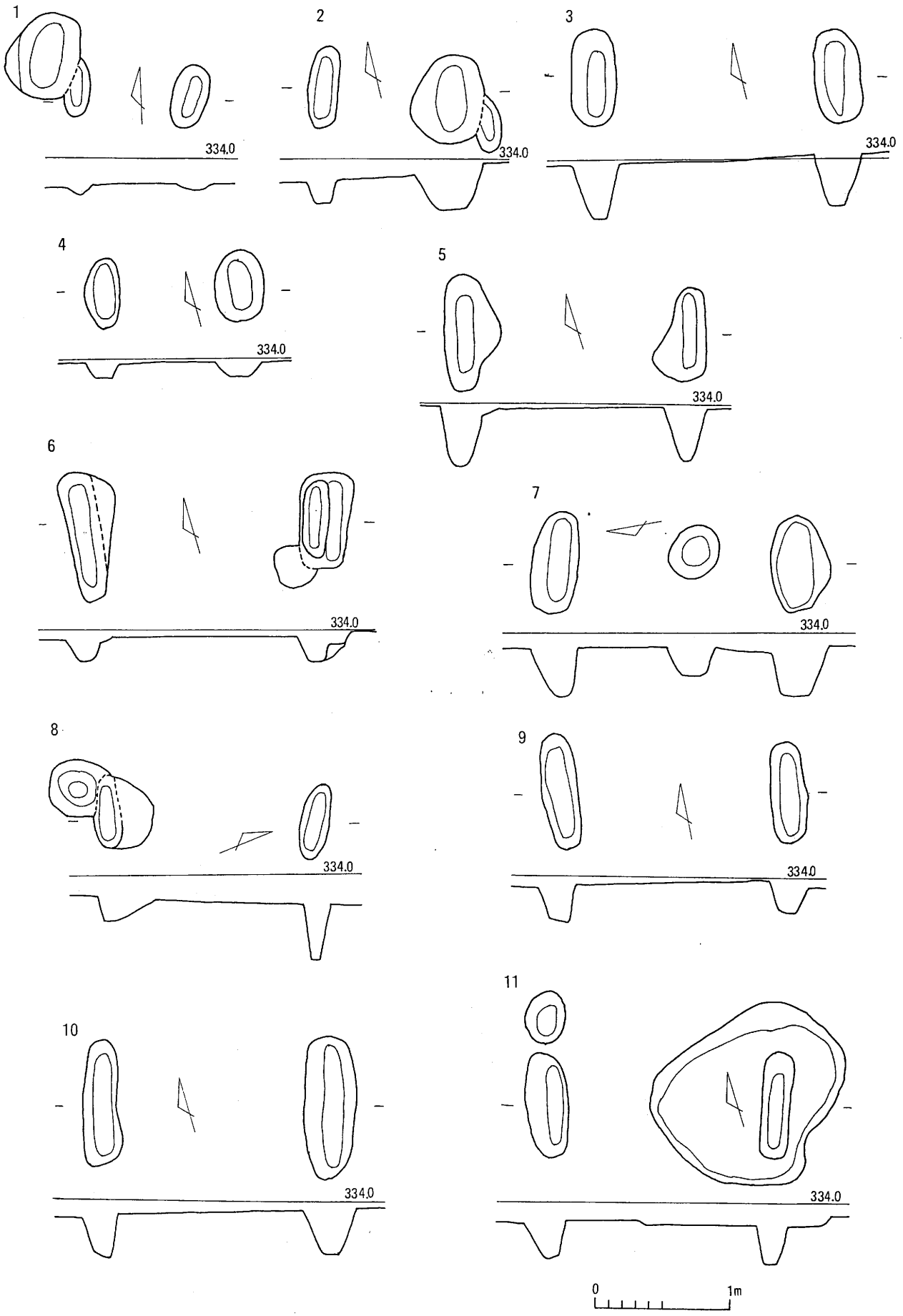


図64　Ⅳ地区木棺墓実測図(1)(1：40)

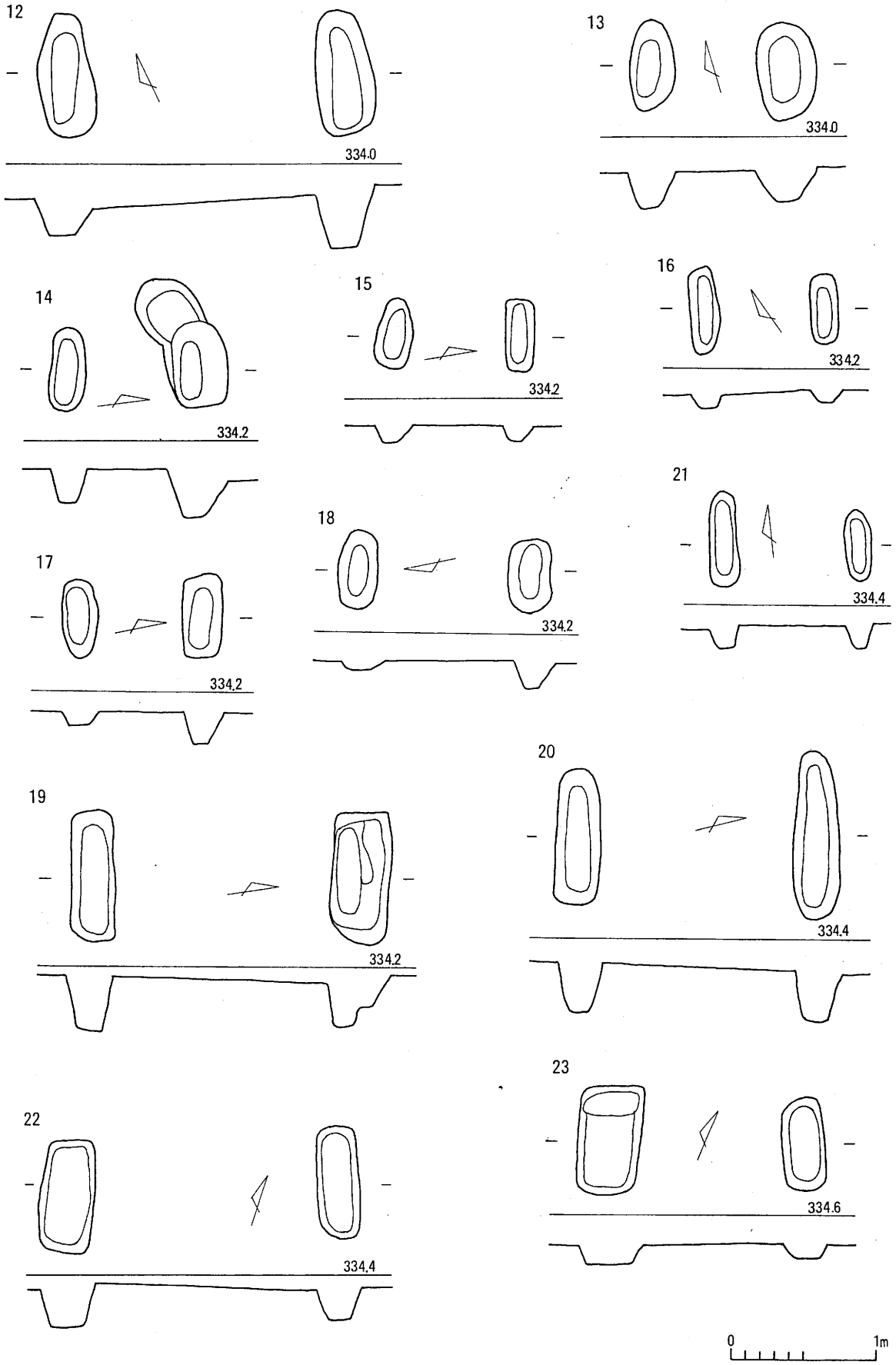


図65　Ⅳ地区木棺墓実測図(2)(1：40)

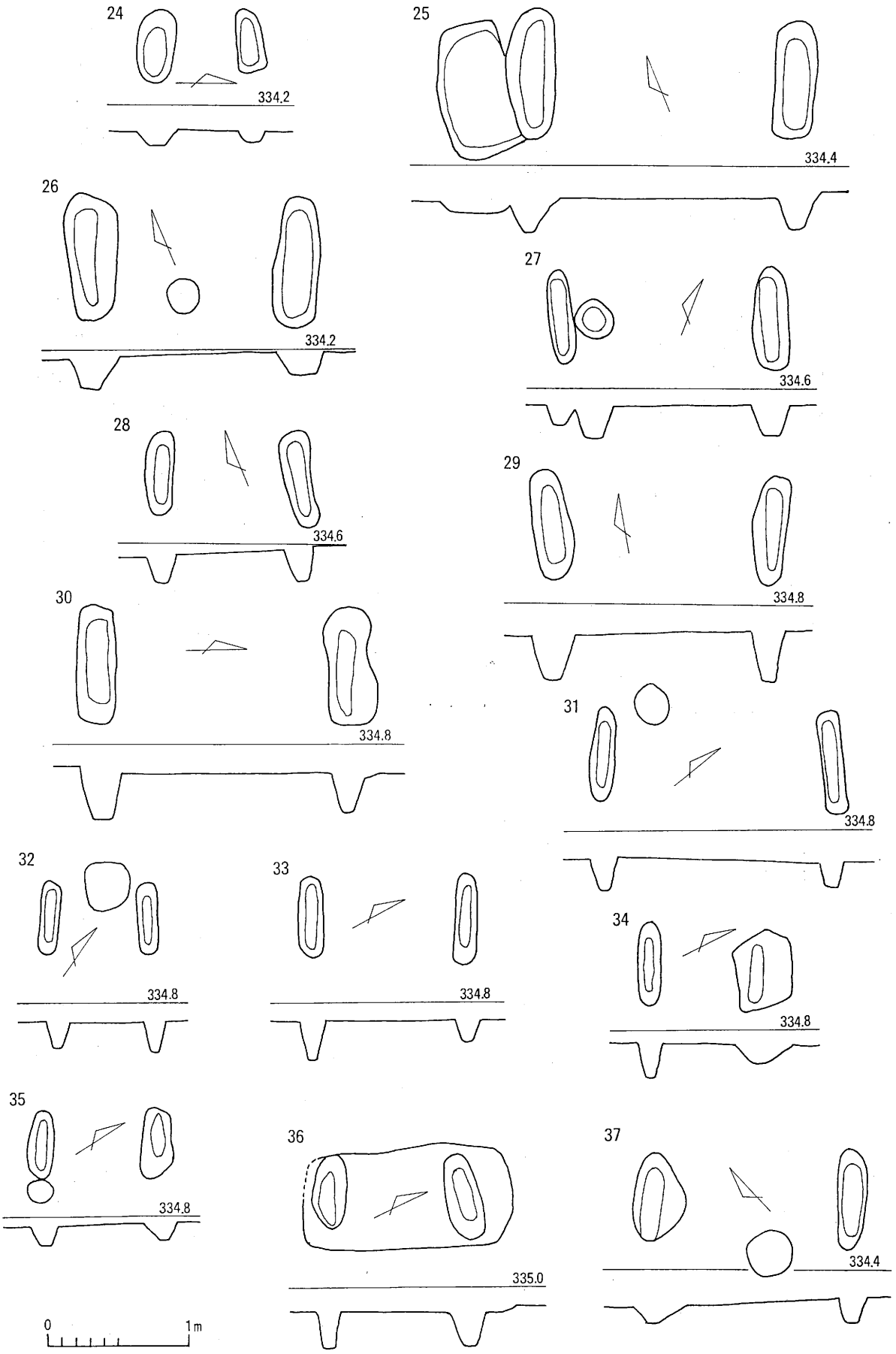


図66　Ⅳ地区木棺墓実測図(3)(1：40)

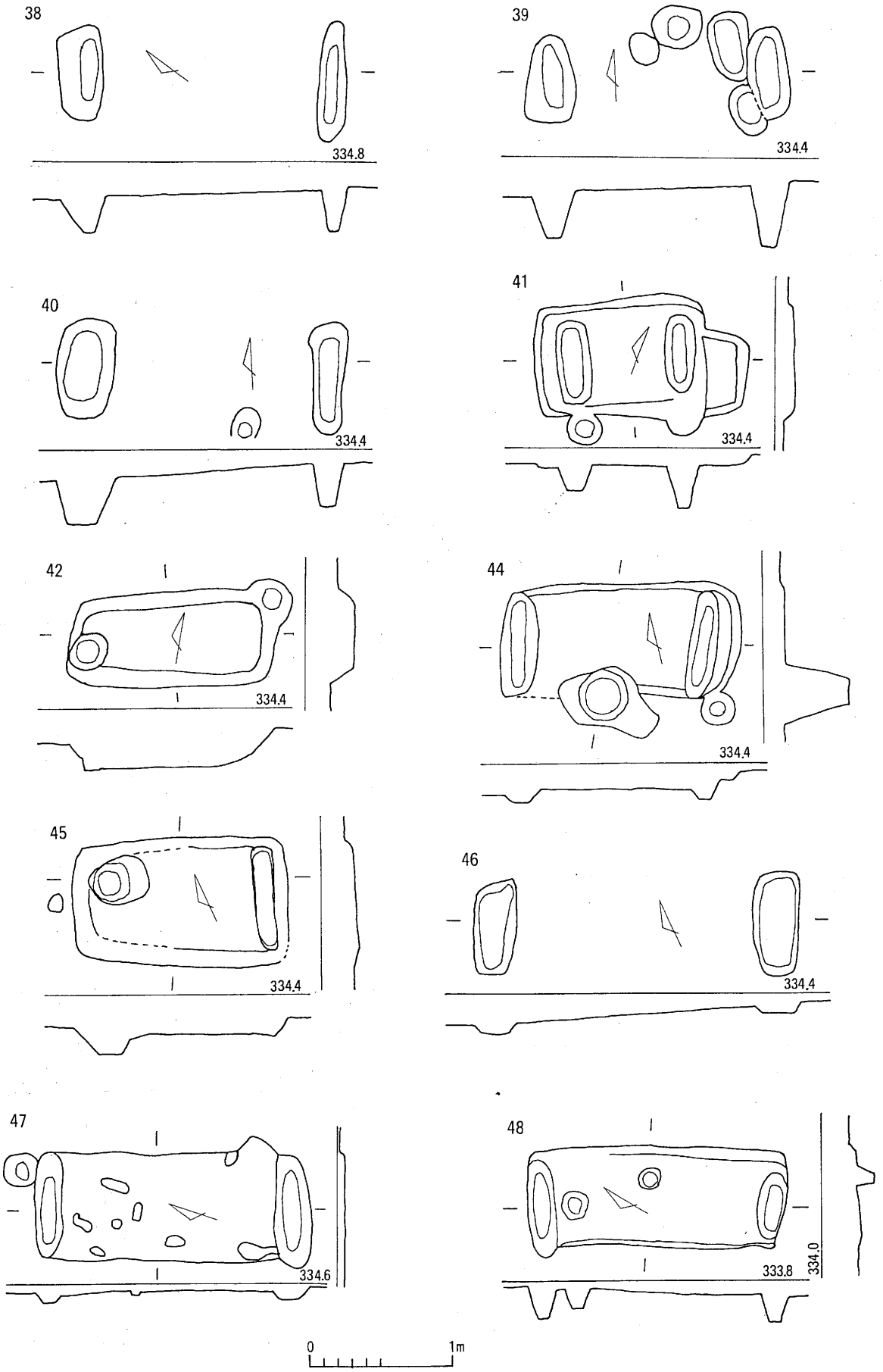


図67　Ⅳ地区木棺墓実測図(4)(1：40)

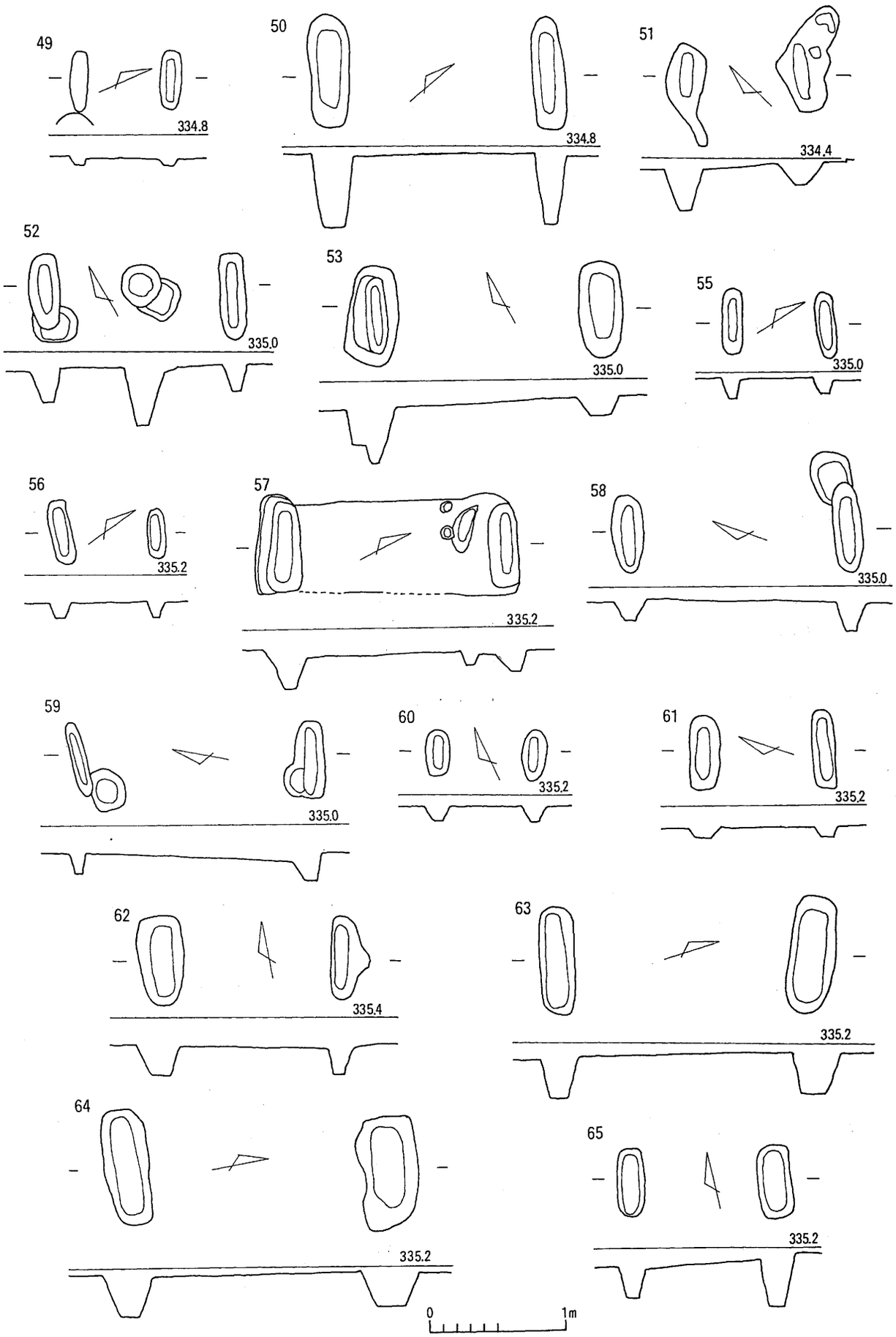


図68　Ⅳ地区木棺墓実測図(5)(1：40)

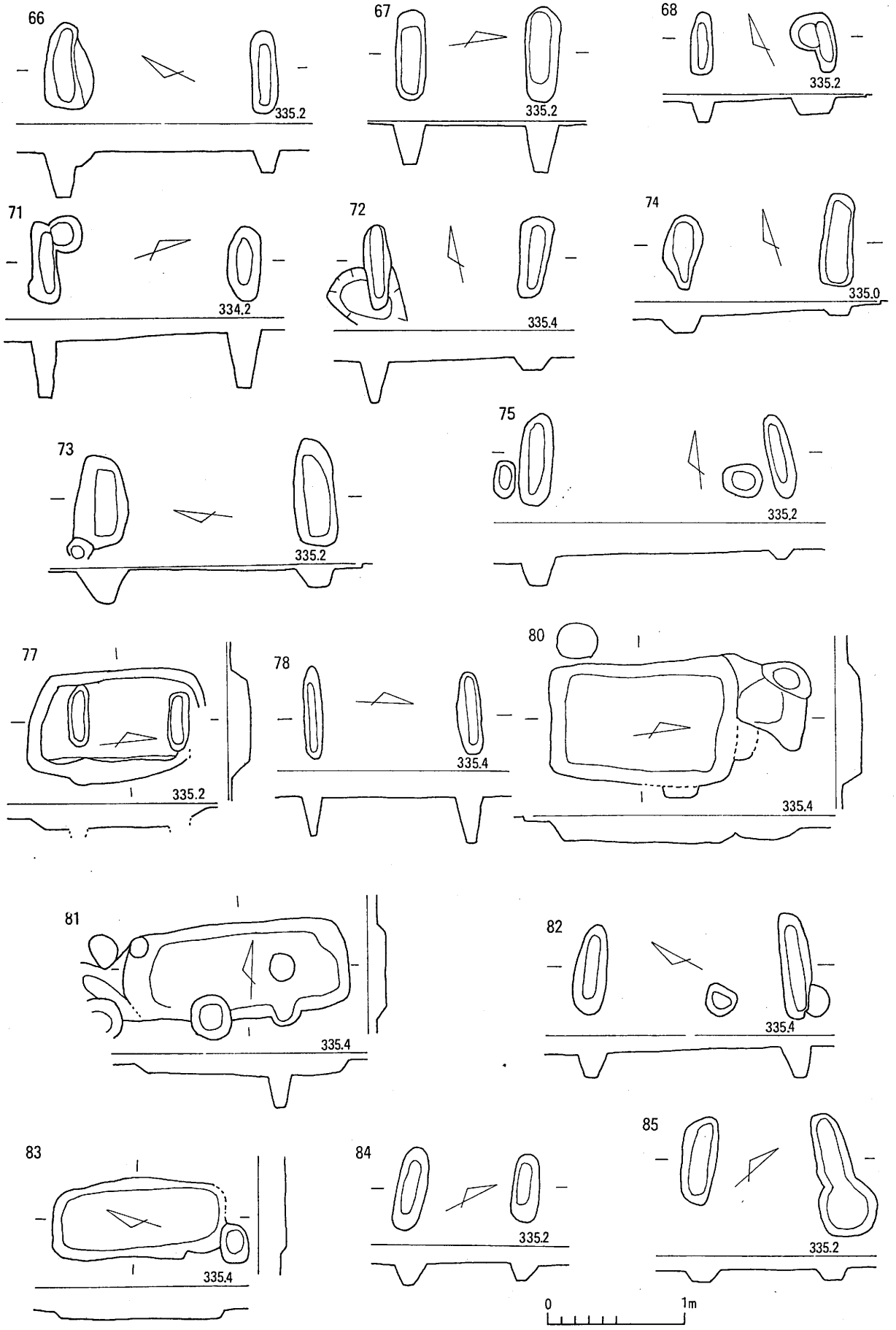


図69　Ⅳ地区木棺墓実測図(6)(1：40)

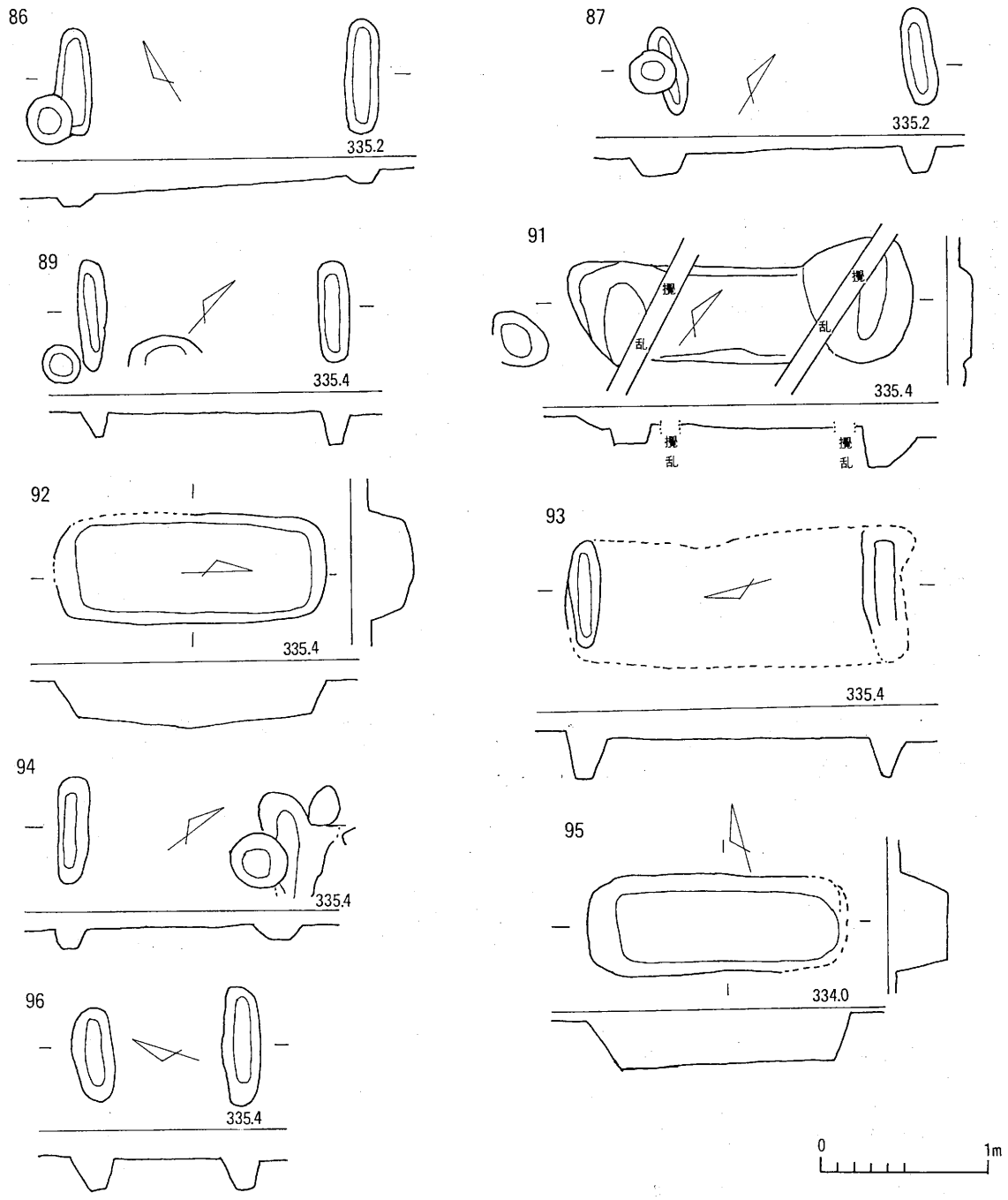


図70　Ⅳ地区木棺墓実測図(7)(1：40)

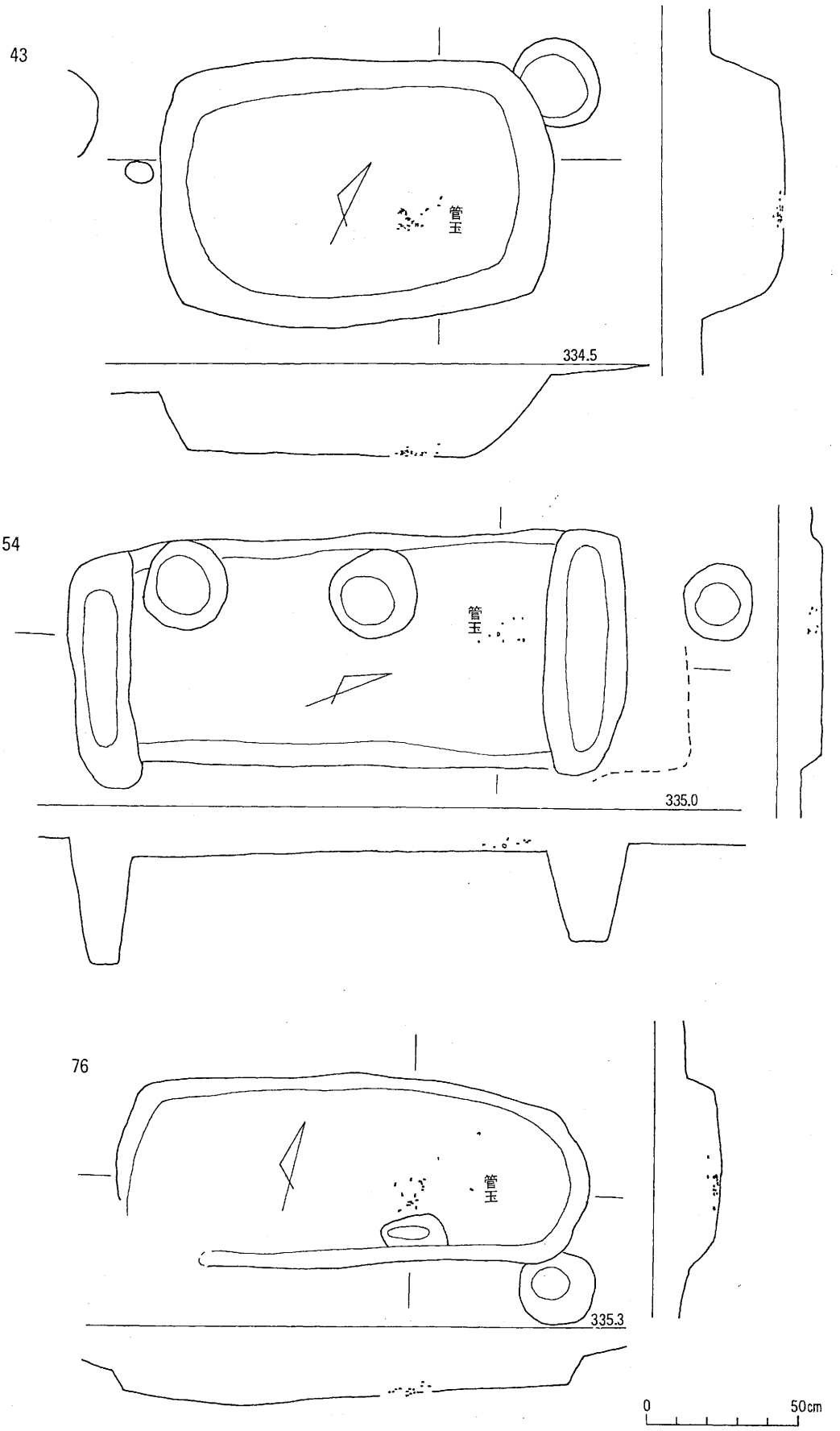


図71　Ⅳ地区木棺墓実測図(8)(1：20)

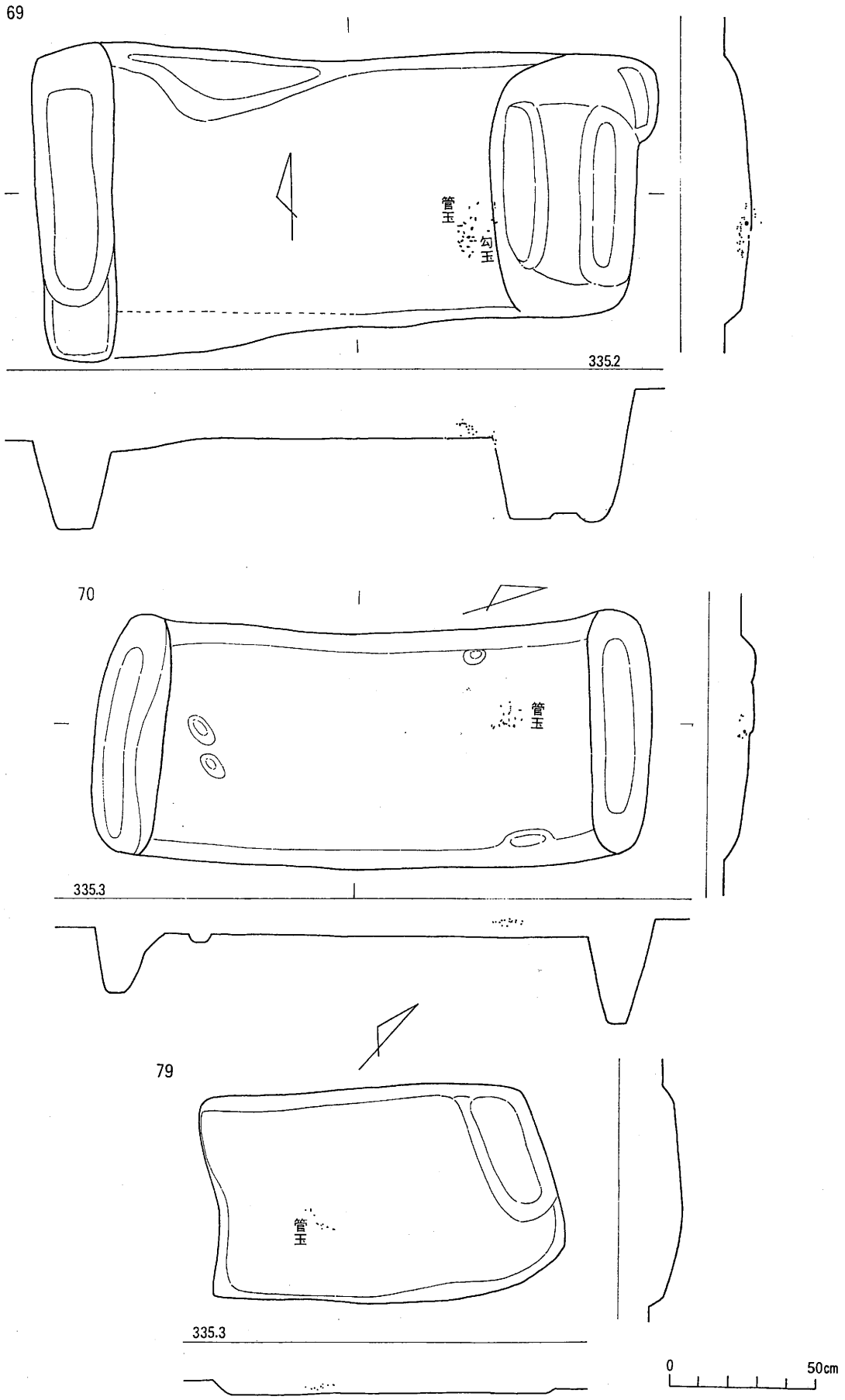


図72　Ⅳ地区木棺墓実測図(9)(1：20)

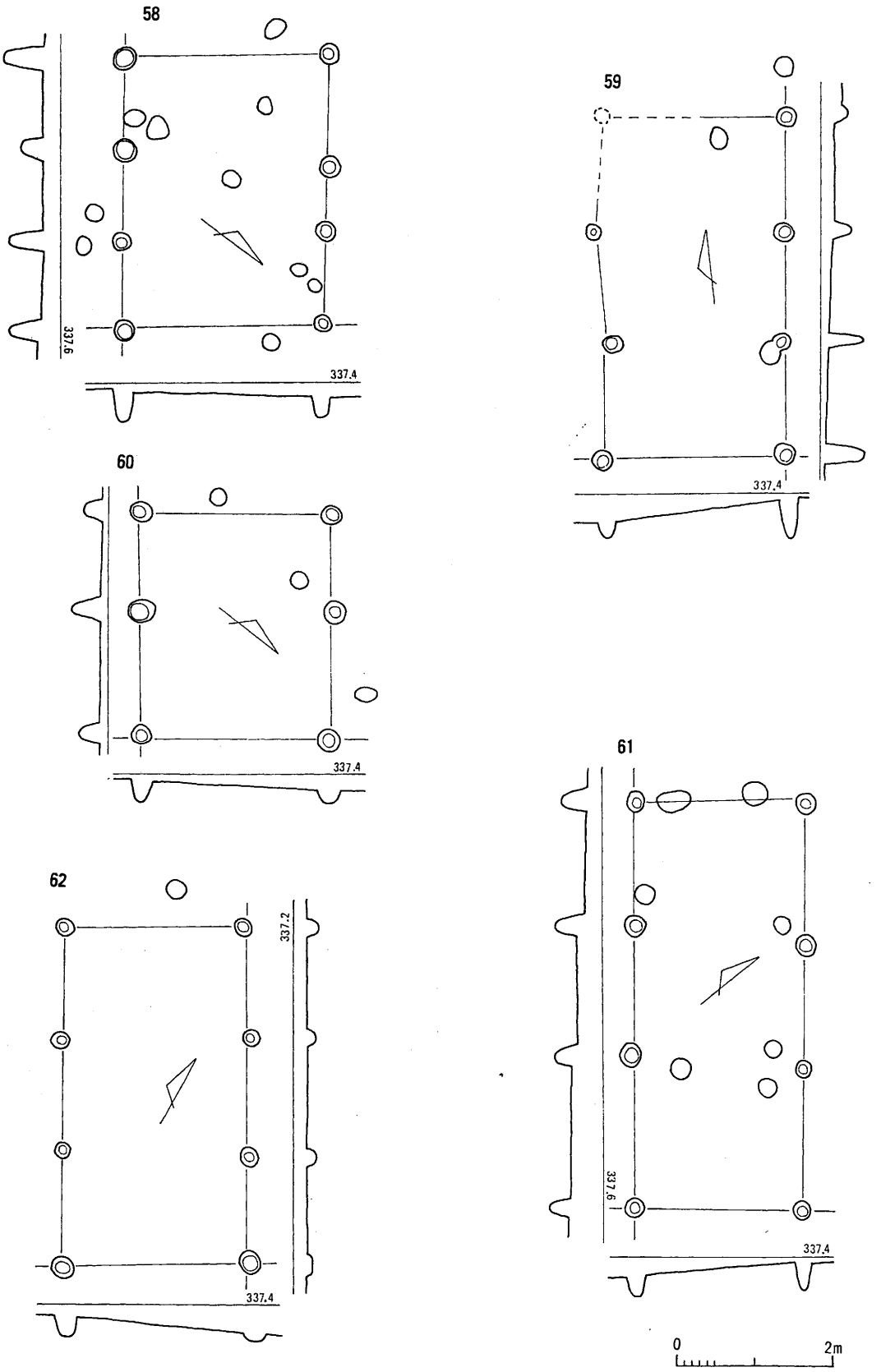


図73　Ⅳ地区ＳＢ58～62号掘立柱建物址実測図(1：80)

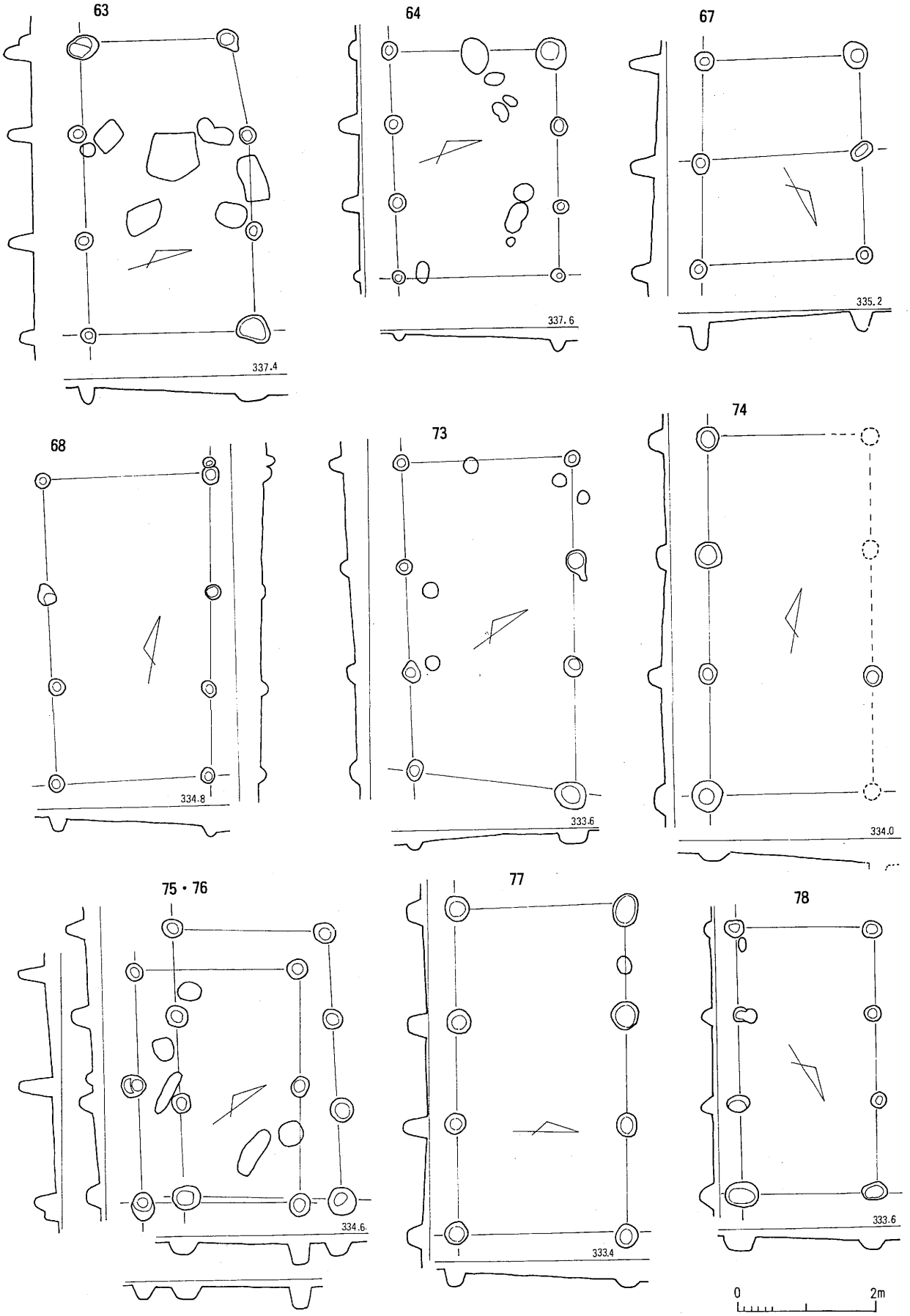


図74　Ⅳ地区ＳＢ63・64・67・68・68・73・74～78号掘立柱建物址実測図（1：80）

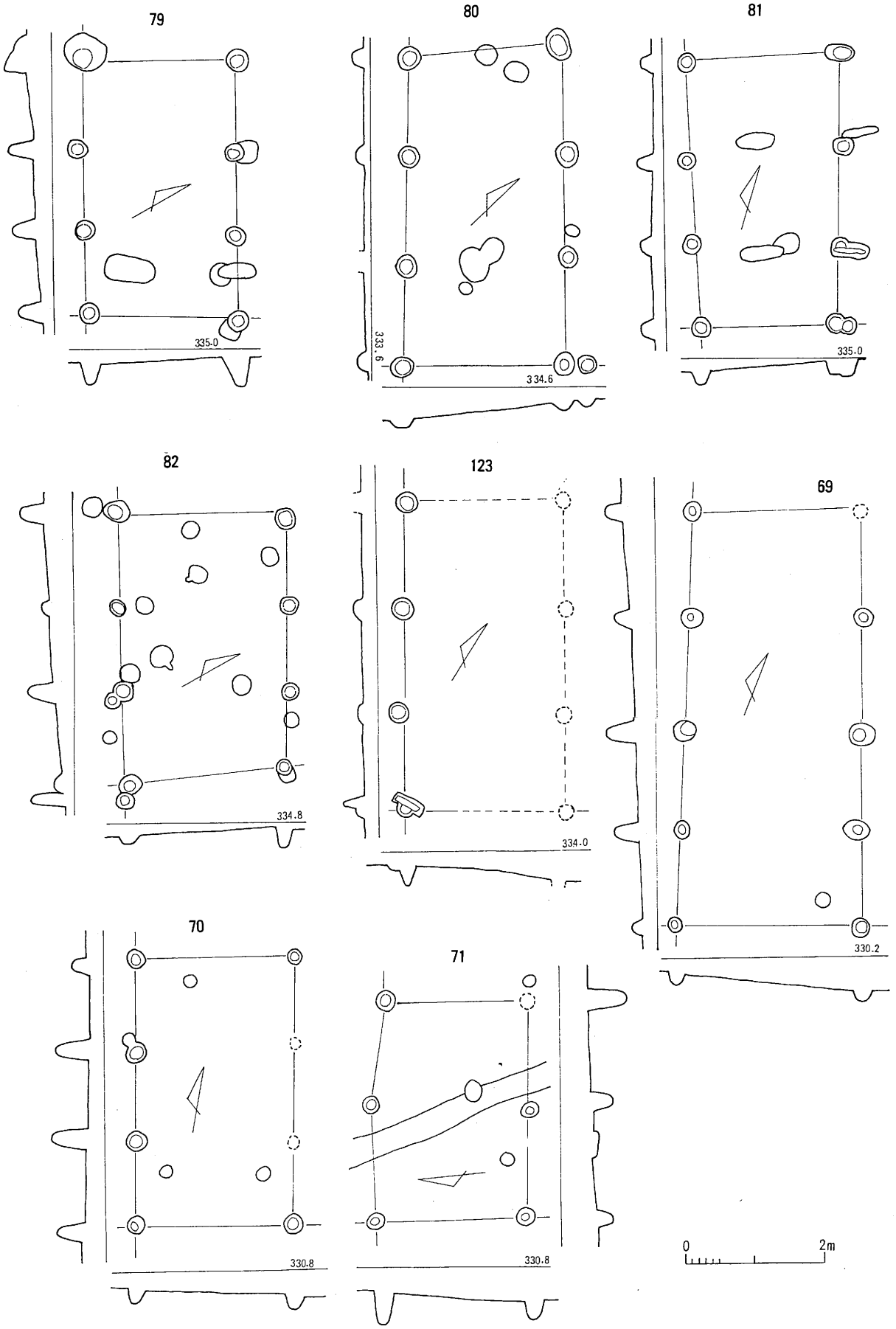


図75　Ⅳ地区ＳＢ79～82, 123, 69～71号掘立柱建物址実測図（1：80）

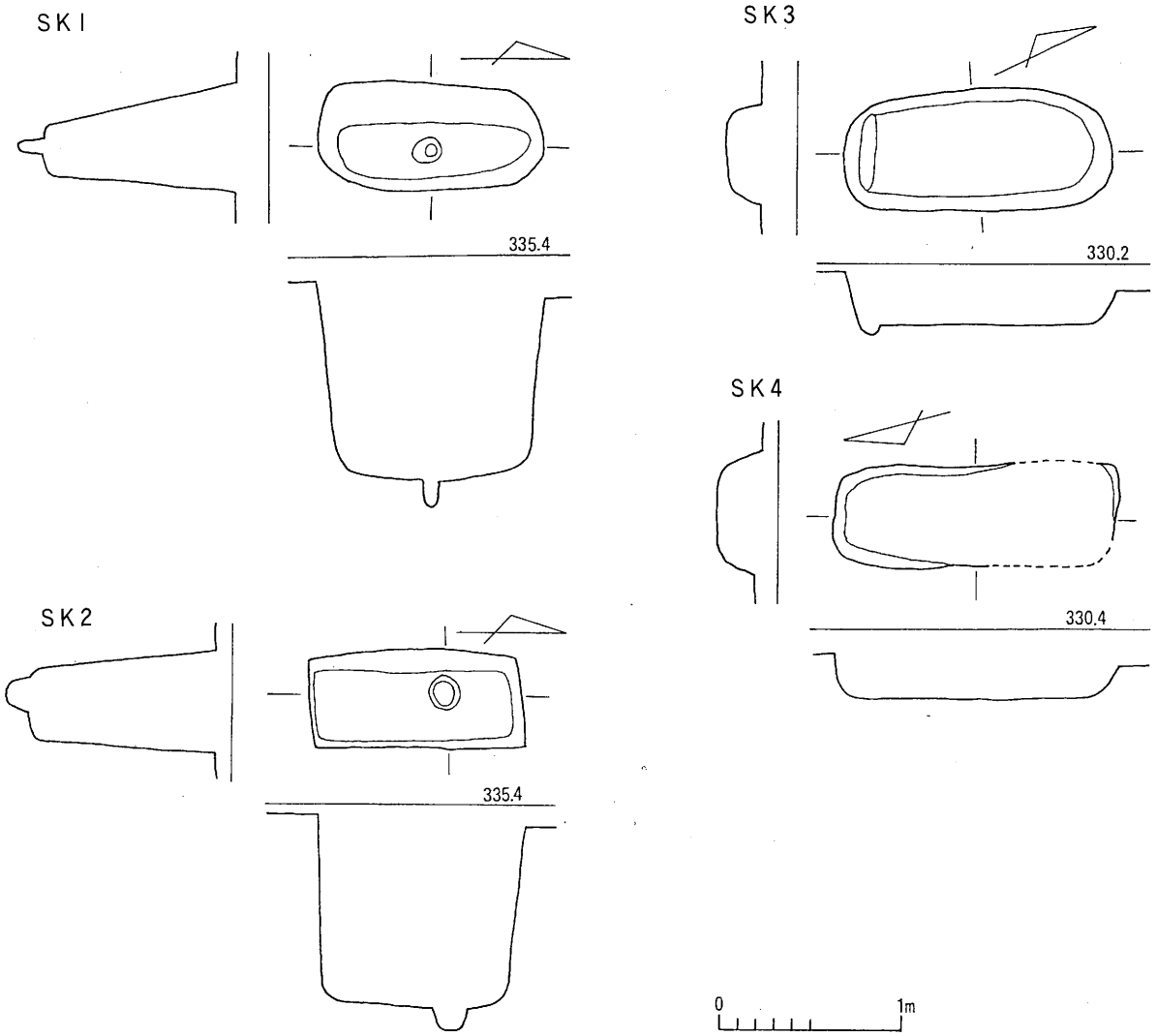


図76　Ⅳ地区ＳＫ１～４号土坑実測図(1:40)

5　Ｖ地区の概要

a　概　　要

第２次造成にかかる地区である。発掘調査時には南原２と呼称していた地区である。比較的小規模な丘陵上にあり、平成２年度に約 3,600㎡を調査した。表土が約20～30cmと浅くその直下は漸移層がなく、黄褐色テフラ層となる。遺構はこの面で検出したが、林檎植栽による坑や深耕機械による攪乱・削平があり、遺存状態は悪かった。遺構は、台地の平坦面から斜面にかかる部分において発見され、平坦面においては掘立柱建物址が切り合いをもって発見されている(図77)。

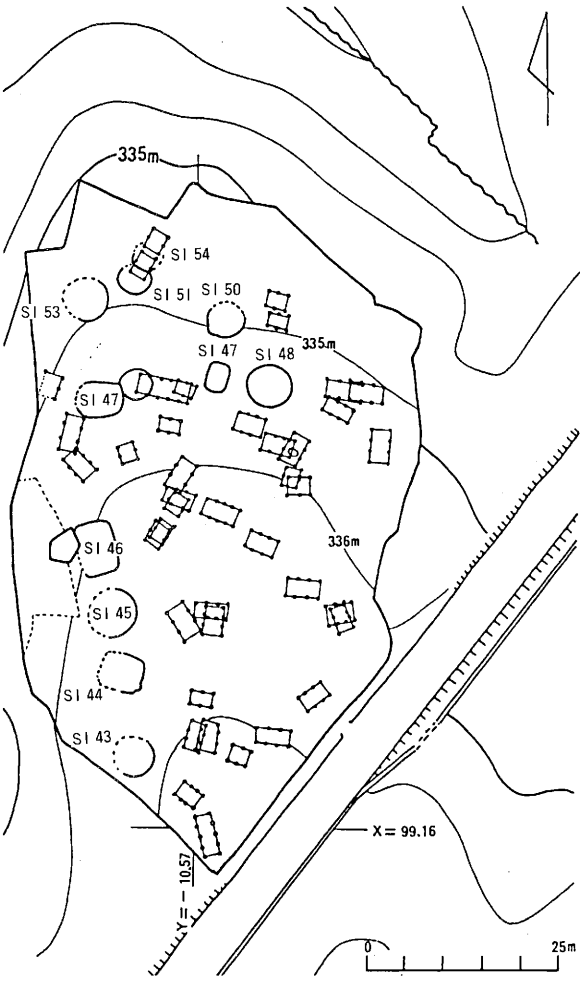


図77　Ｖ地区主要遺構分布図(1:1,000)

b　遺　　構

検出された遺構は、竪穴住居址12軒(中期８、後期４)、掘立柱建物址41軒、土坑６基ほかである。

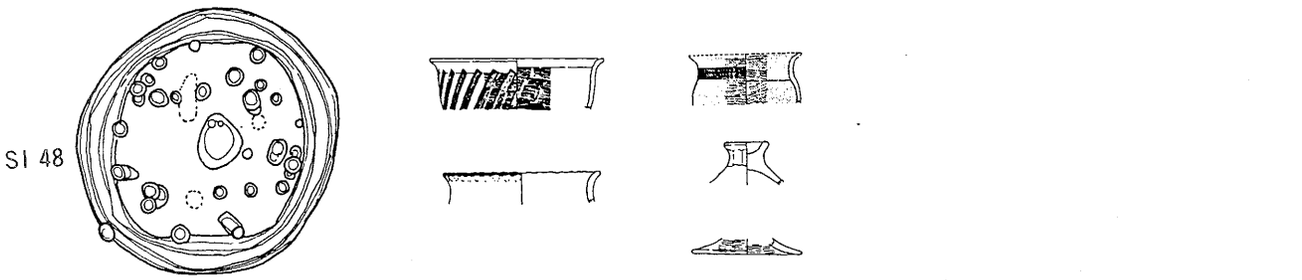
竪穴住居址　中期住居址はＳＩ48・52を除き周溝・ピットのみの検出で、床面も破壊されている例が多い。プランは円形ないし楕円形である。

後期住居址は壁が残されている場合が多く、隅丸長方形が主体を占め、一部(ＳＩ49)の住居址では小型長方形住居址もみられる(図88)。ＳＩ49号住居址では土器も多く出土している。また、ＳＩ46号住居址では、床面直上から潰れた土器・炭化材も出土している。主柱穴はＳＩ46号住居址(図85)のように４本と考えられ、貯蔵穴等のピットも他地区の後期住居址と同形態である。ただし、出入り口施設と思われるピットは、２本１対であったのが、本例およびＳＩ47号住居址とも４本１対となっている。また、ＳＩ47号住居址は、形態・規模ともＳＩ64号住居址と同様であるが、主柱穴は５本もしくは７本と多い(図87)。

掘立柱建物址(図90～94)。　中・後期の時代識別は十分に行っていないが、竪穴住居址に比して異常に多いことが指摘される。

土坑(図95)　　隅丸長方形ないし楕円形で、深さが110cmある。坑底は平坦である。掘立柱建物址内に存在するが、掘立柱建物と関係するものではなく狩猟用の落とし穴ではないかと考えられる。出土遺物はない。

弥生時代中期



弥生時代後期

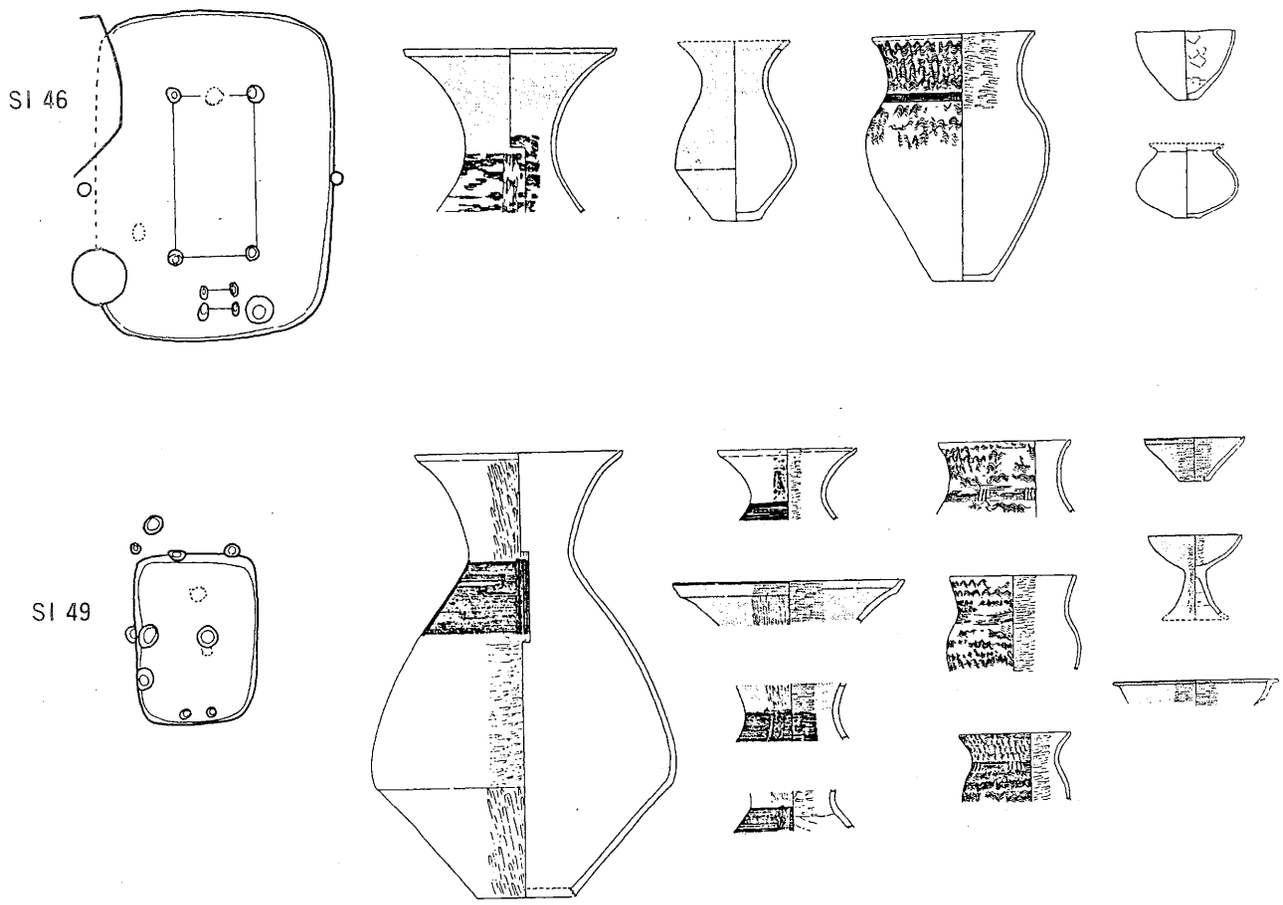


図78　V地区住居址プランと出土土器

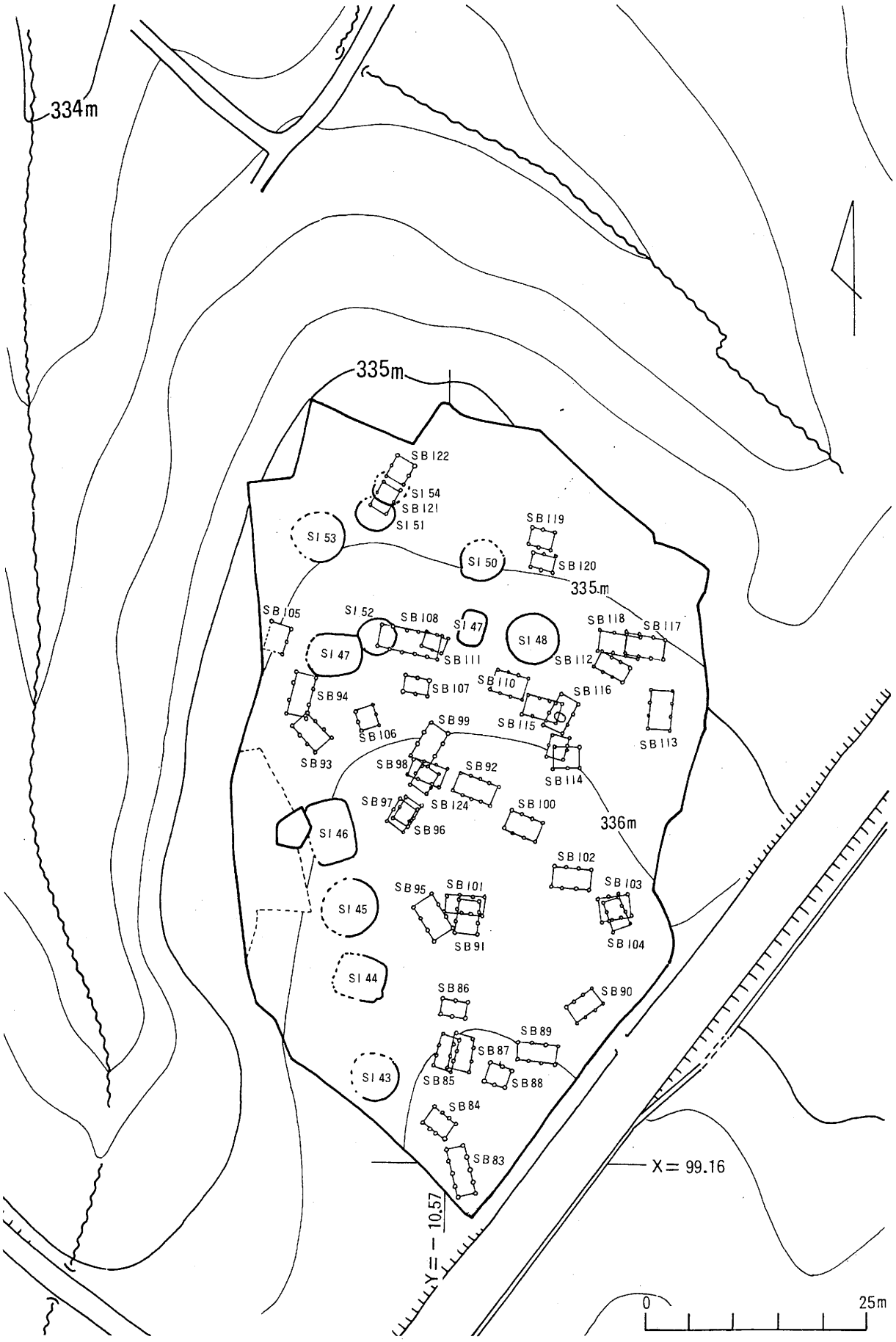


図79　V 地 区 全 体 図（1:600）

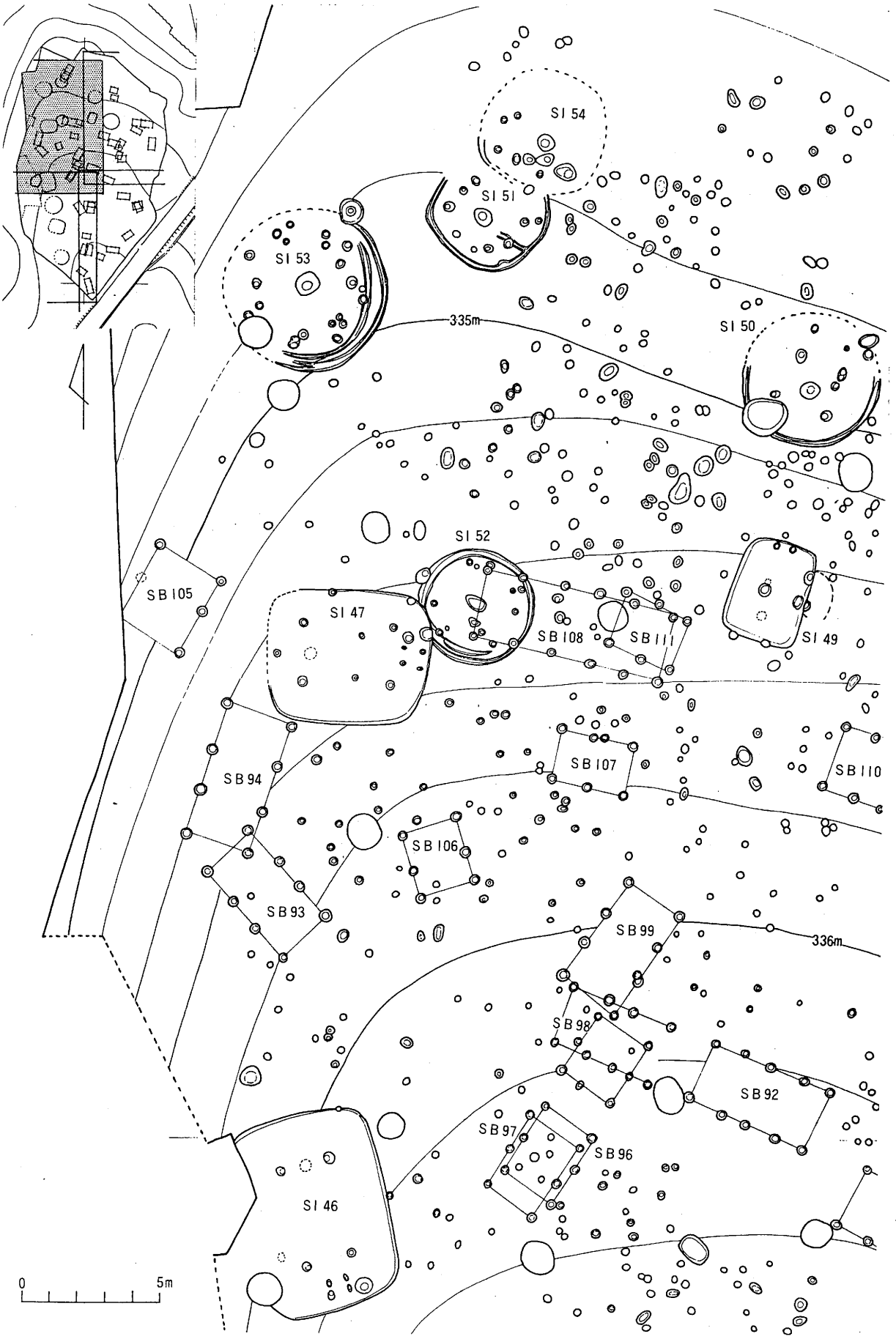


図80　Ⅴ地区遺構分布図(1)（1:200）

図81　V地区遺構分布図(2)（1：200）

図82　V地区遺構分布図(3)（1：200）

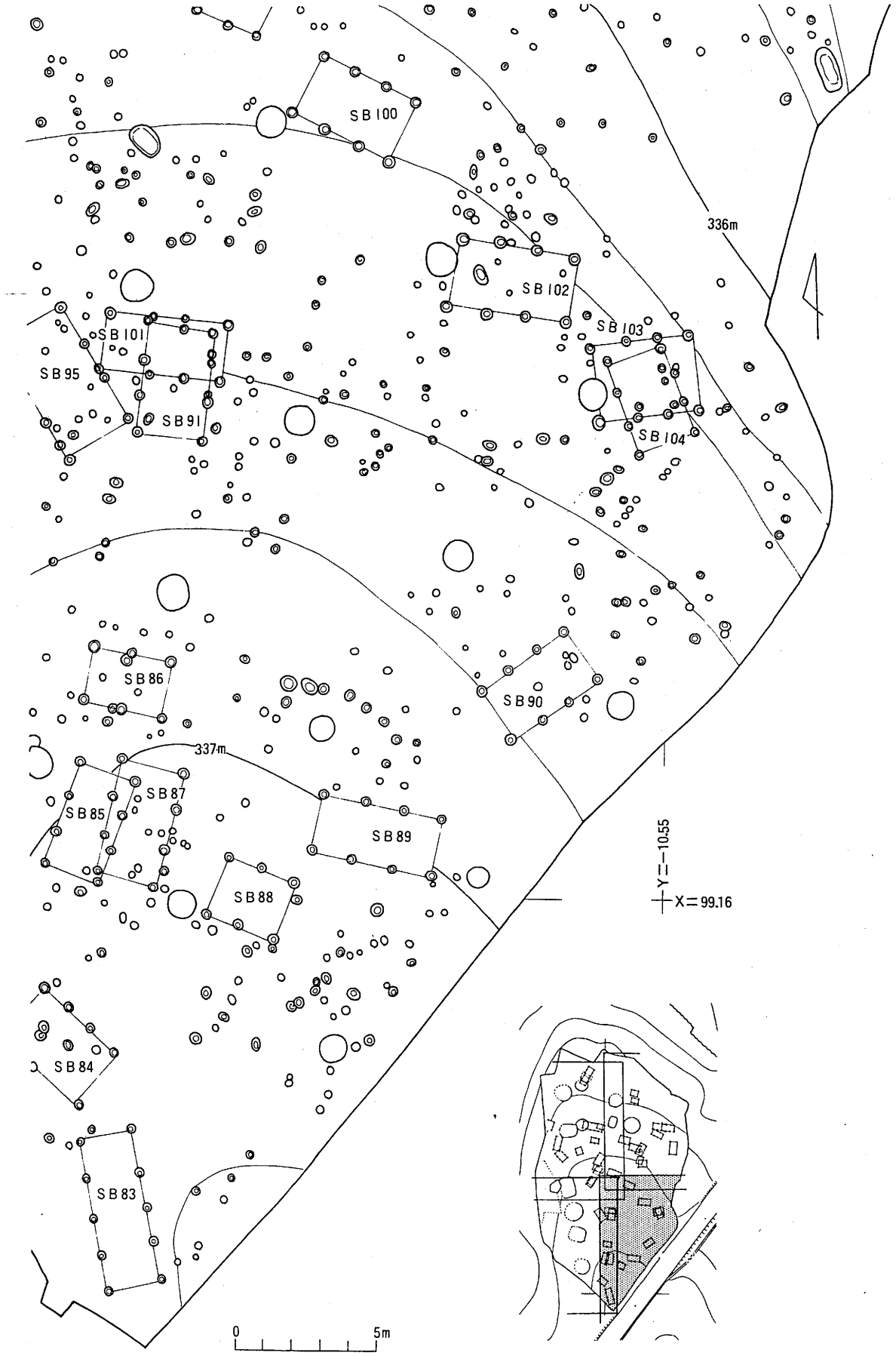
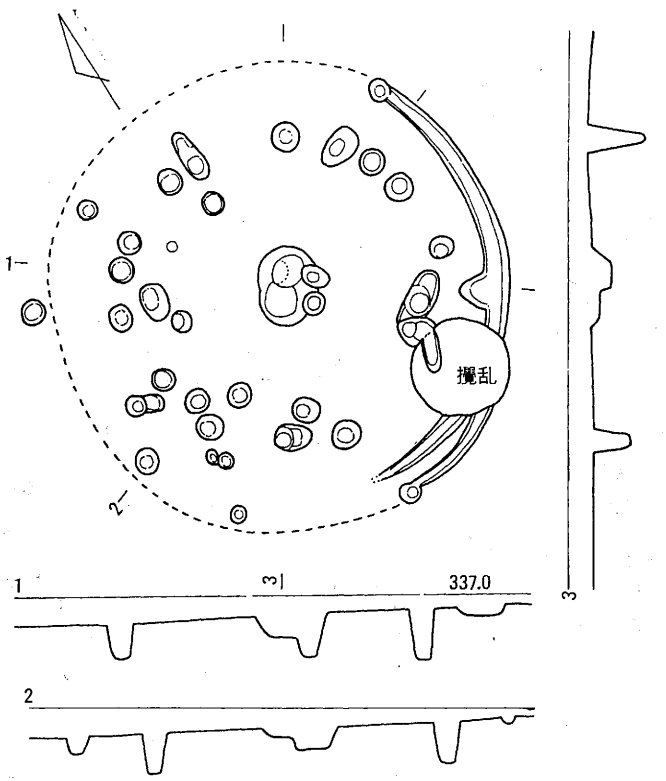


図83　V地区遺構分布図(4)（1：200）

SI 43



SI 44

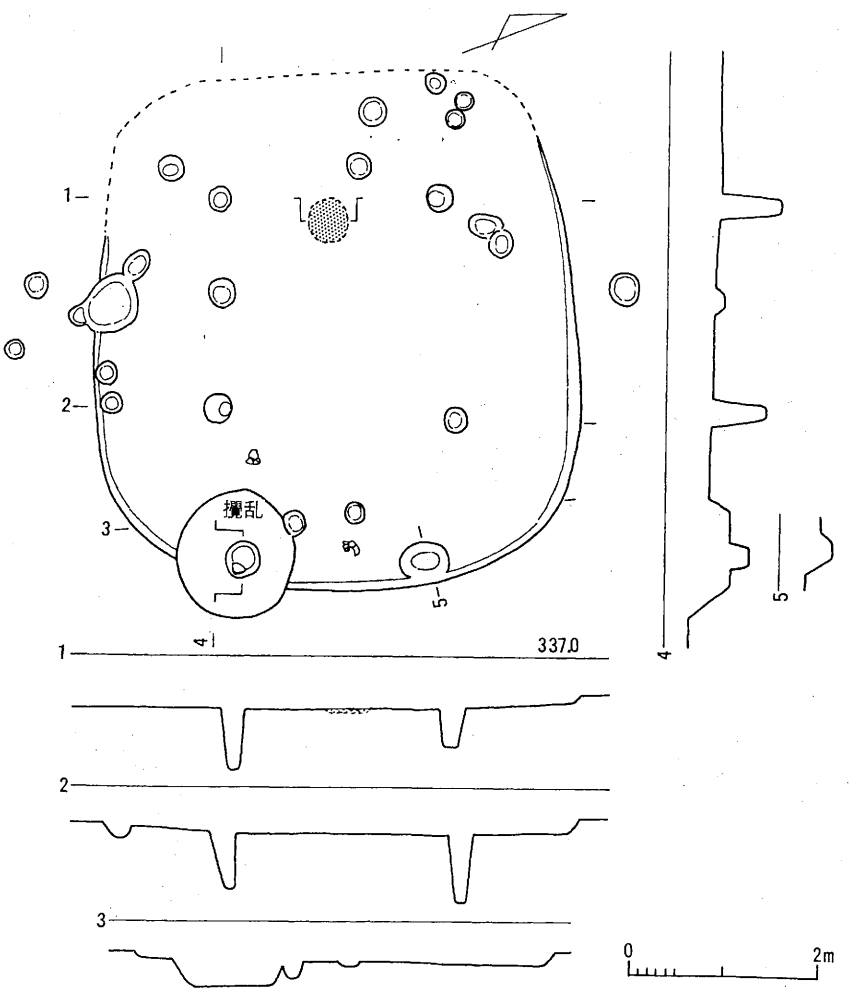


図84　V地区SI 43・44号住居址実測図(1:80)

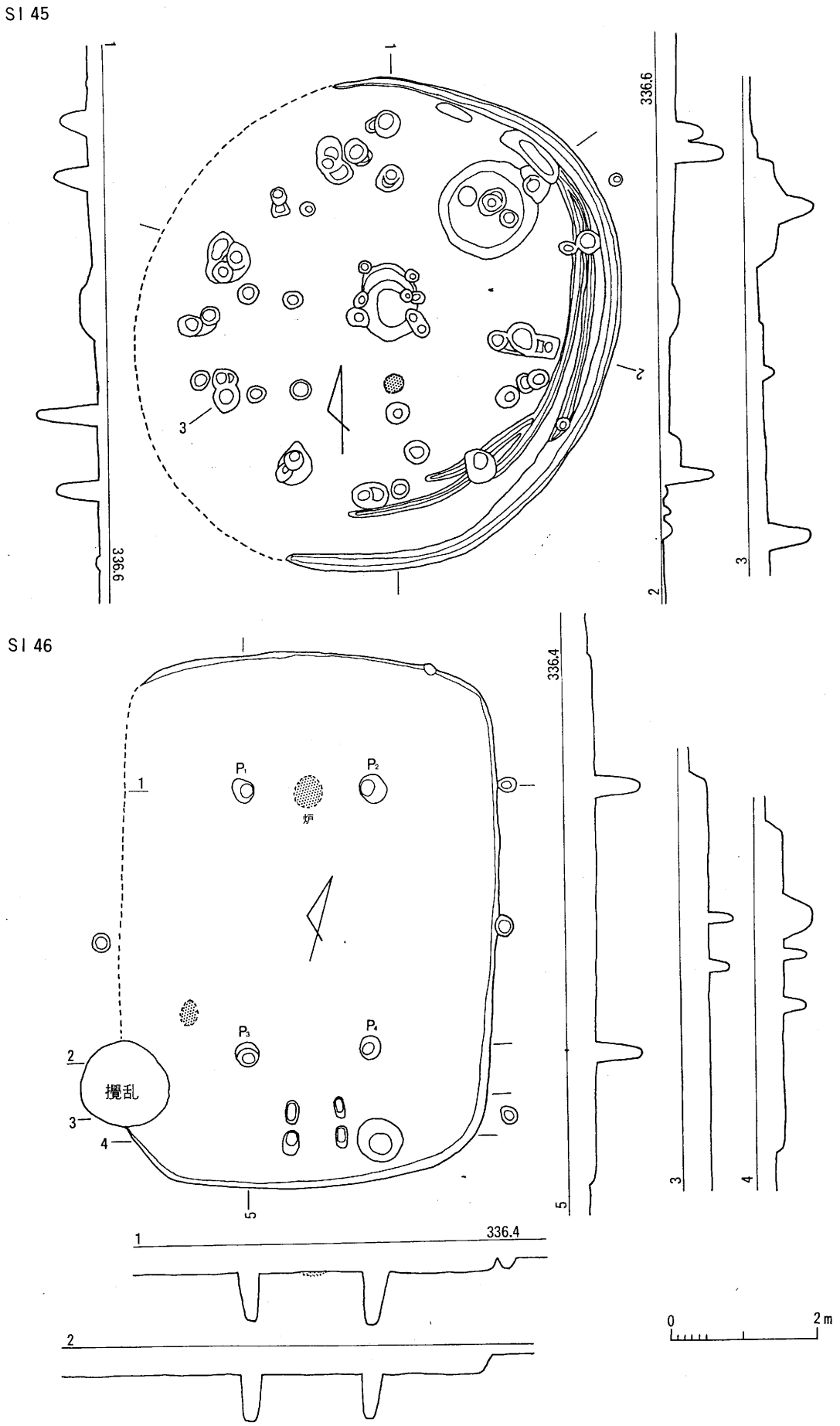


図85　Ⅴ地区ＳＩ45･46号住居址実測図（1:80）

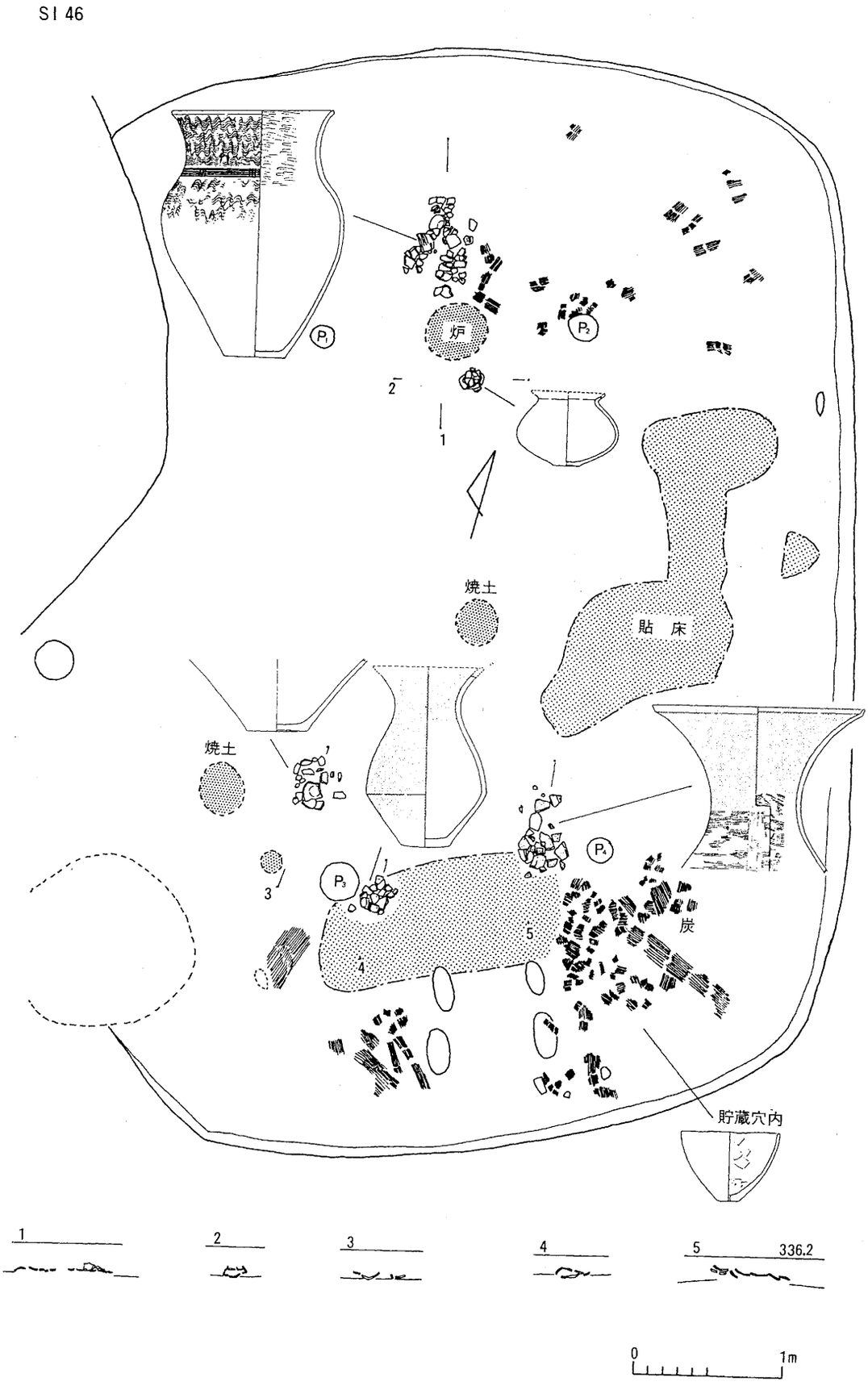


図86　Ⅴ地区ＳＩ46号住居址遺物分布図（1：40）

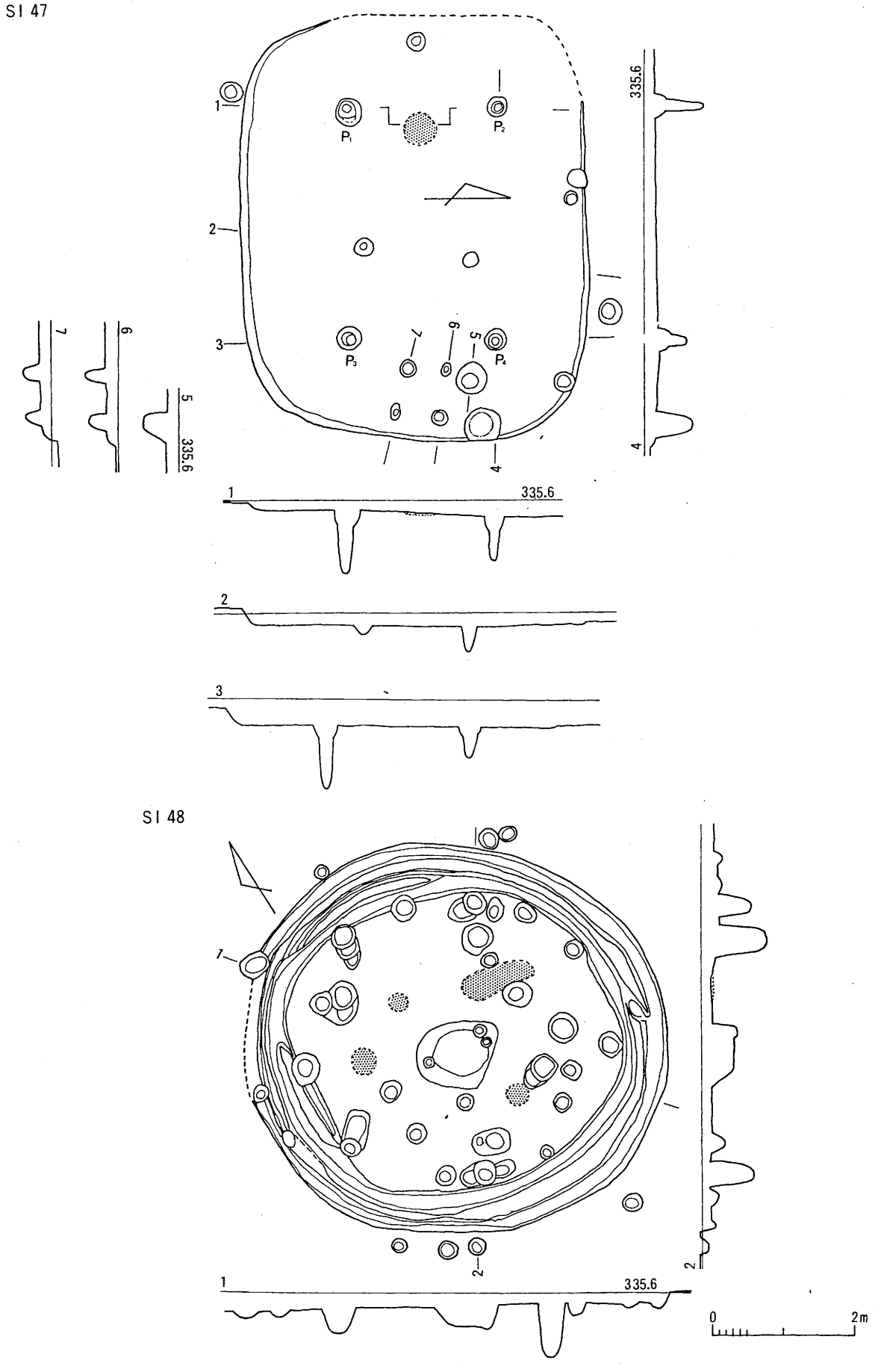


図87　Ⅴ地区ＳＩ47･48号住居址実測図（1：80）

SI 49

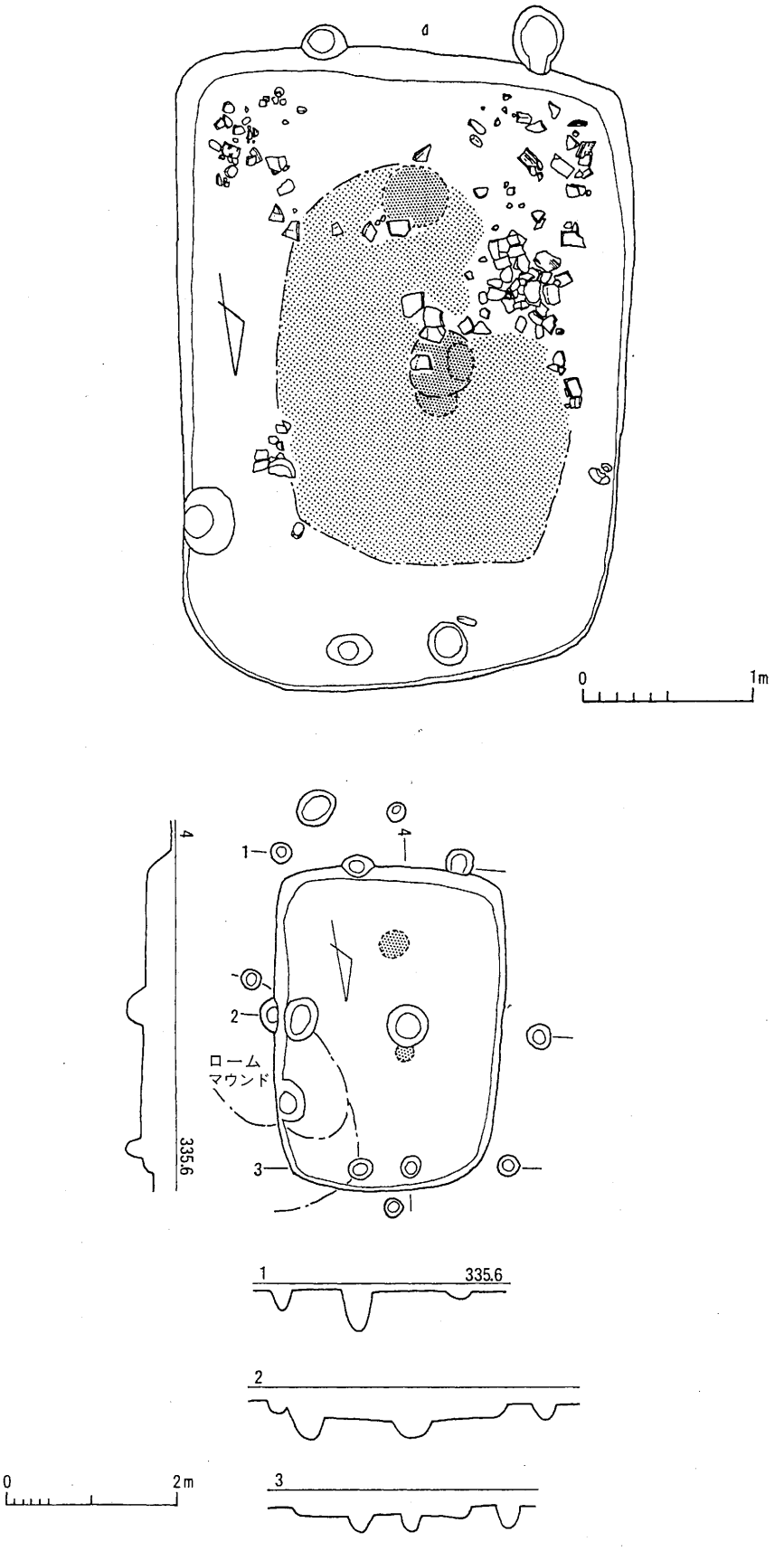


図88　Ⅴ地区ＳＩ49号住居址遺物分布図・実測図（1：40, 1：80）

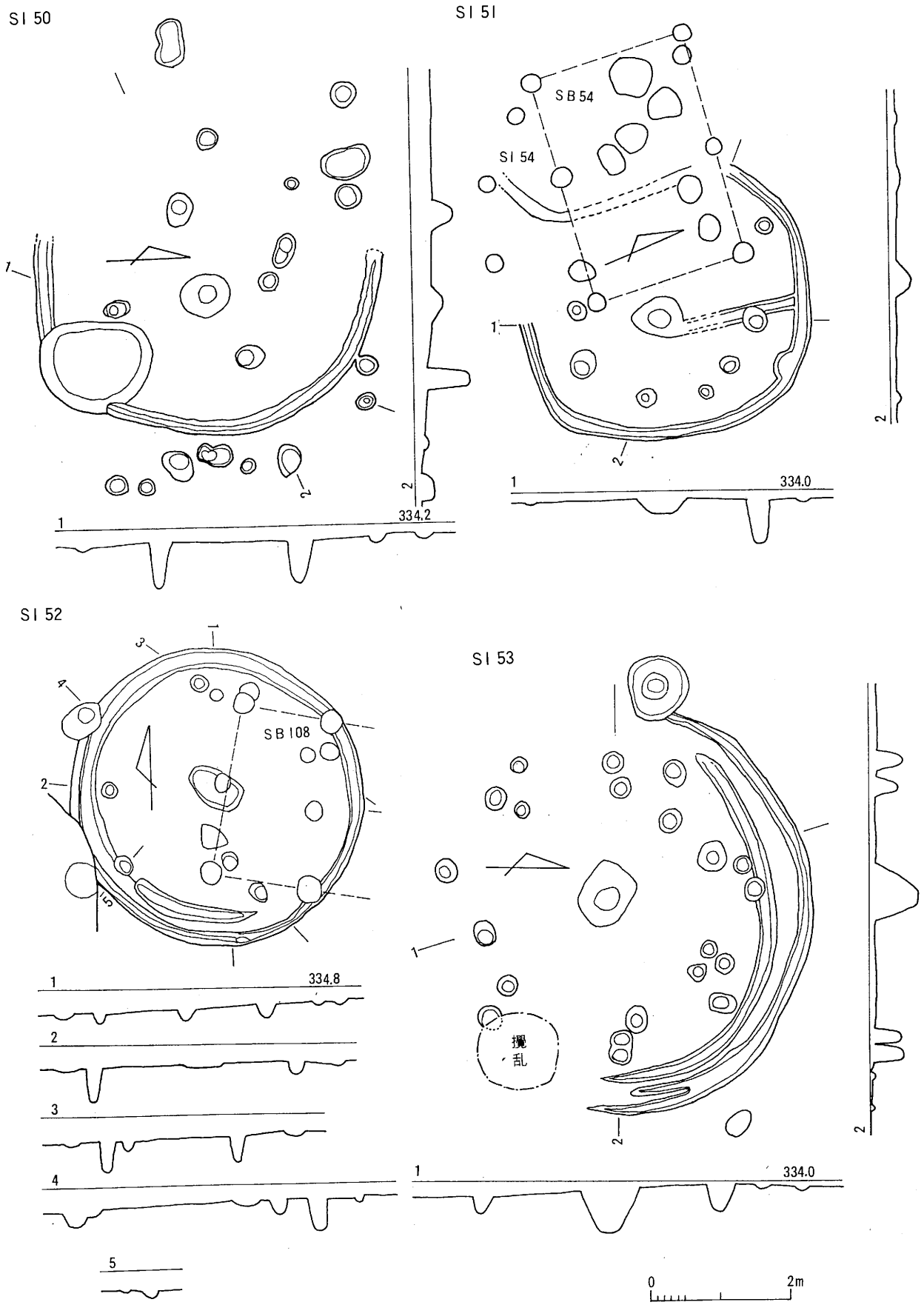


図89　Ⅴ地区ＳＩ50～53号住居址実測図（1：80）

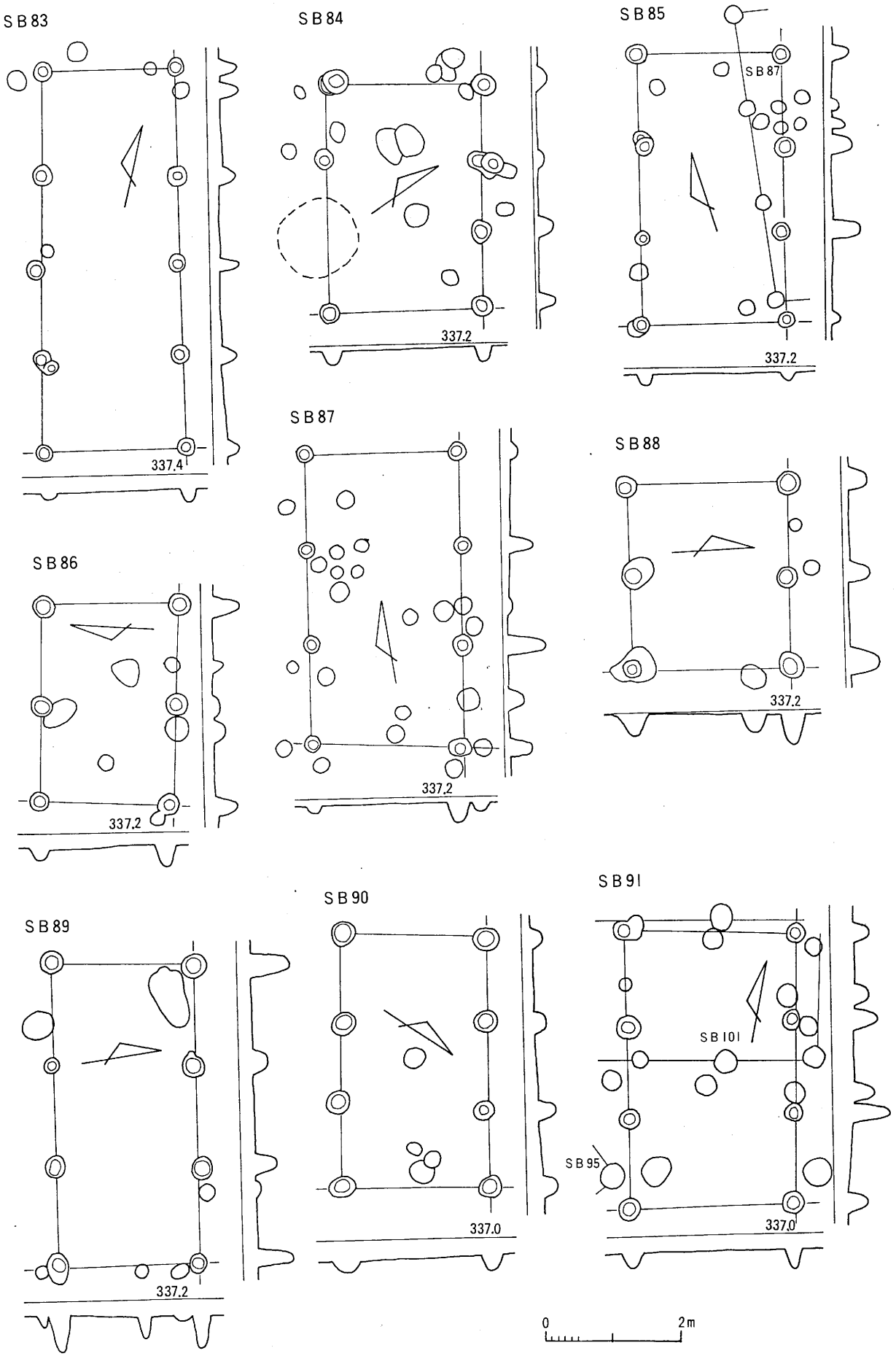


図90　Ⅴ地区ＳＢ83～91号掘立柱建物址実測図（1：80）

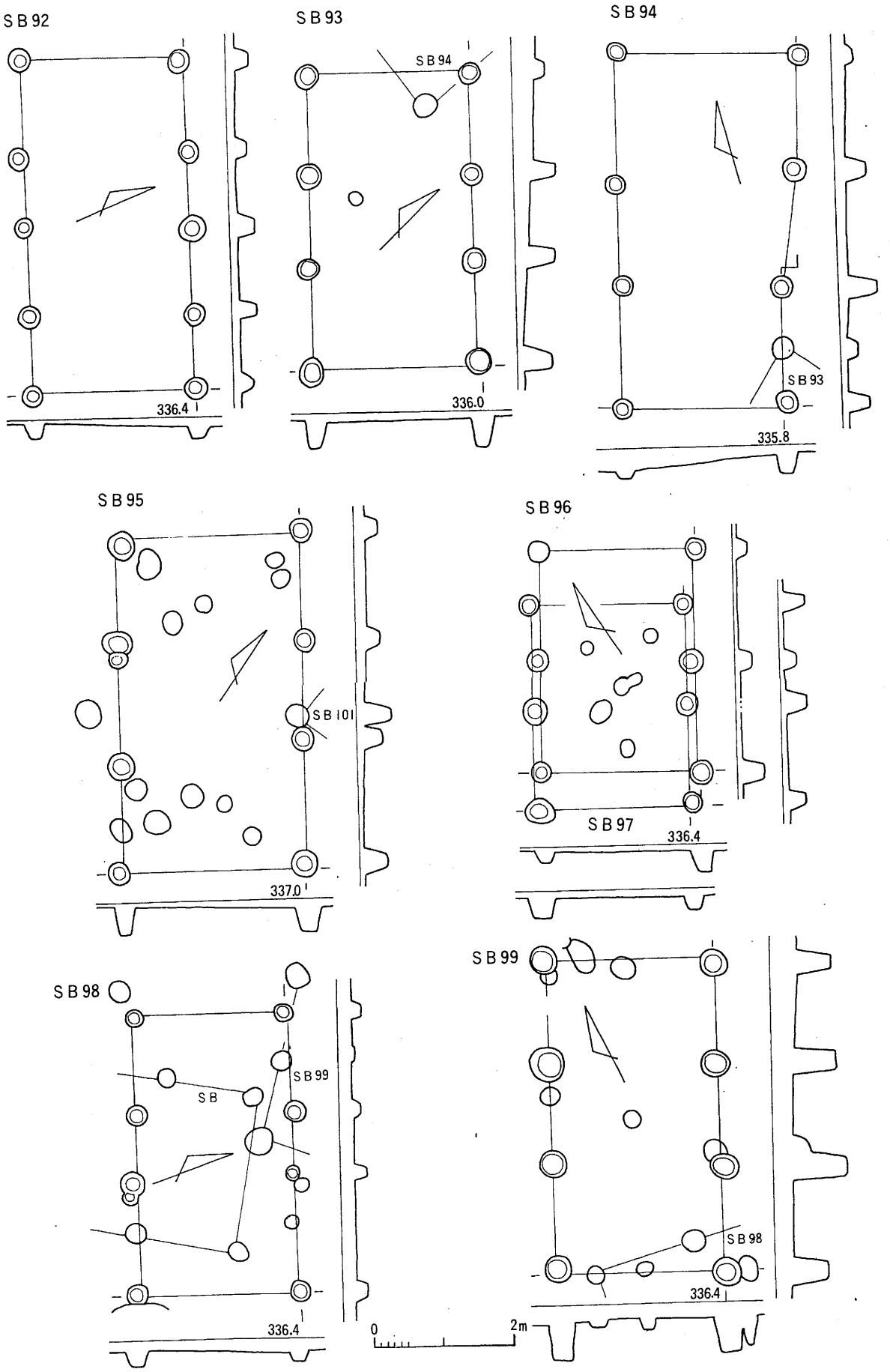


図91　Ⅴ地区ＳＢ92～99号掘立柱建物址実測図（1：80）

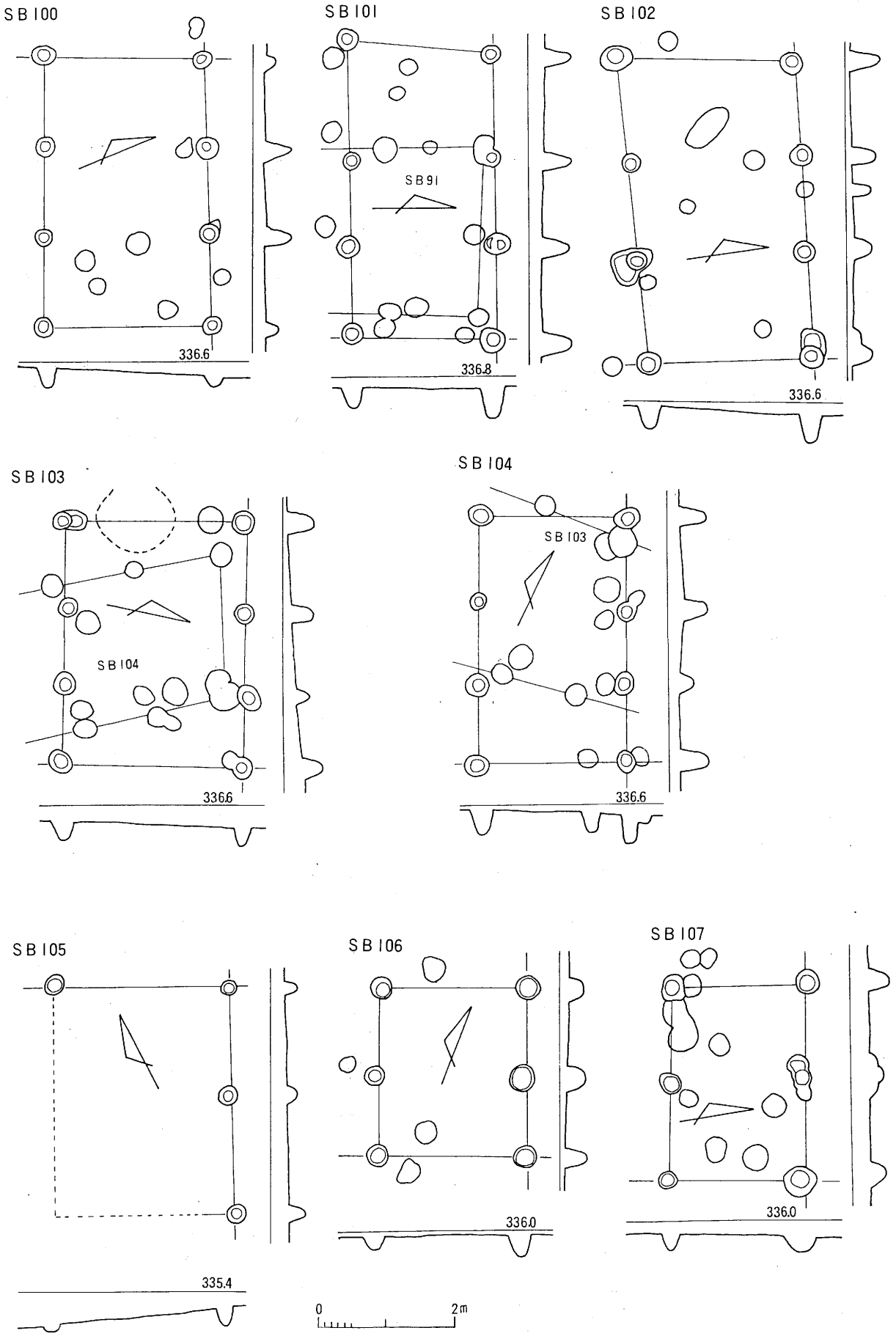


図92　Ⅴ地区ＳＢ100～107号掘立柱建物址実測図（1：80）

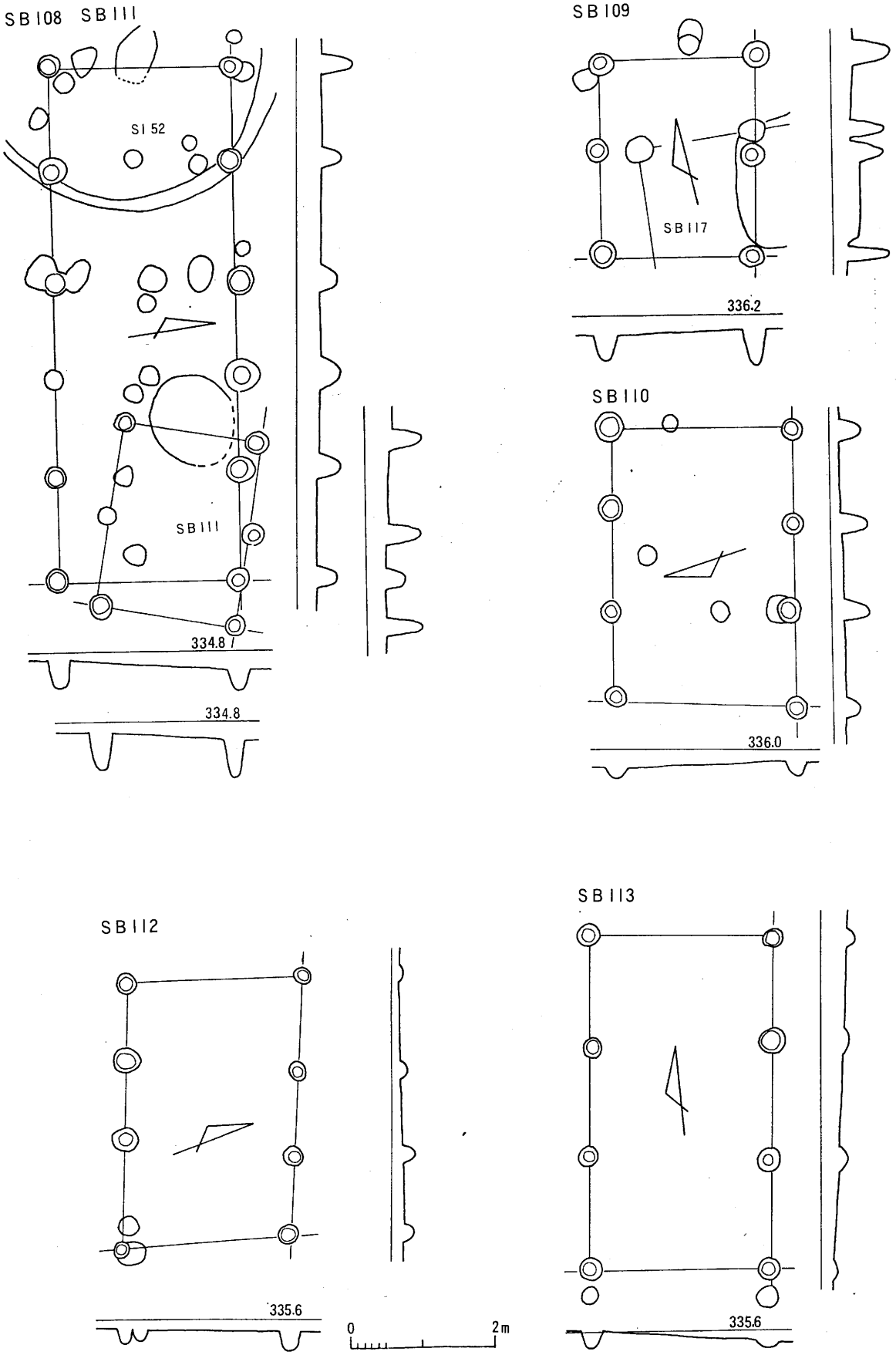


図93　V地区SB108～113号掘立柱建物址実測図（1：80）

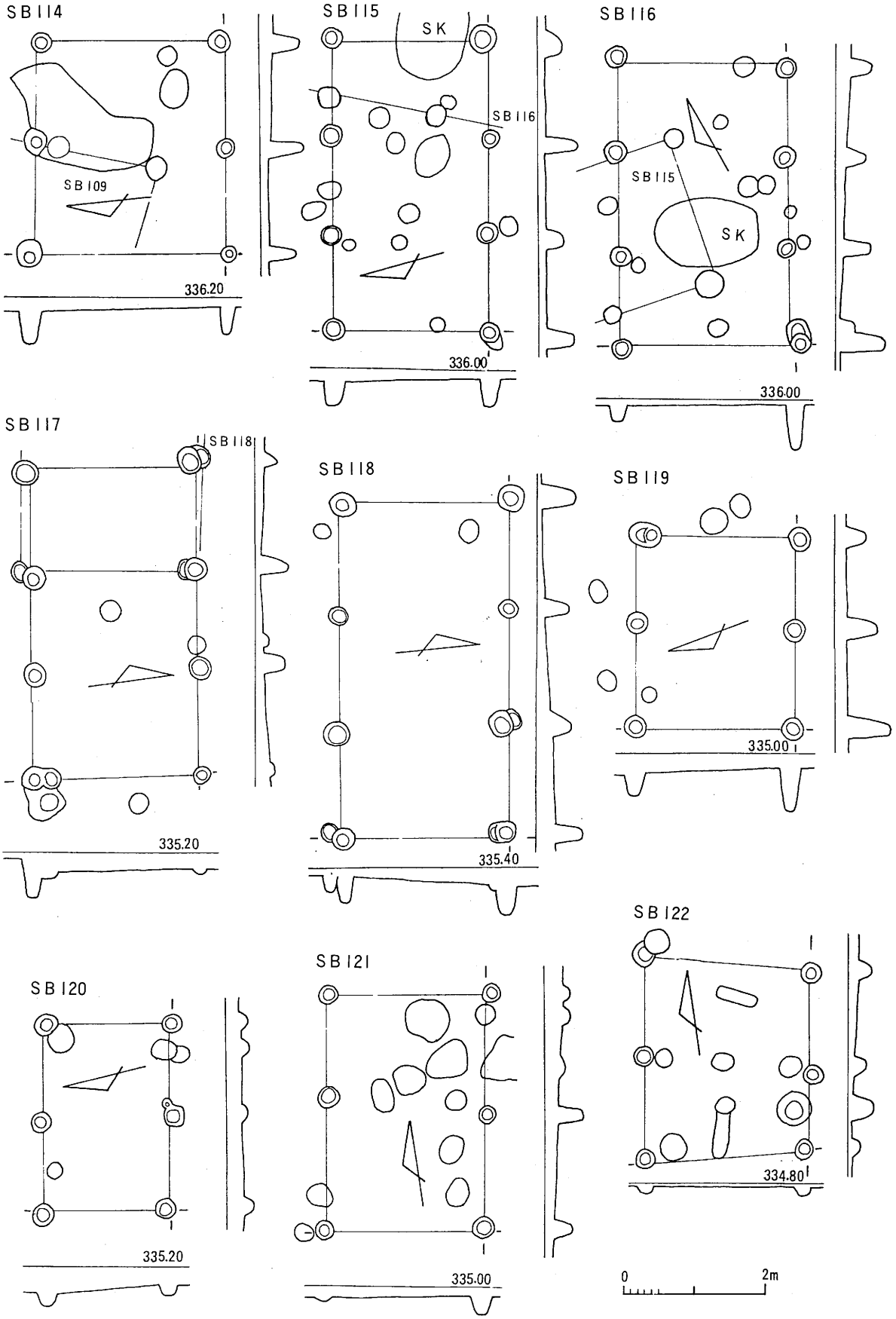


図94　Ⅴ地区ＳＢ114～122号掘立柱建物址実測図（1：80）

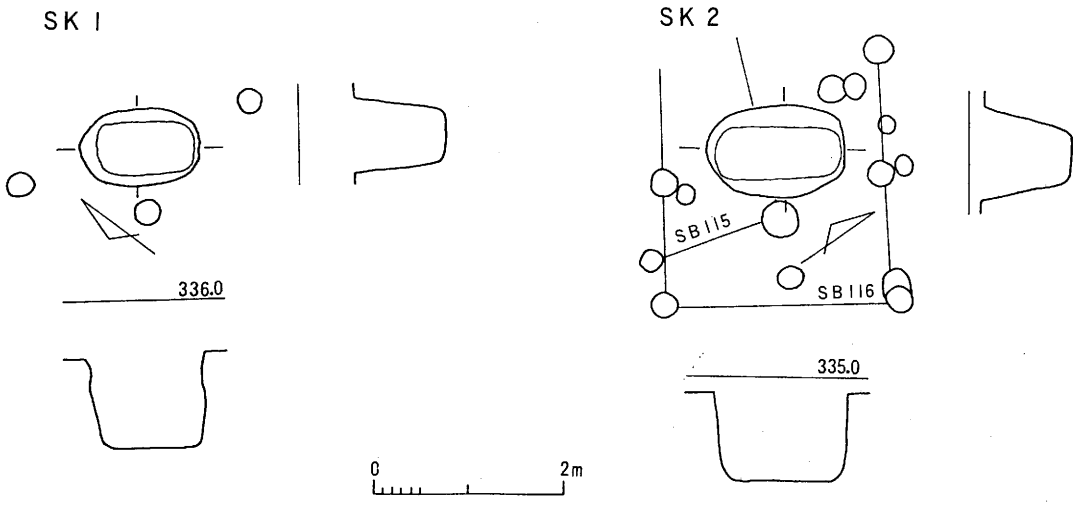


図95　Ⅴ地区ＳＫ１・２号土坑実測図（1:80）

6　Ⅵ地区の概要

a　概　　要

工業団地造成にかかる市道の付け替え工事に伴うもので、調査時には道路区（Ｄ区）と呼称していた。この地区は、平成２年度に実施した。道路幅のみの調査のために国家座標軸による同一グリットを使用せずに、道路センター杭を基準に５ｍグリットを設定した。

本遺跡の主体部となる箇所は発見できなかったが、全体的には東側の斜面直下に発達した谷頭部で、黒色土によって厚く覆われていた。遺物は表土から約50cmの黒色土中に包含されていたが、遺構等は確認困難で掘立柱建物址３棟を検出したにすぎない。また、遺物が集中して出土する地点が10箇所程度で確認されている。すべて弥生中期に所属するもので、ミニチュア土器も含まれる。

b　遺　　構

掘立柱建物址　３棟検出している（ＳＢ51・52・53）。ＳＢ51・52は重複しているが、新旧の関係は不明である。ＳＢ53を含めいずれも１間×３間の規模である。遺構内より遺物の出土は認められなかったが、本地域から弥生中期以外の遺物は認められないので、これらの掘立柱建物址も弥生中期に属する可能性が高い。

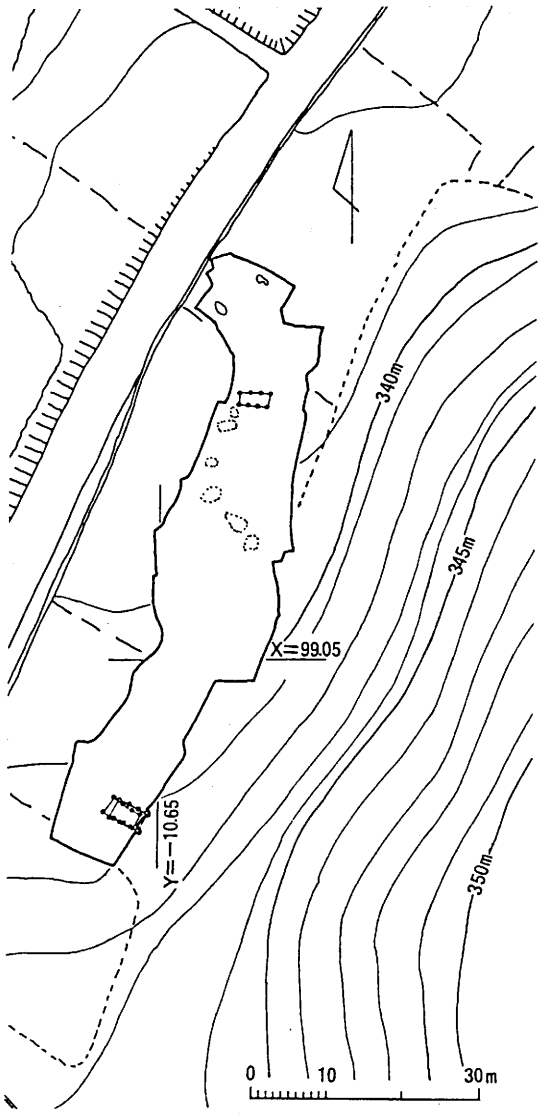


図96　Ⅵ地区主要遺構分布図（1:1,000）

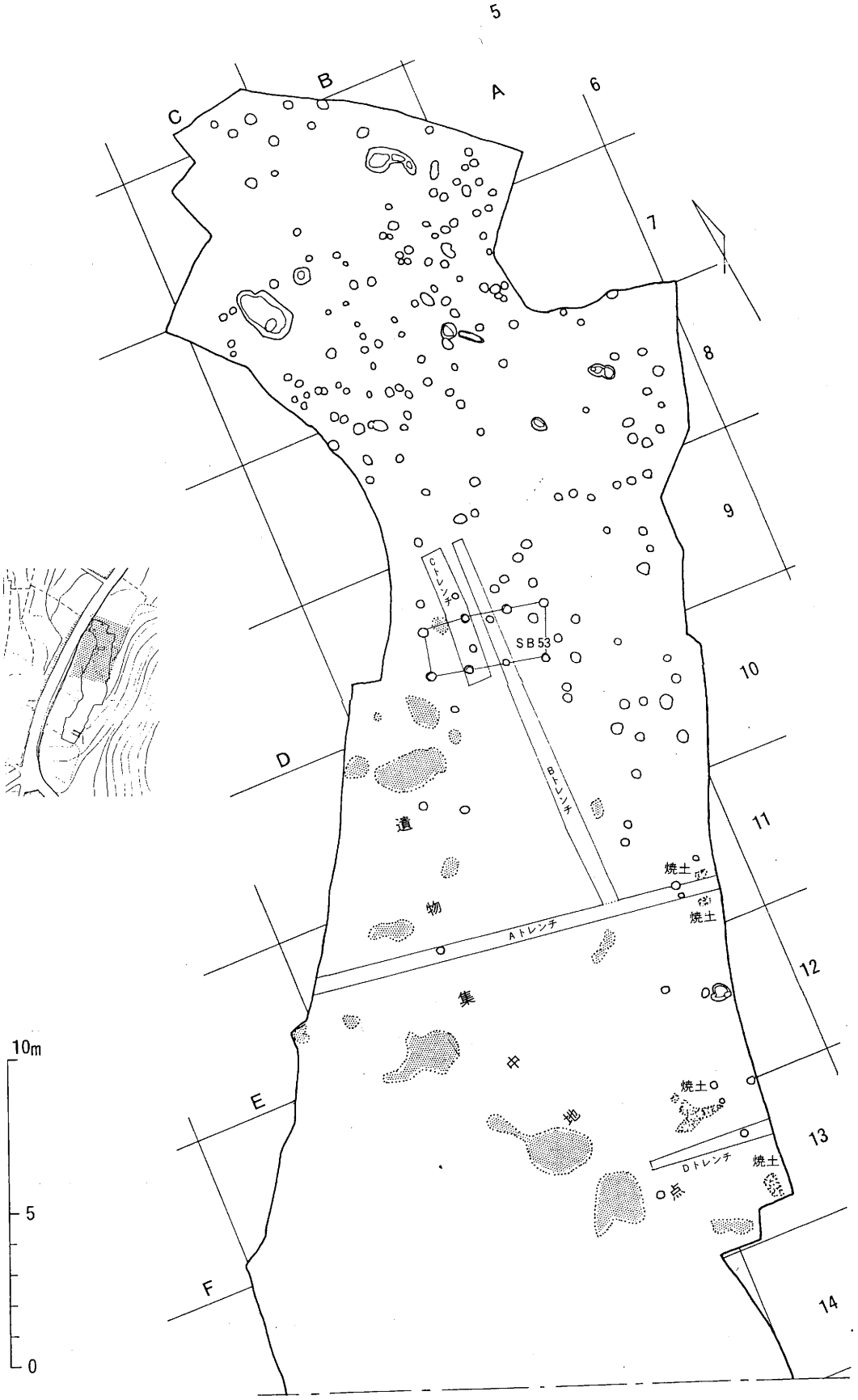


図97　Ⅵ地区遺構分布図(1)（1:200）

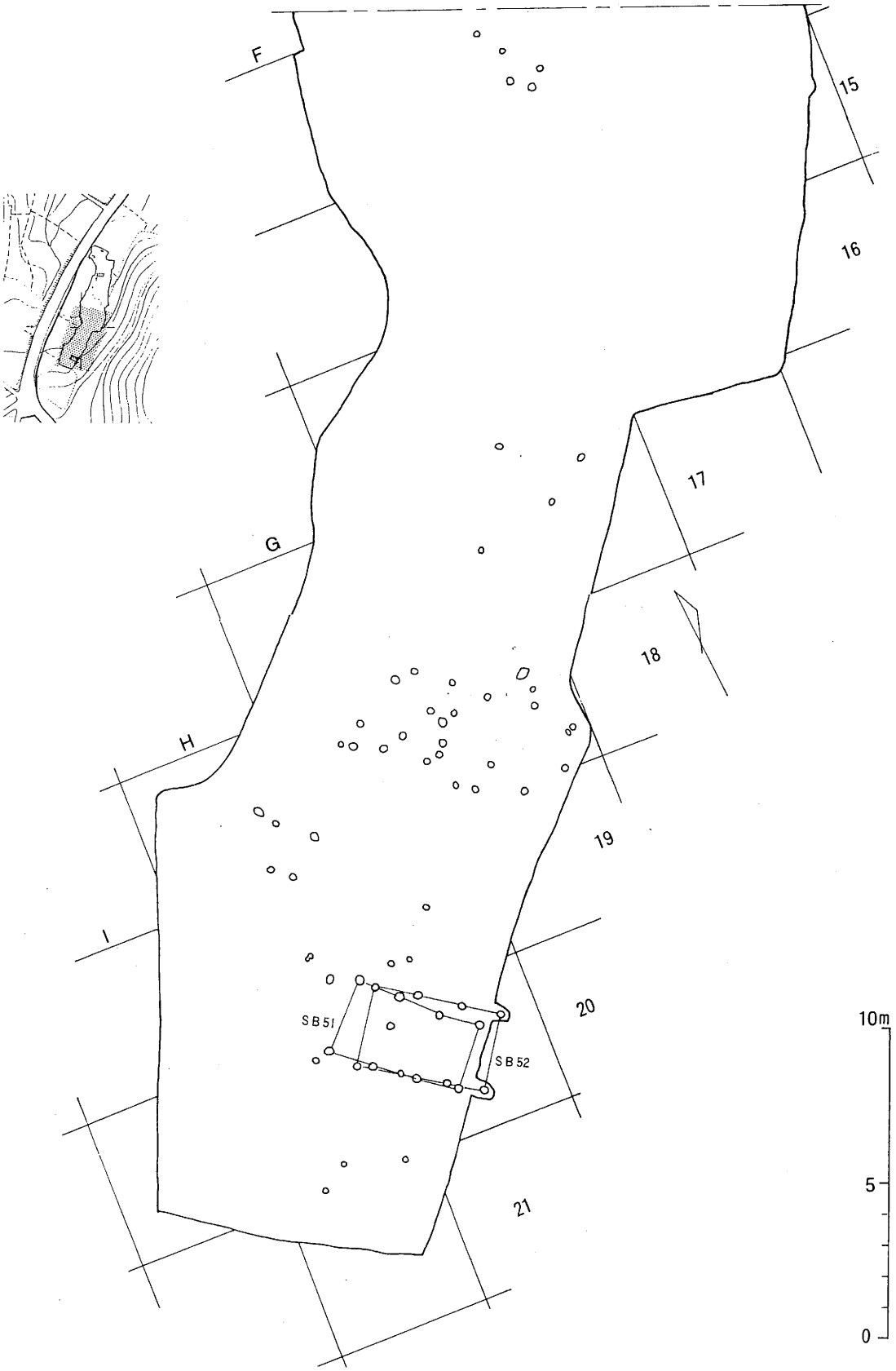


図98　Ⅵ地区遺構分布図(2)（1：200）

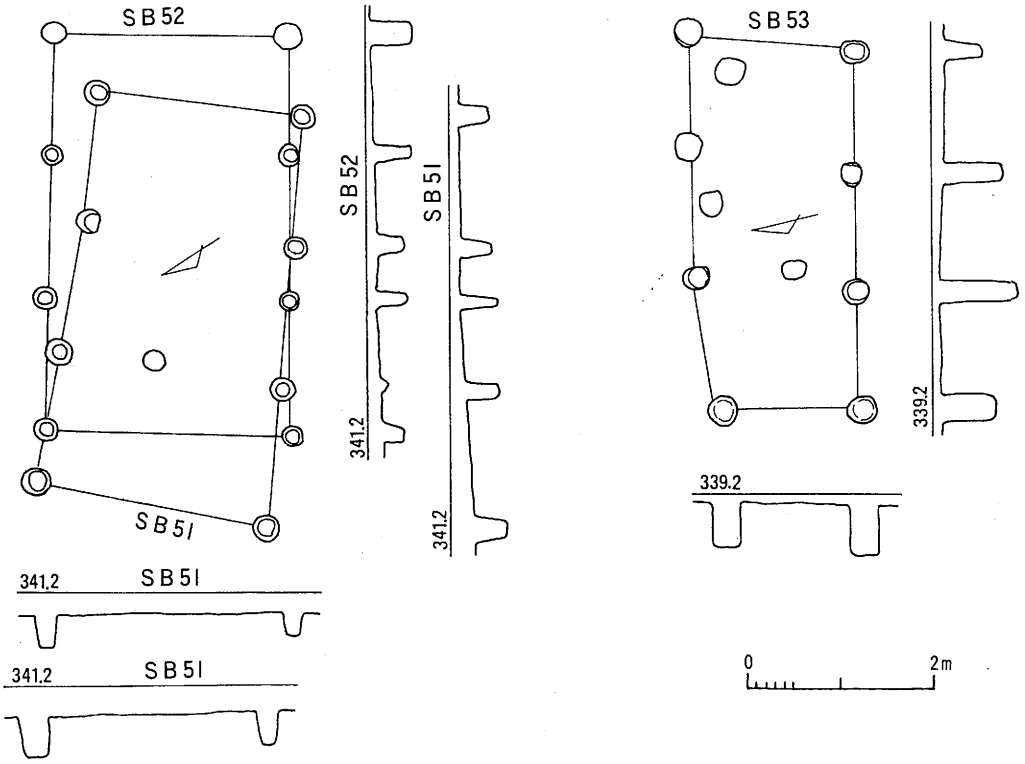


図99　Ⅵ地区ＳＢ51～53号掘立柱建物址実測図（1：80）

7　Ⅶ地区の概要

a　概　　要

平成３年度に調査した地区である。

b　遺　　構

検出された遺構は、弥生時代中期以前の溝状ピット（ＰＴ）131基、弥生時代中期の竪穴住居址２軒、同時期と思われる土壙墓（木棺墓）30基、掘立柱建物址　棟、落とし穴と思われる土坑２基ほかである。

溝状ピット　時期の判明する遺物がないが、ＴＰ121はＳＩ26号住居址の床面に覆われていたので明らかに弥生中期以前である。また、ＴＰ46より無茎石鏃が出土しているが、弥生時代の無茎石鏃は当遺跡においては認められないことから縄文時代の可能性が大きいと思われる。なお、ピットは９例認められるが、切り合い関係や、それぞれの形態に若干の相違が認められる。図100のＡ・Ｂ列はそれぞれ類似し、長軸が比較的短く、間隔も狭いのが特徴的である。Ｃ列は大型で上面が広がる形態で、Ｄ列は間隔が長い。Ｅ・Ｇ列は断面が内湾し、上面が広がる。Ｆ列は短軸の幅が細く、断面が内湾している。Ｉ列は間隔が長い。なお、切り合い関係については、ＢとＣが切り合っており、Ｂが切られている（ＴＰ58・59）。ＡとＤについては、Ｄが切られている（ＴＰ78・79）。このことからＤ→Ａ・Ｂ→Ｃの新旧関係にあると判断される。そして、各列の形態と新旧関係より、Ｄ・Ｆ・Ｈ→Ａ・Ｂ→Ｃ・Ｅ・Ｇと変遷したと考えられる。

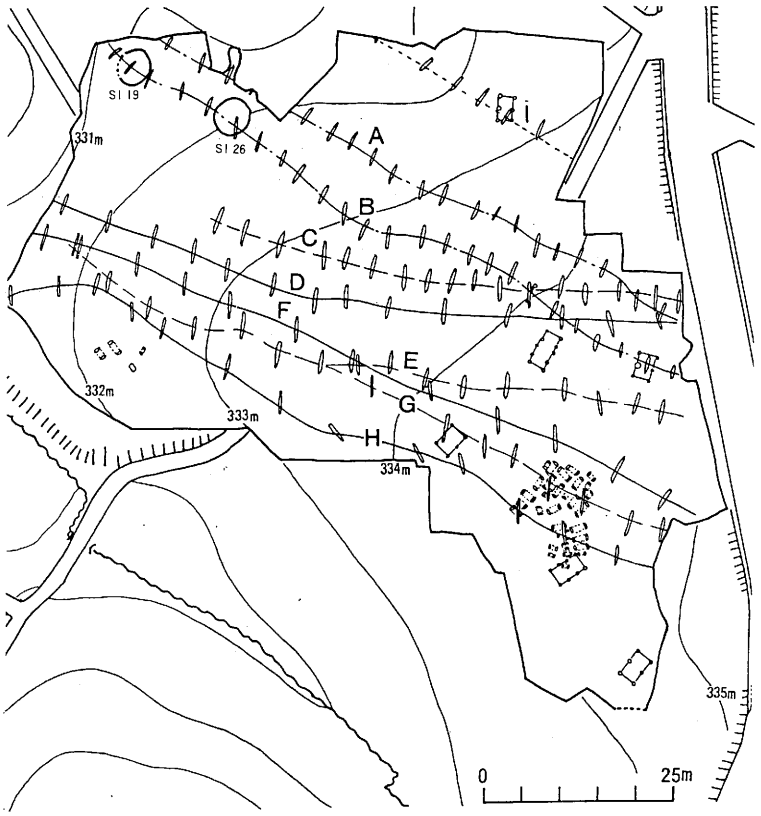


図100　Ⅶ地区主要遺構分布図（1：1,000）

竪穴住居址　２軒発見されている（ＳＩ９・ＳＩ26、発掘時は南原３ＳＩ１・ＳＩ２）。いずれも円形ないし楕円形プランを呈する。ＳＩ９はＴＰ125を壊して構築されている。中央土坑とその南側に炉と思われる焼土が存在している。ＳＩ29は、ＴＰ121を壊してその上に貼り床をして構築している。周溝が一部で２条となり、拡張したためかと思われる。そのため当初は円形プランであるが、拡張により楕円形プランを呈する。

木棺墓群　２か所で認められた。一群は約28基で構成され、ＴＰ群を一部で壊しながら構築されている。大半は木口痕とわずかな掘り方のみの検出であるが、ＳＫＢ35のみ木口痕は確認されていない。遺物は、ＳＫＢ１より管玉35点と石鏃１点、９より管玉６点、20より管玉１点が出土している。また、土器破片もわずかに出土している（138）。

図101　Ⅶ地区全体図（1:600）

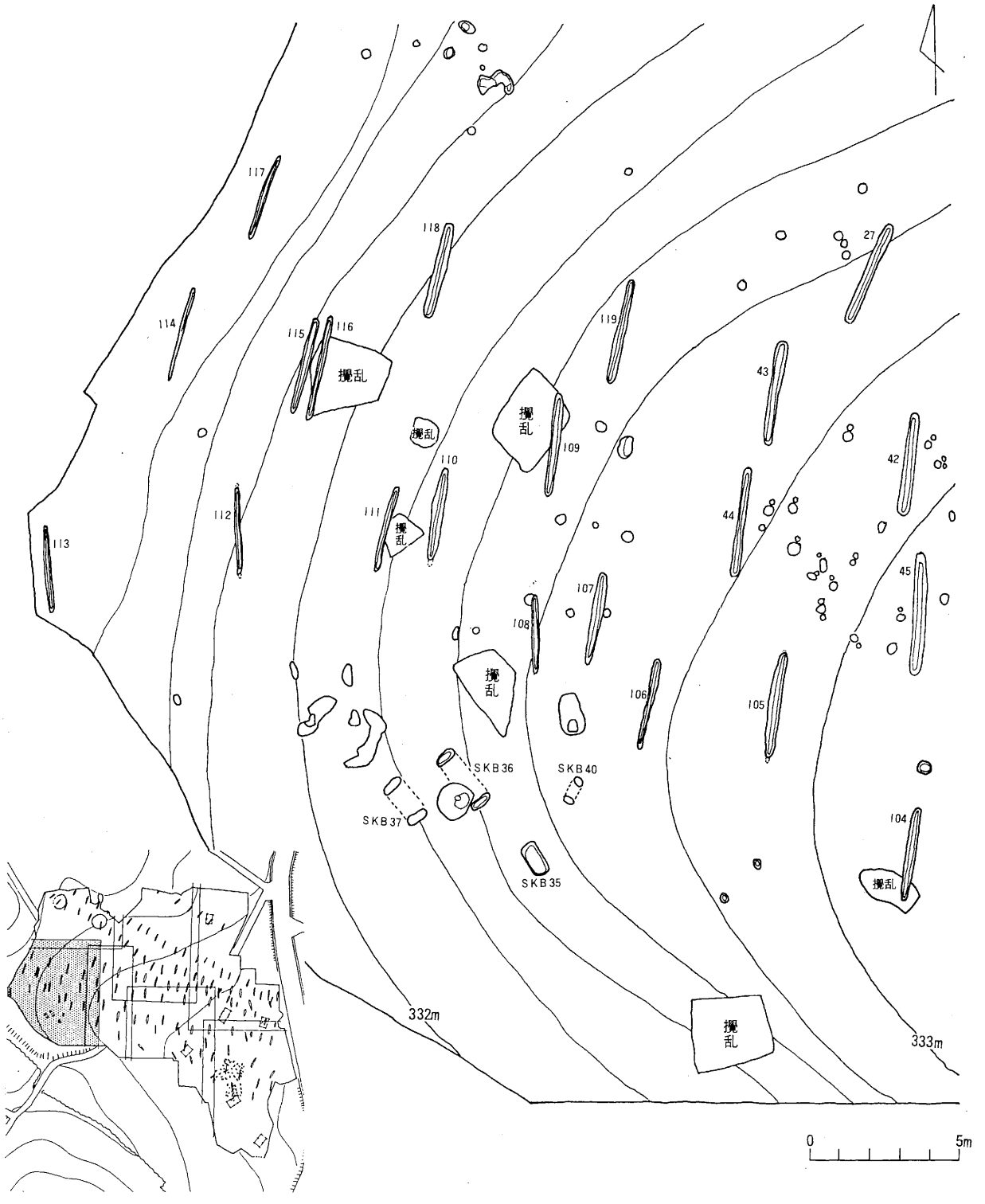


図102　Ⅶ地区遺構分布図(1)(1:200)

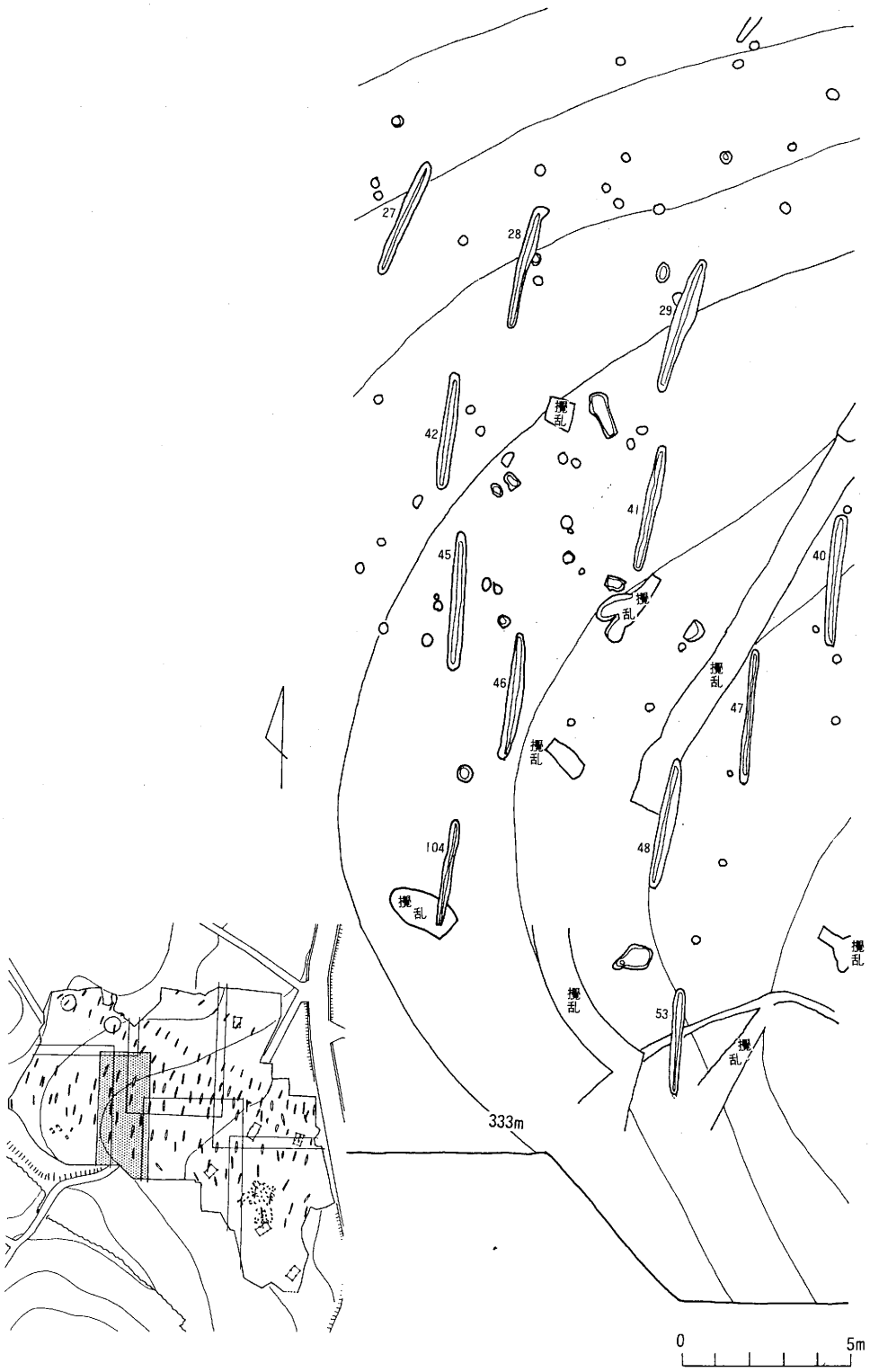


図104　Ⅶ地区遺構分布図(2)(1:200)

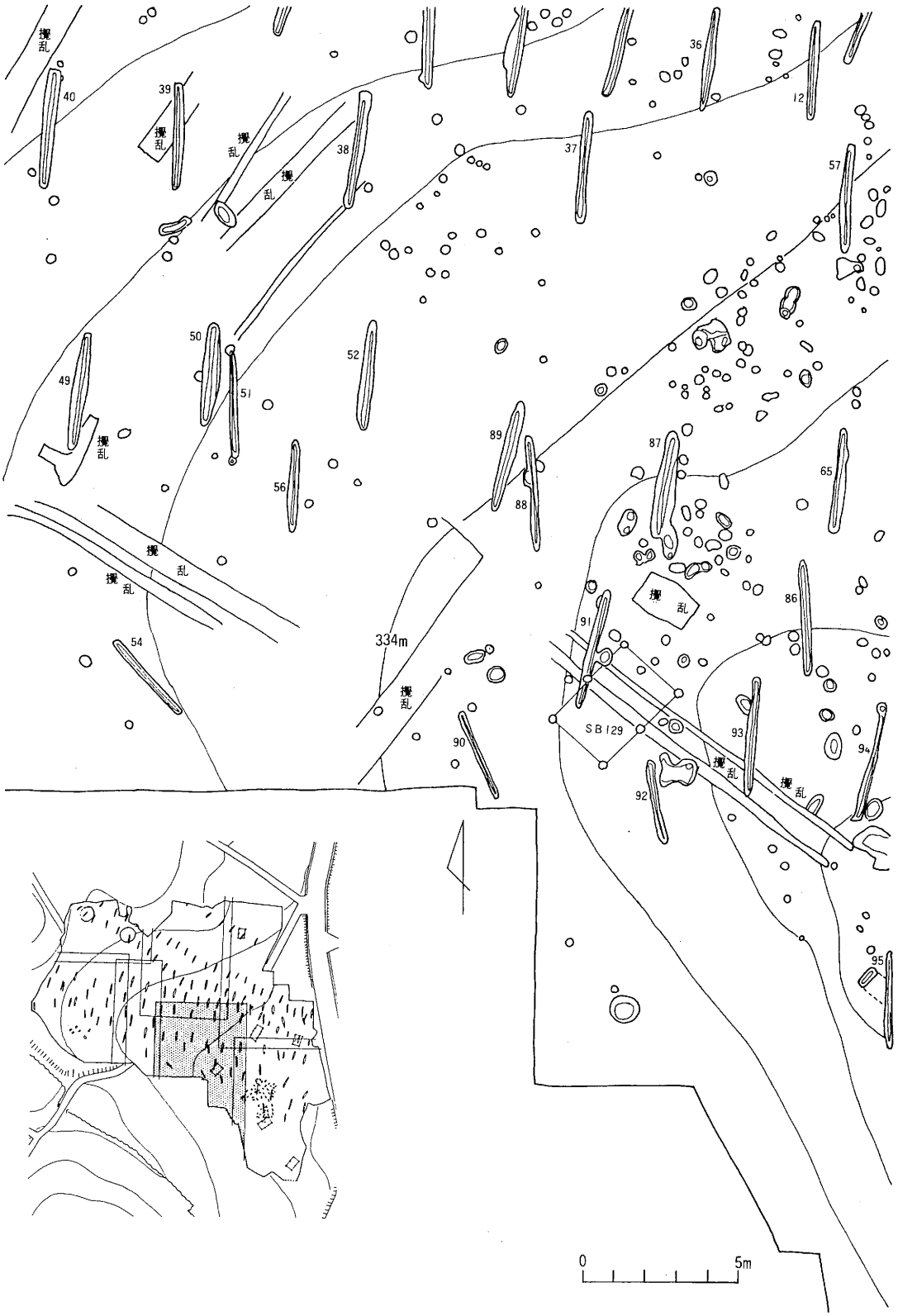


図104　Ⅶ地区遺構分布図(3)(1:200)

図105　Ⅶ地区遺構分布図(4)(1:200)

図106　Ⅶ地区遺構分布図(5)(1:200)

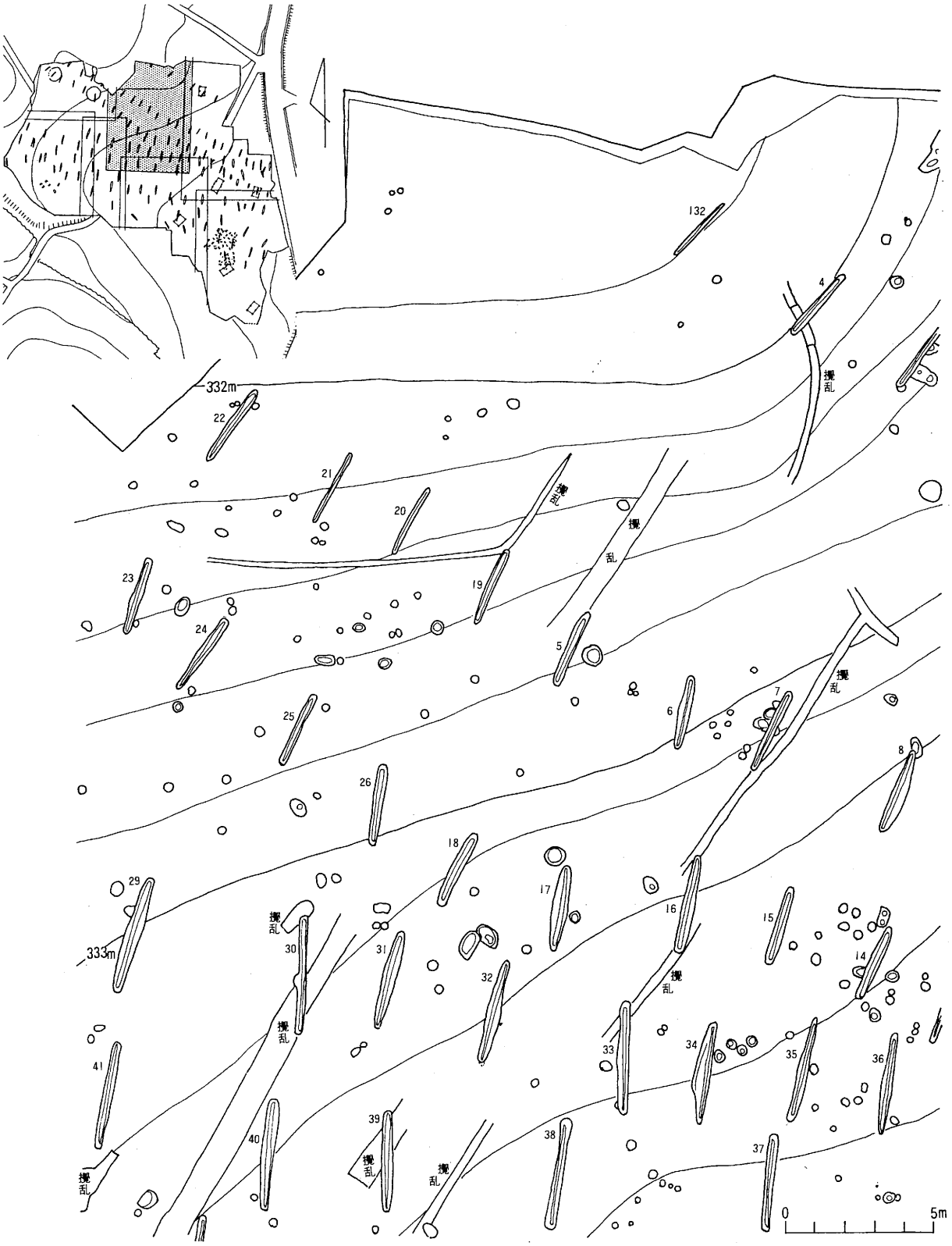


図107　Ⅶ地区遺構分布図(6)(1:200)

図108　Ⅶ地区遺構分布図(7)(1:200)

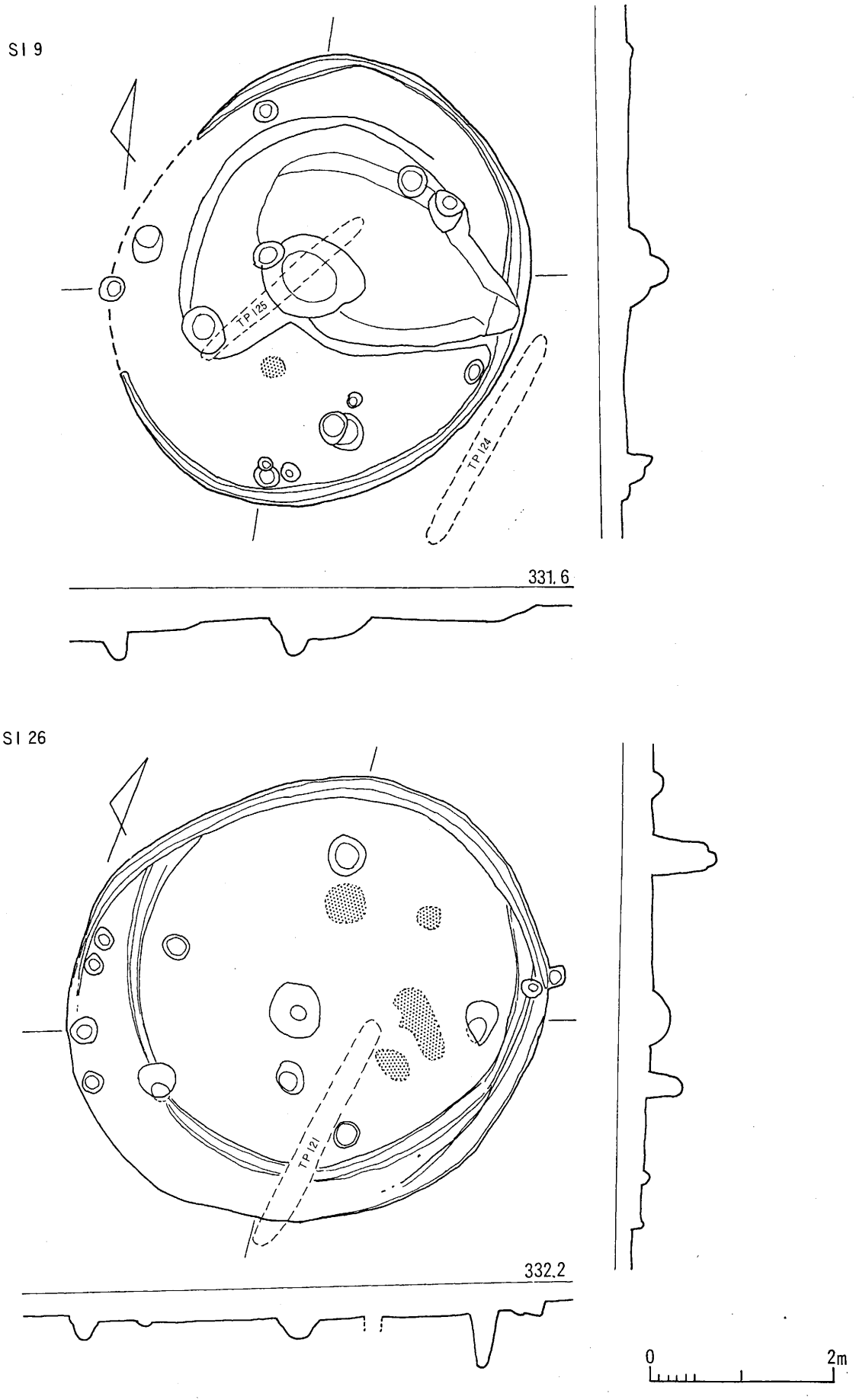


図109　Ⅶ地区ＳＩ９･26号住居址実測図（1：80）

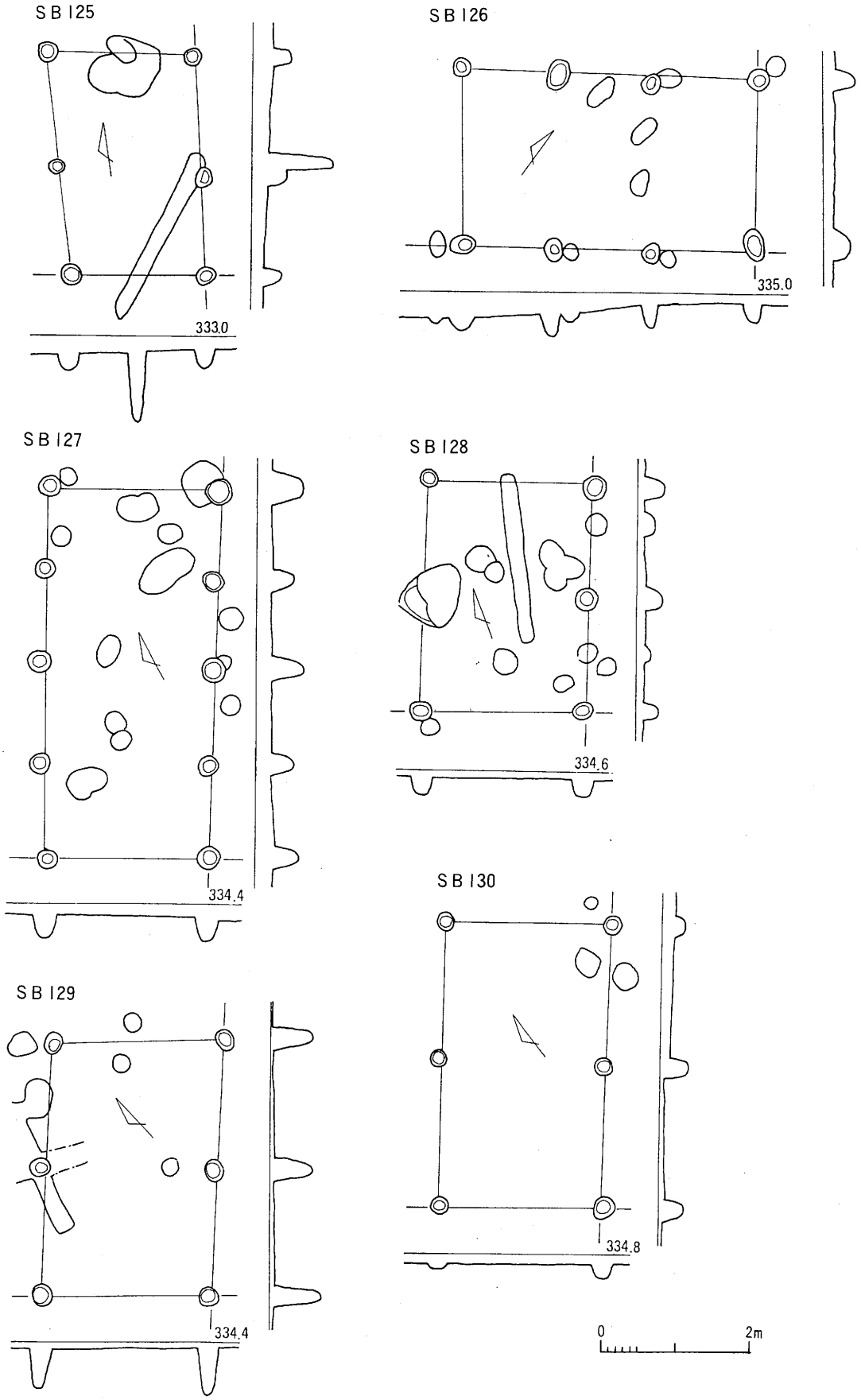


図110　Ⅶ地区ＳＢ125～130号掘立柱建物址実測図

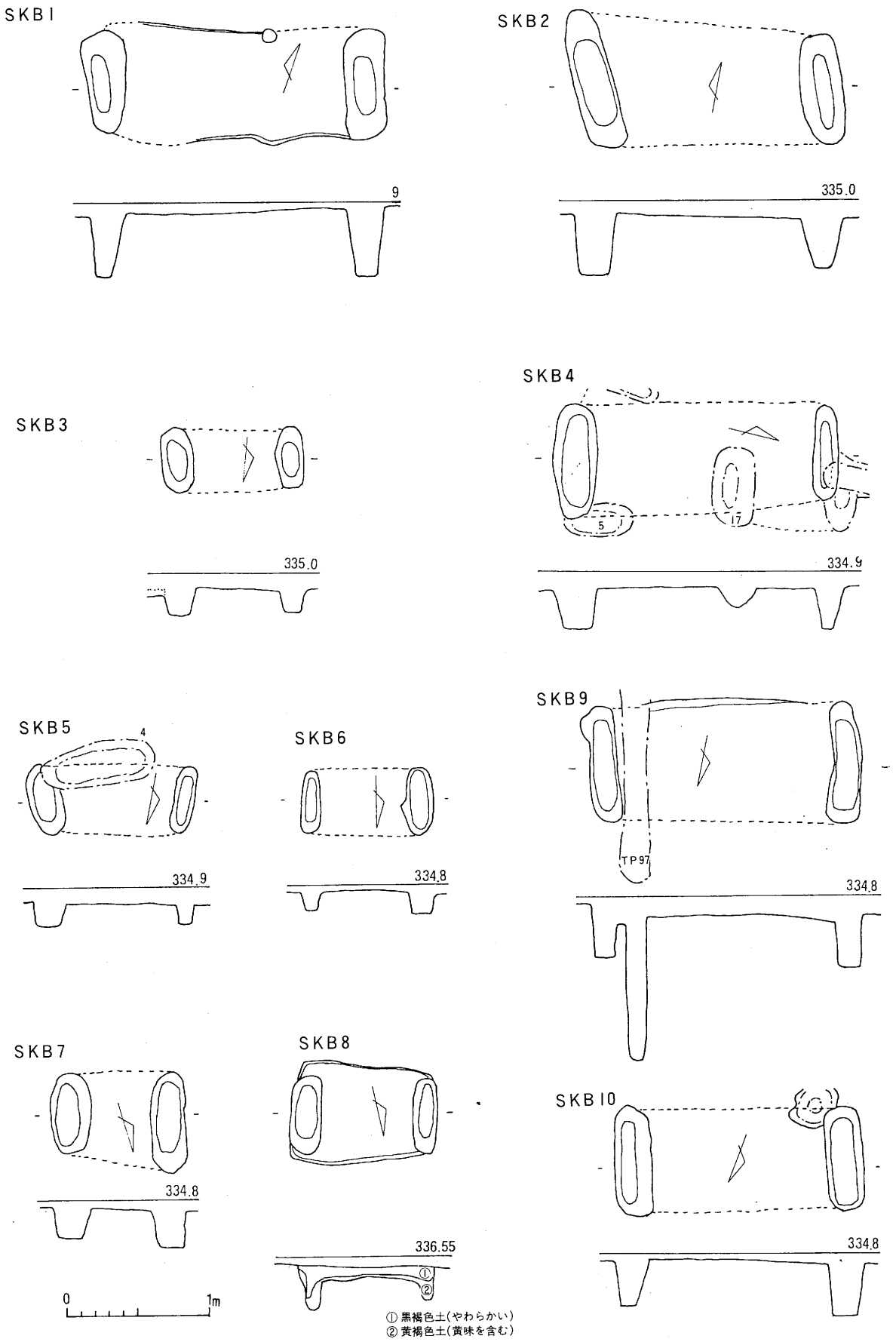


図111　Ⅶ地区ＳＫＢ１～10号木棺墓実測図（1:40）

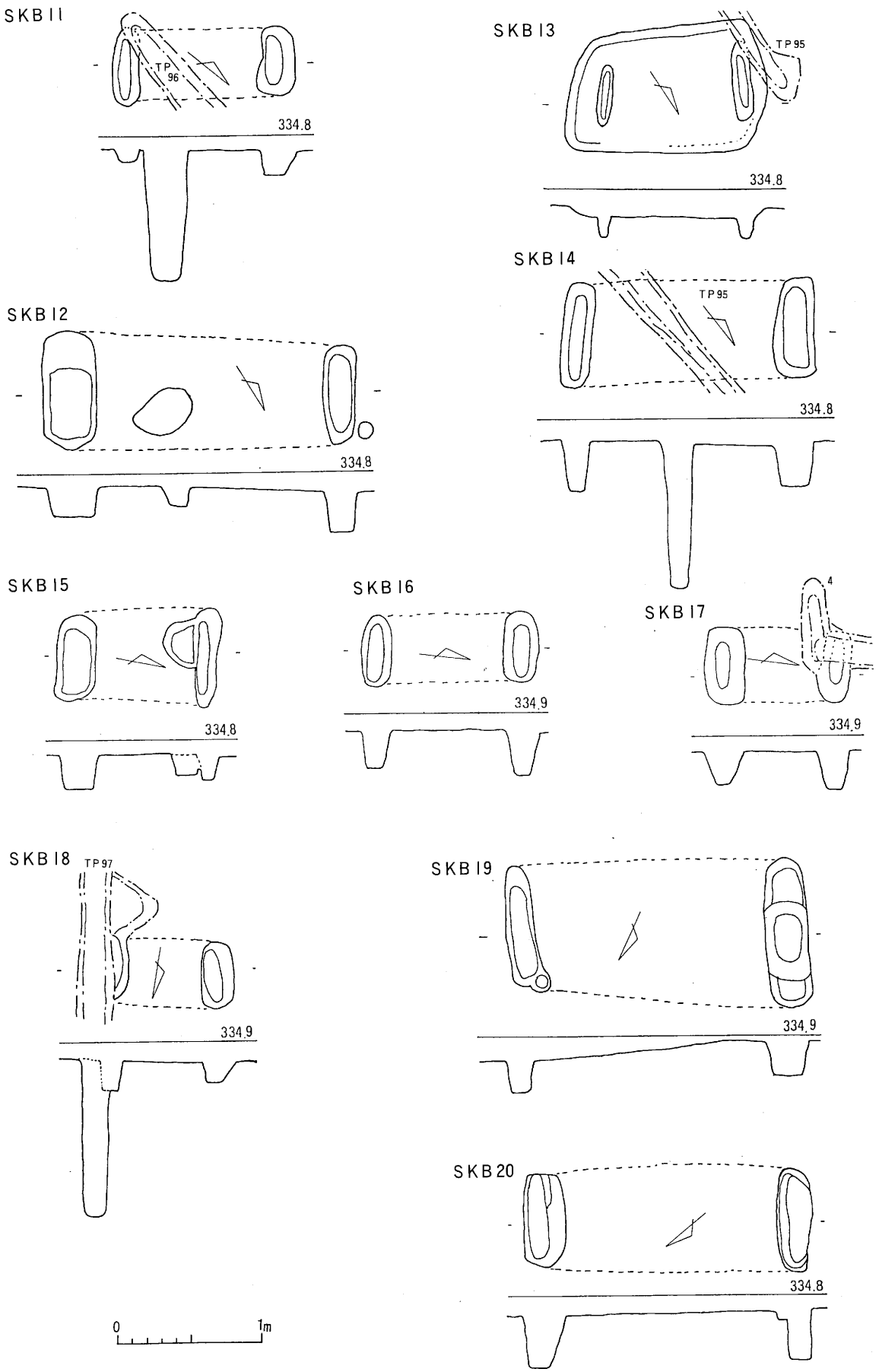


図112　Ⅶ地区ＳＫＢ11～20号木棺墓実測図（1：40）

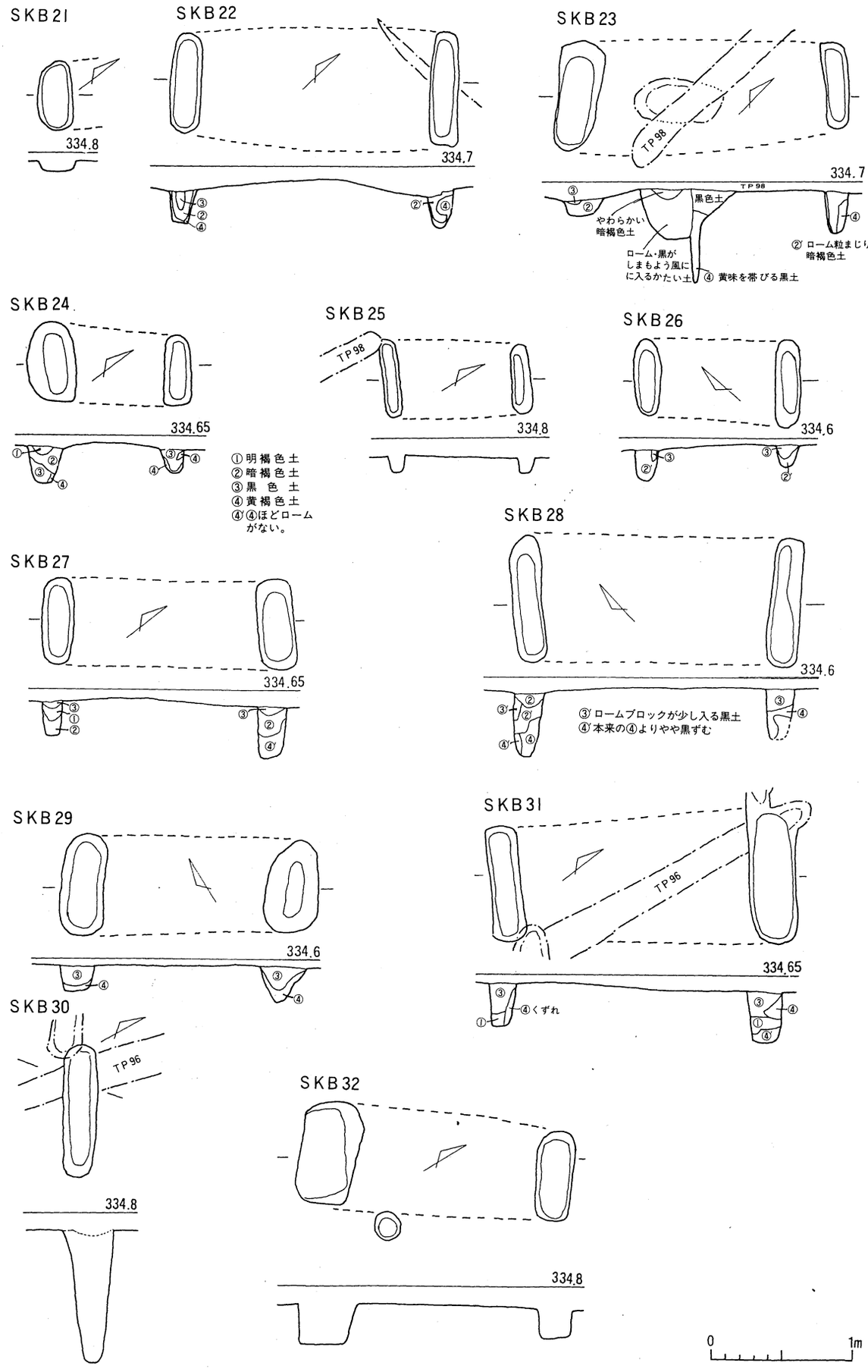


図113　Ⅶ地区ＳＫＢ21～32号木棺墓実測図（1:40）

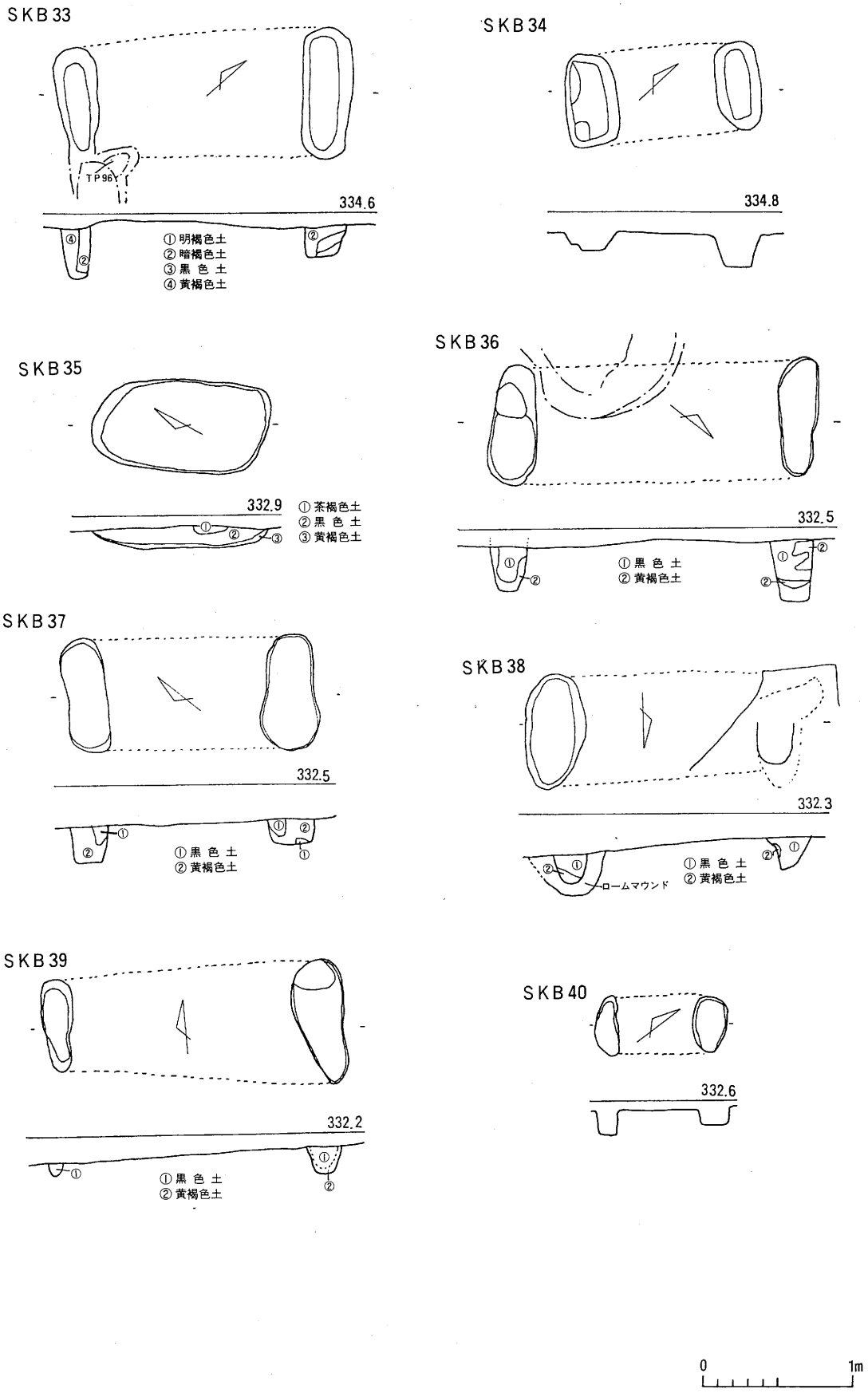


図114　Ⅶ地区ＳＫＢ33～40号木棺墓実測図（1：40）

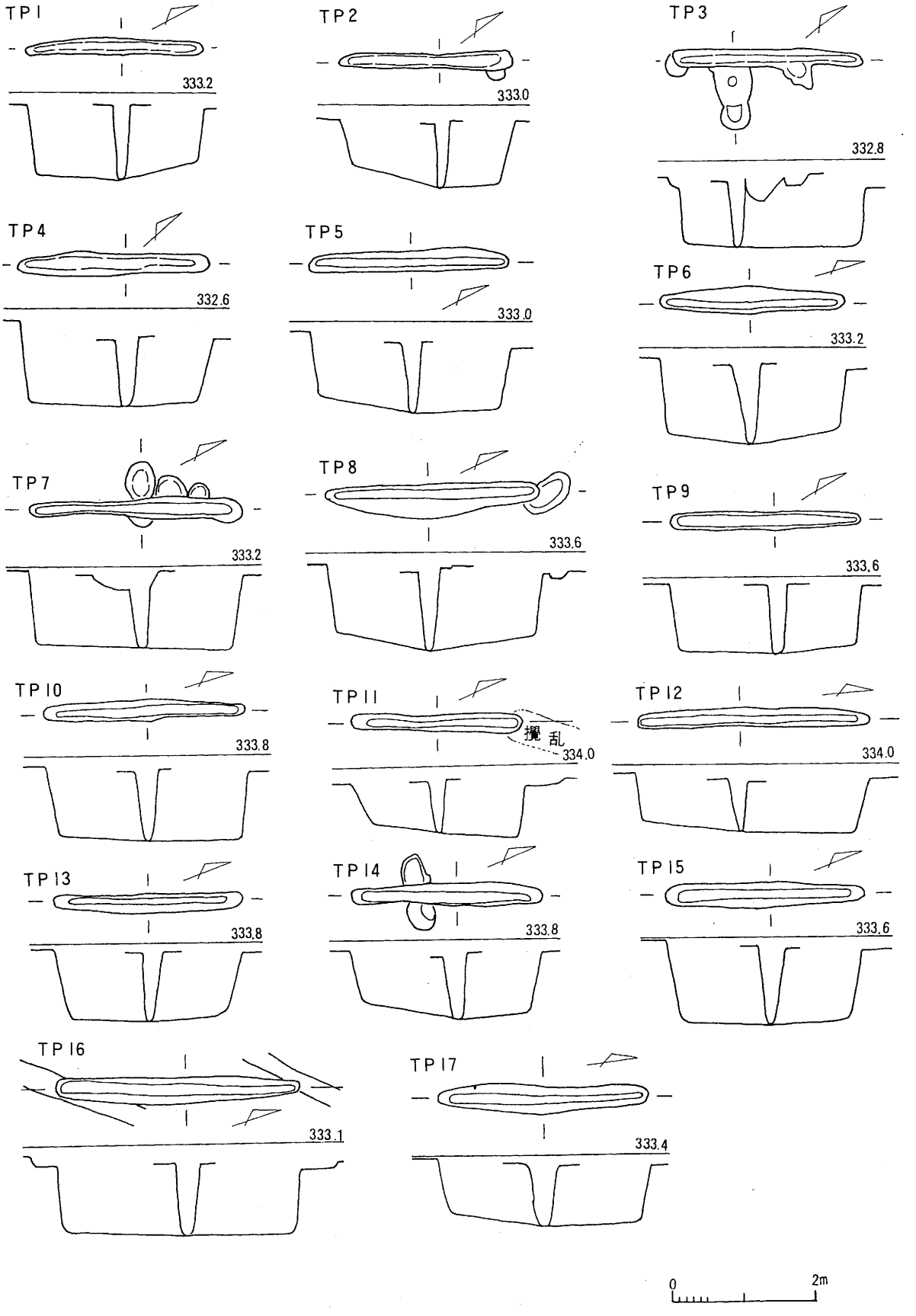


図115　Ⅶ地区ＴＰ１～17号溝状土坑実測図（1：80）

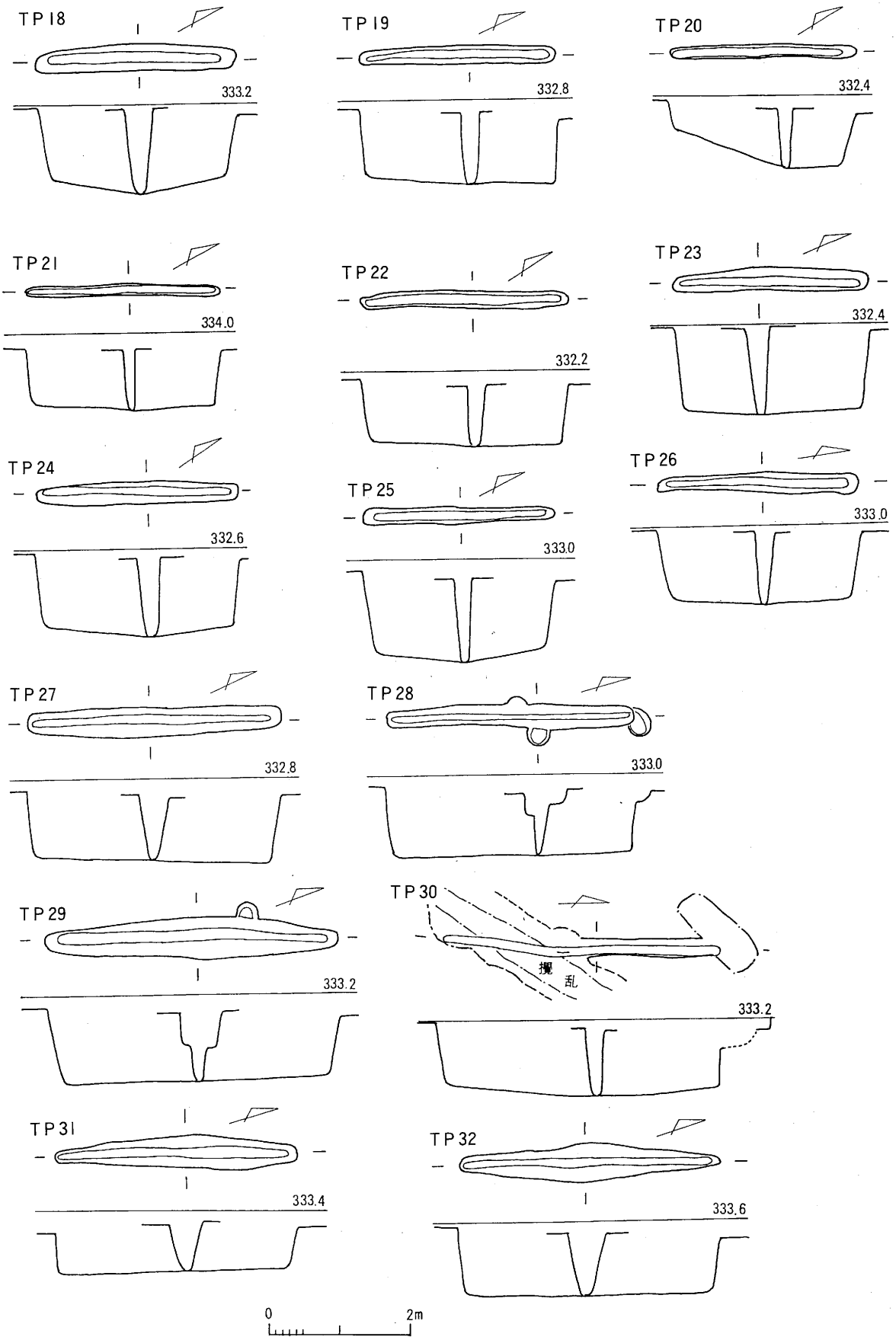


図116　Ⅶ地区ＴＰ18～32号溝状土坑実測図（1：80）

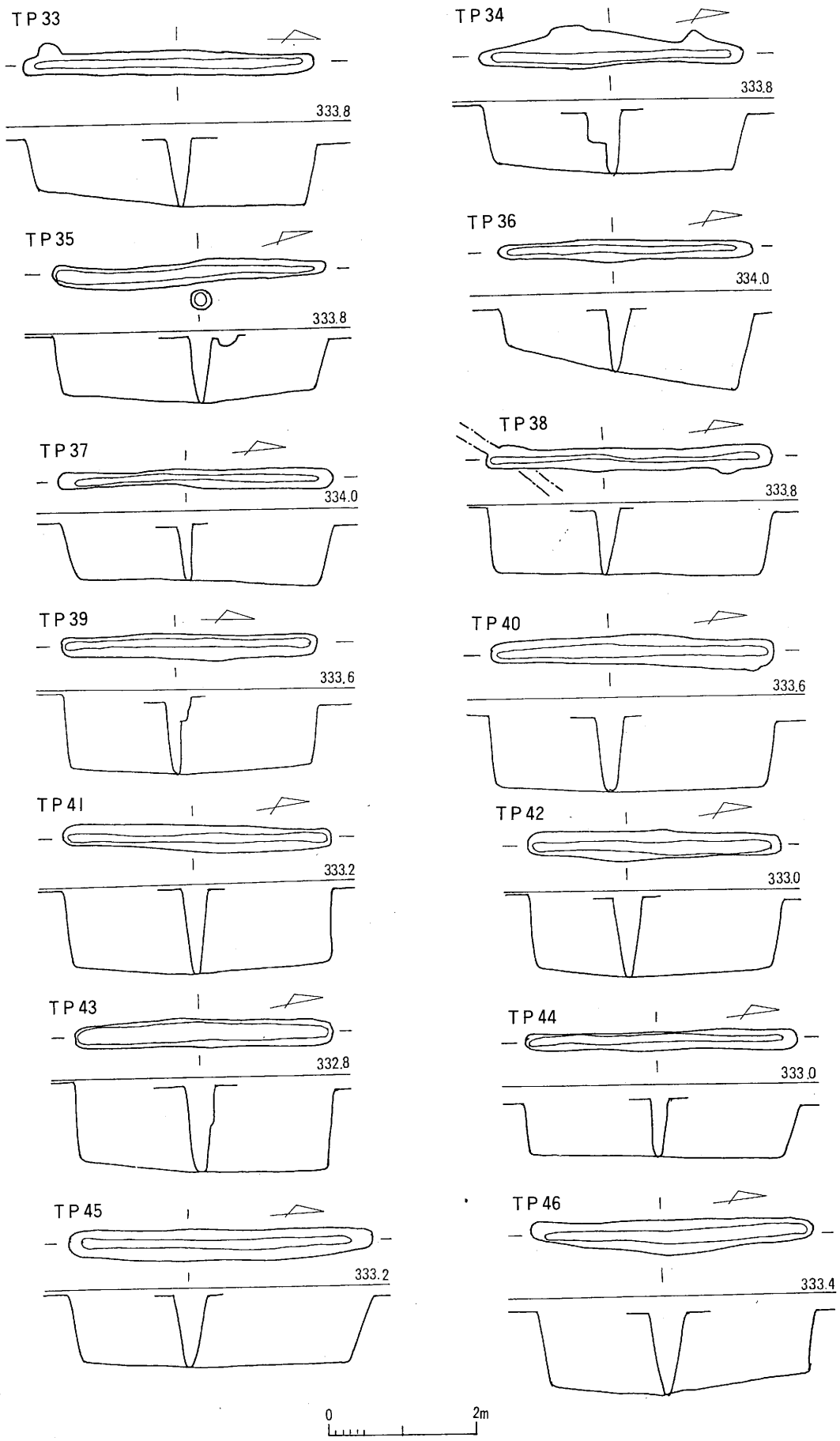


図117　Ⅶ地区ＴＰ33～46号溝状土坑実測図（1：80）

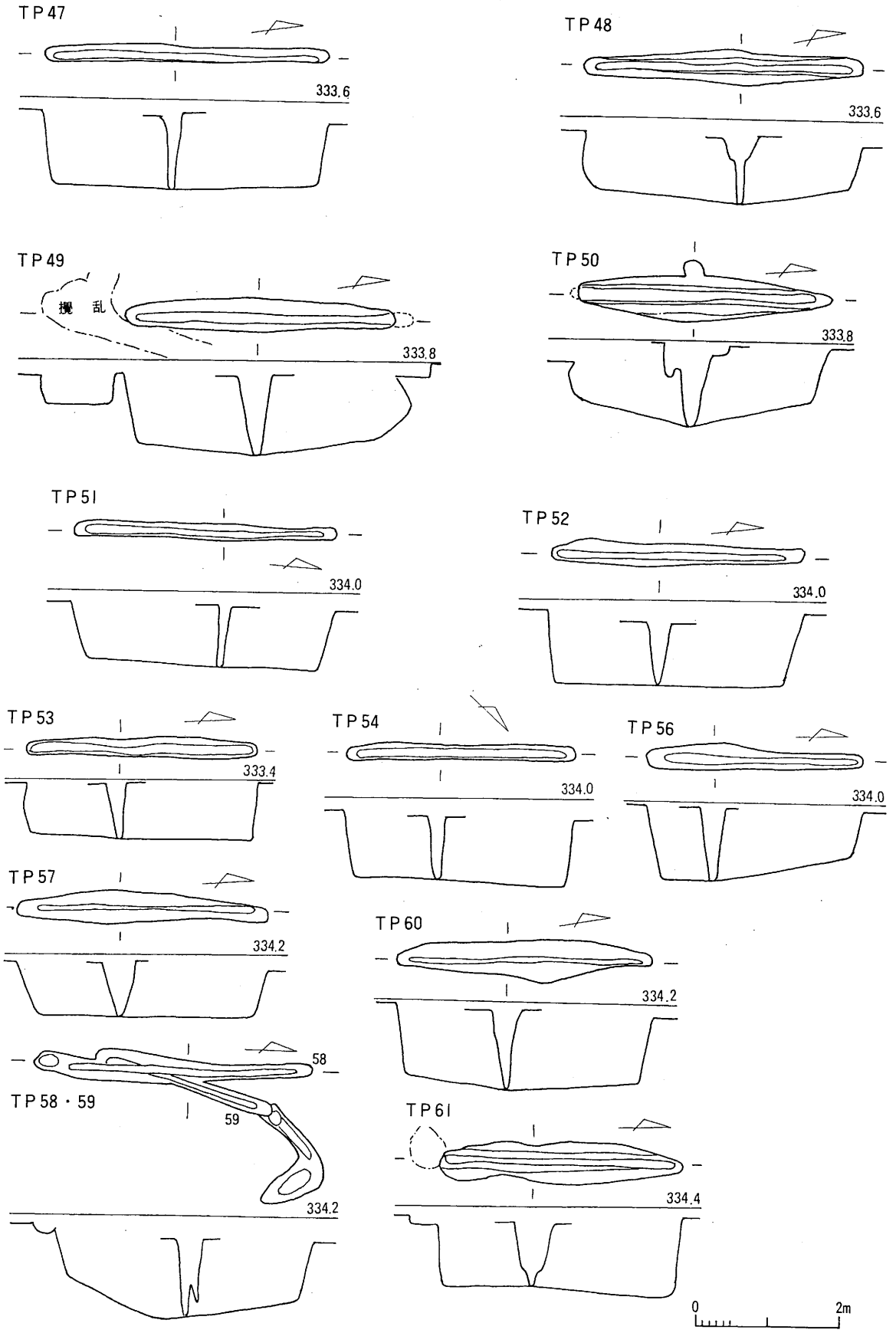


図118　Ⅶ地区TP47～61号溝状土坑実測図(1:80)

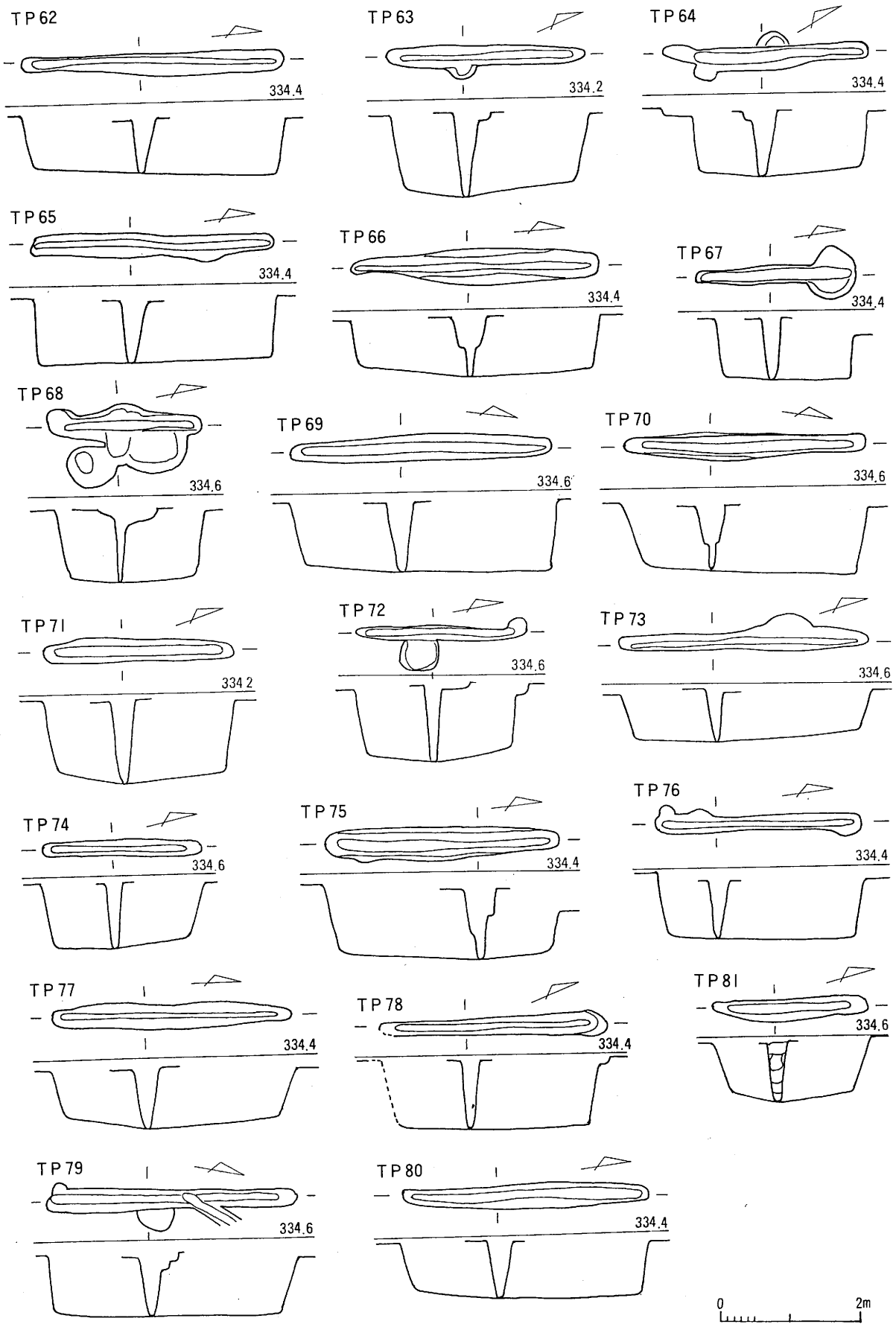


図119　Ⅶ地区ＴＰ62～80号溝状土坑実測図（1：80）

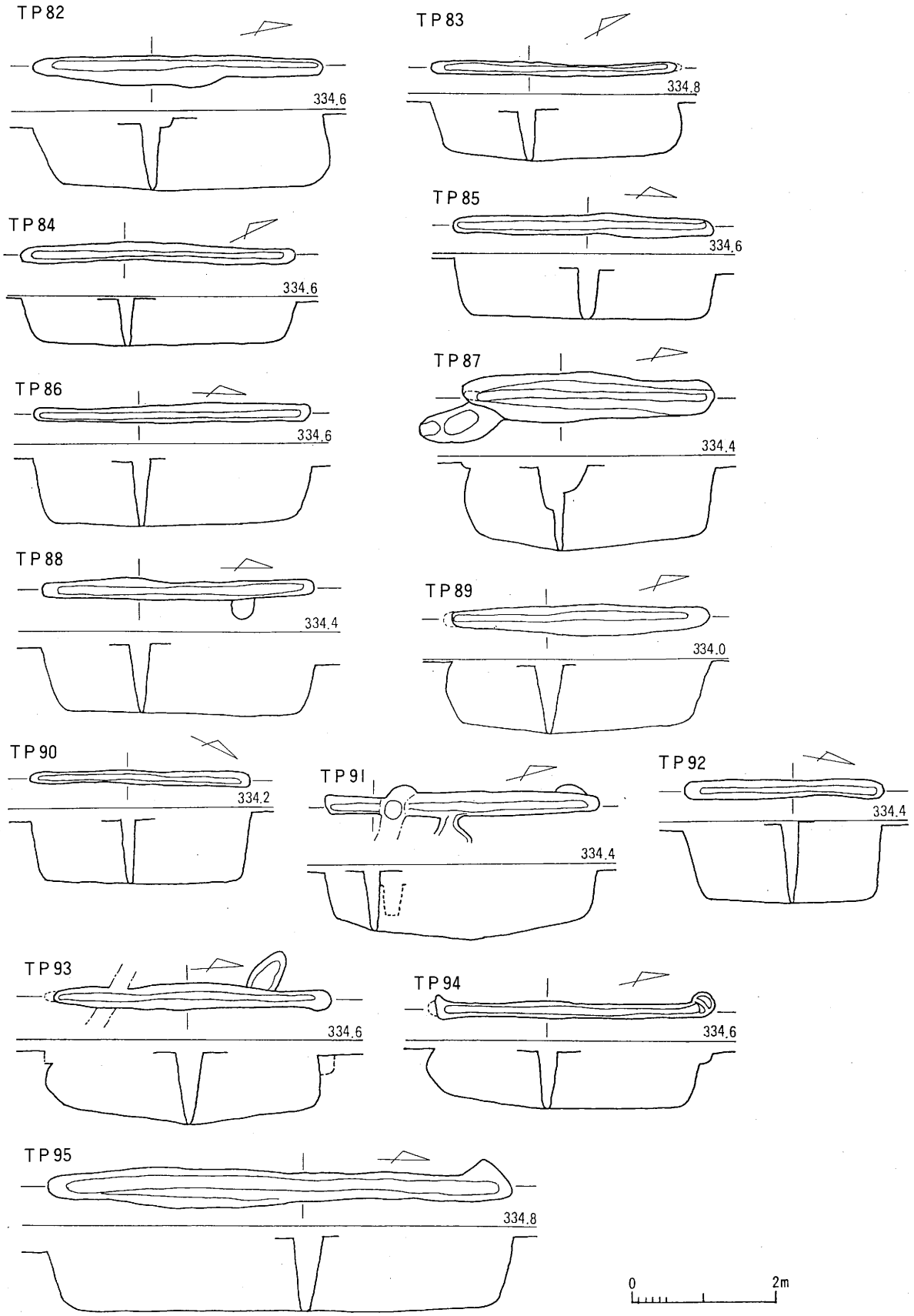


図120　Ⅶ地区ＴＰ82～95号溝状土坑実測図（1：80）

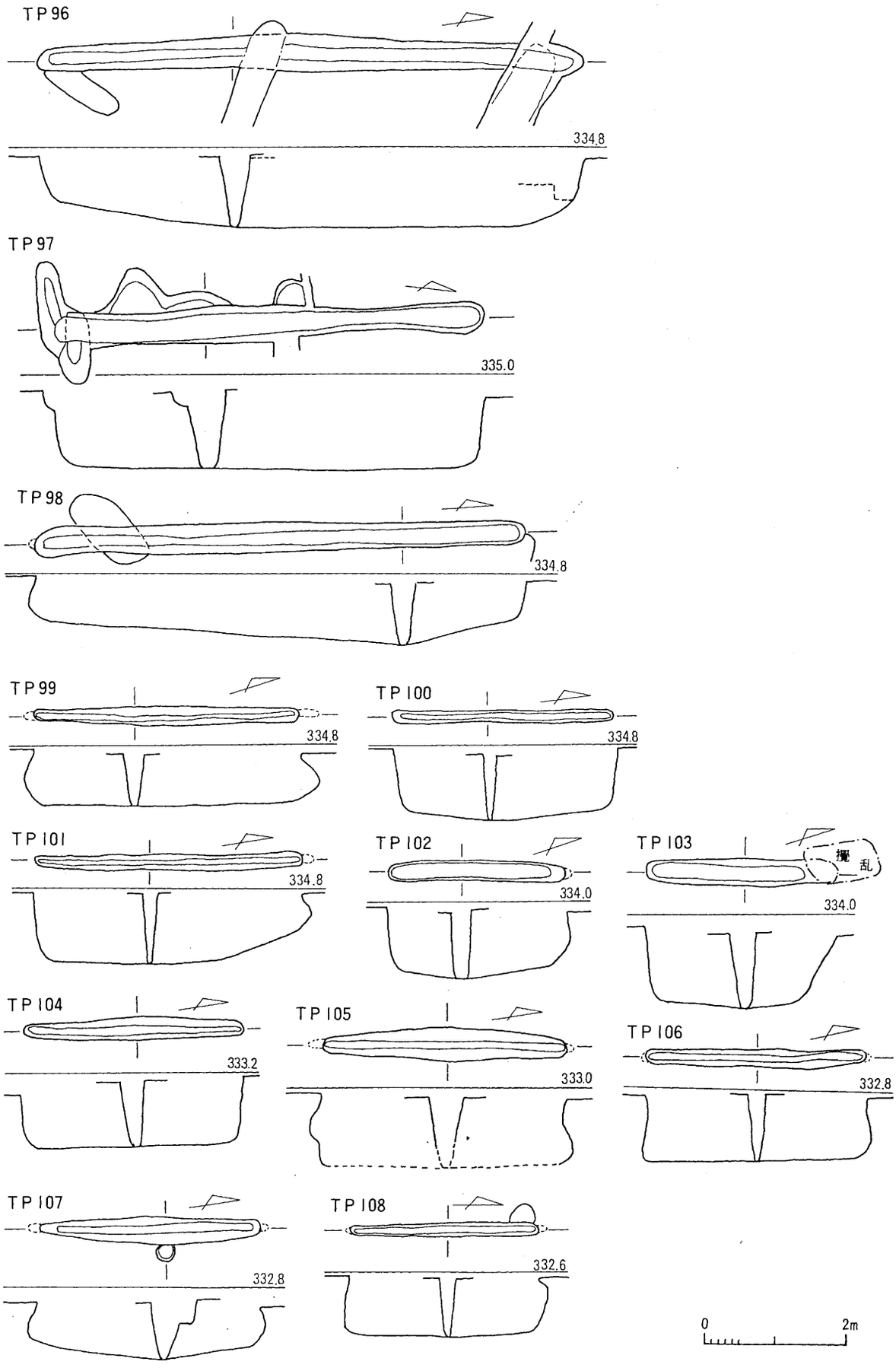


図121　Ⅶ地区ＴＰ96～108号溝状土坑実測図（1：80）

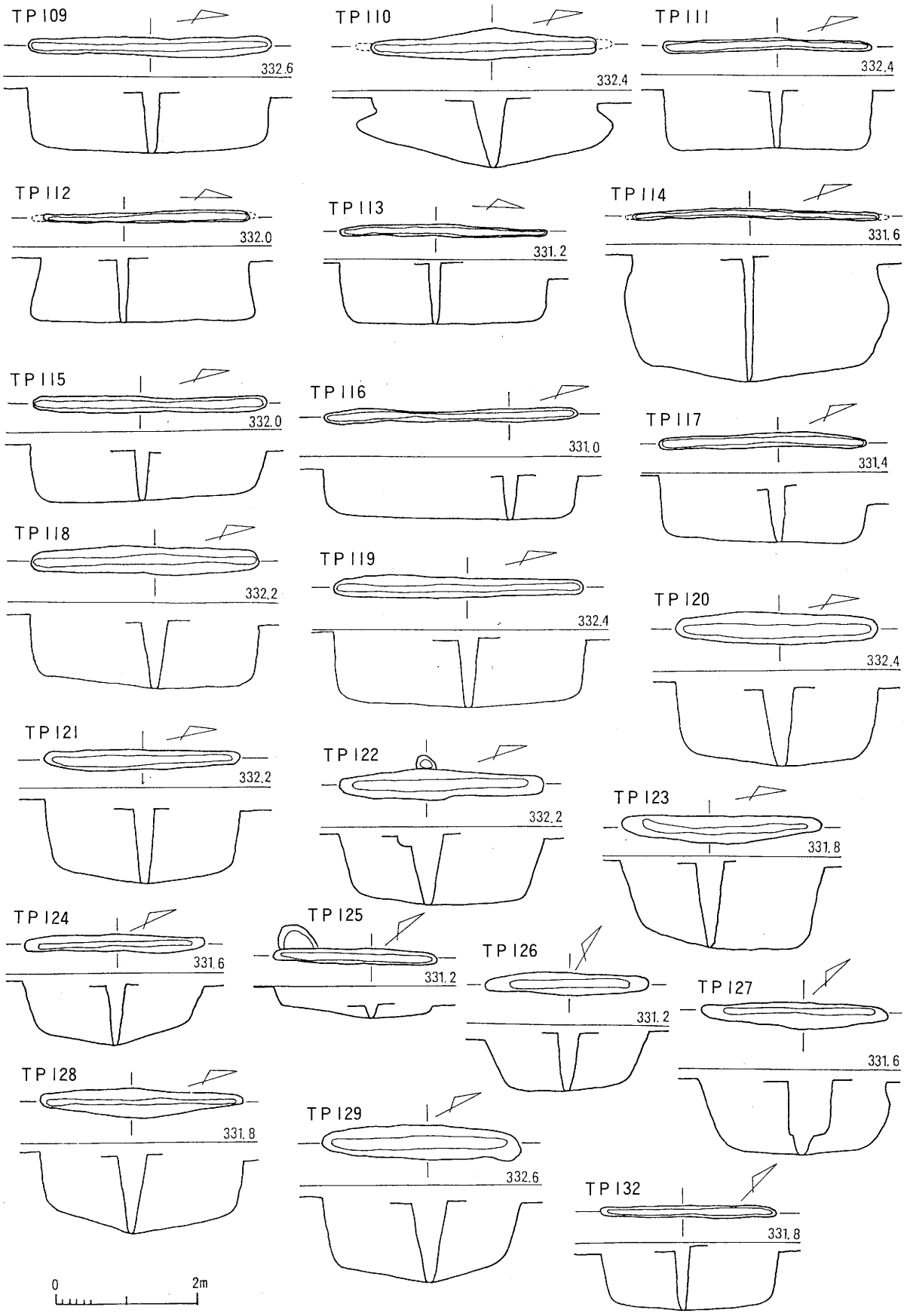


図122　Ⅶ地区ＴＰ109～132号溝状土坑実測図（1：80）

8　出土遺物

はじめに

小泉遺跡Ⅰ～Ⅶ地区より出土した遺物は、弥生時代中期より同後期末までの土器を中心としたものである。本稿では各地区別・遺跡別に土器を中心として略述することとした。掲載した土器は、略完形土器および図上復元可能な土器に限定し、遺構の所属時期を明らかにするために若干の拓影図も掲載した。中期の竪穴住居址出土土器は床面直上に限っているが、耕作土直下が床面となる場合が多く、必ずしも一括遺物とはいえない。一方、後期竪穴住居址の場合は掘り込みが深く、またピット内よりの出土遺物も多いために多分に一括性を有していると考えられる。

なお、石器・石製品・土製品については表に掲載したので、本文では特別の製品以外は省略する。

a　Ⅰ地区出土遺物

中期の土器

ＳＩ７号住居址出土土器(図124)　土器は甕形土器１点のみである(28)。口唇部に縄文を施文し、頸部以下には縄文施文ののち縦方向の区画を施している。さらに、胴部中央部には指頭による円文を施している。

ＳＩ10号住居址出土土器(図125)　ピット内に埋納されて出土した土器やその周囲から出土した壺（35・36）や甕（37・38・39）がある。壺は、球胴形の胴部から緩やかに頸部に立ち上がる細頸壺で、沈線による横帯文が構成され、棒状工具(35)や箆(36)による刺突文が施される。甕は無文(37)のものや口唇部の内外面にわずかに縄文が施される小型品(39)、口唇部に縄文を施文し、頸部から胴部にかけて櫛描横走羽状沈線の施されるものがある(38)。

c　Ⅱ地区出土遺物

中期の土器

ＳＩ８号住居址(図124－29～34)、ＳＩ12号住居址(図125－44)、ＳＢ43号掘立柱建物址（図186－186～189）およびその他の遺構(図125－51～53)から出土している。

ＳＩ８号住居址出土土器(図124)　細頸壺(29)、広口壺(34)、甕(30～33)がある。(29)は多段帯状の文様を施している。甕は区画波状文(31)、櫛描波状文(32)などがあり、口唇部には縄文が施文される。

ＳＩ２号住居址土器(図125)　ピット内より出土した甕１点のみである(44)。黒色を呈し、縦の羽状沈線が施文される。口唇部は指頭によるツマミ上げが行われている。

ＳＢ43号掘立柱建物址出土土器(図186)　甕(187・189)、小型広口壺(188)がある。甕(187)は横の羽状文が施文され、胴部文様帯下端を箆による刺突により区画している。口唇部は、指頭によるツマミ上げを行っている。(189)は小型甕で、櫛描波状文と二孔一対の緊縛孔がある。

その他の遺構出土土器(図125)　ＳＩ17号住居址およびＳＫＢ13～15木棺墓より出土したものである(51～53)。昭和63年度調査の最終末期の調査で、降雪のため一括取り上げを行ったため、所属遺構が不明瞭となってしまったものである。なお、ＳＩ17号住居址と木棺墓の新旧関係では木棺墓が新しい。

甕(52・53)は、ゆるく外反し胴部の張りも少ない器形を呈する。胴部には櫛描波状文が施され、(53)にはさらに縦走櫛描直線文が切る。(52)の口唇部には縄文が施される。

後期の土器

ＳＩ３号住居址出土土器(図123)　甕(１～５)、鉢(６～８)、高坏(９)がある。甕は頸部やや下半に櫛描廉状文、口縁及び胴部に櫛描波状文が施される(１・２)。(３)はいわゆる有段口縁となる北陸系の土器である。鉢(６～８)は内・外面とも赤色塗彩されており、(６)は二孔一対の緊縛孔をもつ。高坏は脚部のみの出土である。赤色塗彩されており、裾が広がる長い脚である。

ＳＩ５号住居址出土土器(図123)　壺(25・26)、高坏(27)が出土している。壺(25)は大きく口縁が外反する器形を呈し、頸部に沈線による区画文により棒状工具による刺突文が充塡される。高坏(27)は長い脚部で、赤色塗彩される。なお、本住居址からは太型蛤刃石斧が出土している。

ＳＩ11号住居址出土土器(図125)　壺(40)、甕(41・43)、高坏(42)がある。壺(40)は胴部下半に最大径を持ち、口縁端が立ち上がり受け口状になっている。頸部にはＴ字文が施され、その下端に刺突文のあるボタン状貼付文がある。さらに、四単位のＴ字文の中間にはナデにより直線文が消去されたのち赤色塗彩による区画がなされている。したがって、櫛描沈線文で切るＴ字文と赤色塗彩の区画文が交互に頸部を巡り、八単位の区画が形成されていることになる。甕(41)は口縁端が短く外反し、単斜の櫛描条痕文が付されている。形態・文様からも栗林式土器であり、本住居址に混入したものであると思われる。高坏(42)は脚部のみで、広がる形態を呈す。

ＳＩ14号住居址出土土器(図125)　高坏の坏部１点を図示した(50)。やや内湾しながら立ち上がり、口縁が外に折れる水平口縁に近い形態を示し、全面赤色塗彩される。

ＳＩ29号住居址出土土器(図129)　壺(104・110)、甕(105・106)、鉢(107・108)、高坏(109)がある。壺(104)は頸部から口縁にかかる一部のみの図上復元であるが、頸部には直線文を箆描沈線文で切るＴ字文が認められる。胴部下半から体部にかけては、(110)のように稜をもってややコケる形態となるようである。甕は櫛描廉状文のみのもの(106)とさらに櫛描波状文が頸部から口縁部に付されるもの(105)とがある。鉢(107・108)はやや内湾ぎみに口縁にいたる形態で、全面が赤色塗彩される。高坏は脚部下半のみで詳細は不明であるが、筒状に伸びて開く形態を呈している。

後期末の土器

弥生時代後期末から古墳時代初期の土器である。

ＳＩ４号住居址出土土器(図123)　壺(10・11・24)、甕(12～19)、高坏(21)、鉢(23)などがある。一部(19)弥生時代中期の土器が混入しているが、他は一括土器と考えられるものである。壺は、赤色塗彩され、(11)は装飾が施されるいわゆる装飾壺である。北陸月影式期と考えられる。

ＳＩ13号住居址出土土器(図125)　甕(45～47)、鉢(48・49)がある。(45)は単純に「く」の字状に外反する甕で、内外面ともにハケ調整が行われている。(46・47)は廉状文と櫛描波状文が施文される。口縁の外反の度合いは小さく、胴部の肩の張りも弱い。(48)は小型台付き鉢である。有段口縁を呈し、内湾ぎみの小さな脚部がつく。内面はヘラケズリ調整が行われている。鉢(49)は赤色塗彩のされない有孔鉢で、内湾ぎみの口縁形態をとる。

その他の遺物(図113)　ＳＩ１号住居址の炉内より炭化した木製品が出土している。流水紋と雷紋が表裏に彫られている。製品名は特定できないが、紡織具の可能性もある。発見時にはもう少し長かったが、取り上げ時に破損してしまった。ただし、文様等は認められなく、文様が彫られている部分は図示した部分のみであった。

c　Ⅲ地区出土遺物

弥生時代中期の土器

本地区の中期の土器は、ＳＩ18・34・35の３軒より出土したものおよびＳＢ55出土土器がある。

ＳＩ18号住居址出土土器(図126)　櫛描の斜格子目文と刺突文の施された甕形土器がある(54)。

ＳＩ34号住居址出土土器(図137－256～272)　箆状工具による横走沈線文の区画により、その間を縄文・刺突文で充塡する壺(261)、櫛描波状文の甕(268)などがみられる。なお、(272)は蓋である。

ＳＢ55号掘立柱建物址出土土器(図134)　ピットより完形の壺が出土している(191)。無花果形を呈する細頸壺の優品である。黒色を呈し、口唇部及び頸部上端に刺突文が施文され、頸部は無文帯となる。そして胴部では多段帯を形成し、平行沈線による区画内を縄文あるいは櫛描文で充塡している。

弥生時代後期の土器

壺・甕・鉢・高坏等のすべてがセットで出土した住居址はないので、各住居址ごとに特徴的な土器について説明を加える。なお、後期の住居址は掘り込みが明確で、遺物も床面直上の略完形品が多く、一括性が高いと考えられるものである。

ＳＩ19号住居址出土土器(図126)　壺(55)、甕(56～58・60)、鉢(59)がある。壺(55)は赤色塗彩がなされず、頸部に箆切りＴ字文が施される。甕(56～58)のうち、器形の判明する(56)は球胴形を呈し、頸部に簾状文が施文され、胴部及び口縁端まで櫛描波状文が施文される。なお、(60)は台付甕の脚部と思われる。

ＳＩ20号住居址出土土器(図126)　壺(61)、甕(62～64・66)、高坏(65)、鉢(67)がある。壺(61)は赤色塗彩された胴部のみの図上実測であるが、頸部に箆切Ｔ字文がわずかに認められる。甕の(64)は丸みのある胴部から『く』の字状に外反し、口縁端がやや内湾する。最大径を胴部のほぼ中央におき、頸部には簾状文、口縁部及び胴部には櫛描波状文が充塡される。(66)は台付甕の脚部であろう。高坏(65)は口縁部で水平につばが付され、やや内屈した口唇部となる。全面赤色塗彩される。

ＳＩ21号住居址出土土器(図127)　壺(68～72)、甕(73～77)、高坏(78～82)と数量的には豊富である。壺は赤色塗彩されるもの(69・70)とされないもの(68・71)がある。文様は櫛描文で切るＴ字文(68)と箆切Ｔ字文(69)および頸部から口縁部にかけて斜格子状沈線の施文されるもの(71)とがある。甕は、櫛描波状文と簾状文で充塡されるものがすべてであるが、器形は口縁部に最大径を有するもの(73・74)と、口縁の外反が弱く胴部に最大径をもつもの(74)などがある。高坏は、やや長めの脚部とほぼ直線的にのびた深めの坏部をもち、口縁部が水平に折れる形態のものである(78)。(79)はさらに明確な鍔状となる。

ＳＩ22号住居址出土土器(図128)　甕(83・84)、鉢(85～87)、高不(88・89)がある。甕(83)は櫛描波状文と簾状文が施文され、最大径は胴部中央にある。なお、(84)は口唇部がやや内側につまみ上げられ、その部分にも櫛描波状文が施文される。鉢(85～87)は、全面が赤色塗彩され口縁端がやや内湾する。高坏は筒状に伸びて開く脚部(88)と、直線的に開き口縁部が水平に屈曲する坏部(89)がある。いずれも赤色塗彩される。

ＳＩ23号住居址出土土器(図128)　壺(90～92・95)、甕(94)・鉢(93・96・97)がある。壺(90)は、口縁が朝顔状に大きく開き口縁端がやや肥厚する形態で、頸部には櫛描直線文が施文される。(92)は中期土器で、混入品であろう。甕(94)はやや長めの口縁で、口縁端がつまみ上げられやや内湾しその部分にも櫛描波状文が施される。鉢は一括しているがそれぞれ形態が異なる。(93)は口縁内湾鉢で、注ぎ口がある。(96)は有孔鉢、(97)は赤色塗彩された鉢で、二孔一対の緊縛孔がある。

ＳＩ25号住居址出土土器(図128)　壺(101)、甕(99・100)、有孔鉢(102)がある。壺(101)は赤色塗彩され、頸部に直線文に櫛描沈線文が切るＴ字文が施文される。甕(99)は簾状文が頸部をめぐり、口縁部・胴部ともに櫛描波状文が充塡される。有孔鉢(102)は赤色塗彩されず、口縁端がやや内湾する形態を呈する。この他土製匙形土製品が出土している(103)。

ＳＩ30号住居址出土土器(図130)　壺(111・112)、甕(113)、鉢(114～116)、高坏(117)が出土している。

壺は内面のみに赤色塗彩が施されるもの(111)と内ぺ外面ともに赤色塗彩されないもの(112)があり、前者は頸部に櫛描直線文、後者はそれに櫛描沈線文が切るT字文が施文される。甕(113)は口縁部に部分的に櫛描波状文が、頸部には簾状文が施文される。鉢は、有孔鉢の(114)は赤色塗彩されず、(115)の内湾鉢には全面赤色塗彩される。高杯(117)は水平口縁となるもので、全面赤色塗彩されている。

SI31号住居址出土土器(図129)　鉢(118)および蓋(119)が出土しているが、一部分の調査であったため土器の様相については不明瞭である。

SI36号住居址出土土器(図130)　壺(127・128)、甕(129・130)、鉢(131)、蓋(132)、高坏(133)がある。このうち蓋(132)は中期栗林式土器であり、本住居址に混入品として入ったものである。壺は赤色塗彩されており外反しながら立ち上がり受け口状の形態を呈する。櫛描直線文が施文されるもの(127)と箆切T字文が施文されるもの(128)とがある。甕はいずれも簾状文と櫛描波状文が充塡されるが、(130)には簾状文直下にボタン状貼り付け文も付される。高坏(133)はゆるく内湾しながら立ち上がり、口縁部が大きく屈曲して水平口縁に近い形態を示す。

弥生時代後期末の土器

SI32号住居址出土土器(図129)　甕(120・121)、蓋(122・125)、高杯(123)、小型手捏土器がある。甕はくの字状に外反した口縁がほぼ直立ぎみに立ち上がるいわゆる北陸系の有段口縁を持つもの(120)と箱清水系の櫛描波状文と簾状文の組み合わせによるもの(121)の二者がある。

d　Ⅳ地区出土遺物

中期の土器

SI37号住居址出土土器(図130)　壺(134～136)、甕(137)、鉢(138)が出土している。(134)は受け口状の壺と思われる。縄文を地文として、沈線による波状文が施文される。(135)は(134)と同様の文様構成であるが、器形は細頸壺となる。(136)は多段帯状の文様を構成する細頸壺である。

SI38号住居址出土土器(図130)　壺(141)、甕(139・140・142)がある。(141)は細頸壺の頸部で、凸帯部に刻み目が施される。甕は横の羽状沈線が施文され、(139)は羽状の交点に、(140)は文様帯の区画として下段に刺突文が施文される。

SI39号住居址出土土器(図130)　甕が2点出土している(143・144)。(143)は横の羽状沈線で胴部文様帯が、口唇部に縄文が施文されている。小型の(144)は口唇部のみ縄文が施文される。

SI41号住居址出土土器(図131)　壺(141)は細頸壺で、多段帯状の文様を構成する。無頸壺(148)は四方に山形文を配する区画文で、6単位の交点に隆起線文が垂下する。一見連続した菱形重ね文風にみえる。また。口唇部との区画には2本の隆帯文がめぐり、その上に箆状工具による刻み目が施される。なお、口唇部には二孔一対の緊縛孔を持つ。

その他の遺構出土土器(図134－193～199)　SI28号住居址に近接したピット内より潰れて押し込まれた状況で多くの土器が出土した。SI28号住居址と関係するものであるかどうかは不明である。

出土土器には、壺(193～196・199)、甕(198)、鉢(198)がある。壺の(193)は、口唇部に縄文を施文し、頸部は無文帯となる細頸壺である。(194)は、球形の胴部に箆描直線文により多段帯を形成し、その間を櫛描直線文により充塡している。(195)の広口壺は、口唇部に縄文、頸部に箆描直線文とその中に刺突文の充塡、胴部には縄文と箆による肋骨文・刺突文及び円形浮文が施文される。(196)は箆描直線文と山形文、その間を縄文が施文される。甕(197)は、口唇部に縄文を施文し、胴部には横走羽状沈線とその下端には刺突文が施文される。鉢(198)は直線的な逆台形を呈する。

後期の土器

ＳＩ40号住居址出土土器(図131)　朱塗りの小型鉢(145)と蓋(146)がある。

その他の遺物(図142)　木棺墓より管玉・勾玉が発見されている。長さ５～15㎜、径３㎜で、石材はすべて碧玉製である。勾玉はＳＫＢ69より１点出土している(33)。そのほか石包丁(図141－20)は、ＳＫ1より出土しているが、自然面を残すなど未製品と思われる。

e　Ｖ地区出土遺物

中期の土器

住居址は８軒検出しているが、ほとんどが破壊されており図示できる資料は少ない。ＳＩ48出土土器(167～171)、ＳＩ50出土土器(185)について説明を加える。

ＳＩ48号住居址出土土器(図132)　甕(167～169)および蓋(170・171)がある。(167)は単斜の櫛描条痕文が施文されている。(168)は胴部文様帯は不明であるが、口唇部に縄文を施したのち、指頭でツマミ上げている。(169)は赤彩された甕で、頸部に簾状文が施文される。

ＳＩ50号住居址出土土器(図133)　壺(185)は小型の細頸壺で、口縁部と胴部下半を欠くが無文と思われる。

その他の遺構出土土器(図134－200～205)　調査区の東端(図78・ＳＢ 117号掘立柱建物址東)よりまとまって出土したものである。台地がやや東側に傾斜を増す部分で、明確な遺構は検出されなかった。

出土遺物には、壺(200・202)、甕(201・203)、ミニチュア土器(205)がある。壺のうち(200)は胴部が無文のもので、(202)は頸部に縄文を地文として箆描直線文が施文される。同一個体ではないが器形等は似ている。甕は縄文が施文されるもので、(202)は頸部にわずかな無文帯をつくるのに対し、(203)は口唇部から胴部まで縄文が充塡される。ミニチュア土器は、縄文に箆描直線文・波状文が施文されている。

後期の土器

ＳＩ44号住居址出土土器(図131)　甕(153)、鉢(154)が出土している。甕は最大径が口縁にあり、簾状文・櫛描は縄文が施文されている。鉢は全面赤塗彩された逆台形を呈す。

ＳＩ46号住居址出土土器(図131)　本住居址出土土器は、図示したものの多くが住居床面から潰れたような状態で出土したものである。土器には、壺(155～158・160・161)、甕(159)、鉢(162)がある。壺は、受け口状の口縁を呈する壺(155・156・158)とそのまま外反する形態の壺(157)がある。(155)は頸部に刷毛目調整ののち櫛描Ｔ字文が施される。(157)は文様のない赤彩土器で、胴部下半で稜を作出し直線的に底部に収束する。(160)はさらに胴部下半がコケる形態であろう。(161)は外来系の壺で、胴部が大きく張り出して押しつぶれたような形態を呈する。甕の(159)は肩が張り胴部上半に最大径をもつもので、口唇部は面取りが行われる。簾状文及び櫛描波状文が充塡される。鉢(162)は有孔鉢で、内面はヘラ削りが行われる。全体的には箱清水式土器群の最終末的な様相を示している。

ＳＩ47号住居址出土土器(図132)　壺(165・166)、甕(163・164)が出土している。壺は赤色塗彩された受け口状口縁(165)と胴部下半から底部にいたるもの(166)がある。甕は、直立ぎみに立ち上がりやや外反し、櫛描波状文が施文される(163)。(164)は口唇部に刺突文が施文されるものである。

ＳＩ49号住居址出土土器(図132～133)　本住居址出土土器は、住居址南側より一括廃棄された状況を呈しており、廃絶された住居のくぼみ内に中央に向かってずり落ちたように出土した。したがって図示した資料も、そのままの状態で出土したものはなくばらばらに離れていたものが接合したものである。土器には、壺(172～177)、甕(178～181)、鉢(182)、高杯(183・184)がある。壺は赤色塗彩されるもの(174・175)とされないものがある。口縁形態は受け口状口縁となるもの(173・174)と思われ、(172)も受け口状とな

っている。施文は、櫛描直線文のみのもの(173)が1点あるが、他は箆切りT字文が施される(172・175・176)。胴部下半は明確に稜線を形成する(172)とゆるく収束する(177)がある。甕は、口縁部が肥厚し折り返し状口縁となるもの(178)がある。施文は、簾状文と櫛描波状文であるが、(179)のみ簾状文とならず直線文となっている。鉢(182)は口縁部が面取りされた逆台形を呈す。高坏は、内湾しながら口縁となるもの(183)と水平口縁となるもの(184)とがある。

f　Ⅵ地区出土遺物（図136）

Ⅵ地区において掘立柱建物址以外明確な遺構が確認できなかった。遺物は、調査区内において平面的分布に若干の粗密はあるもののほぼまとまって出土しており、Ⅵ地区全体が遺物集中地点として考えられるのである。

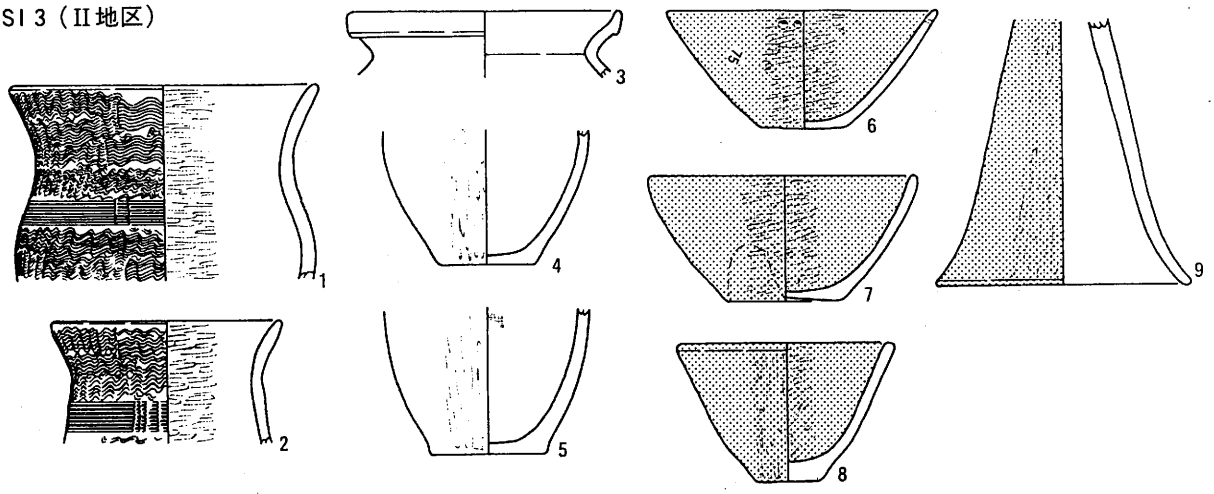
出土土器は、壺(206～213・216～217)、甕(218～221)、小型無形壺(214・215)がある。壺は、文様別には頸部から胴部にかけて懸垂文が描かれるもの(206～209)、多段帯状の文様を持つもの(210・216)とがある。口唇部は、箆状工具により刻みを施すもの(1)と縄文を施すものとがある(209)。なお、縄文帯は沈線区画後に充塡している。甕は横の羽状文を施文するもの(218)、単斜方向への櫛描条痕を施すもの(219)、縄文がわずかに施されるもの(220)、無文のもの(221)がある。口唇部は縄文を施した後、指頭によるツマミ上げを行うもの(218)と縄文を施したもの(219・220)などがある。小型無形壺は沈線による区画ののち、縄文(214)あるきは刺突文(215)を充塡している。

g　Ⅶ地区出土遺物

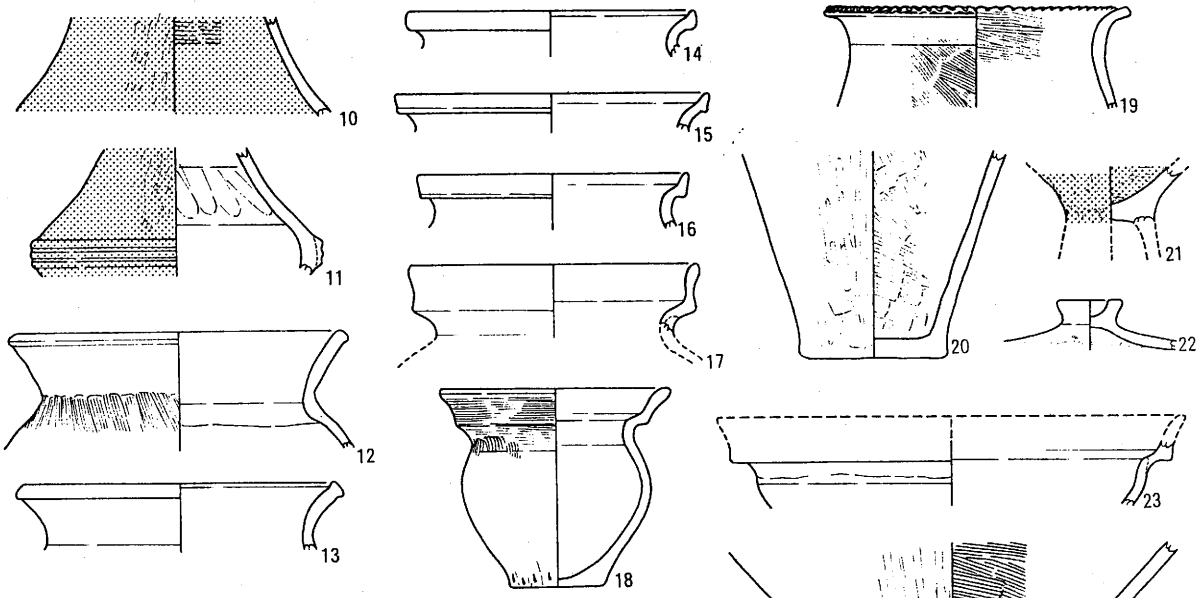
本地区では竪穴住居址2軒が発見されているが、図示できる資料は少ない。ＳＩ９号出土土器では、ミニチュアの壺形土器が出土している(図133－186)。沈線により多段帯状の施文を行い、櫛状工具の1本を挿入して内面を形成しただけの非実用品である。

なお、木棺墓より出土した土器(図138－298～305)は、いずれも埋納したものではなく埋土に混入したと思われるものである。いずれも栗林式土器の範疇に入る。

SI 3（II地区）



SI 4（II地区）



SI 5（II地区）

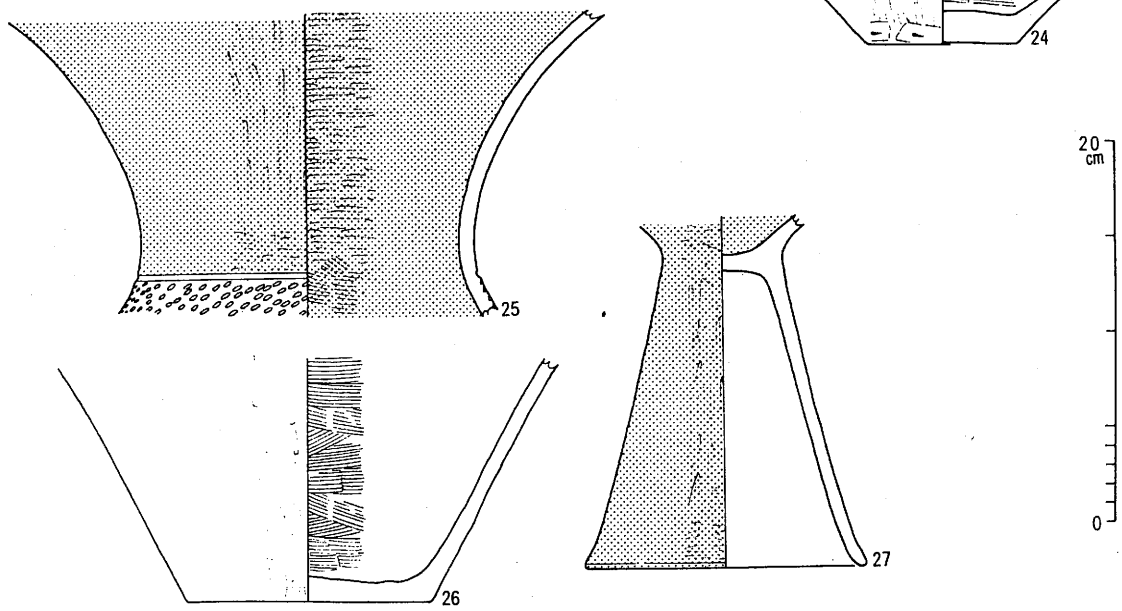
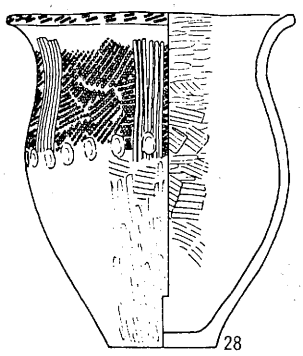
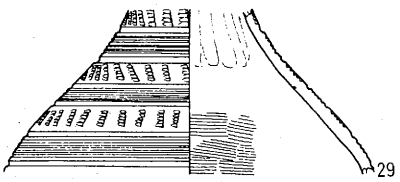


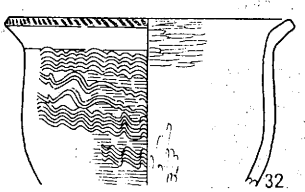
図123　出　土　遺　物 (1)

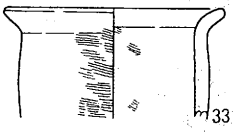
SI 7（I地区）

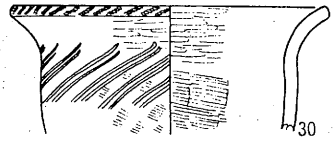


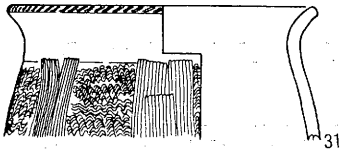
SI 8（II地区）

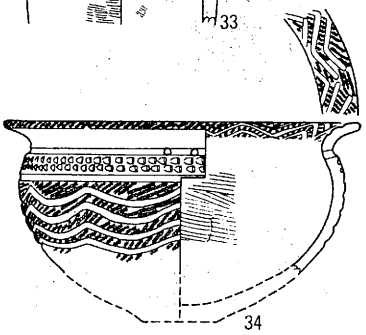




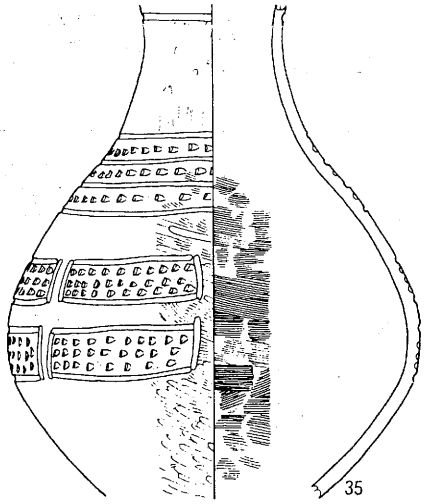


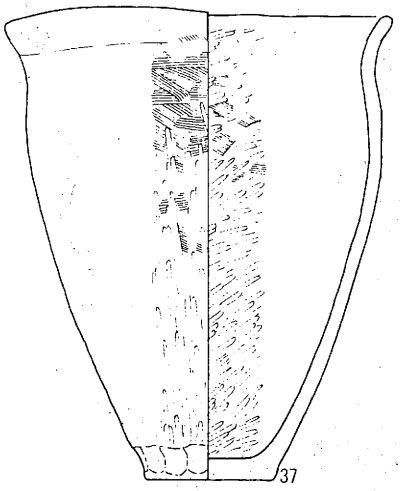


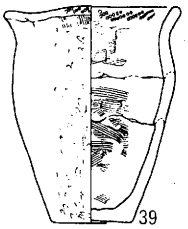


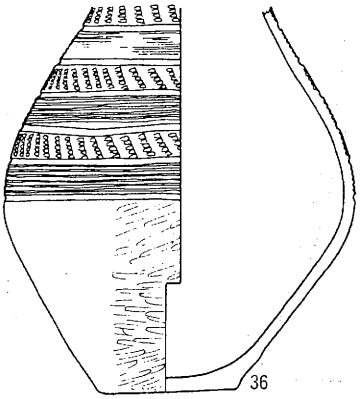


SI 10（I地区）









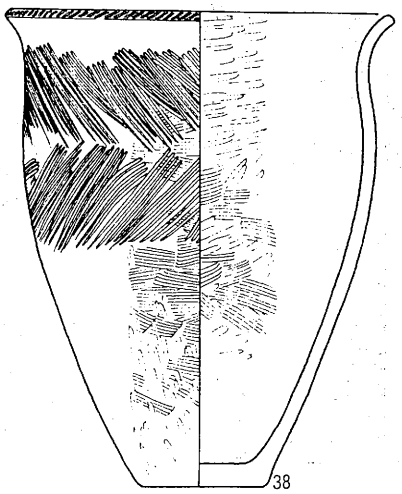
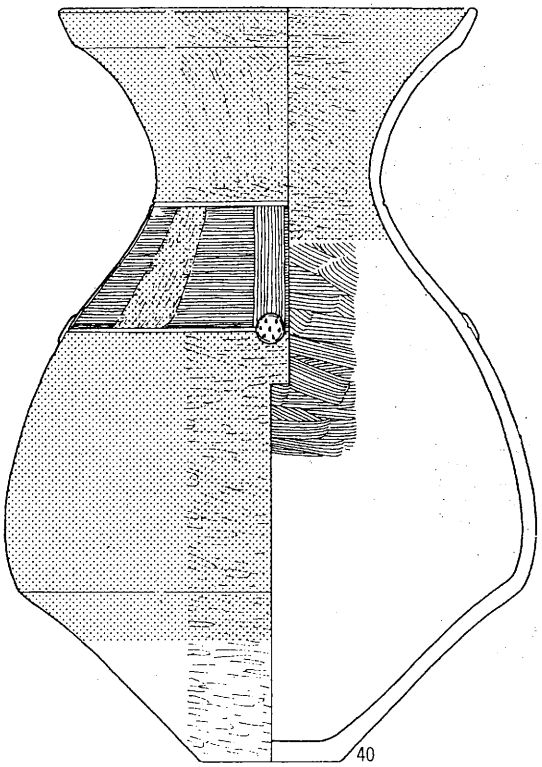
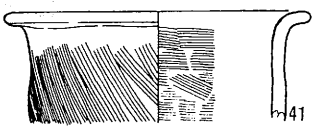
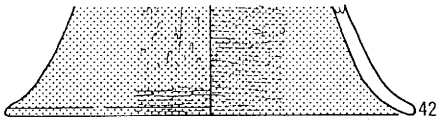


図124 出 土 遺 物 (2)

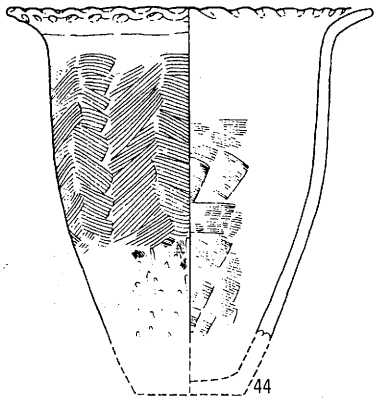
SI 11（II地区）



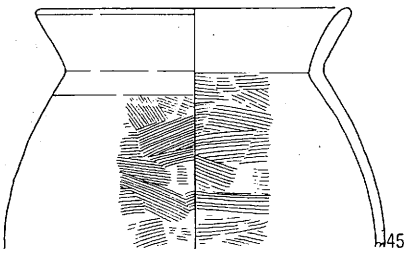


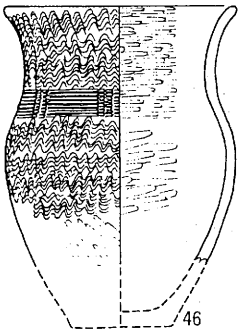


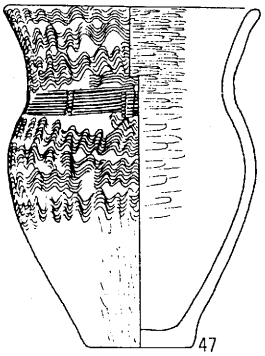
SI 12

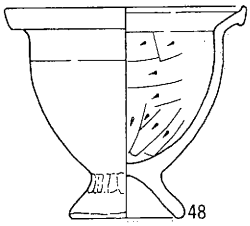


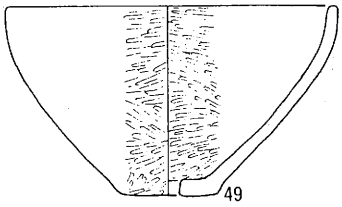
SI 13（II地区）



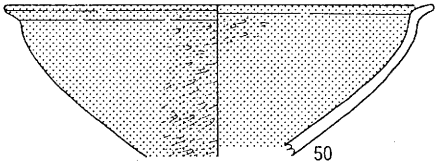




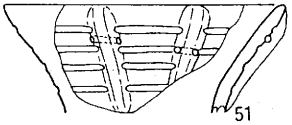


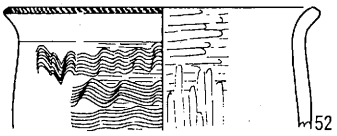


SI 14（II地区）



II地区その他の遺構





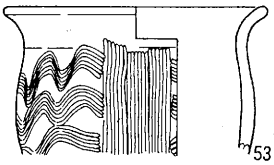


図125　出　土　遺　物 (3)

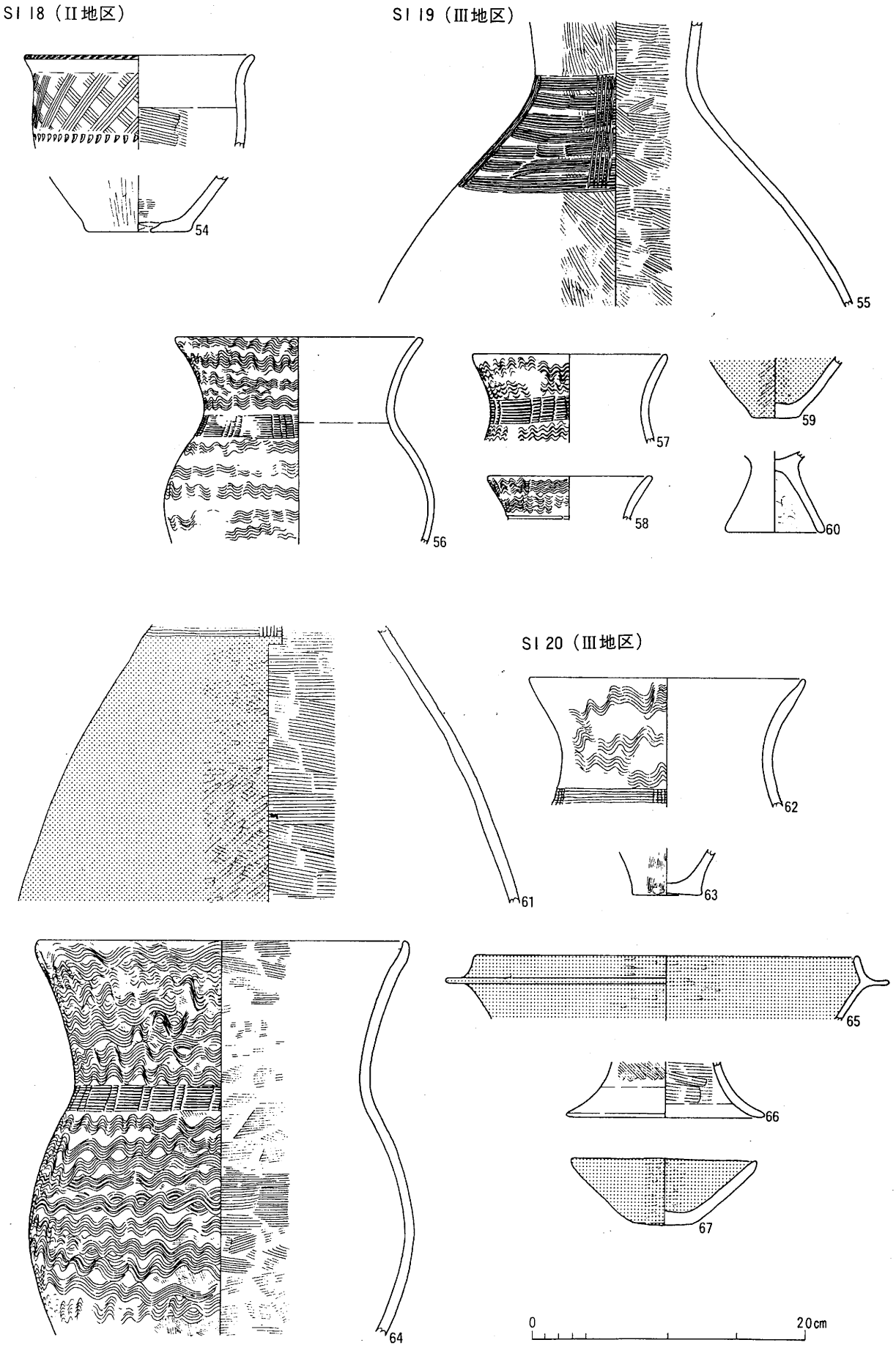

SI 18（II地区）
SI 19（III地区）
SI 20（III地区）
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
0
20cm

図126　出　土　遺　物 (4)

SI 21（Ⅲ地区）

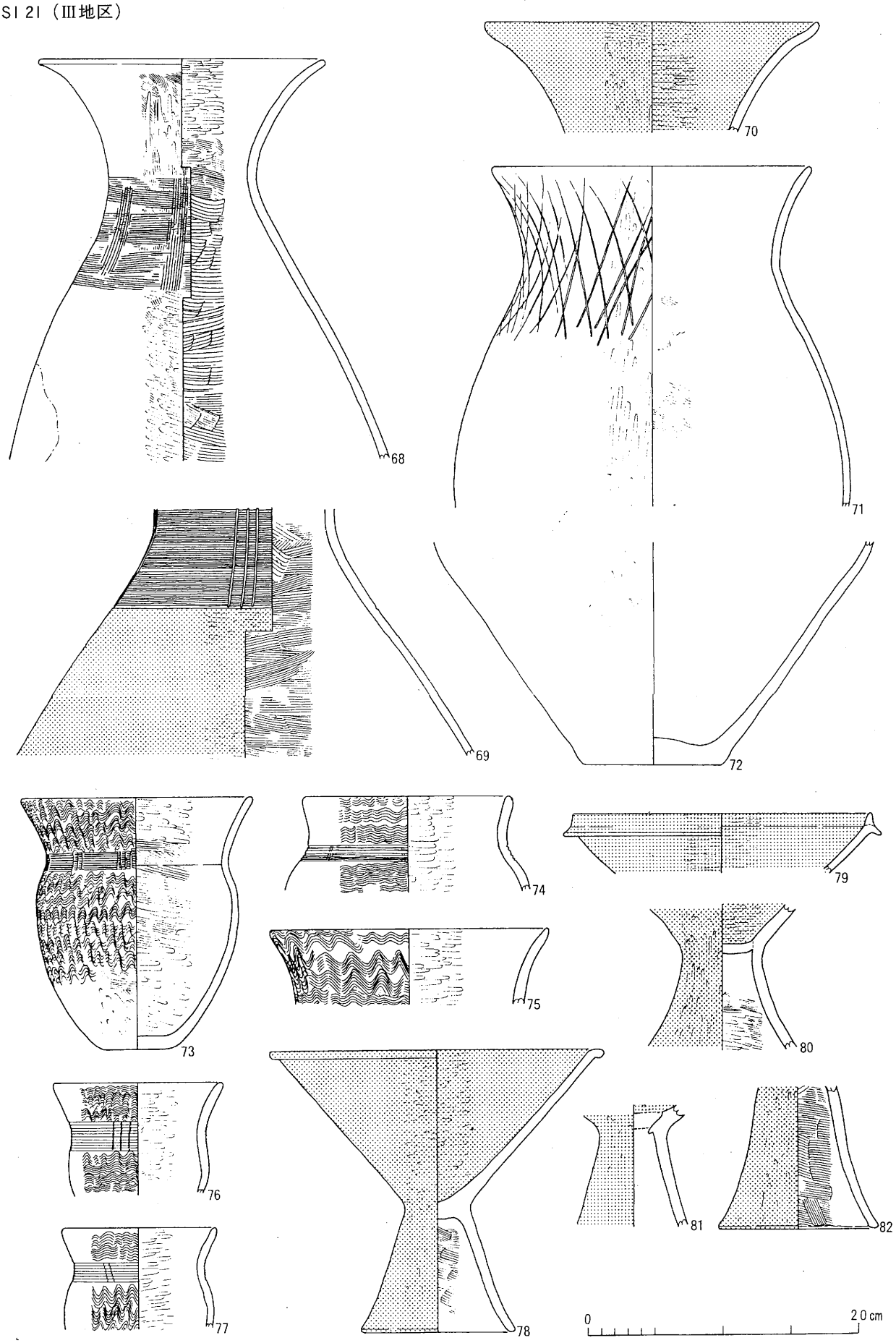
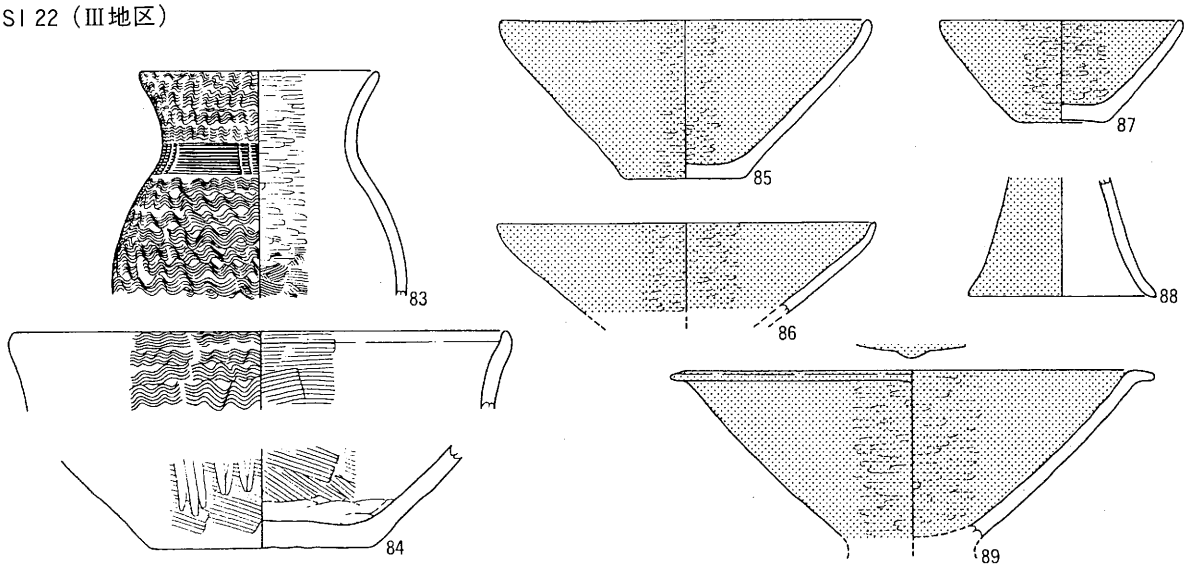
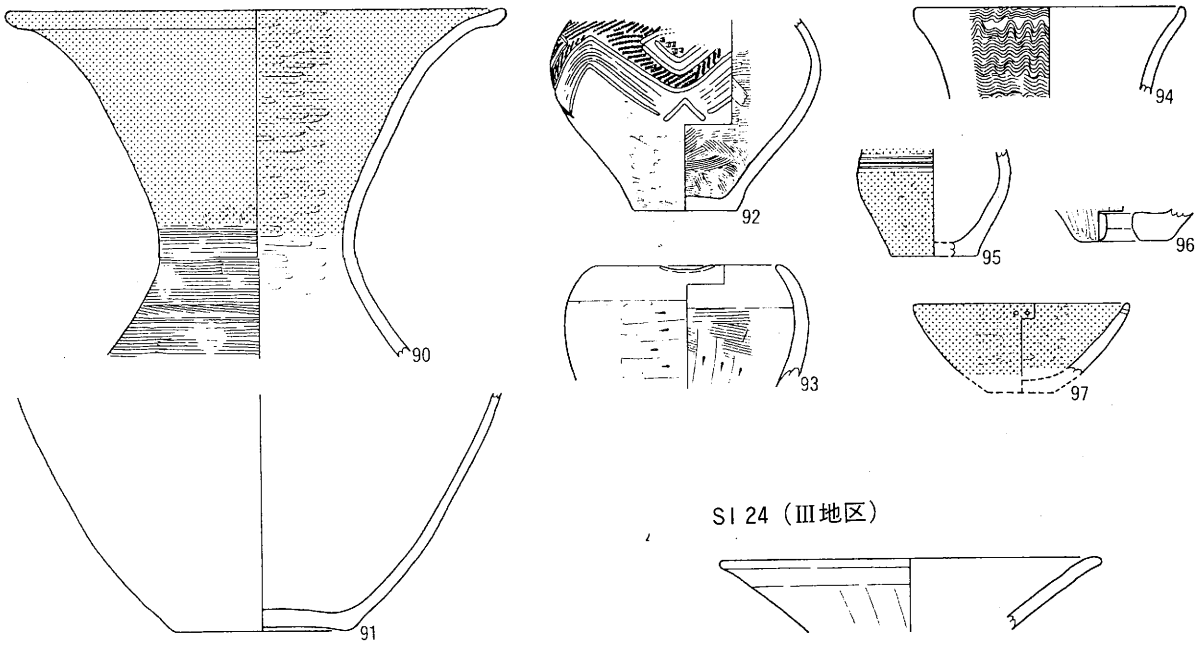


図127　出　土　遺　物 (5)

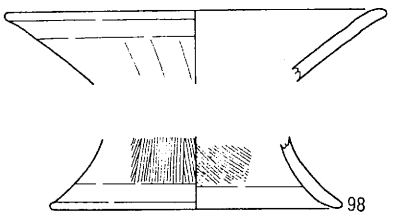
SI 22（Ⅲ地区）



SI 23（Ⅲ地区）



SI 24（Ⅲ地区）



SI 25（Ⅲ地区）

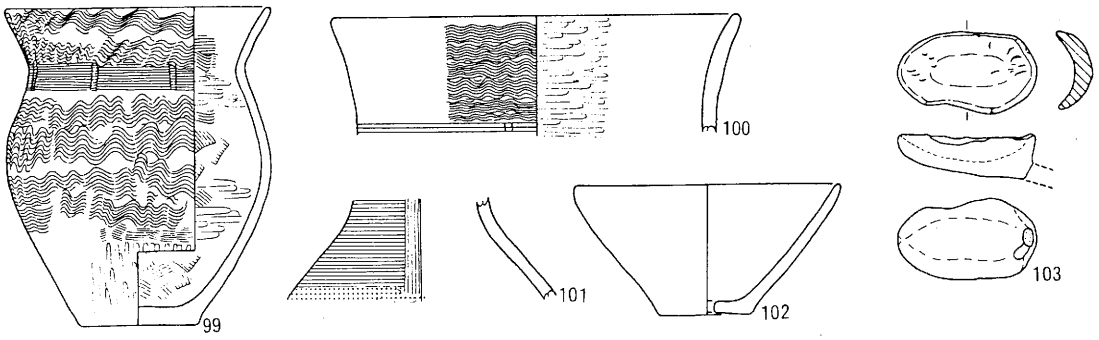
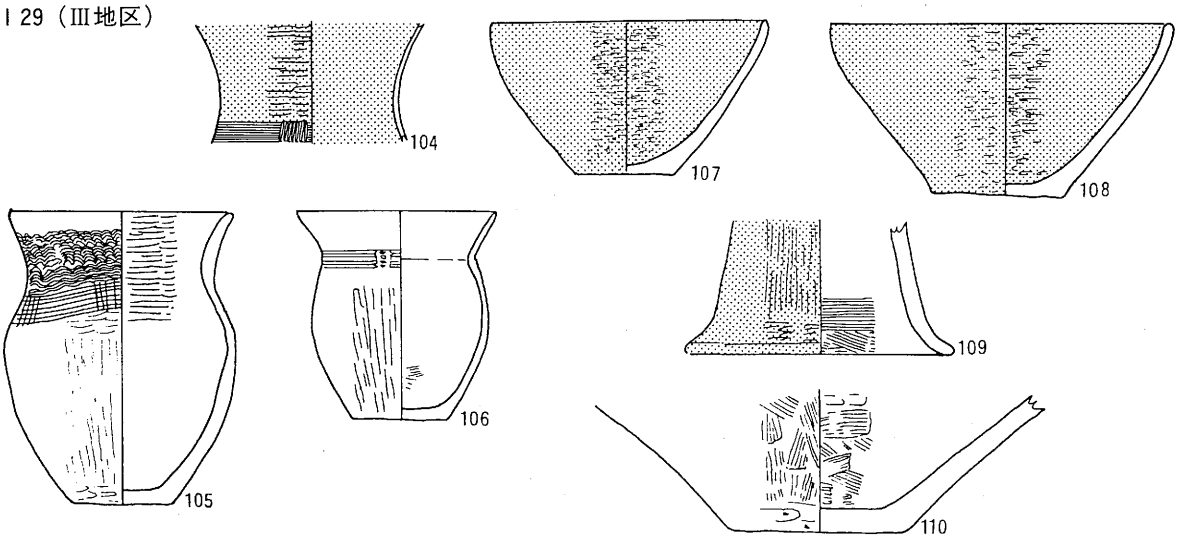
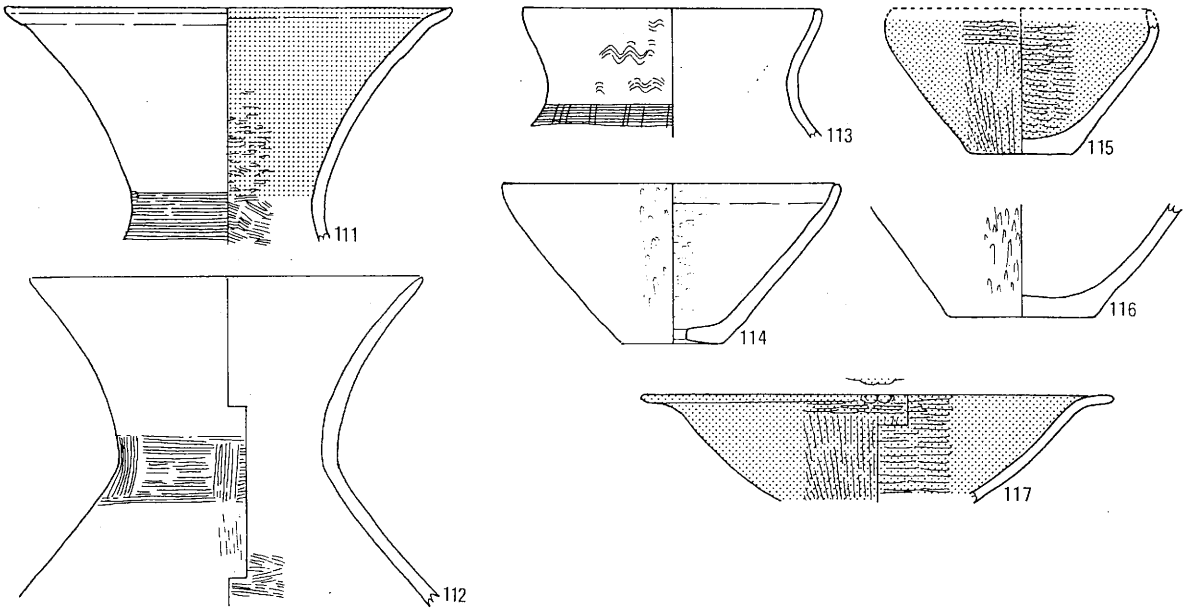


図128　出　土　遺　物 (6)

SI 29（Ⅲ地区）



SI 30（Ⅲ地区）



SI 32（Ⅲ地区）

SI 31（Ⅲ地区）

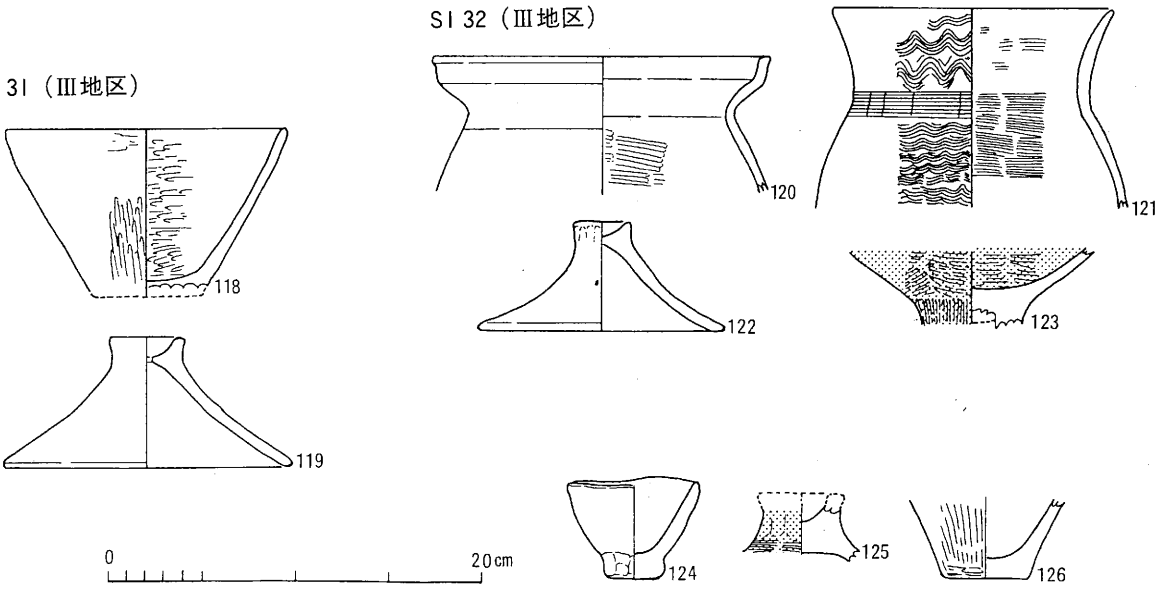
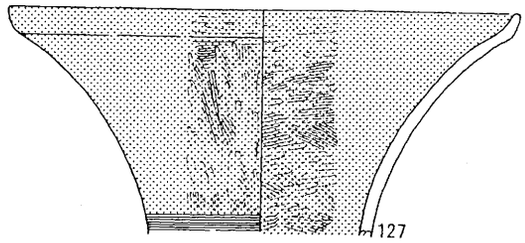
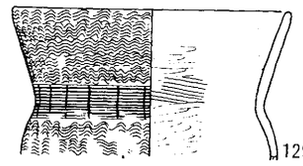
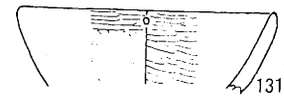


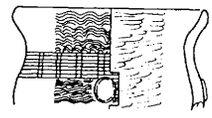
図129　出　土　遺　物 (7)

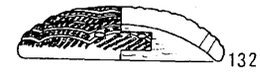
SI 36（Ⅲ地区）

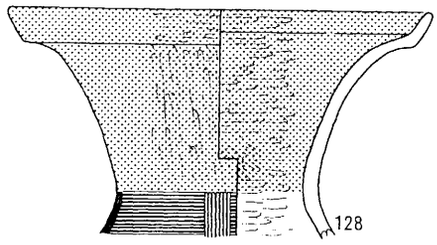


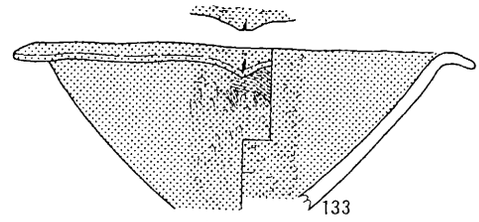




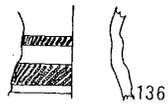


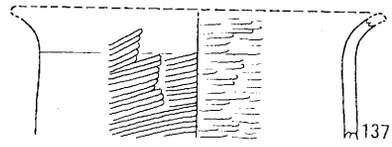


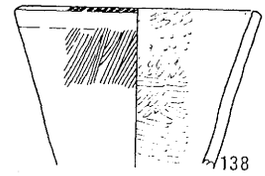




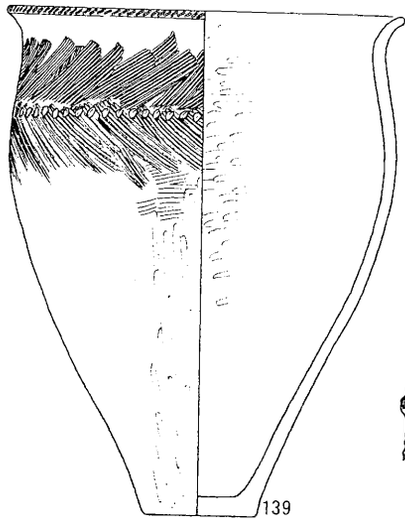
SI 37（Ⅳ地区）

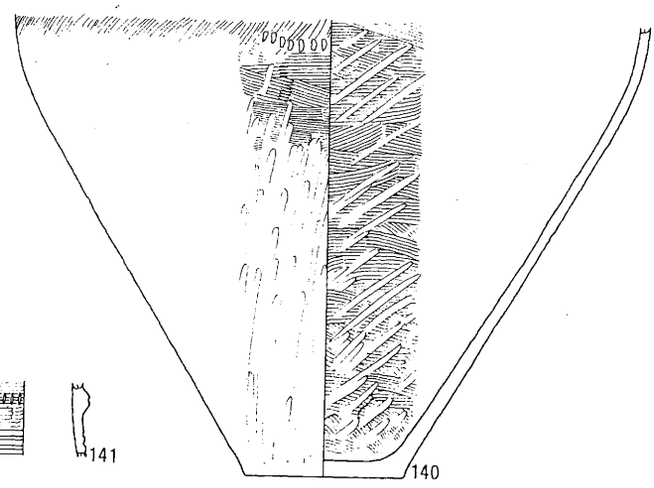


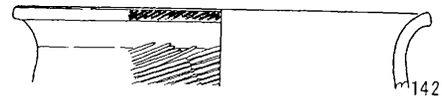




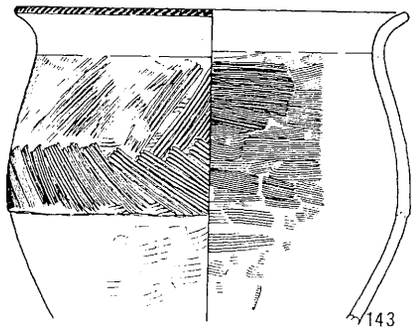
SI 38（Ⅳ地区）

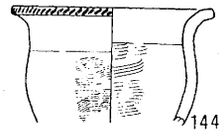






SI 39（Ⅳ地区）





0　20cm

図130　出　土　遺　物 (8)

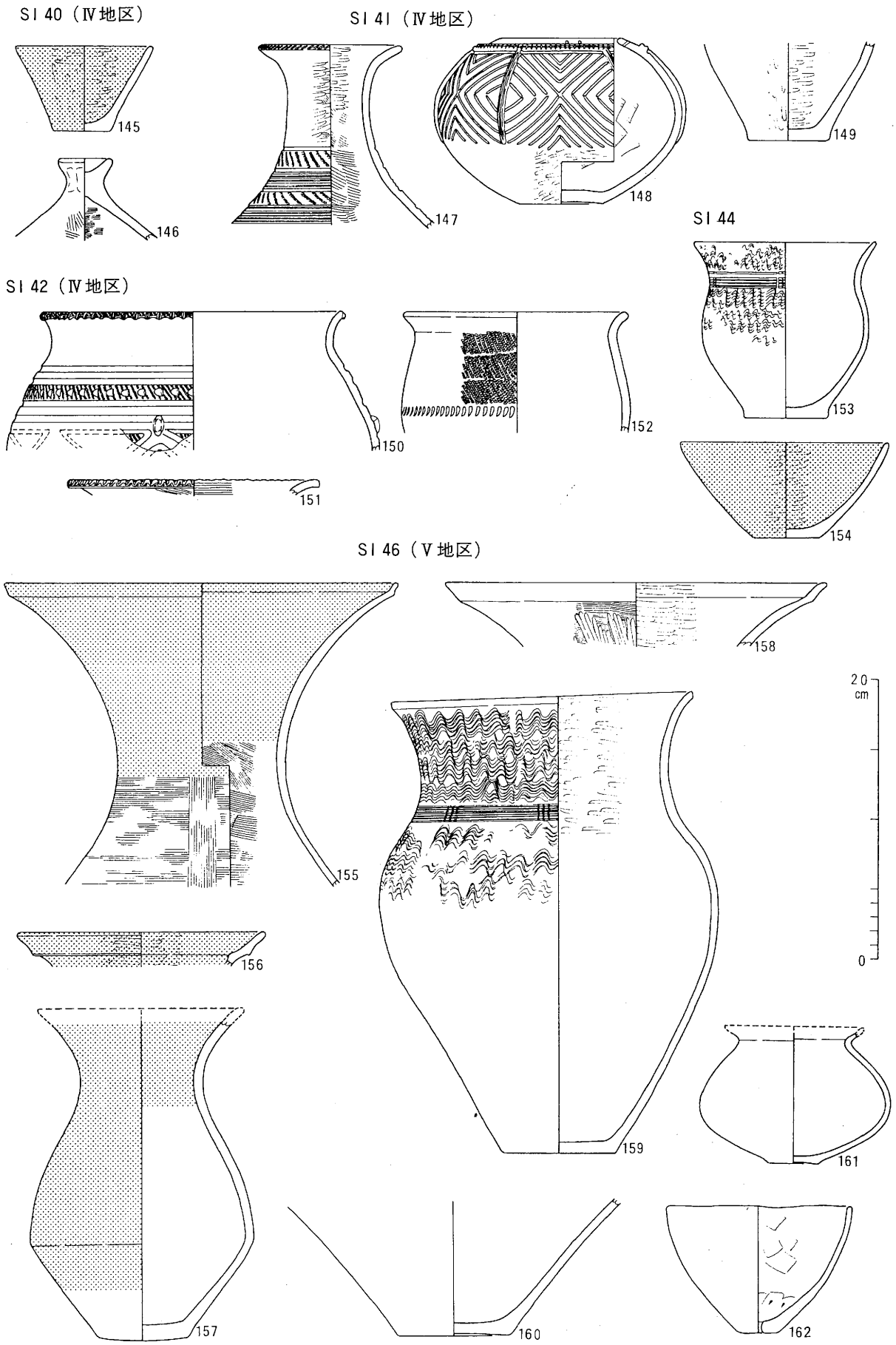
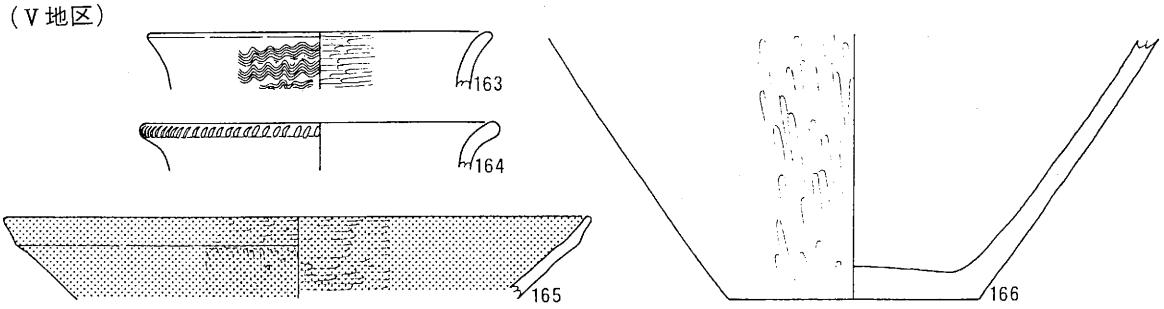
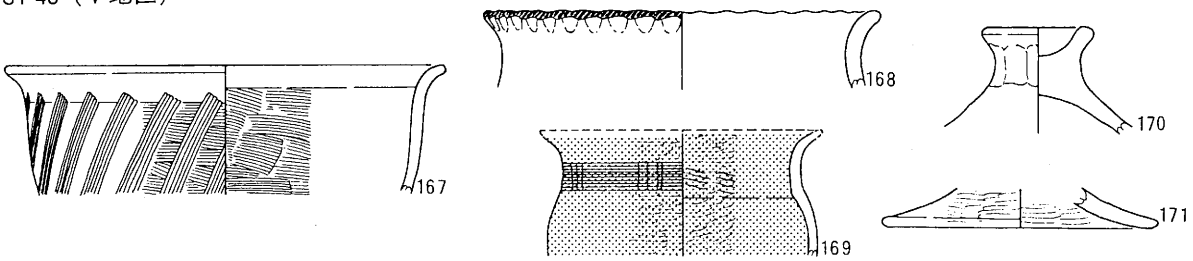

SI 40（Ⅳ地区）
SI 41（Ⅳ地区）
SI 44
SI 42（Ⅳ地区）
SI 46（Ⅴ地区）
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
20
cm
0

図131　出　土　遺　物 (9)

SI 47（V地区）



SI 48（V地区）



SI 49（V地区）

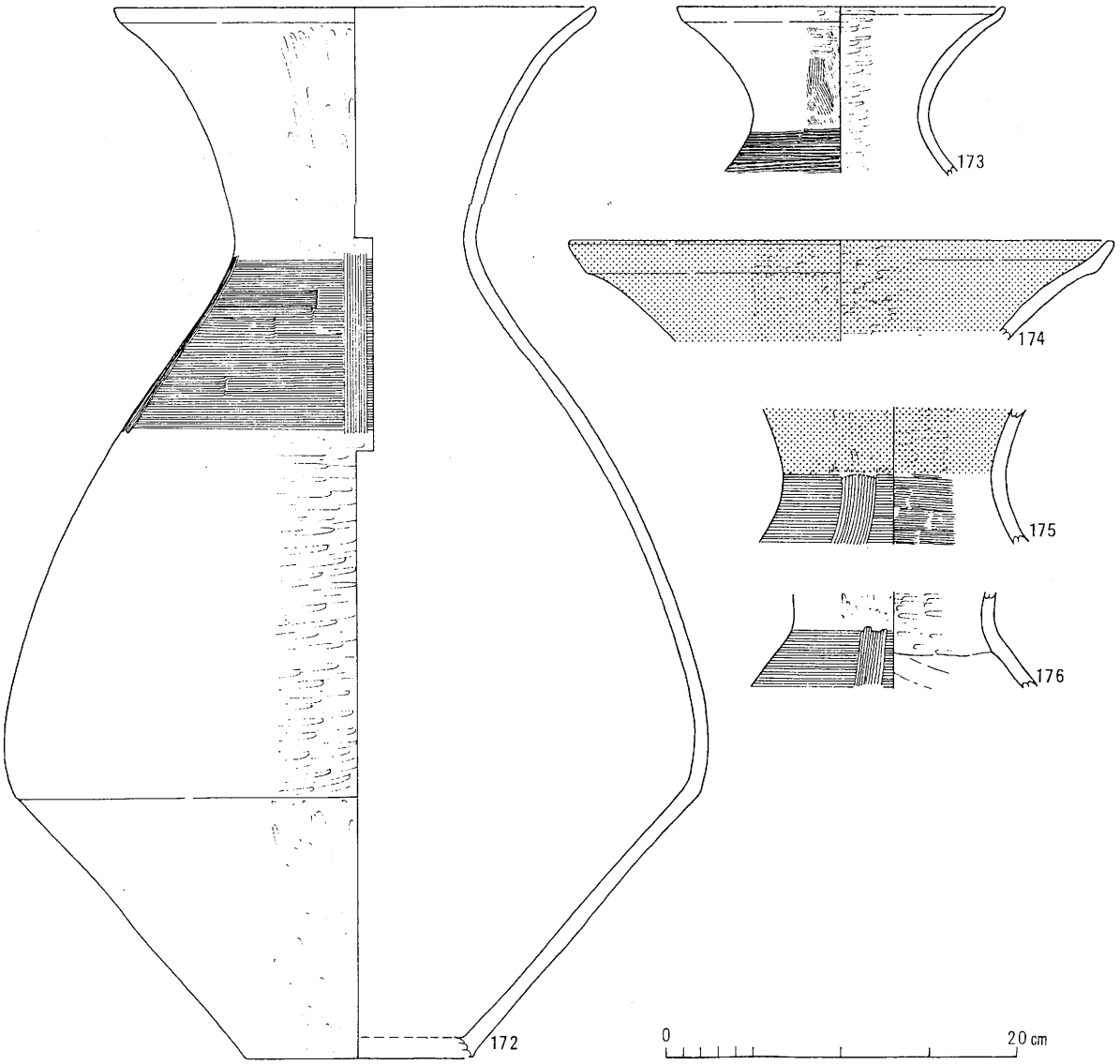


図132　出　土　遺　物(10)

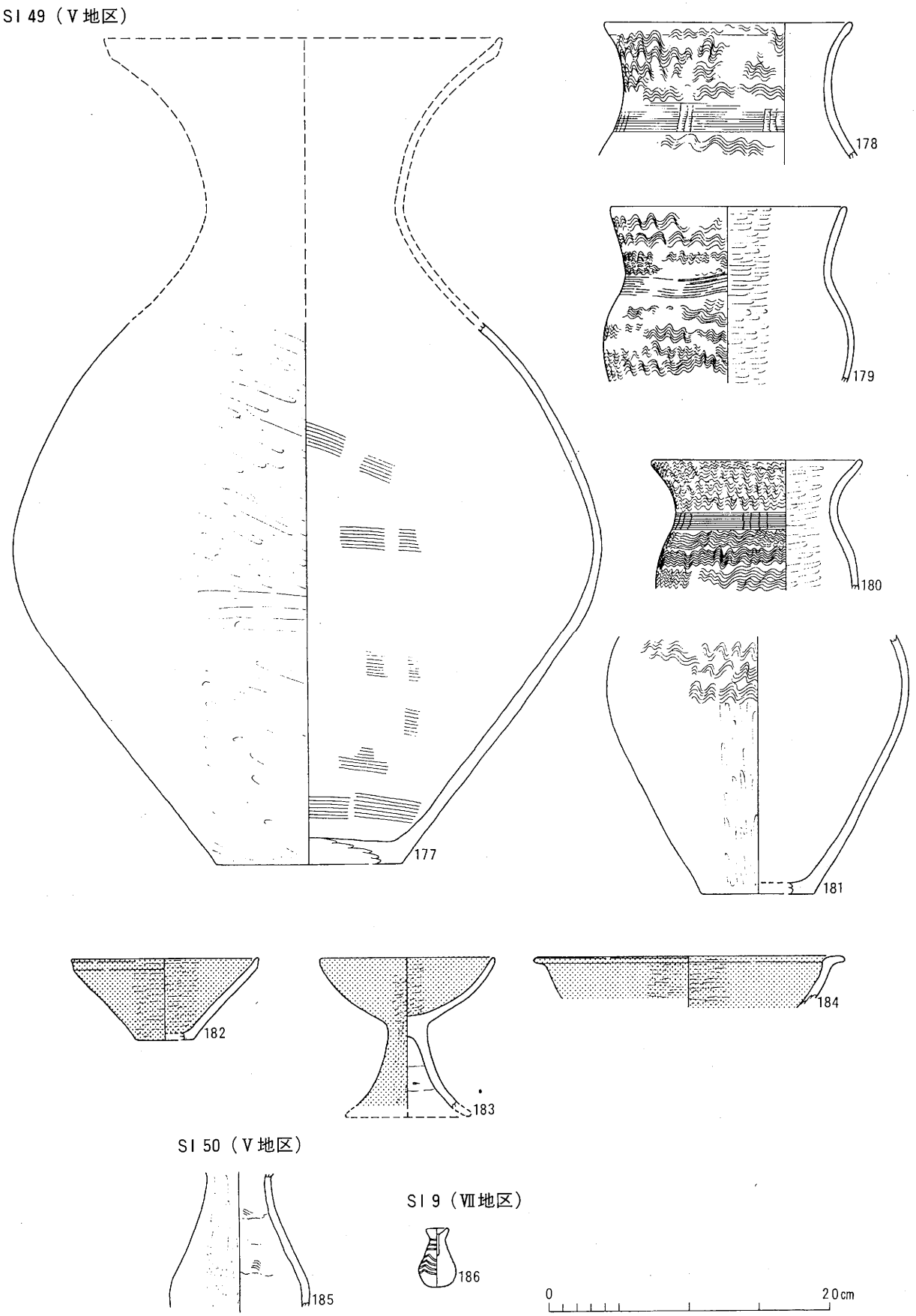

SI 49（V地区）
177
178
179
180
181
182
183
184
SI 50（V地区）
185
SI 9（VII地区）
186
0
20cm

図133　出　土　遺　物 (11)

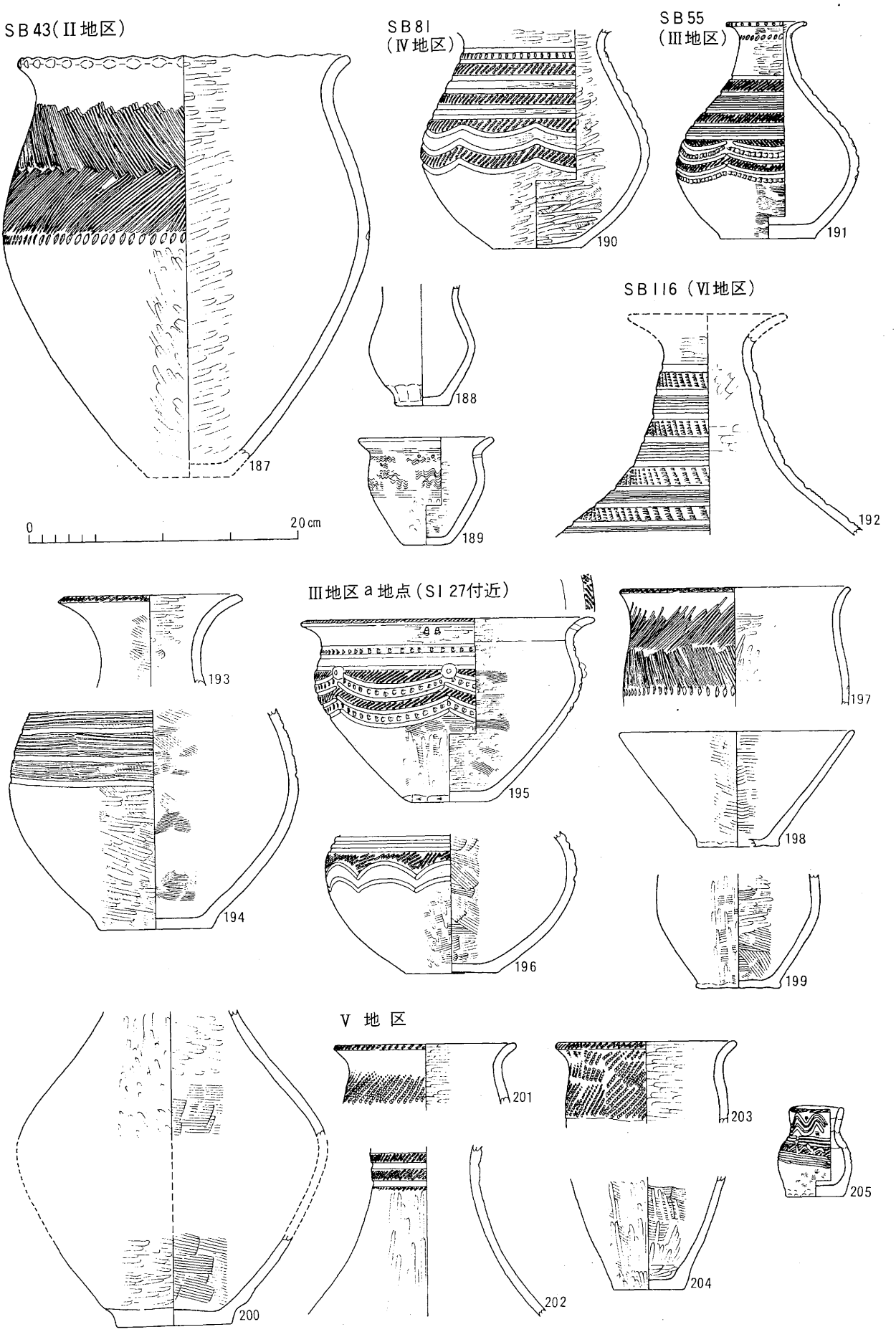

SB43(II地区)
SB81
(IV地区)
SB55
(III地区)
SB116 (VI地区)
III地区a地点(SI 27付近)
V 地 区
0
20cm
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205

図134 出 土 遺 物 (12)

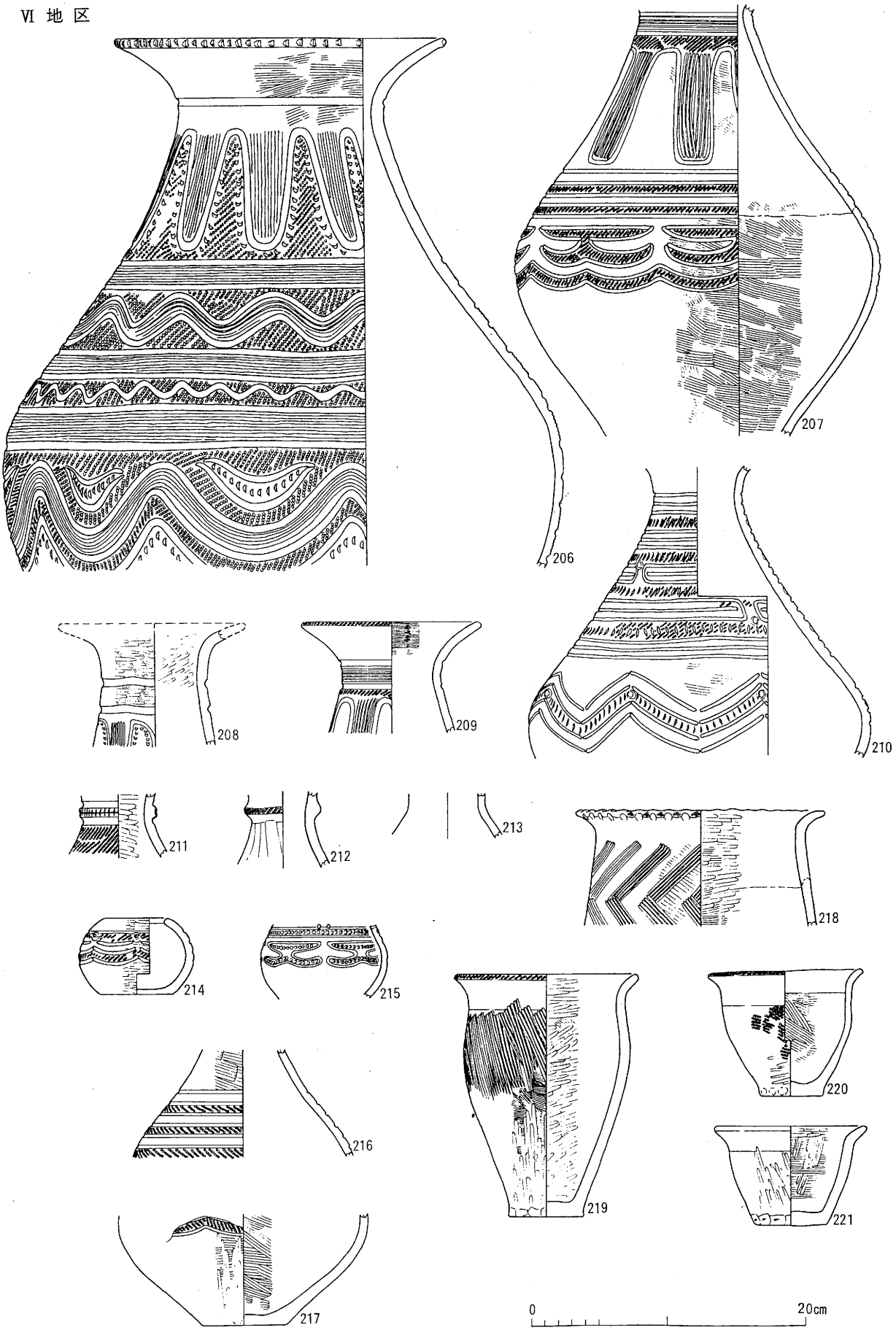
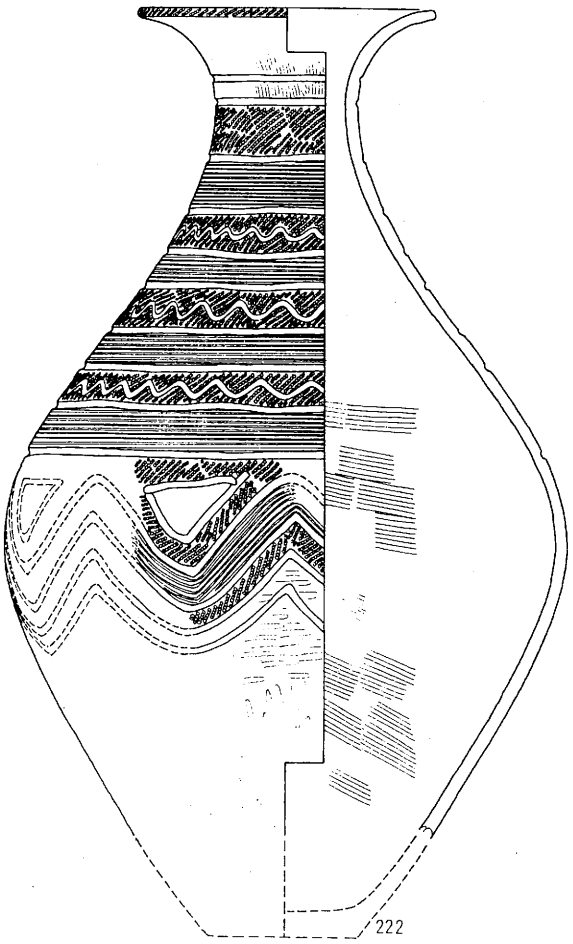
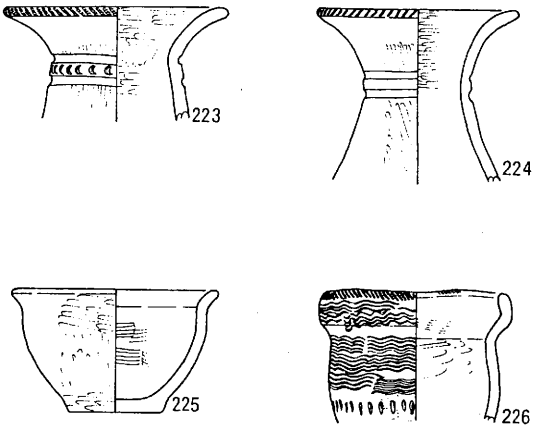
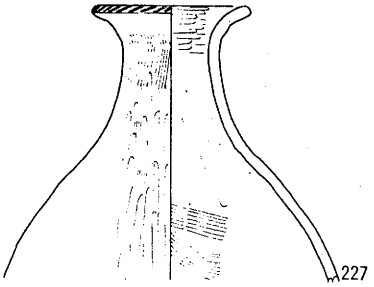

206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
0
20cm

図135 出 土 遺 物 (13)

その他の地点

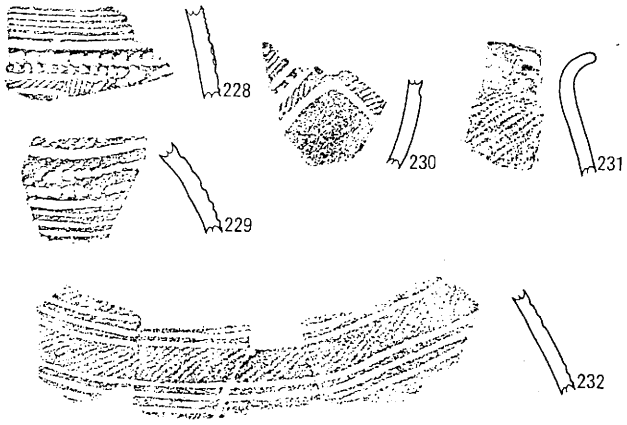




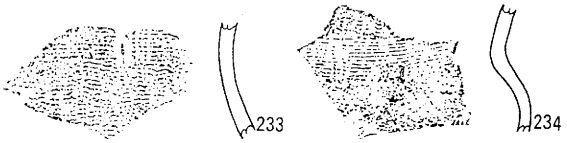


0　20cm

SI 8（II地区）



SI 14（II地区）



0　10cm

SI 17・SKB 13～15（II地区）

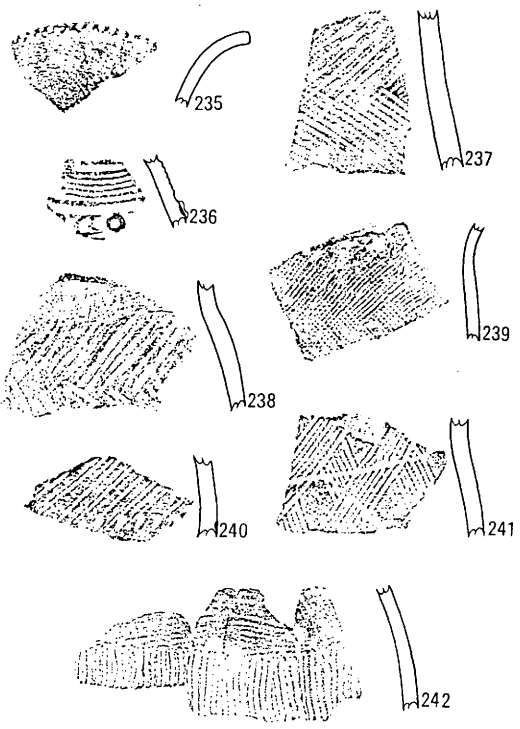


図136　出　土　遺　物 (14)

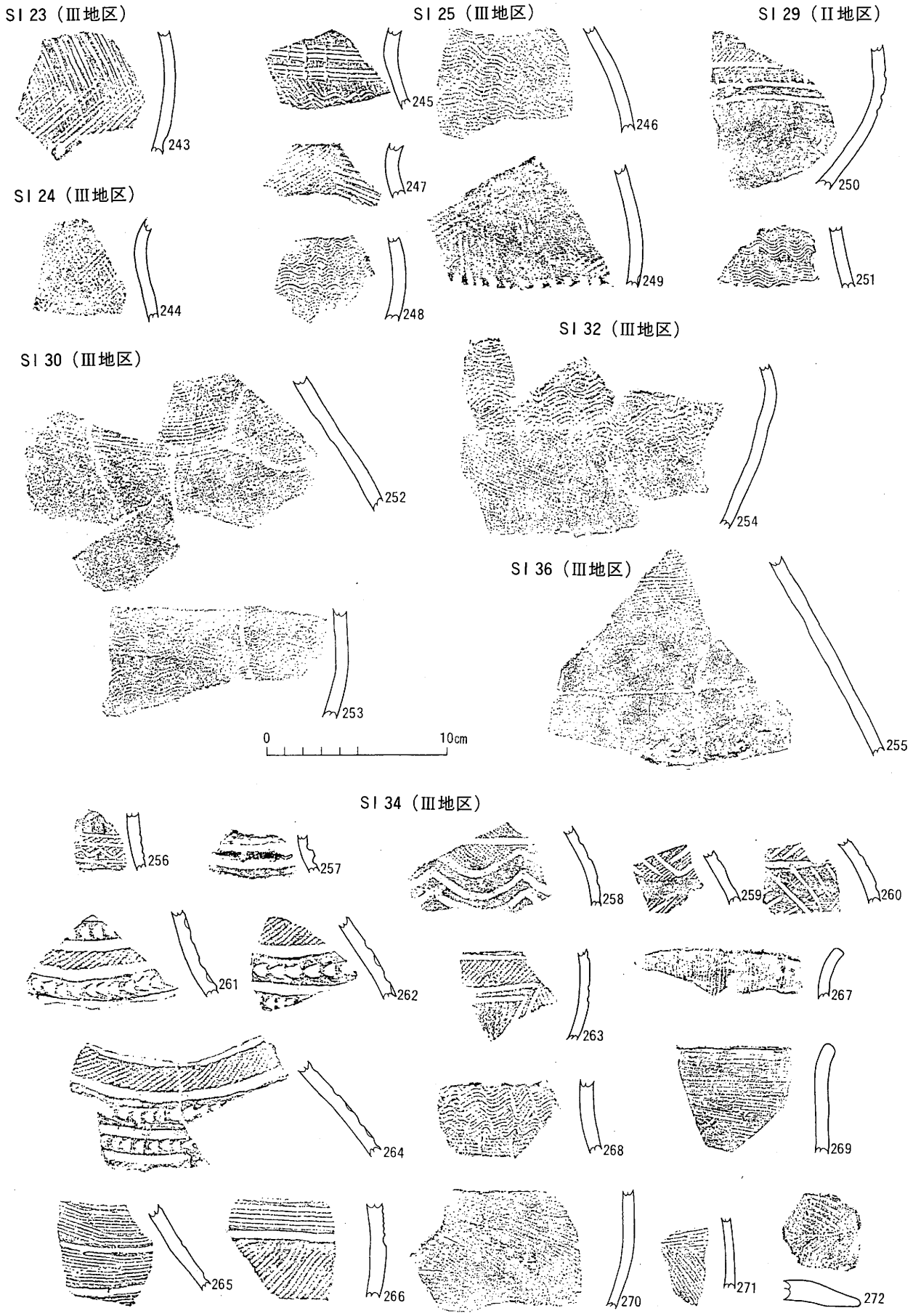
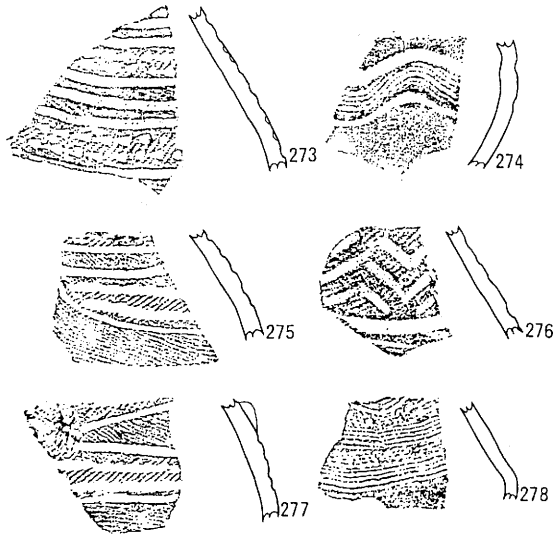
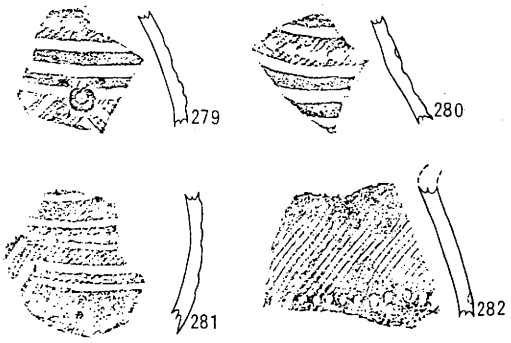

SI 23（Ⅲ地区）
SI 25（Ⅲ地区）
SI 29（Ⅱ地区）
SI 24（Ⅲ地区）
SI 30（Ⅲ地区）
SI 32（Ⅲ地区）
SI 36（Ⅲ地区）
SI 34（Ⅲ地区）
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
0
10cm

図137　出　土　遺　物 (15)

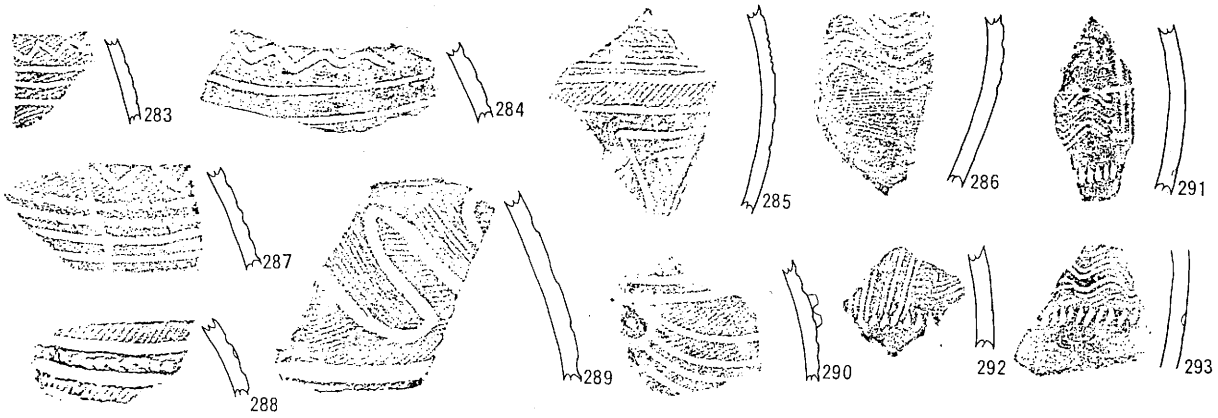
SI 37（Ⅳ地区）



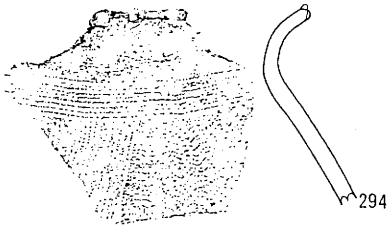
SI 42（Ⅳ地区）



SI 48（Ⅴ地区）



SI 9（Ⅶ地区）



SI 26（Ⅶ地区）

Ⅶ地区木棺墓

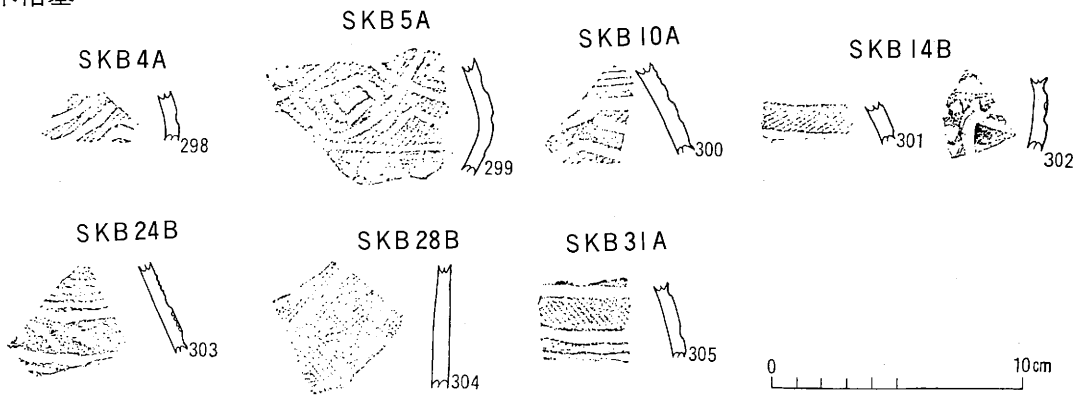


図138　出　土　遺　物 (16)

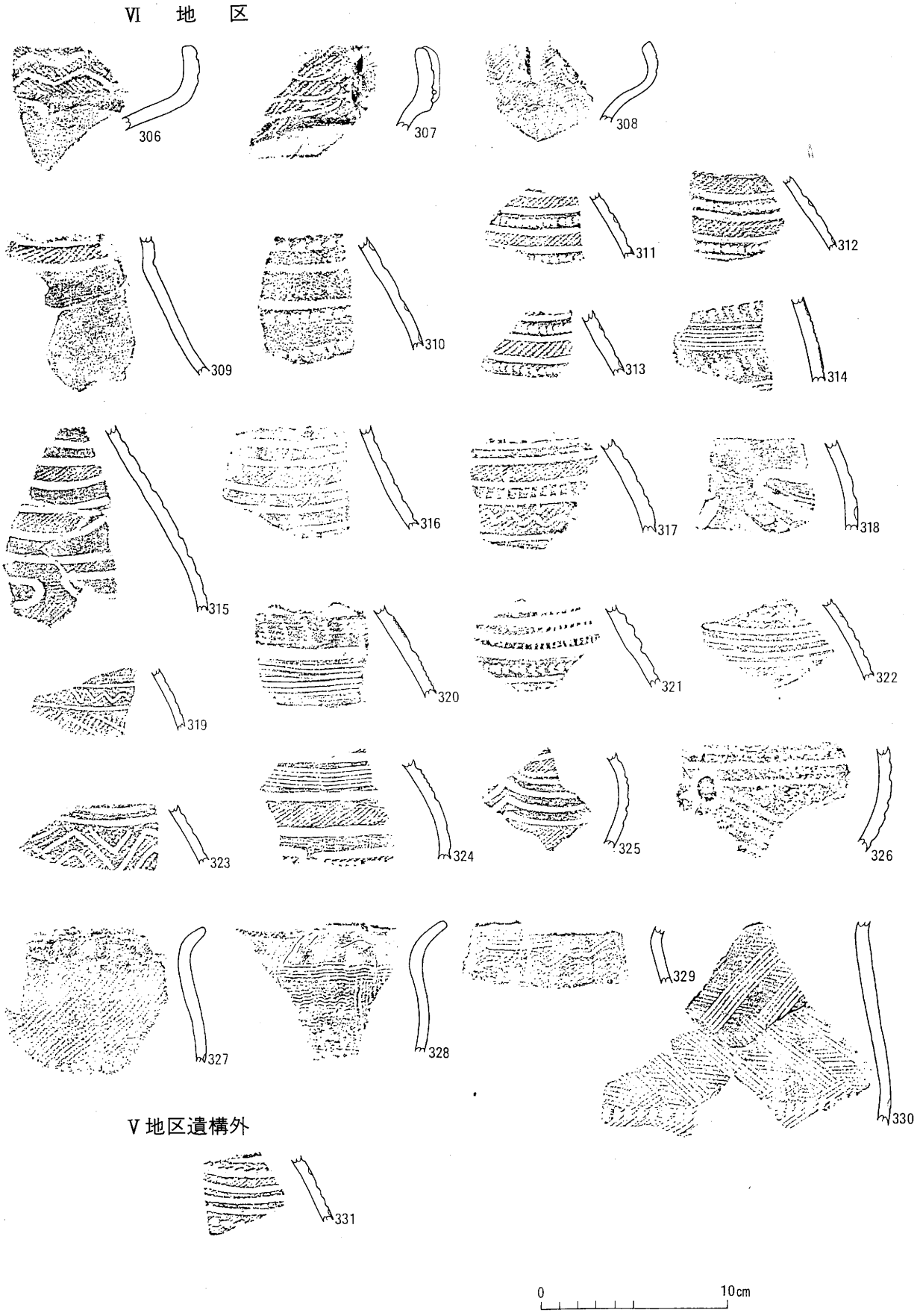

Ⅵ 地 区
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
Ⅴ地区遺構外
331
0
10cm

図139 出 土 遺 物 (17)

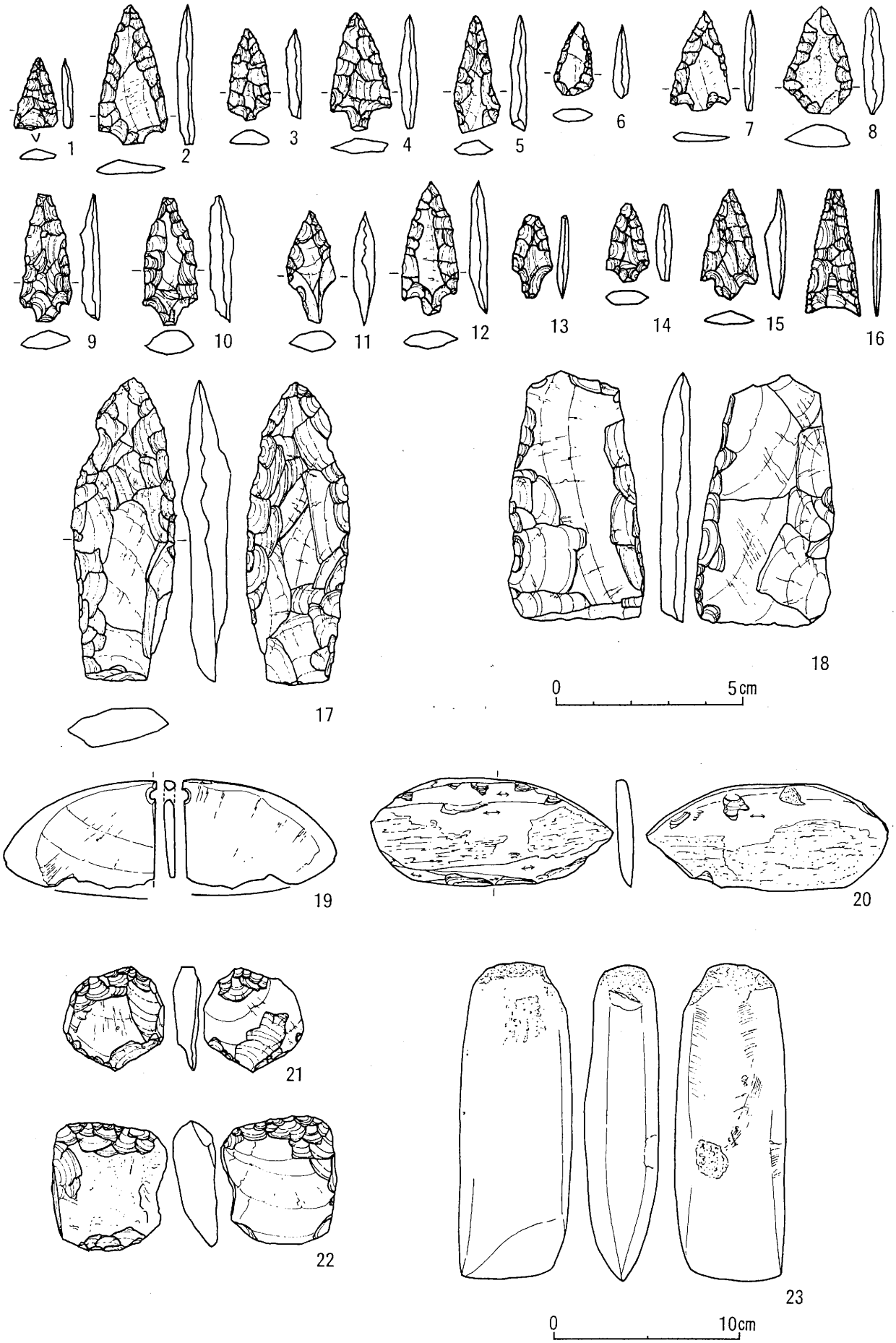


図140　出　土　遺　物 (18)

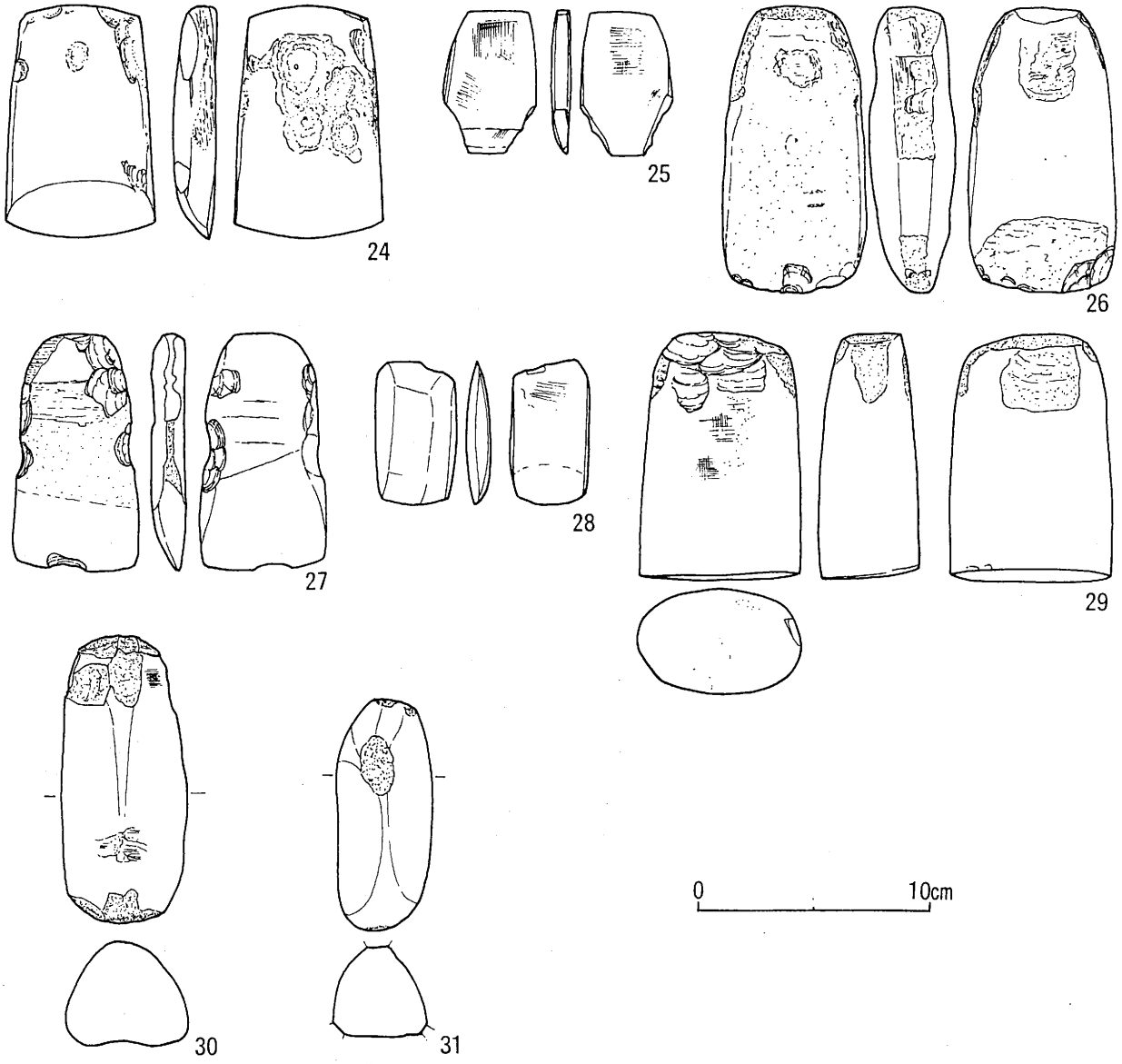


図141　出　土　遺　物 (19)

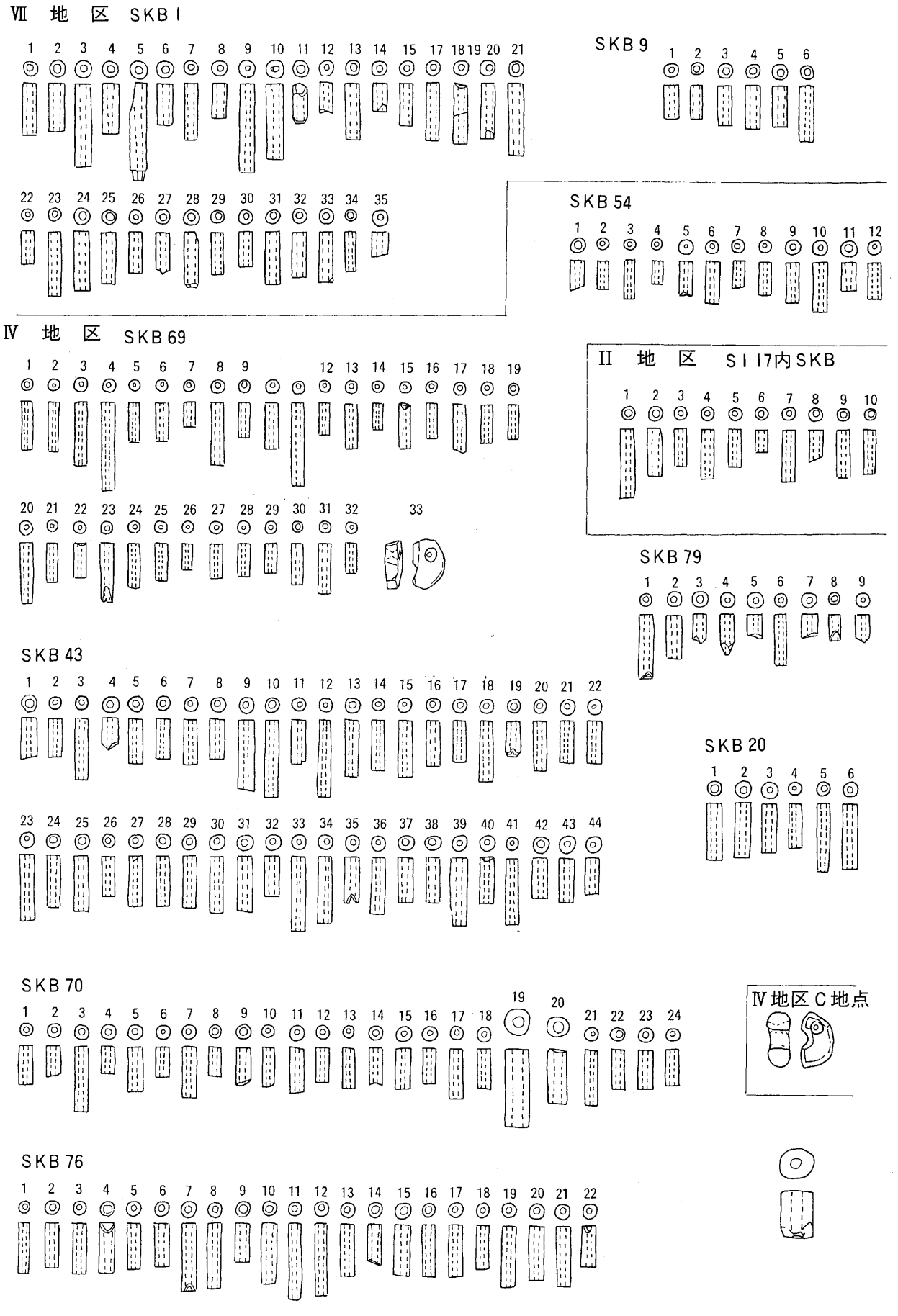


図142 出 土 遺 物 (20) (1：1)

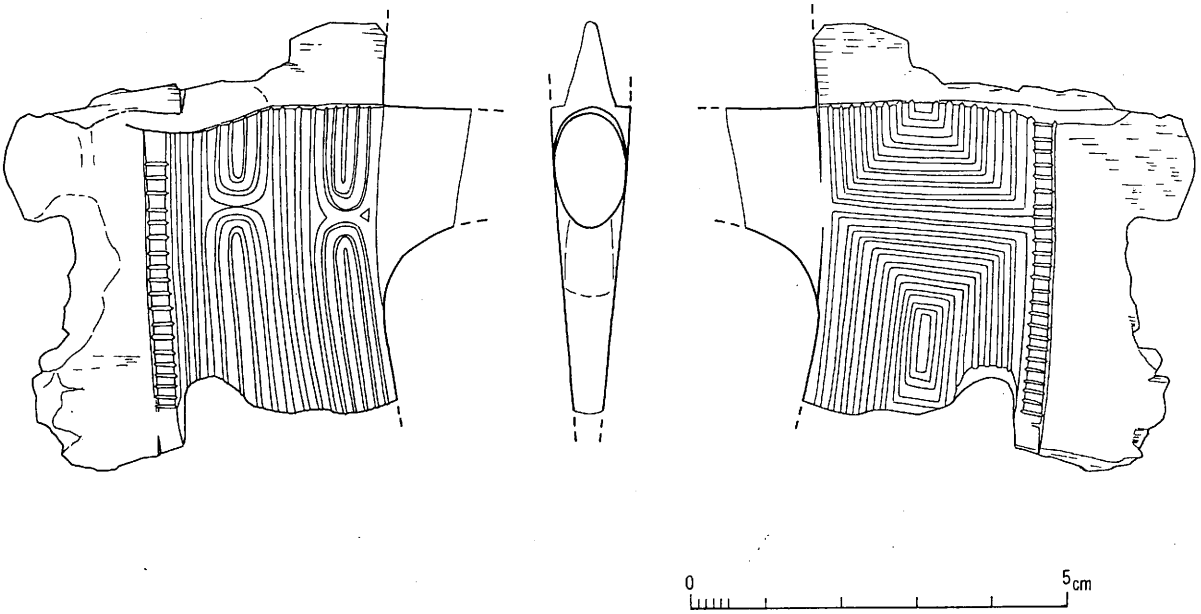


図143　Ⅱ地区ＳＩ１号住居址出土木製品（1：1）

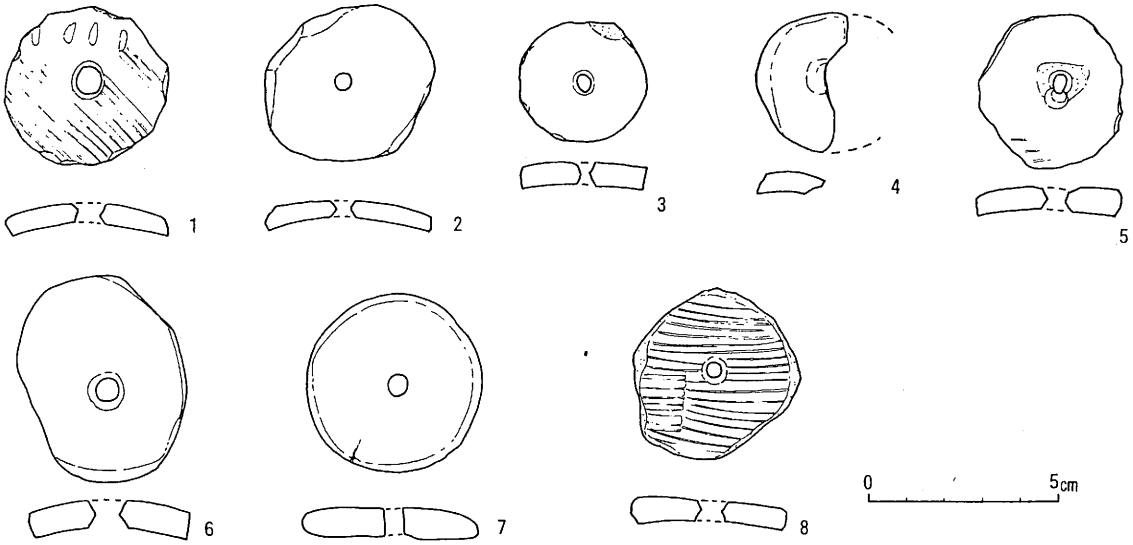


図144　紡錘車実測図（1：2）

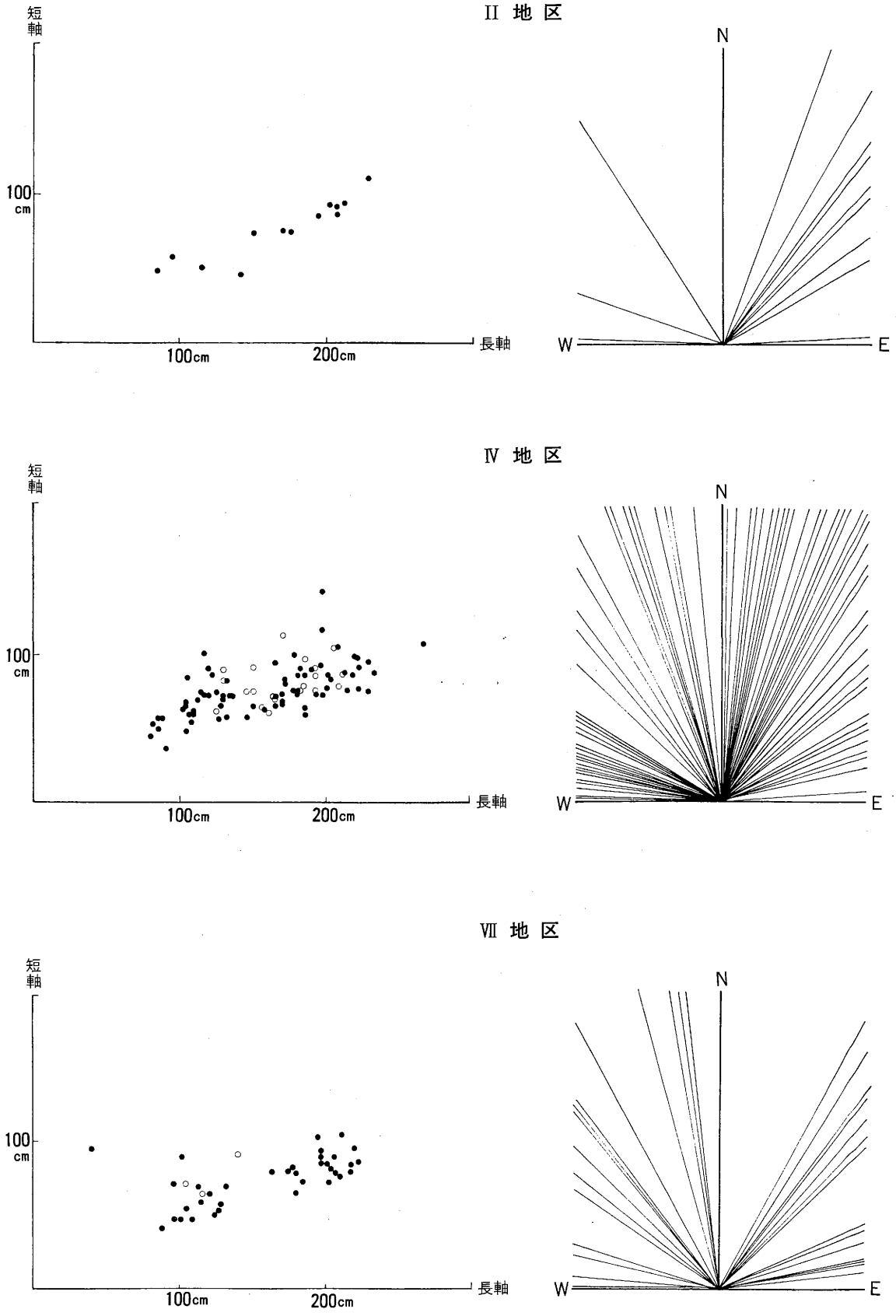


図145　木棺墓規模・方位表

表3　竪穴住居址規模計測表

地区名	住居址番号(SI)	所属時期	平面形態	規模(cm)			炉の位置	主柱穴の数	その他の遺構等
				長径	短径	壁高			
II	1	弥生後期	長方形	420	390	16	奥柱間	4	貯蔵穴
II	2	弥生後期	隅丸長方形	410	360	5	不明	4	
II	3	弥生後期	小判形	680	500	20	奥柱間	4	
II	4	弥生後期	不明	——	410	5	不明	——	
II	5	弥生後期	長方形	(640)	(480)	30	奥柱間	4	
II	6	弥生後期	長方形	(660)	——	——	奥柱間	4	
I	7	弥生中期	円形	(560)	(560)	——	不明		周溝
II	8	弥生中期	楕円形	580	520	15	中央付近	6	中央土坑、周溝
VII	9	弥生中期	楕円形	500	440	15	中央南	不明	中央土坑、周溝
I	10	弥生中期	円形	780	780	——	南寄り	9	周溝3本
II	11	弥生後期	長方形	620	500	20	不明	4	一部周溝
II	12	弥生中期	円形	590	(590)	——	不明	6	中央土坑
II	13	弥生後期	方形	430	430	30	不明	4	
II	14	弥生後期	(長方形)	(450)	(380)	10	奥柱間	4	
II	15	弥生後期	長方形	640	(480)	20	奥柱間	4	出入口ピット、貯蔵穴
I	16	弥生中期	円形	(460)	(460)	——	——	——	
II	17	弥生中期	円形	(640)	(640)	——	不明		中央土坑、周溝
III	18	弥生中期	円形	530	(530)	——	中央東		中央土坑、周溝
III	19	弥生後期	小判形	600	410	25	奥柱間手前	5	出入口ピット、貯蔵穴
III	20	弥生後期	(隅丸長方形)	——	450	10	——		一部検出
III	21	弥生後期	小判形	690	500	20	奥柱間	5	出入口ピット、貯蔵穴
III	22	弥生後期	小判形	770	540	16	奥柱間	5	出入口ピット2、貯蔵穴
III	23	弥生後期	隅丸長方形	520	400	20	奥柱間	4	出入口ピット2、貯蔵穴
III	24	弥生後期	隅丸長方形	——	360	20	不明		出入口ピット2、貯蔵穴1
III	25	弥生後期	隅丸長方形	480	400	32	奥柱間	4	出入口ピット2、貯蔵穴1
VII	26	弥生中期	楕円形	520	480	10	4ケ所	5	中央土坑、周溝
IV	27	弥生中期	円形	588	520	——	不明	不明	中央土坑、周溝
IV	28	弥生中期	円形	524	——	——	不明	不明	中央土坑、周溝
II	29	弥生後期	隅丸方形	500	480	20	奥柱間	4	一部周溝
III	30	弥生後期	隅丸長方形	500	420	20	奥柱間	4	出入口ピット2
III	31	弥生後期	隅丸長方形	(480)	——	20	——	——	
III	32	弥生後期	方形	480	460	20	奥柱間	4	
III	33	不明	不整円形	350	330	——	北側	不明	

Ⅲ	34	弥生中期	円　　形	600	(600)	——	不　　明	8	中央土坑、周溝
Ⅲ	35	弥生中期	円　　形	500	500		中央東	不明	周　溝
Ⅲ	36	弥生後期	長方形	(460)	340	28	奥柱間	4	出入口ピット、貯蔵穴
Ⅳ	37	弥生中期	隅丸方形	420	420	10	奥柱間	4、5	周　溝
Ⅳ	38	弥生中期	不整円形	——	——	——	不　　明	不明	中央土坑
Ⅳ	39	弥生中期	長方形	420	——	14	——————	不明	一部周溝
Ⅳ	40	弥生後期	長方形	670	510	12	奥柱間	5	出入口ピット、貯蔵穴
Ⅳ	41	弥生中期	円　　形	580	510	——	中央南	5	周　溝
Ⅳ	42	弥生中期	円　　形	400	400	——	中央南	5	周　溝
Ⅴ	43	弥生中期	円　　形	(490)	(490)	——	不　　明	8	中央土坑、周溝
Ⅴ	44	弥生後期	小判形	(550)	520	20	奥柱間	5	出入口ピット、貯蔵穴
Ⅴ	45	弥生中期	円　　形	680	(680)	——	中央南	10	中央土坑、周溝
Ⅴ	46	弥生後期	長方形	730	520	30	奥中間	4	2対の出入口ピット、貯蔵穴
Ⅴ	47	弥生後期	長方形	(600)	500	15	奥中間	4	2対の出入口ピット、貯蔵穴
Ⅴ	48	弥生中期	円　　形	600	580	15	中央周辺	6～	中央土坑、周溝
Ⅴ	49	弥生後期	長方形	390	360	30	南	不明	
Ⅴ	50	弥生中期	円　　形	(500)	(500)	——	不　　明	不明	周　溝
Ⅴ	51	弥生中期	円　　形	420	(420)	——	不　　明	不明	中央土坑、周溝
Ⅴ	52	弥生中期	円　　形	420	420	——	不　　明	6	中央土坑、周溝
Ⅴ	53	弥生中期	円　　形	(580)	(580)	——	不　　明	不明	中央土坑、周溝
Ⅴ	54	弥生中期	円　　形	——	——	——	不　　明	不明	周　溝

表4　掘立柱建物址規模計測表

SBNo.	地区	柱間規模	桁 行m	梁 行m	面 積m²	備　　考
1	II区	3 × 1	4.4	2.45	10.78	
2	II区	3 × 1	5.85	2.45	14.33	
3	II区	3 × 1	3.65	2.25	8.21	
4	II区	3 × 1	4.0	2.6	10.4	
5	I区	2 × 1	3.5	1.85～2.0	6.74	
6	I区	2 × 1	3.0	1.6	4.8	
7	I区	2 × 1	2.65	1.9～2.4	5.7	
8	I区	3 × 1	4.35	2.3	10.01	
9	I区	2 × 1	2.2	1.6	3.52	
10	I区	3 × 1	5.1	2.7	13.77	
11	I区	3 × 1	4.4	2.4～2.6	11.0	
12	I区	3 × 1	4.6	2.5	11.5	
13	I区	4 × 1	4.5	2.4	10.8	
14	I区	3 × 1	4.65	2.7	12.56	
15	I区	3 × 1	4.2	2.1～2.2	9.03	
16	I区	2 × 1	3.25	2.4	7.8	
17	II区	2 × 1	3.2	2.2	7.04	
18	II区	3 × 1	4.45	2.5	11.13	
19	II区	3 × 1	7.2	2.65	19.08	
20	I区	3 × 1	4.4～4.55	2.3	10.29	
21	I区	3 × 1	4.6	2.6	11.96	
22	I区	2 × 1	3.05	2.25	6.86	
23	I区	2 × 1	2.4	2.0～2.3	5.16	
24	IV区	3 × 1	4.6	2.5	11.5	
25	IV区	2 × 1	2.65	2.45	6.50	
26	IV区	3 × 1	4.5	2.25～2.65	10.1～	
27	II区	3 × 1	4.2	2.35	9.87	
28	IV区	2 × 1	2.7	2.15	5.85	
29	IV区	2 × 1	3.08	2.26	6.96	
30	IV区	2 × 2	2.2	2.0	4.4	
31	IV区	4 × 1	5.5	2.4	13.2	
32	IV区	3 × 1	4.6	2.2	10.12	

33	Ⅳ区	2 × 1	3.15	2.25	7.08	
34	Ⅳ区	5 × 1	6.7	2.4	16.08	
35	Ⅱ区	3 × 1	4.45	2.55	11.348	
36	Ⅱ区	2 × 1	4.45	2.65	11.79	ＳＩ４(古墳前)にきられる
37	Ⅱ区	―――	―――	2.6	―――	
38	Ⅱ区	4 × 1	4.9	2.5	12.25	
39	Ⅱ区	―――	―――	2.1	―――	
40	Ⅱ区	―――	―――	1.6	―――	
41	Ⅱ区	2 × 1	2.75	2.2	6.05	
42	Ⅱ区	2 × 1	2.6	1.6～1.75	4.36	
43	Ⅱ区	―――	―――	2.8	―――	弥生中期土器
44	Ⅱ区	3 × 1	3.8～4.05	2.2	8.36～	
45	Ⅱ区	3 × 1	4.2	2.3	9.66	
46	Ⅱ区	3 × 1	4.95	2.35	11.63	
47	Ⅱ区	2 × 1	3.2	2.35	7.25	
48	Ⅲ区	1 × 2	2.8	1.35	3.78	
49	Ⅲ区	2 × 1	2.95	2.8	8.26	
50	Ⅲ区	2 × 1	2.5	2.5	6.25	
51	Ⅴ区	3 × 1	4.2	2.2～2.5	9.24～	
52	Ⅴ区	3 × 1	4.2	2.6	10.92	
53	Ⅴ区	3 × 1	3.8	1.55～1.8	5.85～	
54	Ⅲ区	3 × 1	3.7	2.4～2.5	8.88～	
55	Ⅲ区	3 × 1	3.7	2.3	8.51	弥生中期土器
56	Ⅲ区	3 × 1	4.5	2.5	11.25	
57	Ⅲ区	2 × 2	2.45	2.25	5.51	
58	Ⅳ区	3 × 1	3.5	2.7	9.45	
59	Ⅳ区	3 × 1	4.35	2.4	10.4	
60	Ⅳ区	2 × 1	3.0	2.5	7.5	
61	Ⅳ区	3 × 1	5.2	2.2	11.44	
62	Ⅳ区	3 × 1	4.35	2.25～2.45	9.78～	
63	Ⅳ区	3 × 1	4.3	2.15	9.25	
64	Ⅳ区	3 × 1	3.2	2.35	7.52	
65	Ⅰ区	2 × 1	3.05	2.5	7.62	
66	Ⅱ区	3 × 1	3.5	2.45	8.58	

67	Ⅳ区	2 × 1	2.9～3.0	2.1～2.45	6.09～	
68	Ⅳ区	3 × 1	4.2	2.2～2.5	9.24～	
69	Ⅳ区	4 × 1	5.85	2.7	15.79	
70	Ⅳ区	3 × 1	3.85	2.3	8.85	
71	Ⅳ区	2 × 1	3.1	2.0	6.2	
72	Ⅲ区	2 × 1	2.7	1.75	4.73	
73	Ⅳ区	3 × 1	4.75	2.3	10.93	
74	Ⅳ区	3 × 1	5.9	2.4	12.0	
75	Ⅳ区	3 × 1	5.15	2.25	11.59	
76	Ⅳ区	3 × 1	3.85	2.2	8.47	
77	Ⅳ区	3 × 1	4.6	2.4	11.04	
78	Ⅳ区	3 × 1	3.6	1.95	7.02	
79	Ⅳ区	3 × 1	3.1	2.2	6.82	
80	Ⅳ区	3 × 1	4.25	2.35	9.99	
81	Ⅳ区	3 × 1	3.15	2.45	7.72	弥生中期土器
82	Ⅳ区	3 × 1	3.65	2.5	9.13	
83	Ⅵ区	4 × 1	5.55	1.95～2.1	10.82～	
84	Ⅵ区	3 × 1	3.4	2.2	7.48	
85	Ⅵ区	3 × 1	3.95	2.1	8.30	
86	Ⅵ区	2 × 1	2.8	1.9	5.32	
87	Ⅵ区	3 × 1	4.25	2.1	8.93	
88	Ⅵ区	2 × 1	2.65	2.3	6.1	
89	Ⅵ区	3 × 1	4.4	2.1	9.24	
90	Ⅵ区	3 × 1	3.7	2.15	7.95	
91	Ⅵ区	3 × 1	4.0	2.4	9.6	
92	Ⅵ区	4 × 1	4.7	2.3	10.81	
93	Ⅵ区	3 × 1	4.2	2.4	10.08	
94	Ⅵ区	3 × 1	5.0	2.35	11.75	
95	Ⅵ区	3 × 1	4.6	2.15	9.80	
96	Ⅵ区	2 × 1	3.1	2.3	7.13	
97	Ⅵ区	2 × 1	2.9	2.2	6.38	
98	Ⅵ区	3 × 1	3.9	2.35	2.12	
99	Ⅵ区	3 × 1	4.4	2.4	10.56	
100	Ⅵ区	3 × 1	3.9	2.45	9.56	
101	Ⅵ区	3 × 1	4.25	2.05	8.71	

102	Ⅵ区	3 × 1	4.45	2.35～2.6	10.45	
103	Ⅵ区	3 × 1	3.5	2.65	9.28	
104	Ⅵ区	3 × 1	3.6	2.2	7.92	
105	Ⅵ区	2 × 1	3.25	2.5	8.13	
106	Ⅵ区	2 × 1	2.4	2.5	6.0	
107	Ⅵ区	2 × 1	2.4	2.0	4.8	
108	Ⅵ区	5 × 1	7.0	2.5	17.5	
109	Ⅵ区	2 × 1	2.6	2.1	5.45	
110	Ⅵ区	3 × 1	3.7	2.55	9.44	
111	Ⅵ区	2 × 1	2.5	1.9	4.75	
112	Ⅵ区	3 × 1	3.6	2.4	8.64	
113	Ⅵ区	3 × 1	4.6	2.55	11.73	
114	Ⅵ区	2 × 1	3.0	2.8	8.4	
115	Ⅵ区	3 × 1	4.1	2.2	9.02	
126	Ⅵ区	3 × 1	4.1	2.55	10.46	弥生中期土器
117	Ⅵ区	3 × 1	4.3	2.4	10.32	
118	Ⅵ区	2 × 1	4.7	2.8	13.16	
119	Ⅵ区	2 × 1	2.75	2.2	6.6	
120	Ⅵ区	2 × 1	2.65	2.8	7.42	
121	Ⅵ区	2 × 1	3.3	2.3	7.59	
122	Ⅵ区	2 × 1	2.5～2.8	2.25	5.63～	
123	Ⅳ区	3 × 1	4.35	2.3	10.01	
124	Ⅵ区	2 × 1	2.3	2.15	4.95	
125	Ⅶ区	2 × 2	3.0	2.4～2.7	7.2～	
126	Ⅶ区	2 × 1	3.0	2.8～2.9	8.4～	
127	Ⅶ区	3 × 1	3.9	2.35	9.17	
128	Ⅶ区	4 × 1	5.0	2.3	11.5	
129	Ⅶ区	2 × 1	3.1	2.2	6.82	
130	Ⅶ区	2 × 1	3.75	2.2	8.25	

表5　II地区木棺墓計測表

遺構No.	方　　位	計　測　値　(cm)			備　　考
		長　軸	短　軸	壁　高	
1	N　45°　E	(207)	(92)	――――	木口痕のみ
2	N　36°　E	(208)	(86)	――――	木口痕のみ
3	N　30°　E	(195)	(85)	――――	木口痕のみ
4	N　54°　E	(150)	(73)	――――	木口痕のみ
5	N　88°　W	(115)	(50)	――――	木口痕のみ
6	N　20°　E	(95)	(57)	――――	木口痕のみ
7	N　87°　E	(170)	(75)	――――	木口痕のみ
8	N　71°　W	(175)	(74)	――――	木口痕のみ
9	N　33°　W	(141)	(45)	――――	木口痕のみ
10	N　60°　E	(85)	(48)	――――	木口痕のみ
11	N　43°　E	(203)	(95)	――――	木口痕のみ
12	N　43°　E	(213)	(95)	――――	木口痕のみ
13	N　38°　E	(230)	(112)	――――	木口痕のみ

表6　Ⅳ地区木棺墓計測表

遺構No.	方　　位	計　測　値　(cm)			備　　考
		長　軸	短　軸	壁　高	
1	N　89°　W	(106)	(84)	――	木口痕のみ
2	N　76°　W	(132)	(80)	――	木口痕のみ
3	N　77°　W	(215)	(75)	――	木口痕のみ
4	N　74°　W	(132)	(56)	――	木口痕のみ、中期土器片
5	N　74°　W	(196)	(90)	――	木口痕のみ、中期土器片
6	N　76°　W	(220)	(96)	――	木口痕のみ
7	N　11°　E	(222)	(76)	――	木口痕のみ
8	N　22°　E	(177)	(76)	――	木口痕のみ
9	N　79°　W	(200)	(85)	――	木口痕のみ、管玉9点
10	N　74°　W	(207)	(106)	――	木口痕のみ、中期土器片
11	N　73°　W	(197)	(140)	――	木口痕のみ
12	N　63°　W	(232)	(86)	――	木口痕のみ
13	N　74°　W	(130)	(70)	――	木口痕のみ
14	N　7°　E	(122)	(86)	――	木口痕のみ、中期土器片
15	N　12°　E	(109)	(52)	――	木口痕のみ
16	N　60°　W	(103)	(62)	――	木口痕のみ
17	N　8°　E	(110)	(58)	――	木口痕のみ
18	N　11°　E	(146)	(56)	――	木口痕のみ
19	N　6°　E	(222)	(95)	――	木口痕のみ
20	N　10°　E	(197)	(115)	――	木口痕のみ
21	N　85°　W	(112)	(68)	――	木口痕のみ
22	N　71°　E	(222)	(87)	――	木口痕のみ
23	N　64°　E	(172)	(78)	――	木口痕のみ
24	E　－　W	(89)	(54)	――	木口痕のみ、中期土器片
25	N　72°　W	(268)	(108)	――	木口痕のみ
26	N　70°　W	(178)	(98)	――	木口痕のみ
27	N　67°　E	(170)	(72)	――	木口痕のみ
28	N　69°　W	(118)	(70)	――	木口痕のみ、中期土器片
29	N　82°　W	(180)	(84)	――	木口痕のみ
30	N　1°　E	(212)	(86)	――	木口痕のみ
31	N　40°　E	(180)	(75)	――	木口痕のみ、中期土器片
32	N　52°　E	(85)	(54)	――	木口痕のみ
33	N　28°　E	(128)	(65)	――	木口痕のみ

34	N 27° E	(110)	(60)	――	木口痕のみ
35	N 33° E	(104)	(66)	――	木口痕のみ
36	N 26° E	150	75	3	
37	N 47° W	(165)	(92)	――	木口痕のみ
38	N 38° W	(200)	(85)	――	木口痕のみ
39	N 88° W	(180)	(70)	――	木口痕のみ
40	W ― S	(202)	(80)	――	木口痕のみ
41	N 67° E	150	90	9	
42	N 73° E	145	75	15	
43	N 62° E	130	88	26	管玉35点
44	N 78° W	170	110	12	
45	N 65° W	150	90	5	
46	N 69° W	(230)	(74)	――	木口痕のみ
47	N 13° W	192	74	3	
48	N 32° W	182	75	7	
49	N 24° E	(80)	(43)	――	木口痕のみ
50	N 38° E	(185)	(84)	――	木口痕のみ
51	N 41° W	(116)	(100)	――	木口痕のみ
52	N 61° W	(158)	(63)	――	木口痕のみ
53	N 60° W	(200)	(76)	――	木口痕のみ
54	N 20° E	184	76	7	管玉12点
55	N 30° E	(82)	(52)	――	木口痕のみ
56	N 32° E	(85)	(50)	――	木口痕のみ
57	N 28° E	192	78	5	
58	N 18° W	(183)	(88)	――	木口痕のみ
59	N 11° W	(185)	(57)	――	木口痕のみ
60	N 63° W	(90)	(36)	――	木口痕のみ
61	N 19° W	(108)	(58)	――	木口痕のみ
62	N 79° W	(170)	(66)	――	木口痕のみ
63	N 14° E	(218)	(85)	――	木口痕のみ
64	N 11° E	(230)	(92)	――	木口痕のみ
65	N 76° W	(126)	(54)	――	木口痕のみ
66	N 21° W	(170)	(65)	――	木口痕のみ
67	N 6° E	(120)	(70)	――	木口痕のみ
68	N 63° W	(105)	(46)	――	木口痕のみ
69	N 89° W	205	4	4	管玉32点、勾玉１点

70	N 19° E	192	88	5	管玉24点
71	N 17° E	(165)	(65)	――	木口痕のみ
72	N 78° W	(135)	(70)	――	木口痕のみ
73	N 10° W	(190)	(87)	――	木口痕のみ
74	N 72° W	(137)	(70)	――	木口痕のみ
75	N 83° W	(198)	(70)	――	木口痕のみ
76	N 77° E	157	64	11	管玉22点
77	N 10° E	130	80	8	
78	N 5° W	(130)	(68)	――	木口痕のみ
79	N 47° E	125	74	3	管玉９点
80	N 10° E	185	95	10	
81	N 86° E	164	70	10	
82	N 29° W	(172)	(80)	――	木口痕のみ
83	N 17° W	125	60	7	
84	N 23° E	(104)	(65)	――	木口痕のみ
85	N 33° E	(120)	(90)	――	木口痕のみ
86	N 59° W	(193)	(71)	――	木口痕のみ
87	N 59° E	(185)	(64)	――	木口痕のみ
88					欠　番
89	N 44° E	(165)	(70)	――	木口痕のみ
90					欠　番
91	N 50° E	208	77	11	
92	N 3° E	165	68	27	
93	N 13° E	210	85	18	
94	N 38° E	(150)	(65)	――	木口痕のみ
95	N 77° W	160	60	30	
96	N 22° W	(114)	(75)	――	木口痕のみ

表7　Ⅶ地区木棺墓計測表

遺構No.	方　位	計測値 (cm)			備　考
		長　軸	短　軸	壁　高	
1	N 72° E	(218)	(80)	――	木口痕のみ・管玉・石鏃
2	N 79° E	(195)	(102)	――	木口痕のみ
3	N 83° E	(100)	(48)	――	木口痕のみ
4	N 16° W	(202)	(81)	――	木口痕のみ
5	N 78° E	(126)	(52)	――	木口痕のみ
6	W － S	(96)	(48)	――	木口痕のみ
7	N 73° W	(96)	(72)	――	木口痕のみ
8	N 77° W	105	72	10	
9	N 78° E	(198)	(86)	――	勾　玉
10	N 68° E	(176)	(80)	――	木口痕のみ
11	N 39° W	(128)	(57)	――	木口痕のみ
12	N 56° W	(222)	(85)	――	木口痕のみ
13	N 56° W	140	90	5	
14	N 51° W	(177)	(80)	――	木口痕のみ
15	N 10° W	(113)	(70)	――	木口痕のみ
16	N 8° W	(125)	(50)	――	木口痕のみ
17	N 7° W	(102)	(90)	――	木口痕のみ
18	N 80° E	(110)	(47)	――	木口痕のみ
19	N 66° E	(212)	(105)	――	木口痕のみ
20	N 38° E	(203)	(73)	――	木口痕のみ・管玉
21	N 37° E	――	――	――	
22	N 44° E	(205)	(80)	――	木口痕のみ
23	N 46° E	(208)	(79)	――	木口痕のみ
24	N 46° E	(116)	(60)	――	木口痕のみ
25	N 32° E	(105)	(55)	――	木口痕のみ
26	N 40° W	(119)	(64)	――	木口痕のみ
27	N 38° E	(180)	(65)	――	木口痕のみ
28	N 46° W	(207)	(90)	――	木口痕のみ
29	N 56° W	(185)	(73)	――	木口痕のみ
30	N 29° E	――	――	――	
31	N 38° E	(220)	(95)	――	木口痕のみ
32	N 32° E	(198)	(92)	――	木口痕のみ
33	N 41° E	(198)	(90)	――	木口痕のみ

34	N 41° E	(132)	(70)	――	木口痕のみ
35	N 29° W	118	64	11	
36	N 38° W	(218)	(83)	――	木口痕のみ
37	N 39° W	(164)	(80)	――	木口痕のみ
38	N 89° W	(180)	(80)	――	木口痕のみ
39	N 85° W	(200)	(85)	――	木口痕のみ
40	N 37° E	(88)	(40)	――	木口痕のみ

表8　Tピット計測表（Ⅶ地区）

遺構No.	列番号	計測値（cm）			備考
		長軸	短軸	深さ	
1	I	246	22	114	
2	I	242	20	108	
3	I	268	60	108	
4	I	260	40	112	
5	A	278	36	114	
6	A	260	40	124	
7	A	289	40	116	
8	A	300	50	120	
9	A	266	30	100	
10	A	282	30	104	
11	B	240	28	90	
12	C	326	32	86	
13	B	241	36	102	
14	B	268	34	96	
15	B	276	40	120	
16	B	342	44	114	
17	B	298	60	98	
18	B	274	40	120	
19	A	276	30	104	
20	A	262	20	96	
21	A	272	22	88	
22	A	294	28	98	
23	B	274	36	124	
24	B	290	34	118	
25	B	270	28	130	
26	B	286	32	108	
27	C	356	44	104	
28	C	350	50	98	
29	C	412	60	108	
30	C	406	29	104	
31	C	342	58	68	
32	C	366	56	98	
33	C	394	38	96	

34	C	356	66	96	
35	C	368	42	96	
36	C	344	34	116	
37	D	370	38	84	
38	D	386	46	98	
39	D	346	40	108	
40	D	384	58	120	
41	D	366	44	118	
42	D	342	40	112	
43	D	350	44	124	
44	F	370	24	80	
45	F	410	46	100	
46	EG	384	50	118	石　鏃
47	F	396	24	106	
48	EG	390	66	110	
49	EG	376	50	116	
50	F	364	64	114	
51	E	364	24	90	
52	E	350	40	104	
53	H	324	26	130	
54	H	318	24	102	
55	――	――	――	――	欠　番
56	G	300	40	102	
57	D	350	50	86	
58	C	388	50	130	59をきる
59	B	390	90	130	58にきられる
60	C	356	58	116	
61	C	340	88	112	
62	D	374	36	100	
63	A	282	52	118	
64	B	250	38	100	
65	E	340	48	96	
66	E	352	54	86	
67	B	224	36	88	
68	B	210	90	106	
69	E	378	40	104	

70	D	348	48	106	
71	A	276	42	120	
72	B	246	20	108	
73	E	356	36	76	
74	B	230	26	98	
75	C	338	54	108	
76	A	294	42	94	
77	C	348	44	86	
78	A	310	34	98	79をきる
79	D	360	52	90	78にきられる
80	C	356	40	76	
81	B	224	34	90	
82	E	410	42	100	
83	F	342	28	84	
84	F	380	34	66	
85	F	360	36	86	
86	F	382	30	94	
87	F	350	74	122	
88	F	380	32	94	
89	E	354	46	100	
90	H	306	26	96	
91	G	378	100	94	
92	H	274	32	106	
93	G	390	40	104	
94	G	370	36	80	
95	H	644	64	104	
96	G	772	64	102	
97	H	622	180	124	
98	G	692	58	96	
99	G	374	30	82	
100	H	314	22	106	
101	G	380	30	100	
102	A	250	30	104	
103	A	272	40	114	
104	H	314	38	98	
105	EG	350	50	98	

106	H	312	28	90	
107	EG	316	46	92	
108	H	266	24	88	
109	F	342	30	94	
110	EG	320	48	100	
111	H	294	20	84	
112	H	300	18	92	
113	H	292	20	86	
114	F	350	18	178	
115	F	332	28	82	
116	F	360	22	72	
117	D	292	22	96	
118	D	320	42	102	
118	D	356	40	106	
120	B	284	46	120	
121	B	276	34	220	
122	B	290	44	98	
123	B	286	40	124	
124	B	254	26	92	
125	B	230	24	44	
126	B	232	34	84	
127	A	274	40	108	
128	A	288	46	120	
129	A	286	54	124	
130	A	――	――	――	一部検出
131	I	――	――	――	一部検出
132	I	250	20	84	

表6　石　器　計　測　表

図版No.	名　称	計測(cm) 長さ	幅	厚	重量(g)	石質	備考
1	石　鏃	(1.9)	1.2	0.3	0.8	安山岩	SI 7
2	石　鏃	(3.7)	1.8	0.4	2.9	安山岩	SI 18
3	石　鏃	(2.5)	1.1	0.4	2.1	安山岩	SI 22
4	石　鏃	(3.1)	1.6	0.5	2.3	安山岩	SI 30
5	石　鏃	(3.1)	1.3	0.4	2.0	安山岩	SI 34
6	石　鏃	2.0	1.1	0.4	1.0	安山岩	SI 37
7	石　鏃	(2.6)	1.1	0.3	1.4	安山岩	SI 37
8	石　鏃	2.9	1.8	0.6	3.4	安山岩	SI 38
9	石　鏃	(3.4)	1.4	0.5	2.3	安山岩	SI 42
10	石　鏃	3.4	1.5	0.7	3.9	安山岩	SI 43
11	石　鏃	3.1	1.3	0.6	1.9	安山岩	SI 43
12	石　鏃	3.6	1.5	0.5	2.7	安山岩	SI 43
13	石　鏃	2.2	1.1	0.3	0.6	安山岩	SI 56
14	石　鏃	(2.1)	1.1	0.4	1.2	安山岩	SI 22
15	石　鏃	3.0	1.6	0.6	1.9	安山岩	SI 56
16	石　鏃	(3.4)	1.5	0.3	1.2	安山岩	Ⅶ地区TP
17	石　槍	8.1	2.7	1.3	29.0	安山岩	SI 34、46
18	打製石斧	6.2	3.7	0.8	25.7	安山岩	SI 56
19	石包丁	(8.2)	(6.0)	0.6	43.5	砂岩	Ⅱ区河川内
20	石包丁	13.0	5.8	1.0	84.0	砂岩	Ⅳ区未製品
21	スクレイパー	5.7	5.4	1.4	38.6	安山岩	SI 37
22	スクレイパー	6.8	6.2	2.4	124.4	安山岩	SI 37
23	磨製石斧	17.0	6.2	4.0	831.3	蛇紋岩	SI 5
24	磨製石斧	10.0	6.4	1.8	150.7	蛇紋岩	SI 39
25	磨製石斧	6.0	(3.8)	0.8	228.7	蛇紋岩	SB 101
26	磨製石斧	12.2	6.2	3.8	479.8	蛇紋岩	SI 48
27	磨製石斧	10.2	5.4	1.4	150.7	蛇紋岩	SI 39
28	磨製石器	6.0	3.4	1.0	33.3	不明	Ⅱ区U−28
29	磨製石器	10.6	6.8	4.2	682.4	蛇紋岩	Ⅳ区P−28
30	敲　石	12.2	4.4	4.4	366.1	砂岩	SI 3
31	敲　石	10.0	4.0	4.0	220.3	砂岩	SI 2

表10　土製紡錘車計測表

No.	出土遺構・地区	長径(mm)	短径(mm)	重量(g)	遺物固体番号	備考
1	SI3	42	42	12.1	SI3−102	中期土器片
2	SI41	42	42	14.0	SI41	土器片
3	SI48	34	32	8.0	SI48	中期土器片
4	SI48	(36)		(5.0)	SI48	土器片
5	II	40	37	12.4	H−26 SKI	土器片
6	II	55	43	23.6	II ハ−46	土器片
7	VI	47	47	18.6	VI C−141	製品
8	VI	46	42	14.4	VI B−9	中期土器片

第Ⅳ章　まとめ

ま　と　め

長峰丘陵上に土器・石器が出土することは明治時代より知られていた。明治29年、宮沢甚三郎氏が人類学雑誌第12巻第128号の誌上に「北信地方石器時代遺跡」として尾崎・山崎・水沢等出土の石器を紹介している。昭和12年藤森栄一氏が「千曲川下流長峰・高丘の弥生式石器」として、外様法寺、尾崎出土の石器について雑誌「考古学８の８」に発表されてから長峰丘陵の遺跡は学界に知られるようになった。第二次世界大戦後、森山茂夫氏を中心とする飯山北高等学校郷土研究会が、東長峰を中心に発掘調査をたびたび行い、大きな成果をあげた。これらの調査には、神田五六氏や宮坂英弐氏が指導されることもあった。昭和32年には、桐原健氏が丘陵突端の柳町遺跡を調査し、古墳時代初頭に属する柳町式土器を得ている。実の所、柳町遺跡と命名したのは桐原健氏である。それまでは、柳町遺跡までも含めて長峰遺跡群として扱われていた。

以上のように長峰丘陵上の遺跡の調査は、小泉遺跡の南端で丘陵は二股に分れ外様平に突出する丘陵上に止まっており、照里に至る丘陵上やこの二つの丘陵に挾まれた小泉遺跡所在地には調査の手が届かなかったのである。東長峰遺跡、柳町遺跡の所在する丘陵は旧外様村に属し、小泉遺跡の所在地は旧常盤村属し、耕作者がそれぞれ異なっていたせいかも知れない。ただ、耕作者の中に興味をもつ人々がおり、それらの人々によって管玉、勾玉等が採集されていたようである。従って、近年にいたるまで小泉遺跡については知られていなかったといってもよい。

「長峰工業団地」造成開始１年前の昭和62年「長峰丘陵と考古学」（雑誌「飯山」創刊号（飯山郷土史研究会発行））という雑文を記したことがあった。その中で「工業団地造成計画」について以下のように触れている。「どのような遺構、遺物が私達の眼前に姿を現すのであろうか。限りなき夢と破壊の不安が心の中で交錯し複雑な心境である」と。

昭和63年に開始された本遺跡の調査の結果は、想像していたよりはるかに大規模で、発見された遺構、遺物は尨大で貴重なものであった。私達は、確かに今回の調査を通じ大きな成果を得た。このことは大きな喜びであるが、同時に貴重な埋蔵文化財包蔵地が壊滅してしまったことも事実である。付近一帯は、原型を止めず工業団地として大きく変貌をとげてしまっている。

遺跡の所在地は、細かくみるとⅠ区を除いては、ほぼ西方にゆるやかに傾斜し、西端はⅠ区の東長峰崖下より湧出し流下する小河川によって削りとられ、外様平に向って開口しつつ低湿地帯を形成している。この小河川にⅠ区東方の崖下より流出する湧水がⅠ区の北端を北西に流れⅠ区とⅡ区との間に沢状地形を作りつつ、東長峰崖下より流出する小河川に合流している。この低湿地帯は、つい近年まで水田として利用されていた。西方に向ってゆるやかに傾斜する台地状の地形は、幾筋もの沢が西方に向って走り、沢と沢の間には丘陵状の小台地となっている。今回調査の対象となった地籍は、６ケ所の丘陵状の小台地が認められる。これら小台地上に遺跡が存在する。従って区分された小台地ごとに遺跡をⅠ区～Ⅶ区に区分している。

発見された弥生式住居址は、弥生中期24軒、弥生後期30軒、計54軒である。弥生中期の住居址はⅥ区を除いた全ての台地に、弥生後期の住居址は、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴに認められる。

弥生中期の住居址は、全て円形であり周溝を伴なっている。Ⅴ区を除いては、３～４軒で構成されており集落構成の小単位を考える上で重要な意味をもつものといえるであろう。弥生後期の住居址は、Ⅱ、Ⅲ区に集中して発見された。特にⅢ区の住居址群は、小判形あるいは隅丸長方形を有しているが、出入口と

想定される場所に2個のピットを配列する点が共通している。家屋構造の一端を示す好資料といってよいであろう。

掘立柱建物址は126基の多きに達している。特にV区では40基が集中している。建物址そのものは、弥生中期・後期いずれに所属するかは明確でないが、このような尨大な掘立柱建物址が何故に構築されたのであろうか。本遺跡に居住した弥生時代の人々の生産活動や日常生活との係わり合いの面で、今後究明していかねばならない重要課題の一つといえよう。

今回の調査の結果、最も注目されるのは、土坑墓、木棺墓の墓址群であろう。全体で152基発見されている。就中、94基が集中していたIII区は注目に値しよう。木棺墓の長軸方向は、南北、東西の二方向に大別される。そのほかは、斜面に直行あるいは平行している。そして、それぞれが等高線に沿ってまとまっている。規模は、大型、小型の2つのタイプに分られ、被葬者の年代を暗示しているものと思われる。耕作土がいたって浅く、畑の耕作中に破壊されたものが大部分で、若干の凹を残したものは少なく、大半は木口痕を残しているのみである。出土遺物も管玉・勾玉の装飾品に限定されており、土器類等の出土は見られなかった。管玉、勾玉が発見されたのは5基のみであって、他の木棺墓からの遺物の出土は皆無であった。管玉は、細身で小形である。これら墓址群と人々との係わり合いも重要である。これも今後の重要な研究課題といえよう。

旧石器時代の土坑の発見も特筆に値しよう。

遺物では、先述した管玉、勾玉のほかに弥生中期・後期の土器が大量に出土した。それぞれが特色ある土器であり、飯山地方の弥生式土器編年にとって貴重な資料である。今後、これらの土器の分析研究を通して当地方の弥生中期・後期の土器の姿相が鮮明化されるであろう。本調査報告書が、大まかに土器の形態や文様を述べるに止まり、敢えて編年的序列について触れなかったのは、より綿密な今後の研究の課題として残したからに他ならない。そのほか、流水文と雷文を有する木製品の一部が、II区1号住居址内より発見されている。これも今後の研究課題である。

小泉遺跡が存在する長峰丘陵上には、ミズナラ、コナラ、クヌギ等の落葉広葉樹が繁茂している。そのほかオオバクロモジ、オオカメノキ、ガマズミ、コシアブラ等もある。かつては、ブナも亭々と聳え立っていたことであろう。弥生中期の人々はこれらの樹木を伐採し、自分達の居住空間を確保し、東長峰崖下に広がる低湿地帯を水田化し、生活を営んだことであろう。そして、ドングリ、クリ、クルミなども重要な食料源としたであろう。その他、ゼンマイ、コゴミ、ワラビ等の山菜も当然利用したであろう。

いずれにしても小泉遺跡の調査は、私達に多くの課題を残した調査であったといえよう。末尾ながら、いちいちお名前は記さないけれども本調査にご指導、ご助言をいただいた多くの方々、酷暑の中額に汗しつつ調査にご協力いただいた作業員の皆さんに心よりお礼申し上げる。

引用・参考文献

飯沢澄男 1954 『長峰第12号住居埋蔵文化財発見届出書』

飯山市 1993 『飯山市誌』歴史編上巻

飯山市教育委員会 1986 『飯山の遺跡』飯山市埋蔵文化財調査報告第14集

飯山市教育委員会 1989 『国道117号線小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告書I』飯山市埋蔵文化財調査報告第19集

飯山市教育委員会 1990 『国道117号線小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告書II』飯山市埋蔵文化財調査報告第21集

飯山市教育委員会 1994 『南原・深沢遺跡』飯山市埋蔵文化財調査報告第37集

飯山市教育委員会　1988　『釜渕・北顔戸遺跡』飯山市埋蔵文化財調査報告第16集
飯山市教育委員会　1991　『小佐原遺跡・関沢遺跡』飯山市埋蔵文化財調査報告第25集
飯山市教育委員会　1986　『飯山の遺跡』飯山市埋蔵文化財調査報告第14集
飯山市教育委員会　1980　『北原遺跡調査報告書』飯山市埋蔵文化財調査報告第４集
桐　原　　健　1955　『長峰尾崎遺跡の重要性』若木考古38・39合併号
桐　原　　健　1957　『北信濃長峰丘陵柳町遺跡調査概報』信濃９－12
桐　原　　健　1959　『北信長峰丘陵における弥生式遺跡』考古学雑誌48－３
清　水　　亨　1950　『外様村尾崎東長峰発掘調査報告㈡』下水内郡遺跡発掘調査報告書
高　橋　　桂　1962　『飯山市照丘遺跡出土の弥生式遺物について』信濃14－11
高　橋　　桂　1968　『長野県飯山市照里環状周溝遺跡調査略報』信濃20－４
東　道雄・清水　亨・森山茂夫・寺崎昭夫　1951　『下水内郡外様村東長峰遺跡３・４・５・６・７号住居址』下水内郡遺跡調査報告２
藤　森　栄　一　1937　『千曲川下流長峰、高丘の弥生式石器』考古学８－８
松　沢　芳　宏　1983　『飯山・中野地方の前半期古墳文化と提起する諸問題』信濃35－３
宮　坂　英　弐　1955　『長野県下水内郡長峰遺跡』日本考古学年報３
森　山　茂　夫　1950　『外様村尾崎東長峰発掘調査報告㈠』下水内郡遺跡発掘調査報告書
森　山　茂　夫　1951　『外様村尾崎長峰遺跡第７号住居址』下水内会会報

PLATE

PL1

写真２　調査開始式（昭和63年７月13日）

写真３　Ⅰ地区調査風景

写真4　Ⅰ地区　7号竪穴住居址

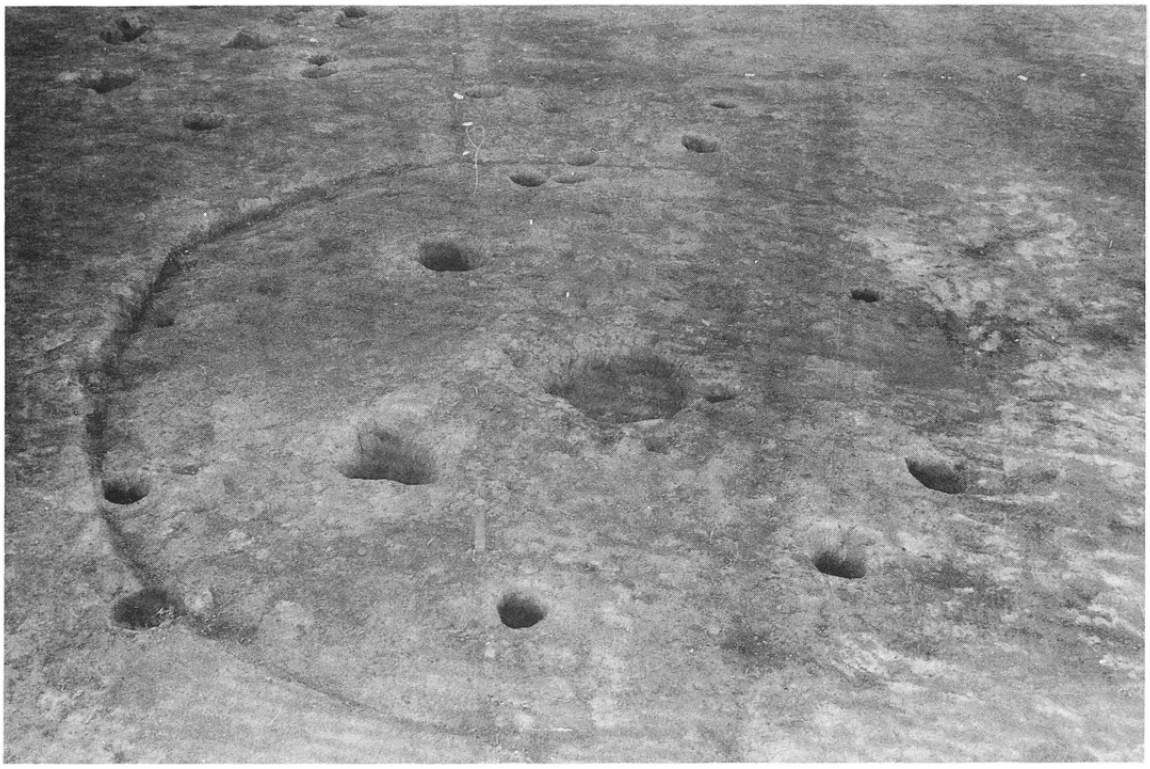


写真5　Ⅰ地区　16号竪穴住居址

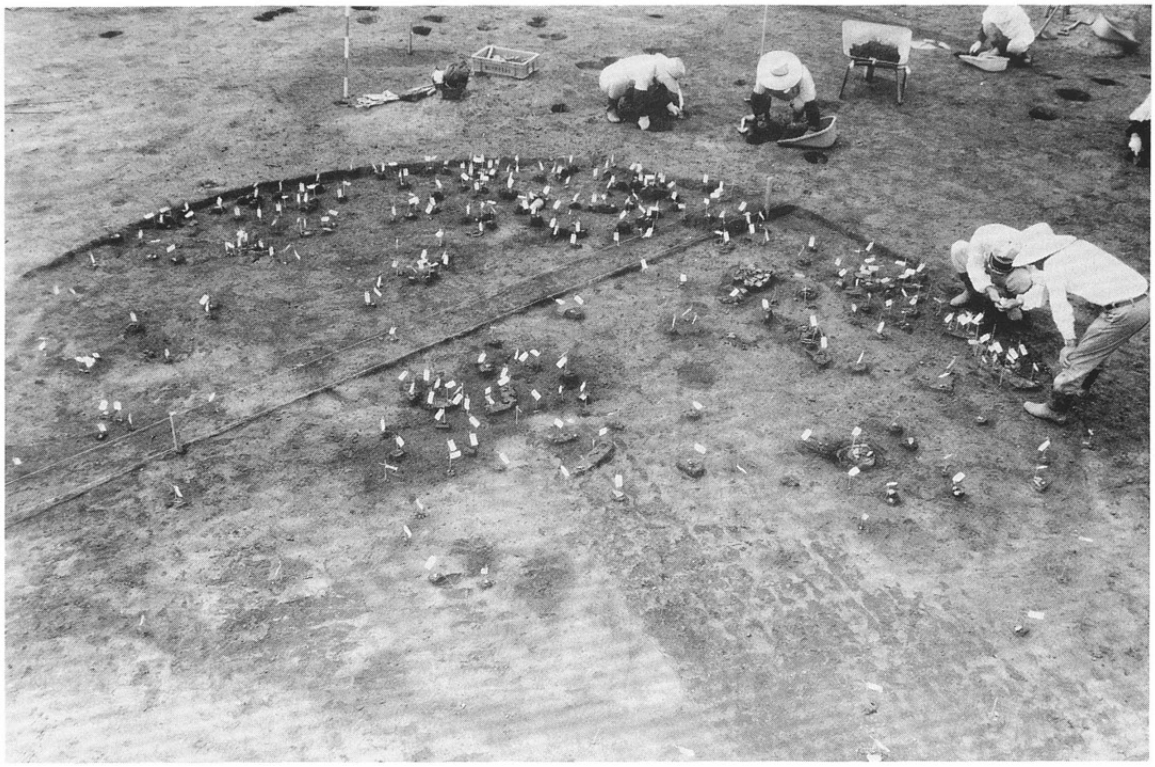


写真6　Ⅰ地区　10号竪穴住居址

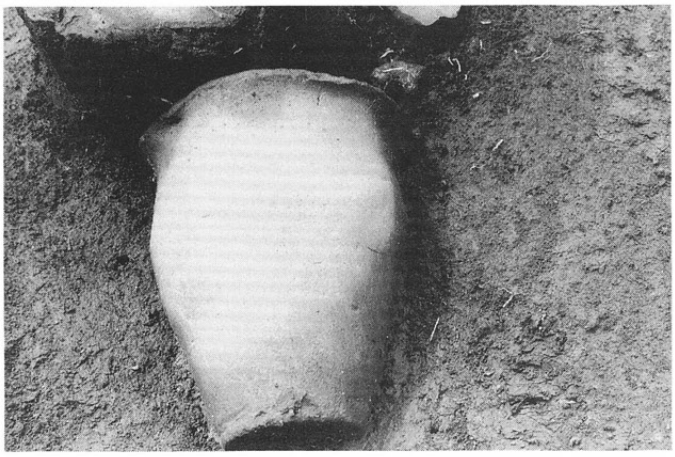


写真7　10号竪穴住居卦出土土器

写真8　10号竪穴住居址P_3出土土器

写真9　9号掘立柱建物址

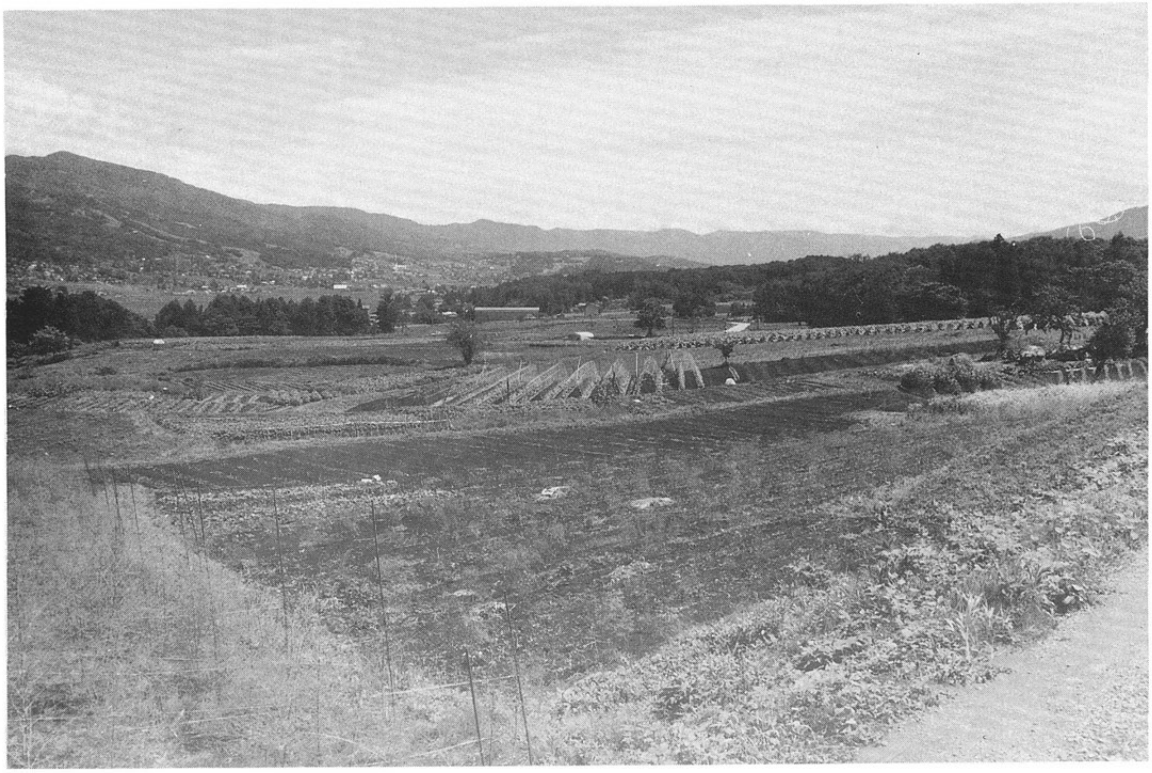


写真10　II 地区近景（中央立木付近）

写真11　II地区　1号竪穴住居址

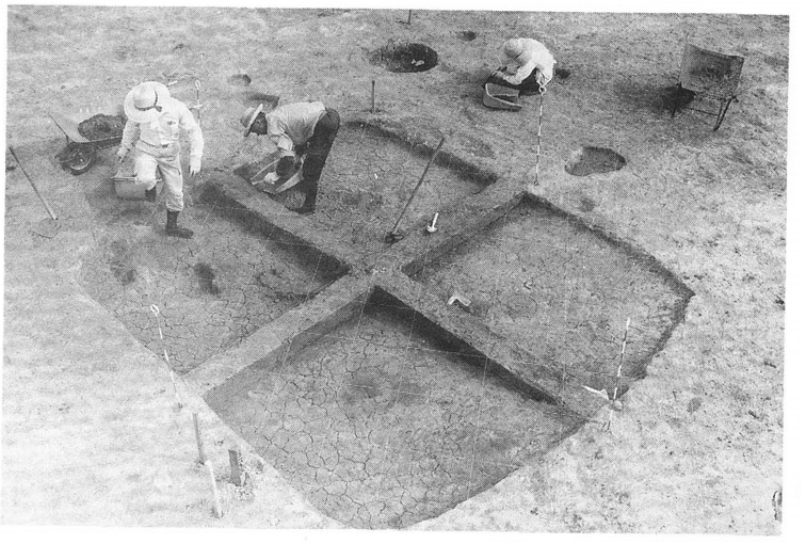


写真12　1号竪穴住居址調査風景

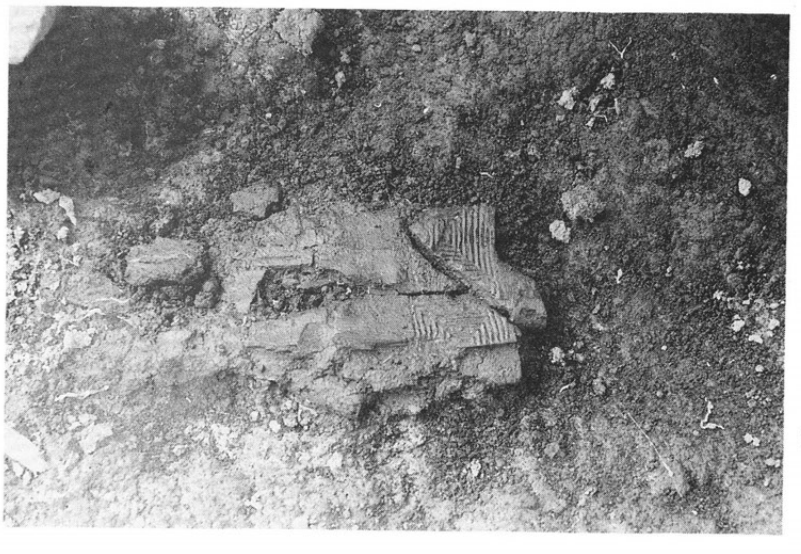


写真13　1号竪穴住居址
炉内出土炭化木製品

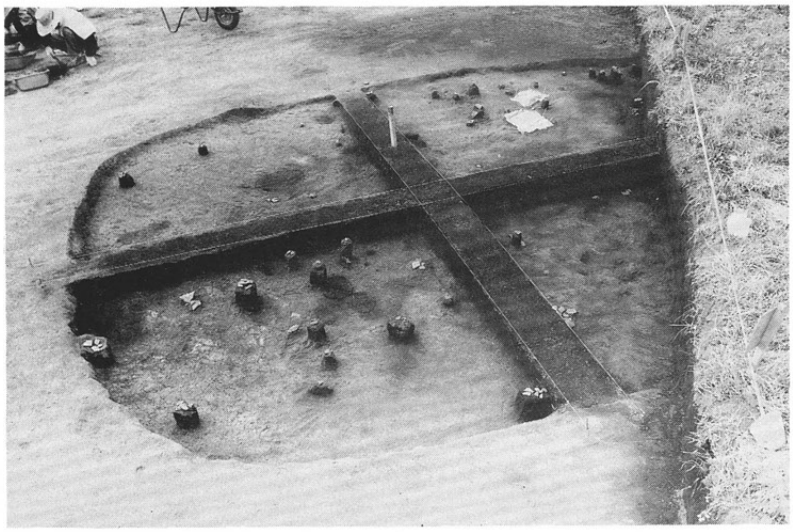


写真14　3号竪穴住居址

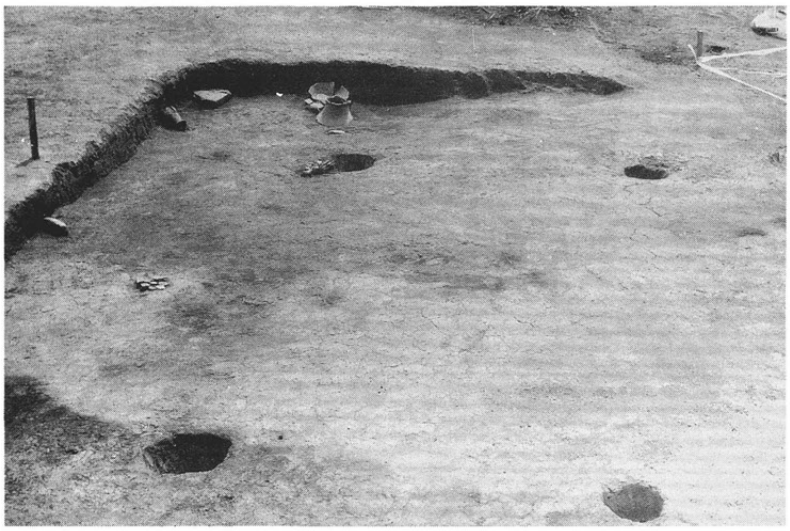


写真15　5号竪穴住居址

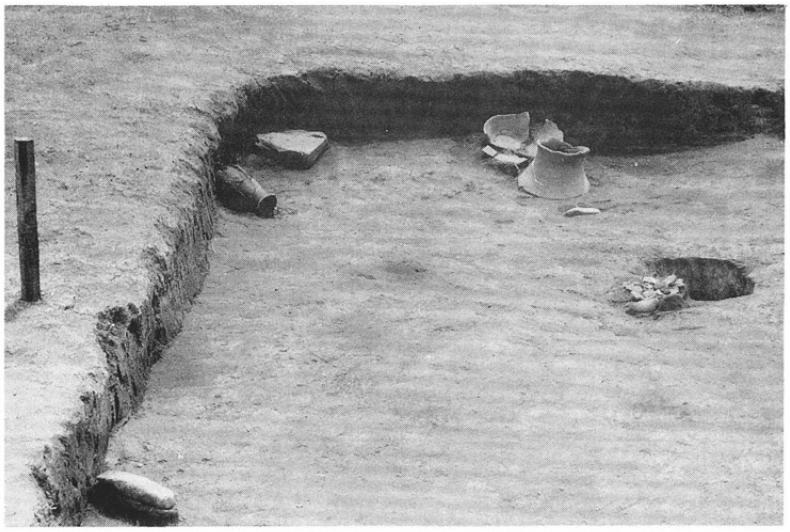


写真16　5号竪穴住居址遺物出土状況

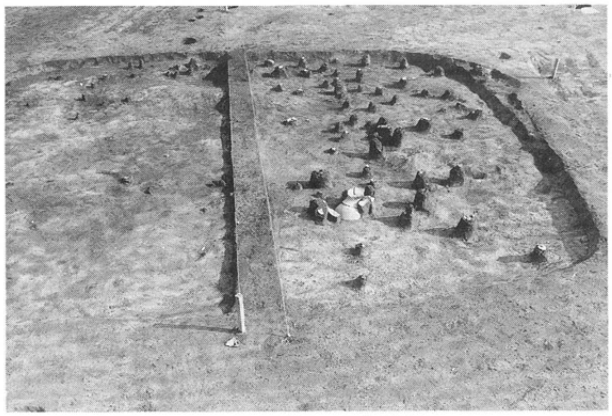


写真17　11号竪穴住居址

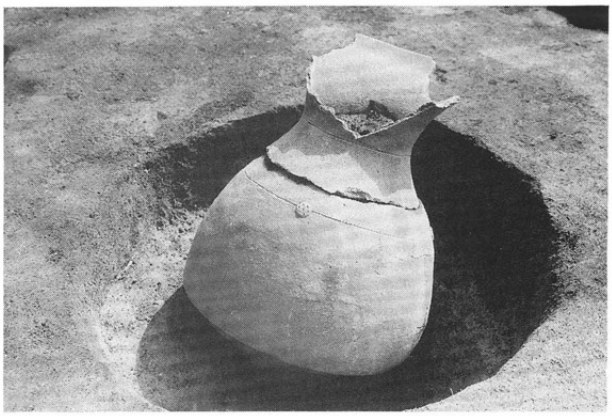


写真18　11号竪穴住居址出土土器

写真19　12号竪穴住居址

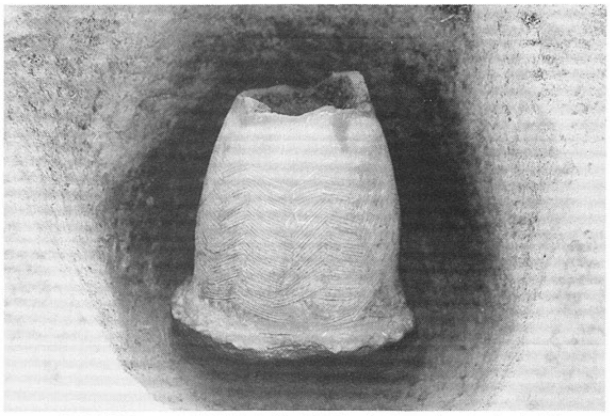


写真20　12号竪穴住居址内ピット出土土器

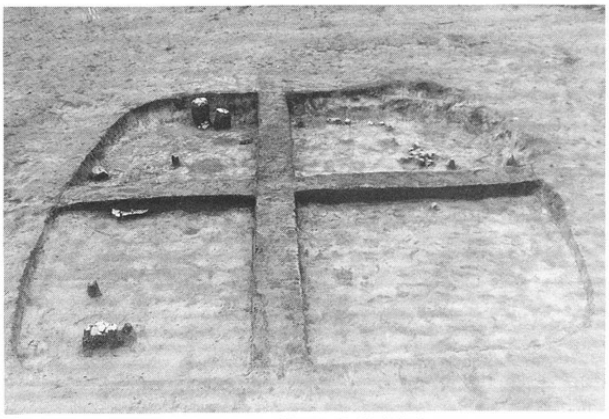


写真21　13号竪穴住居址

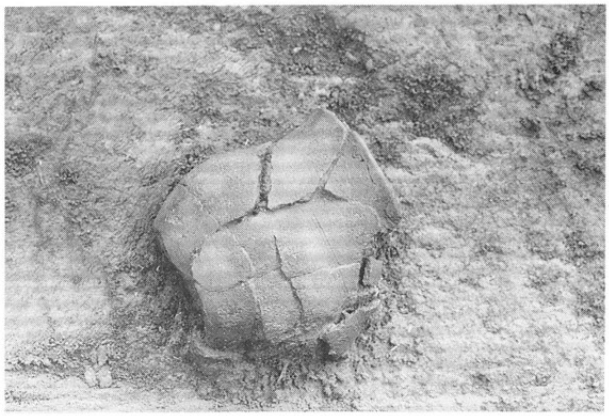


写真22　13号竪穴住居址 変形土器出土状況

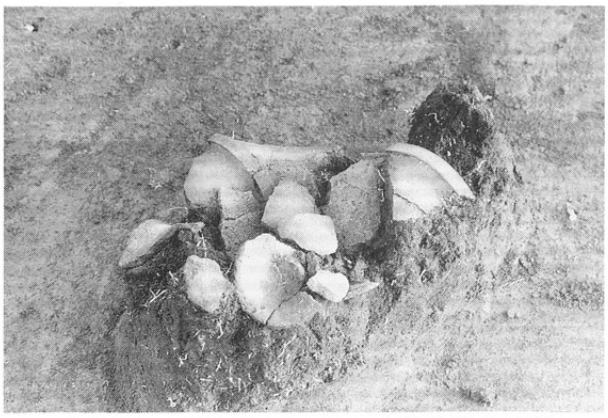


写真23　13号竪穴住居址 台付鉢出土状況

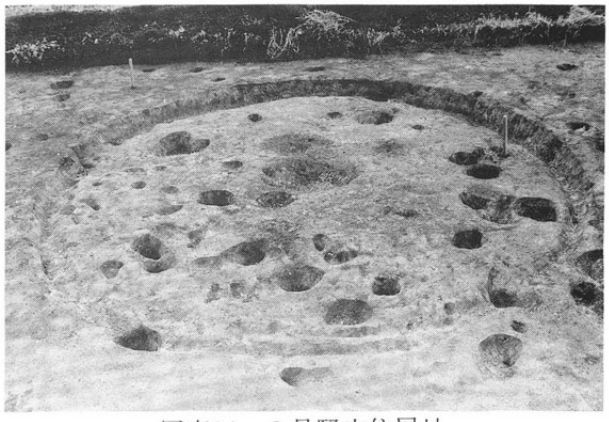


写真24　8号竪穴住居址

写真25　17号竪穴住居址・10～13号木棺墓

写真26　柵　　列

写真27　谷地の水辺

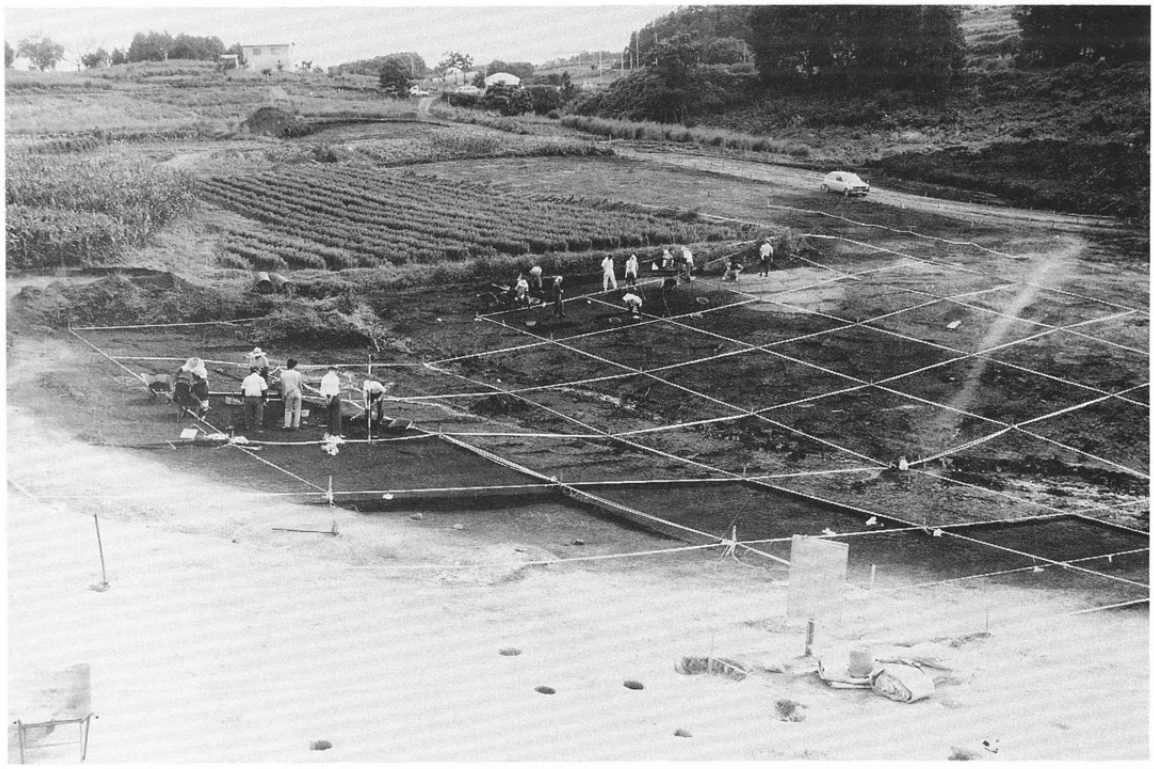


写真28　II地区 a 地点より谷地・I 地区を望む

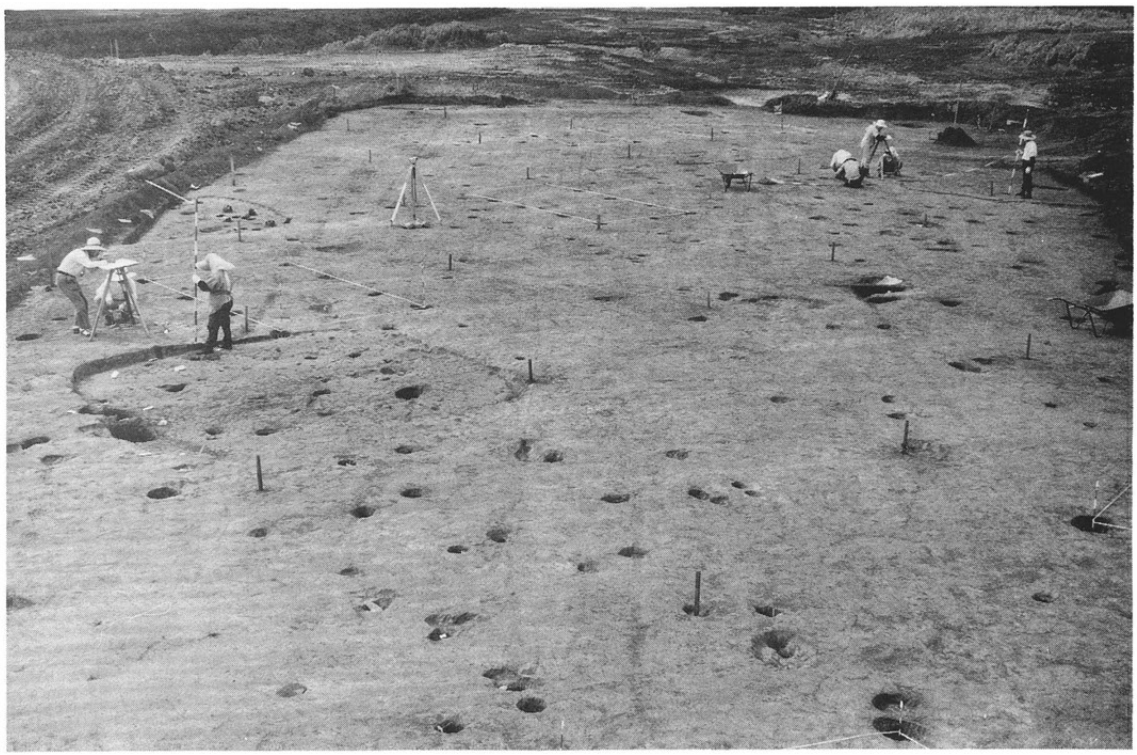


写真29　II地区 a 地点（平成 2 年度）全景

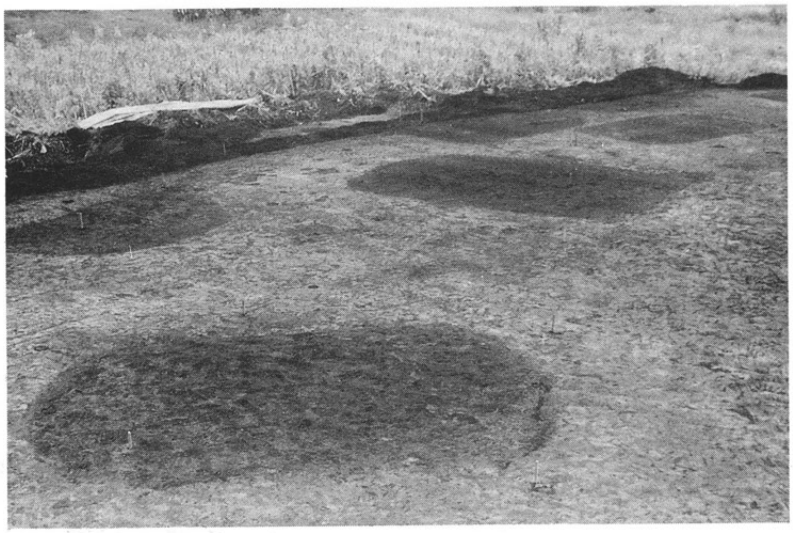


写真30　III地区遺構検出状況

写真31　18号竪穴住居址

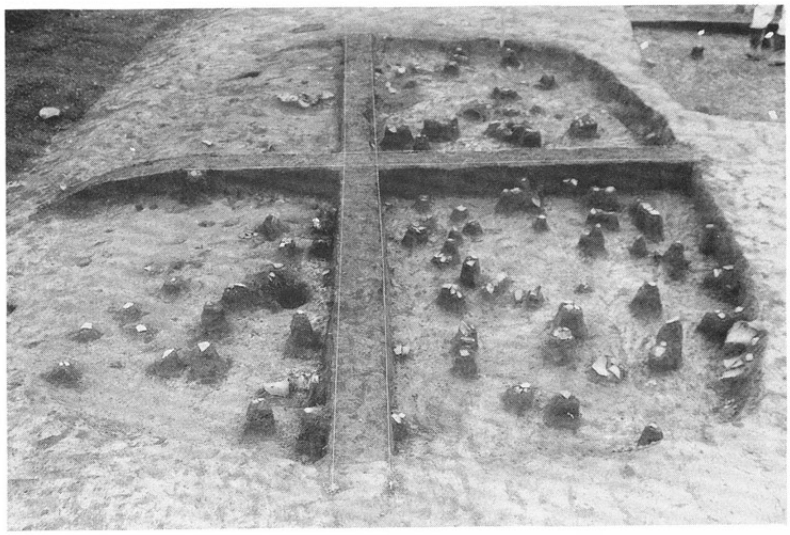


写真32　19号竪穴住居址
遺物出土状況

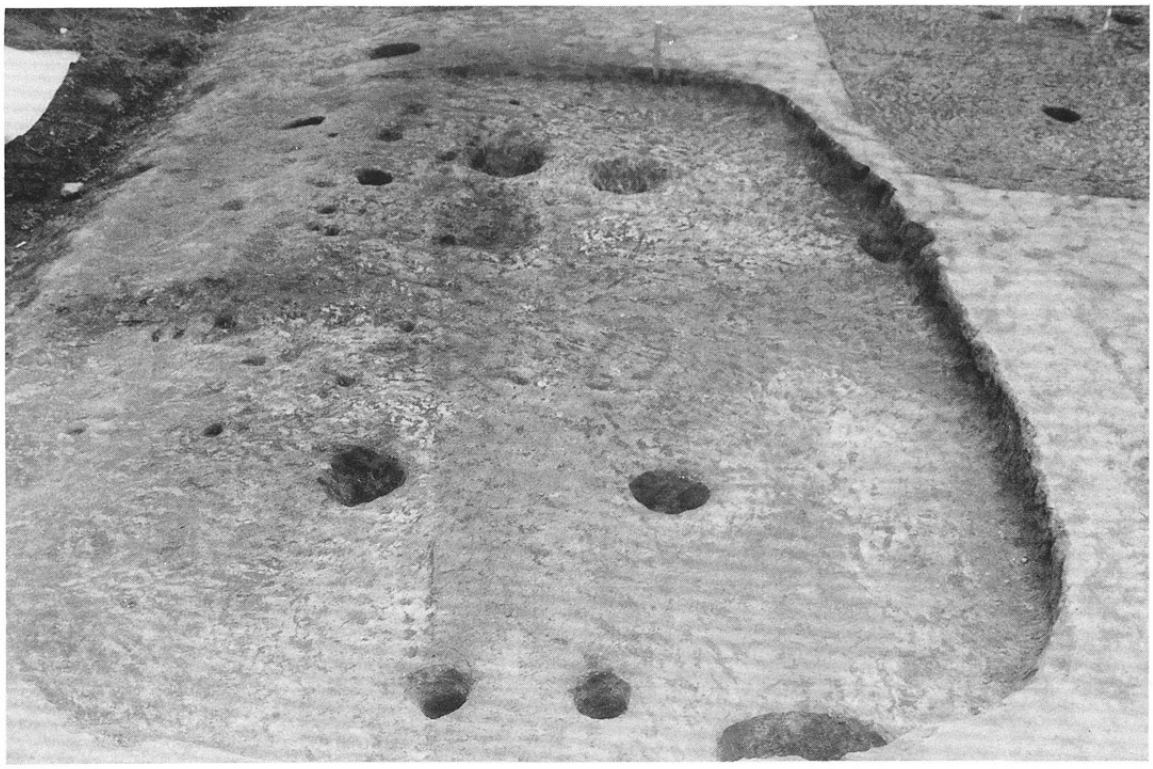


写真33　19号竪穴住居址

写真34　24号竪穴住居址

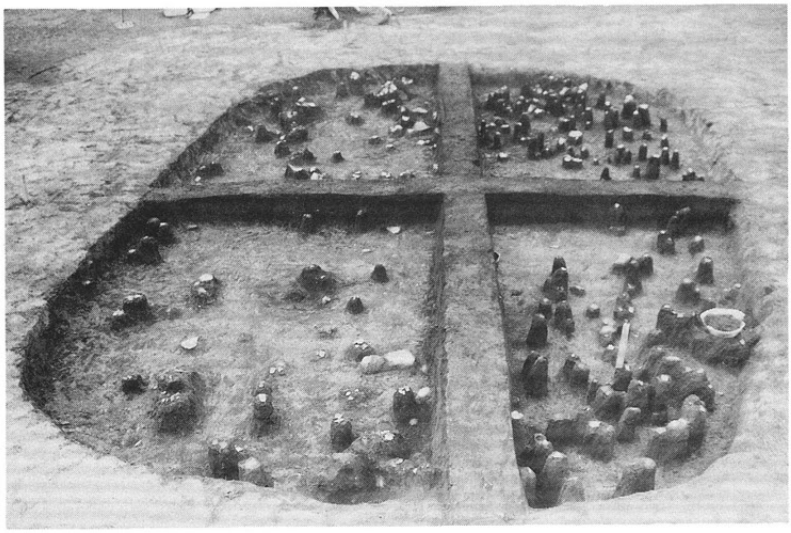


写真35　21号竪穴住居址

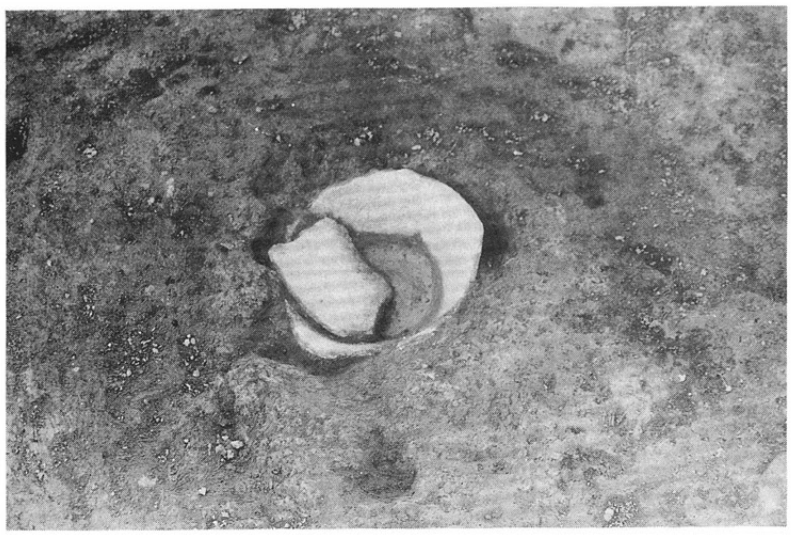


写真36　21号竪穴住居址炉体土器

写真37　21号竪穴住居址
土坑内土器出土状況

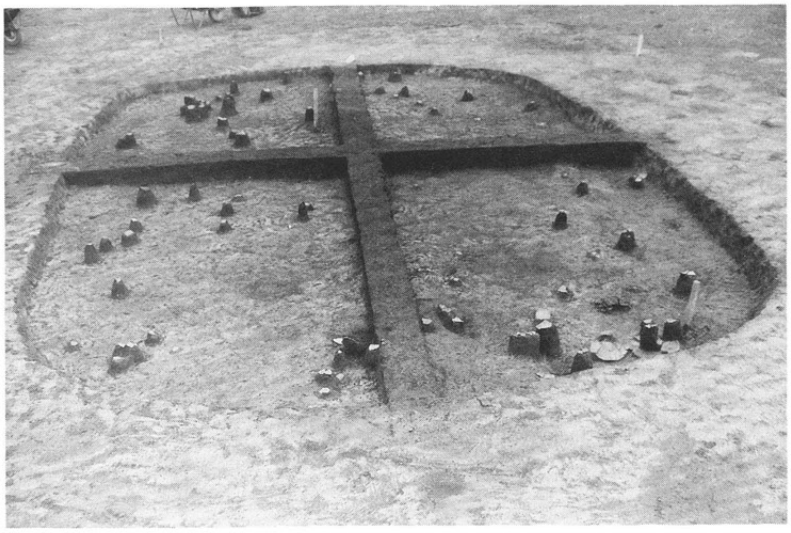


写真38　22号竪穴住居址
遺物出土状況

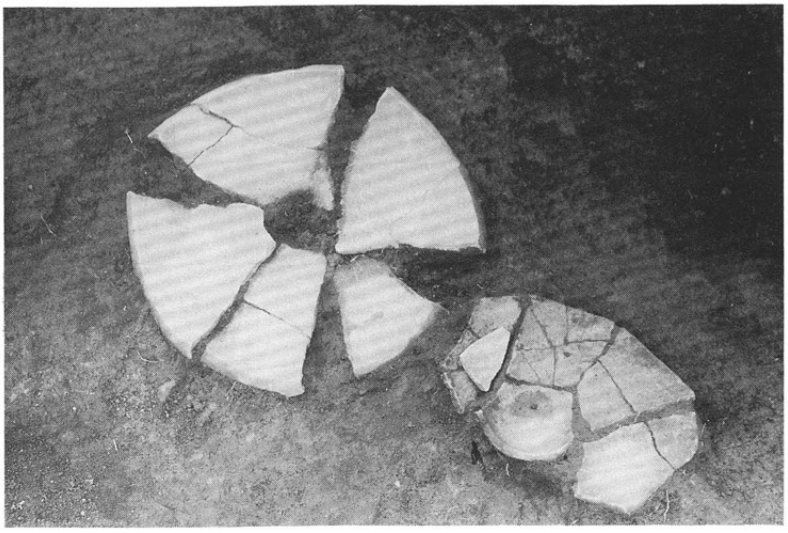


写真39　土器出土状況

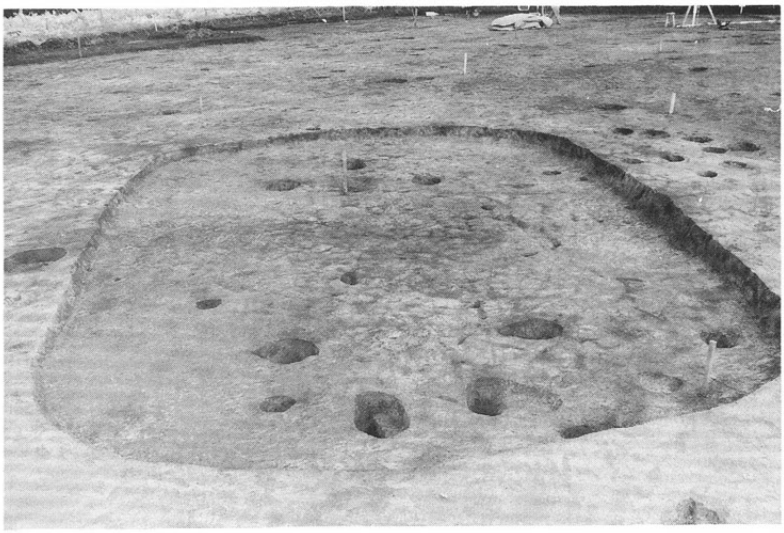


写真40　22号竪穴住居址

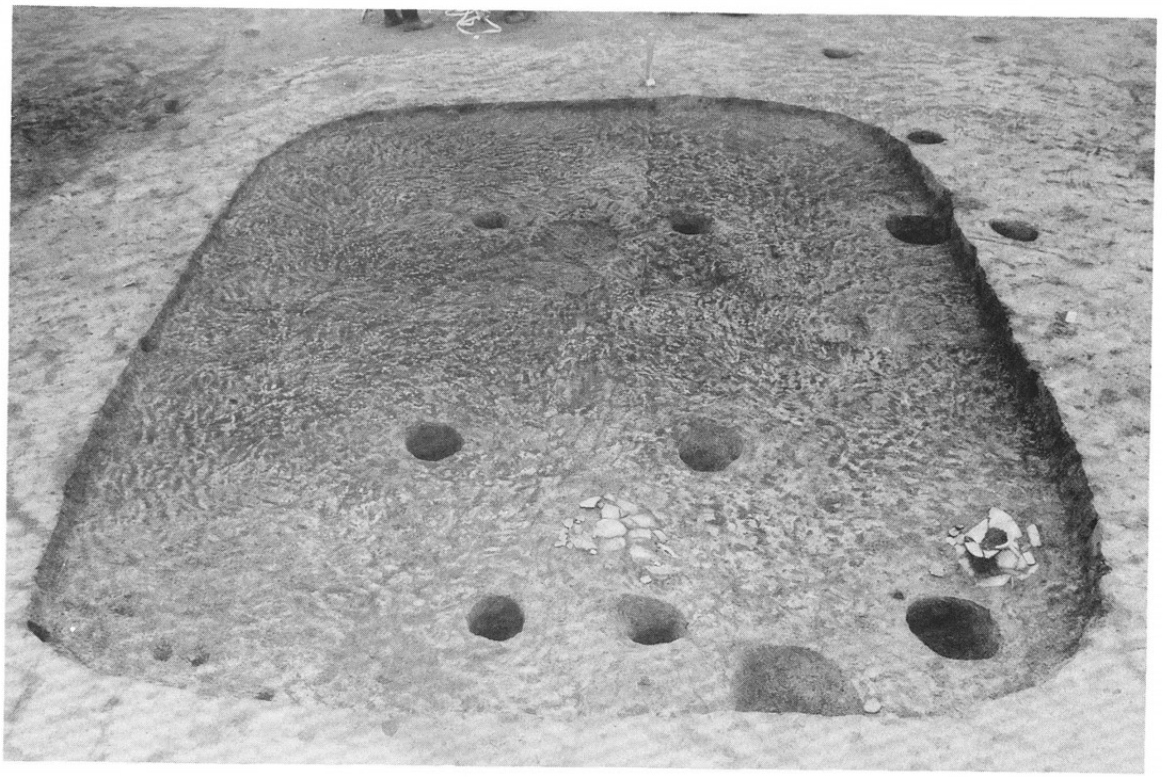


写真41　23号竪穴住居址

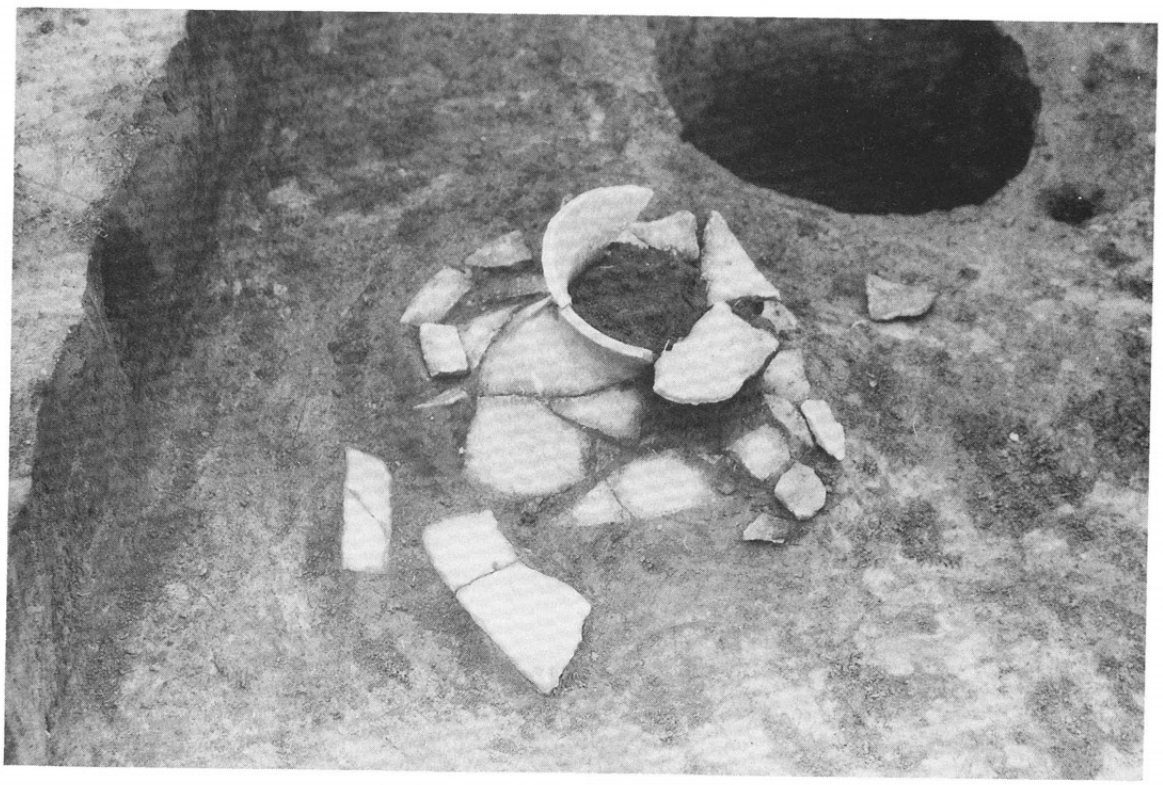


写真42　住居址床面出土土器

写真43　25号竪穴住居址

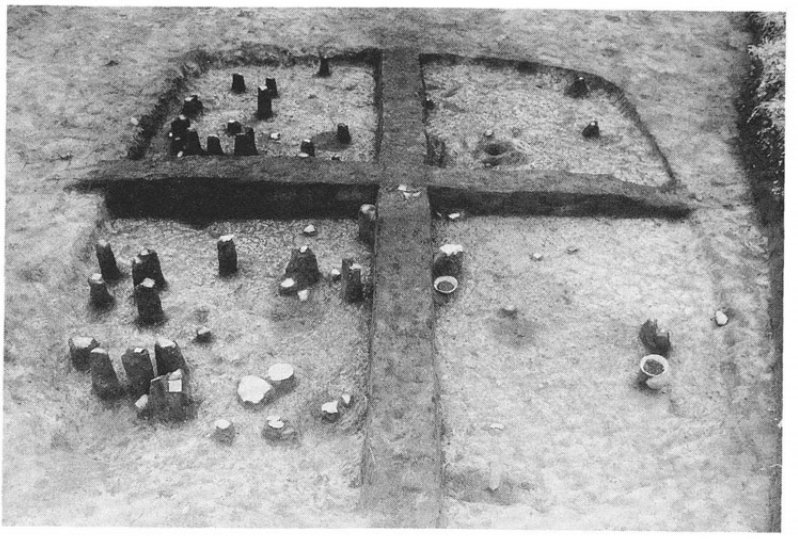


写真44　遺物出土状況

写真45　甕出土状況

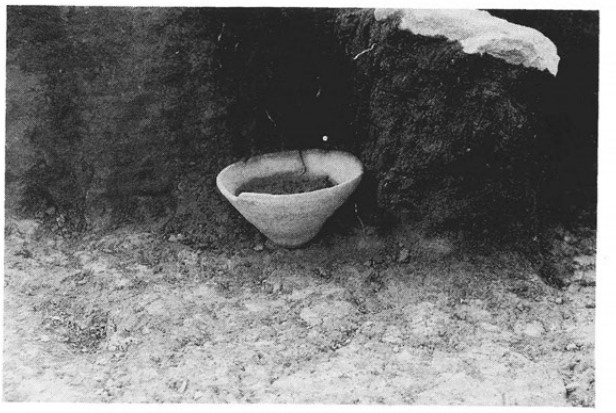


写真46　有孔鉢出土状況

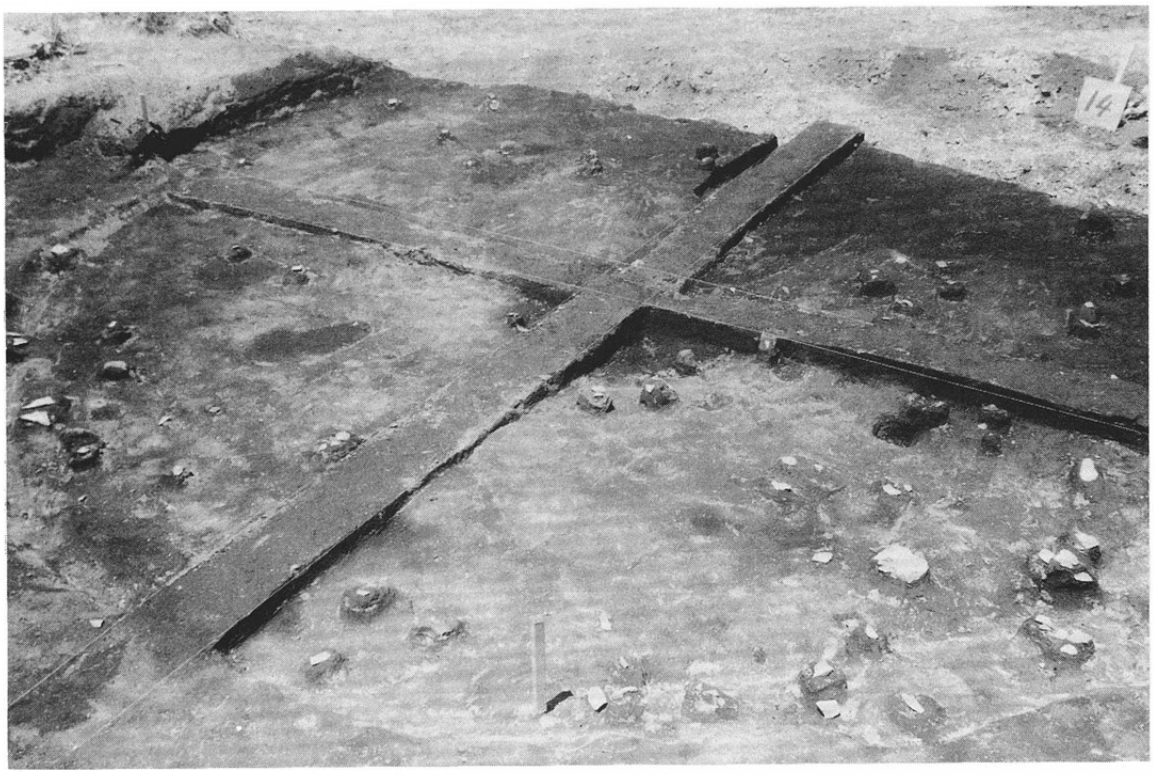


写真47　34号竪穴住居址

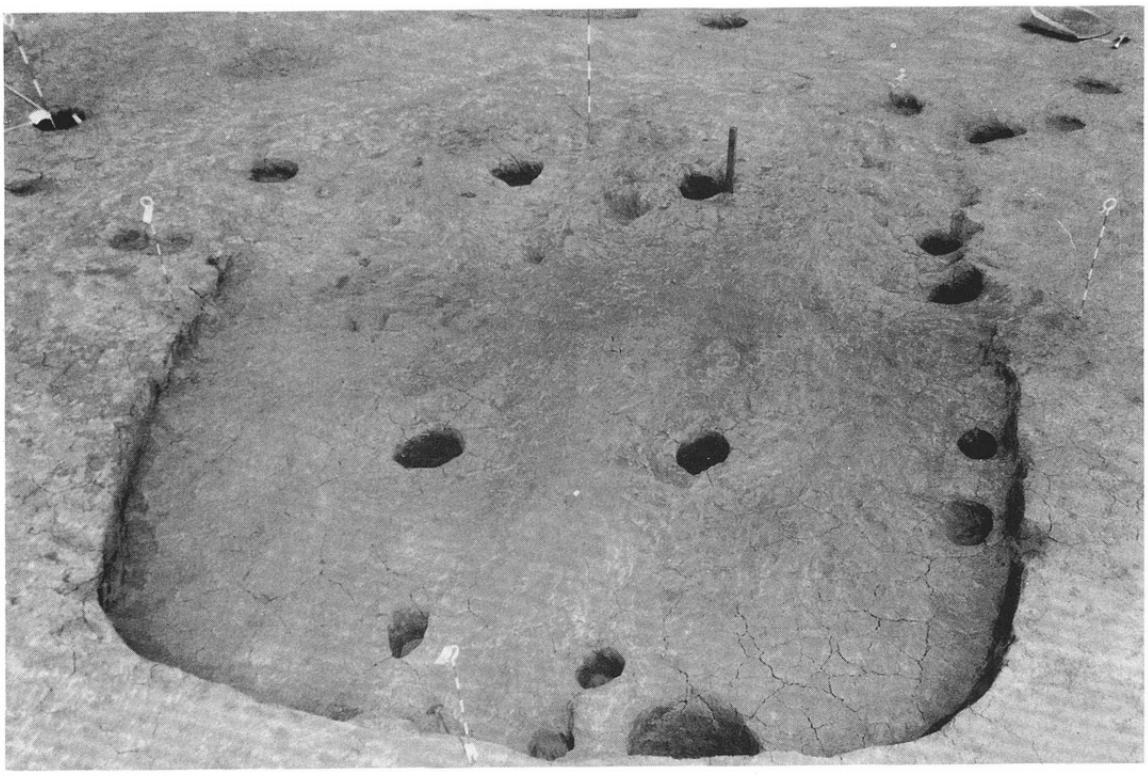


写真48　36号竪穴住居址

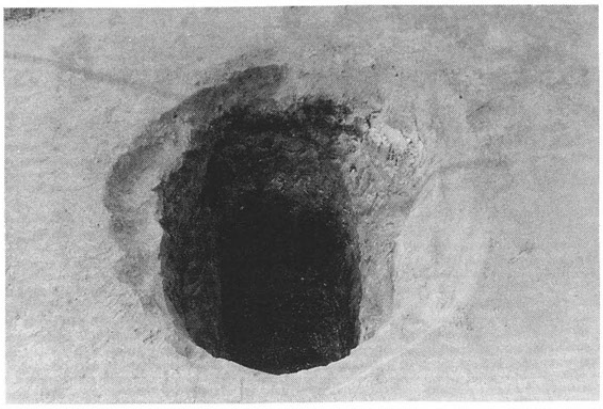


写真49　1号井戸址

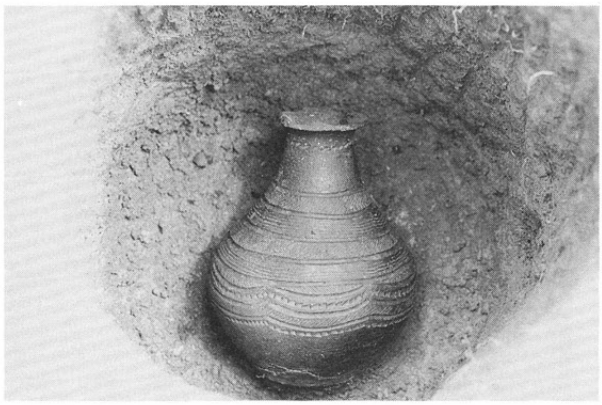


写真50　55号掘立柱建物址
ピット内出土土器

写真51　III 地区調査状況

写真52　Ⅳ 地 区 近 景 （Ⅴ地区より）

写真53　Ⅵ地区 c 地点調査風景

写真54　c 地 点 全 景

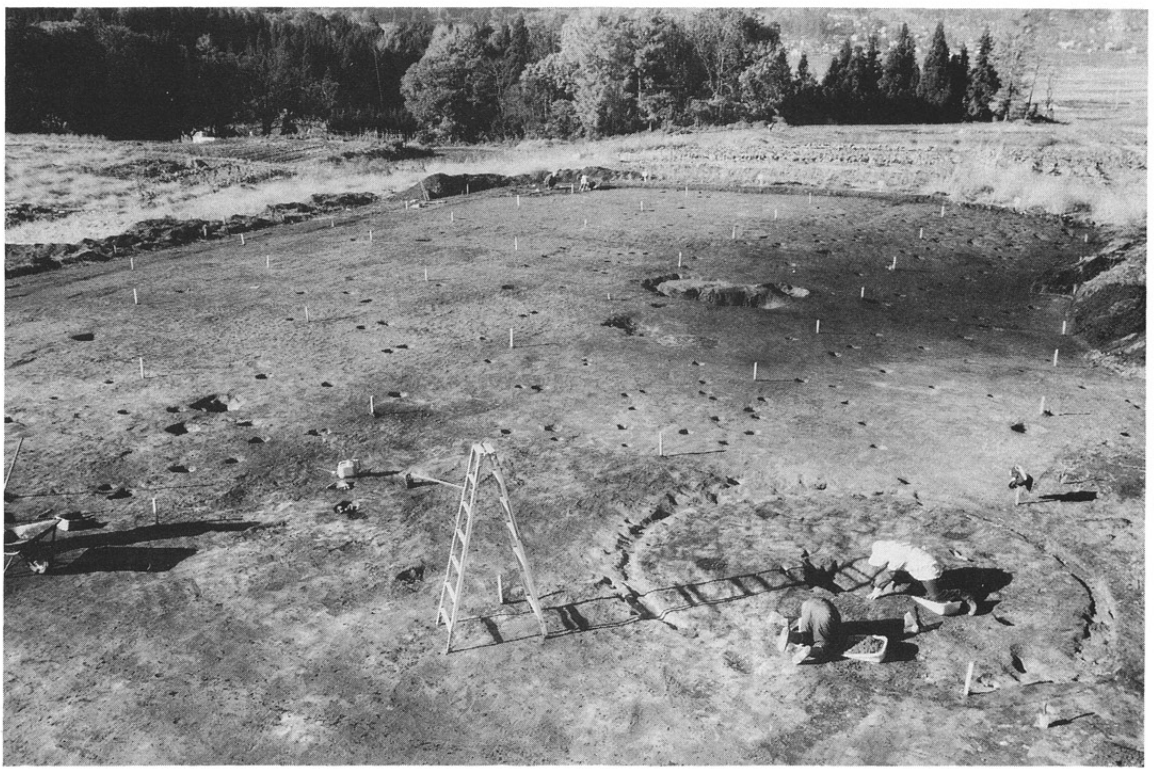


写真55　a 地 点 全 景

写真56　40号竪穴住居址

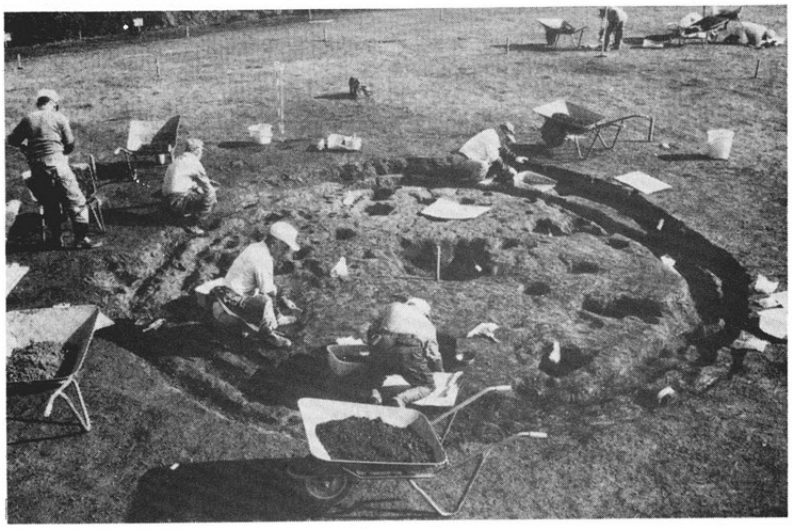


写真57　41号竪穴住居址

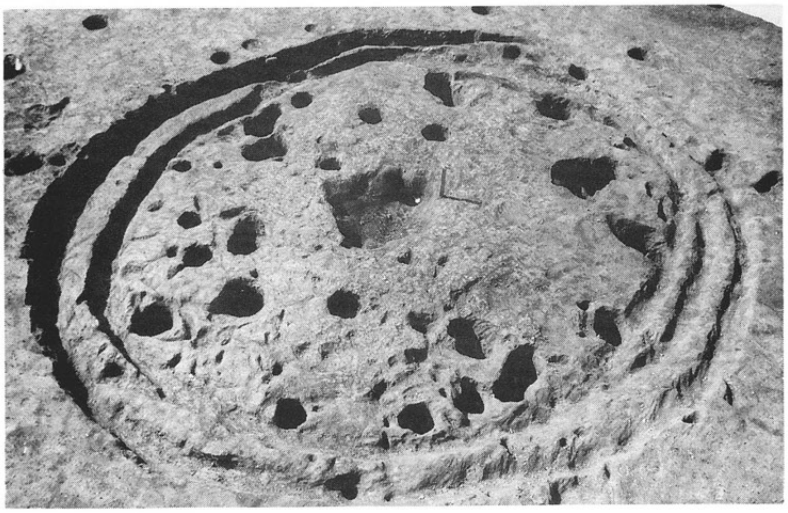


写真58　41号竪穴住居址

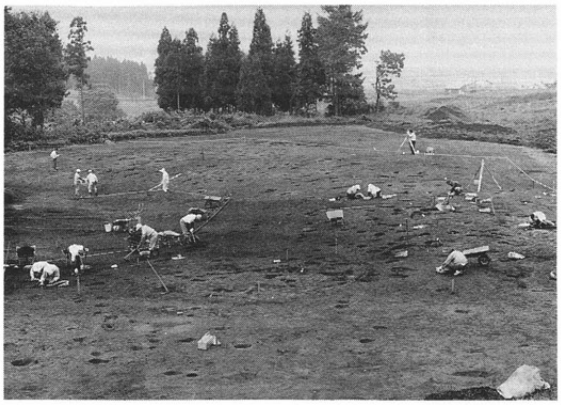


写真59　c 地点木棺墓群調査風景

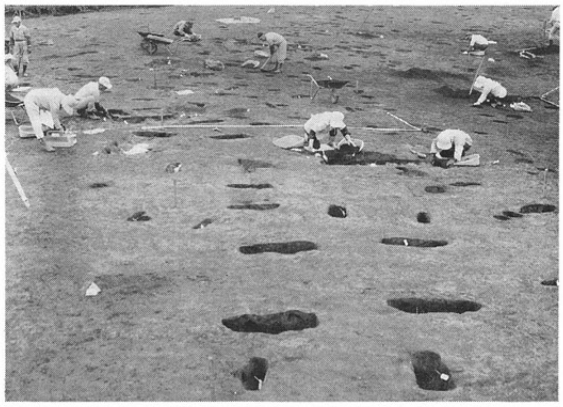


写真60　木棺墓調査風景

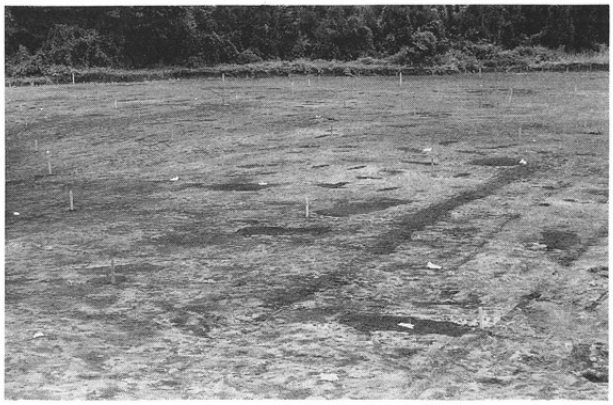


写真61　木棺墓確認状況

写真62　木棺墓群全体写真

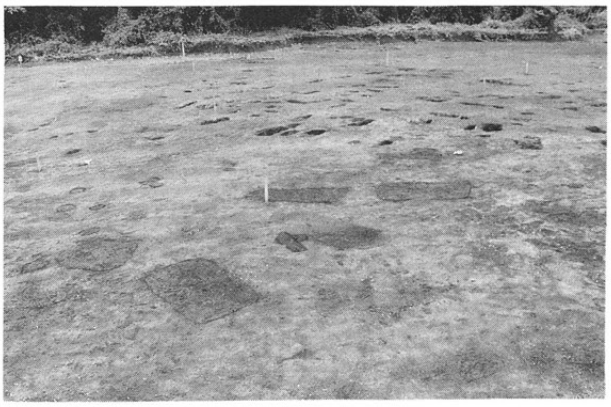


写真63　木棺墓検出状況

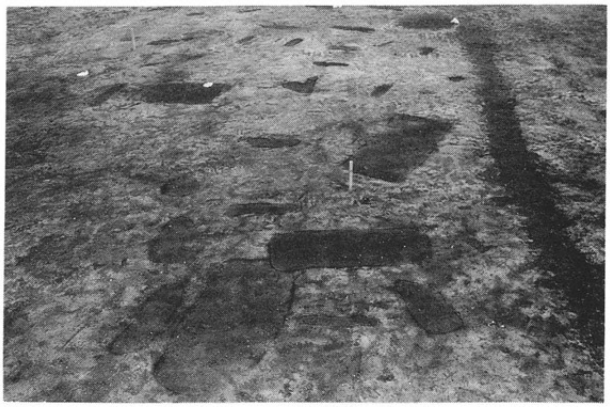


写真64　木棺墓検出状況

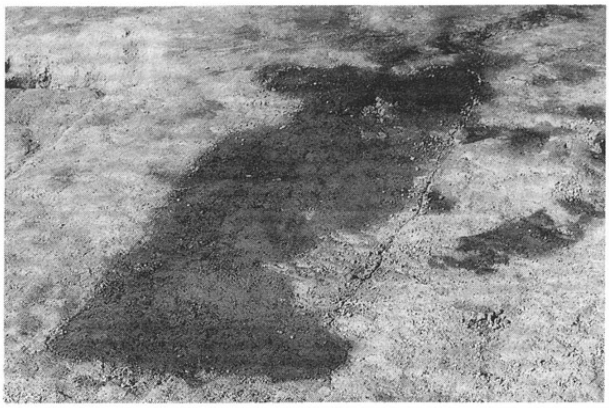


写真65　木棺墓検出状況

写真66　43号木棺墓検出状況

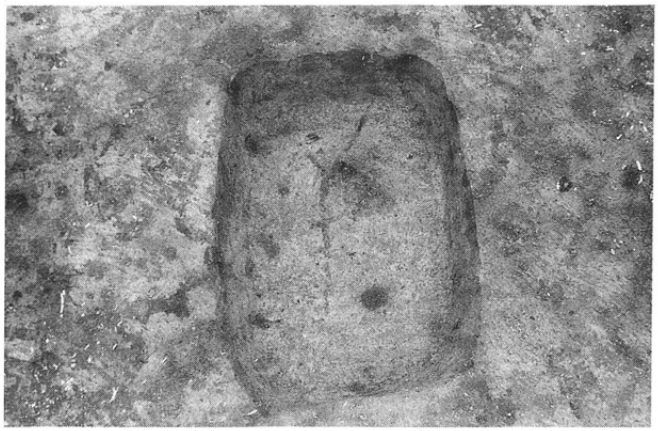


写真67　43号木棺墓

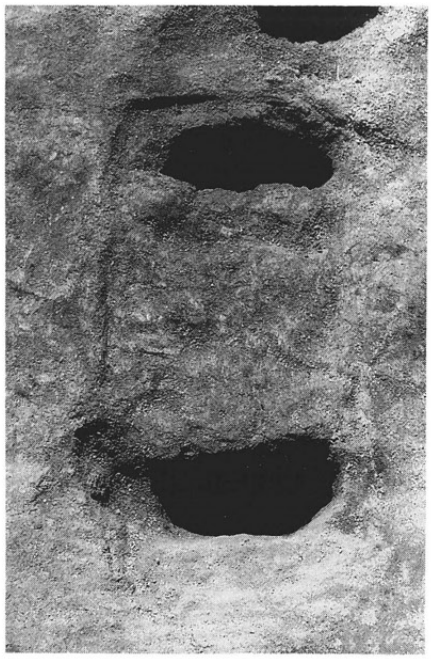
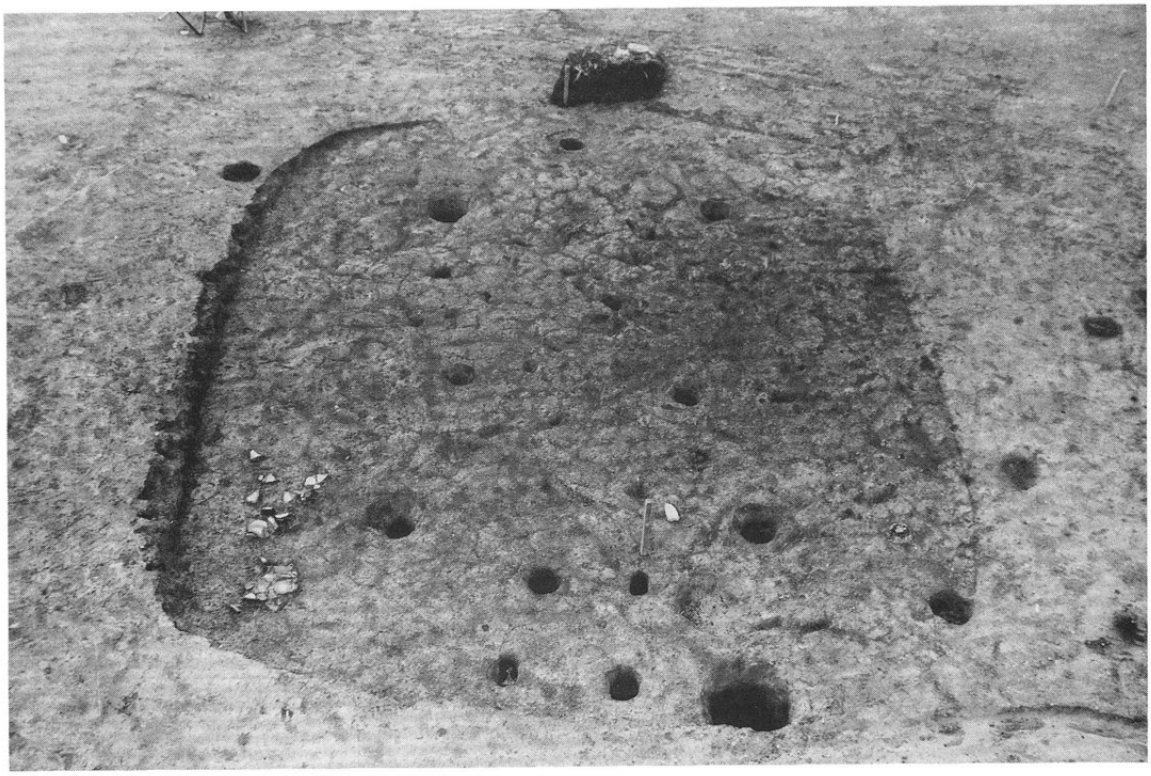


写真70　36号木棺墓

写真68　48号木棺墓

写真69　69号木棺墓管玉・勾玉出土状況

写真71　V　地　区



V 地区調査風景

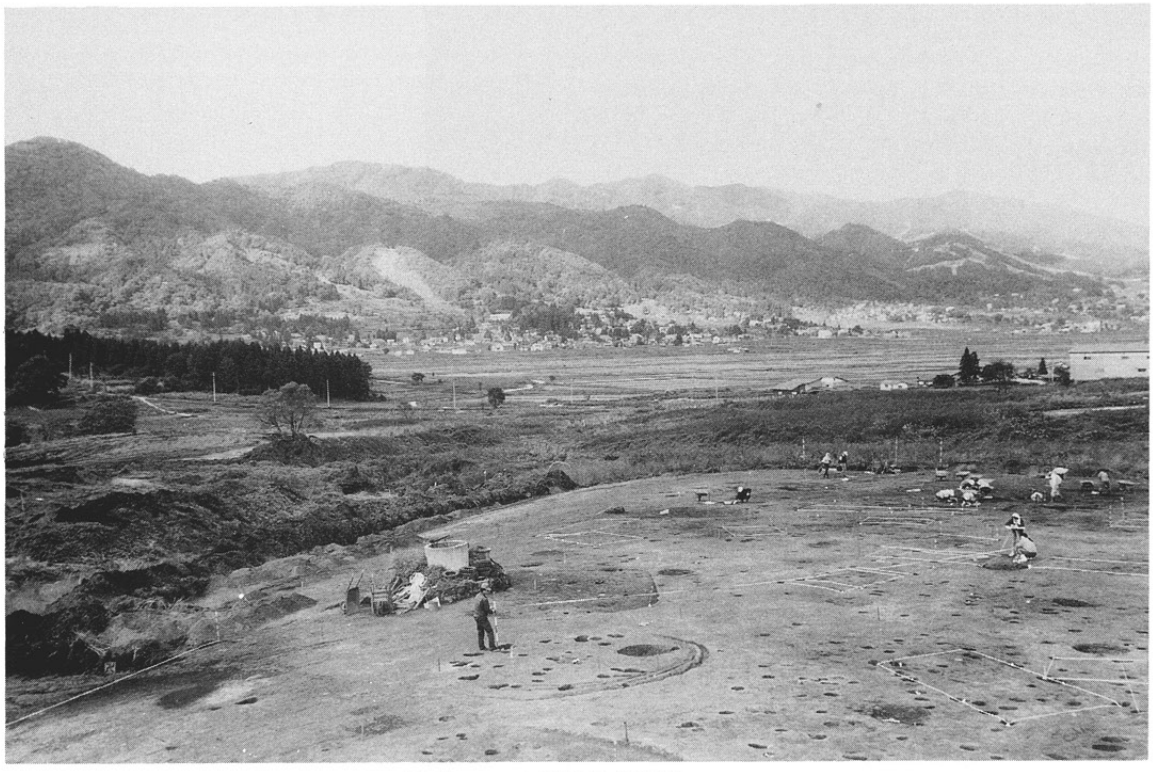


写真72　46号竪穴住居址

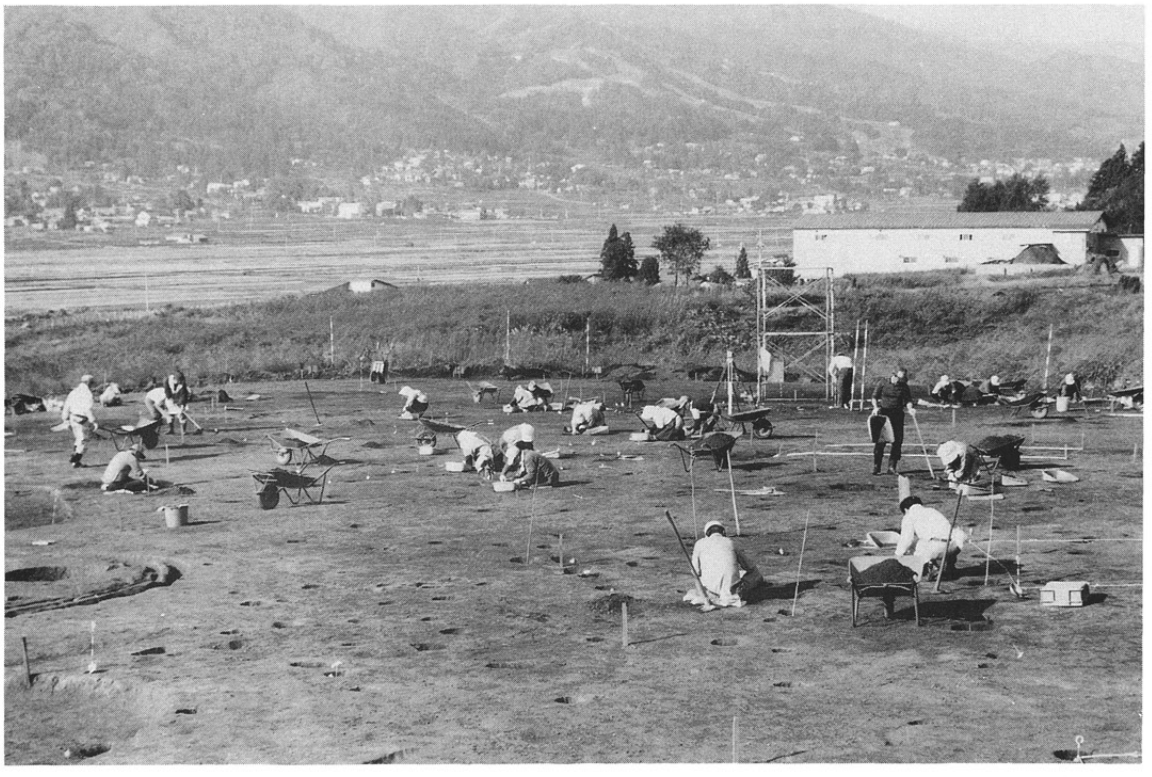


写真73　47号竪穴住居址

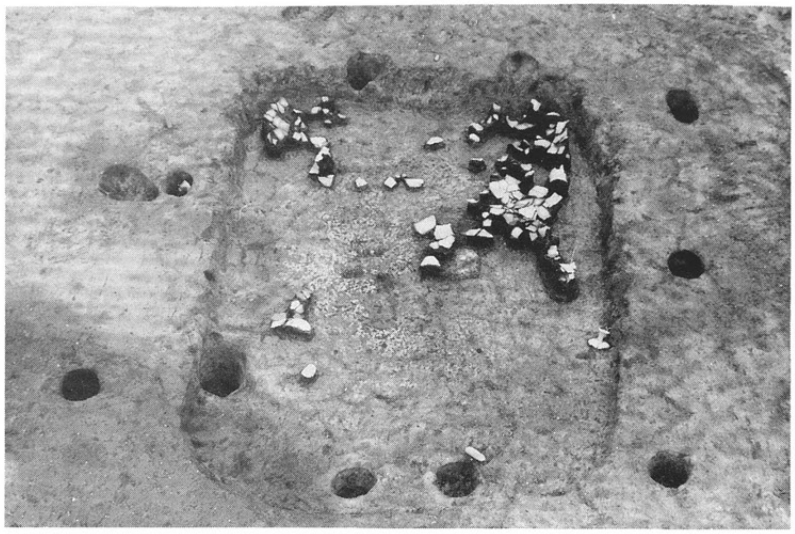


写真74　47号竪穴住居址
遺物出土状況

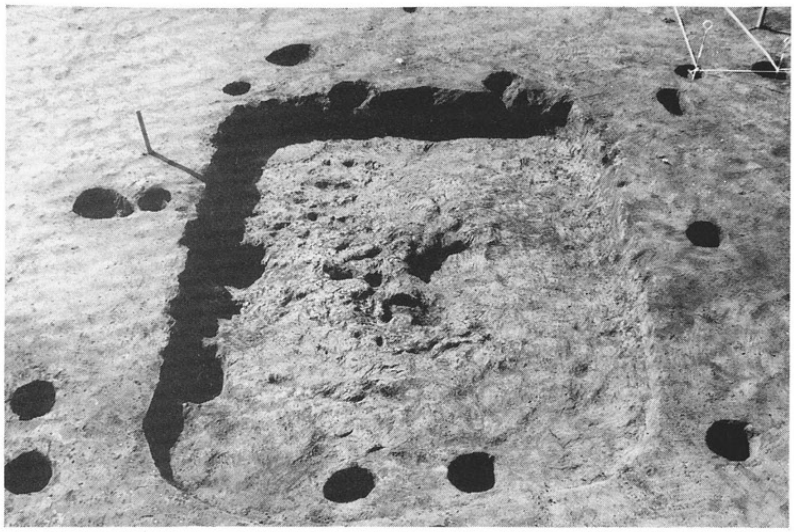


写真75　47号竪穴住居址

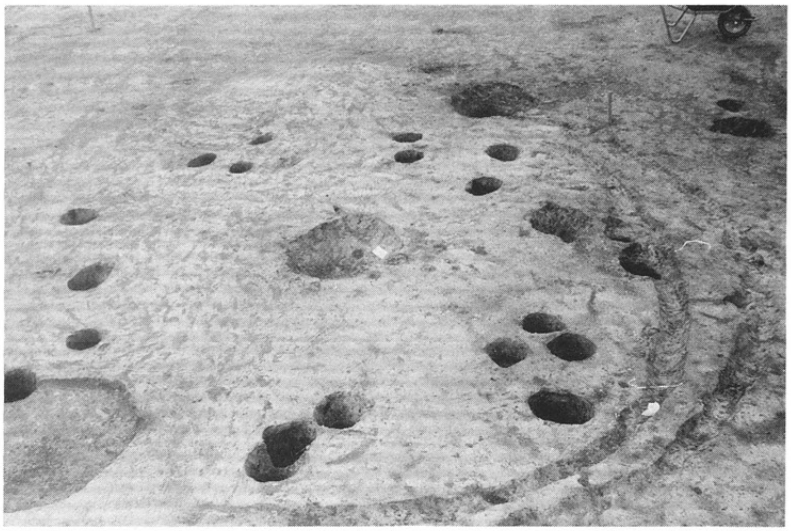


写真76　53号竪穴住居址

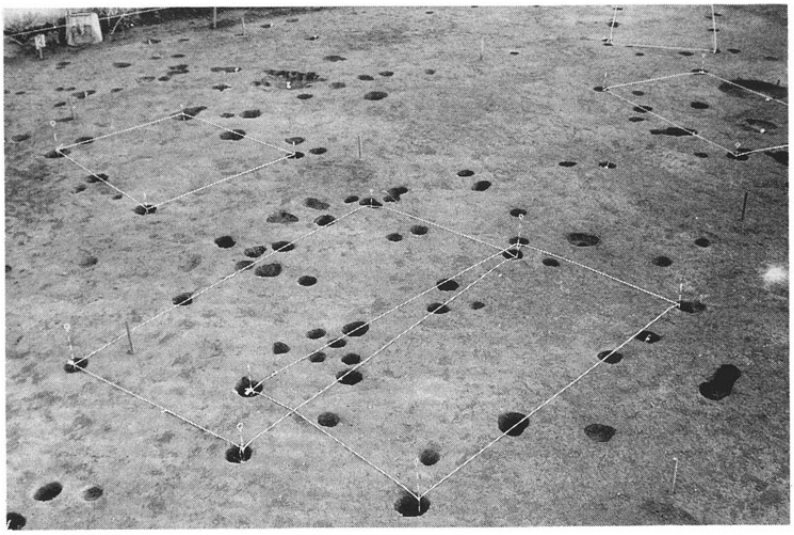


写真78　93・94号掘立柱建物址

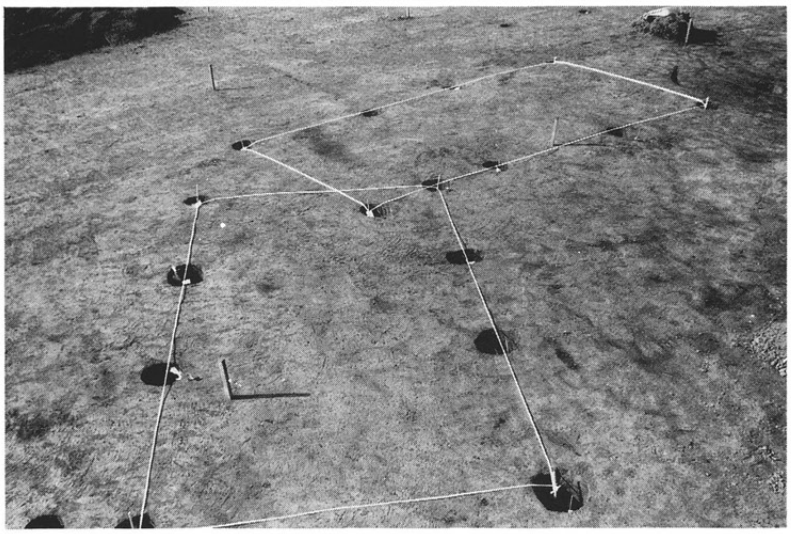


写真77　85・87・88号掘立柱建物址

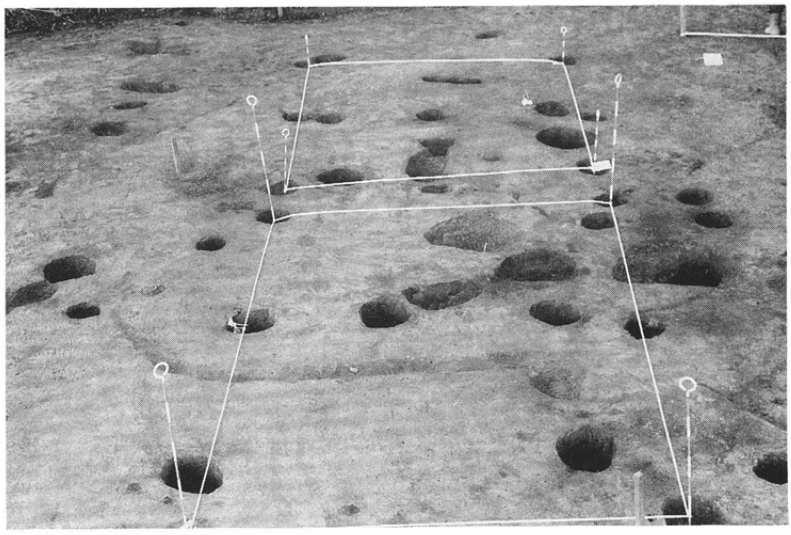


写真79　51・52号竪穴住居址
121・122号掘立柱建物址

写真80　Ⅵ　地　区

写真81　Ⅵ　地　区

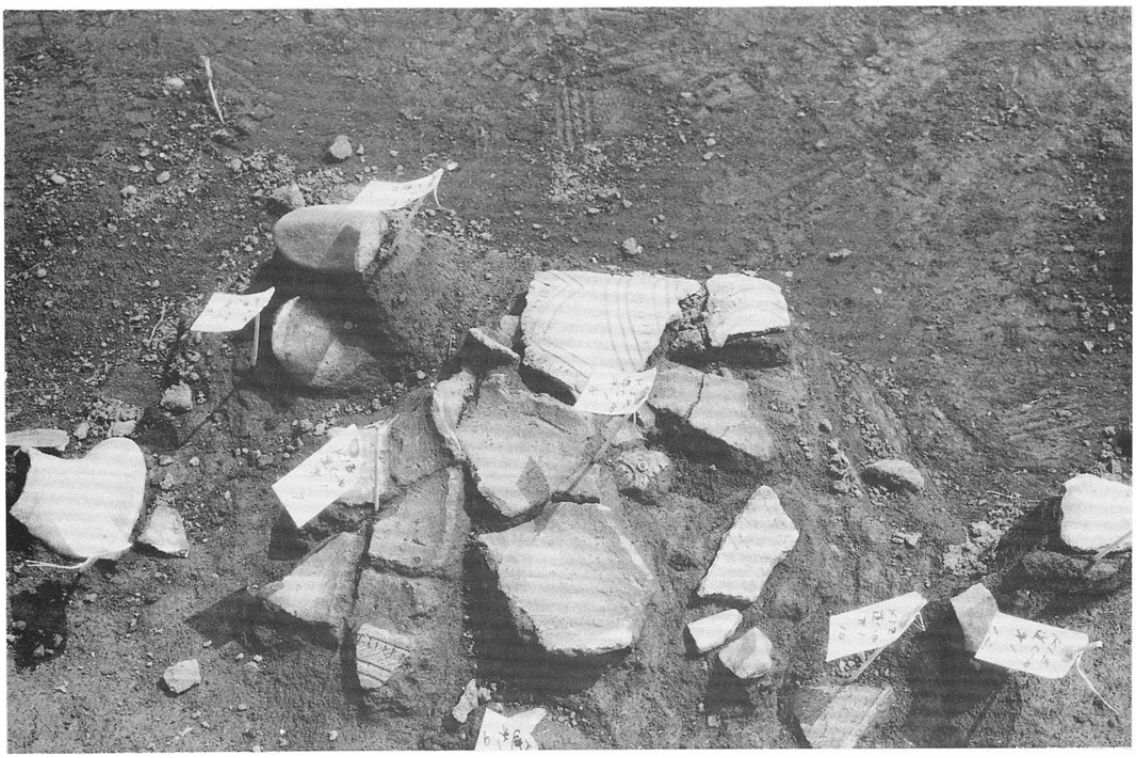


写真82　土 器 出 土 状 況

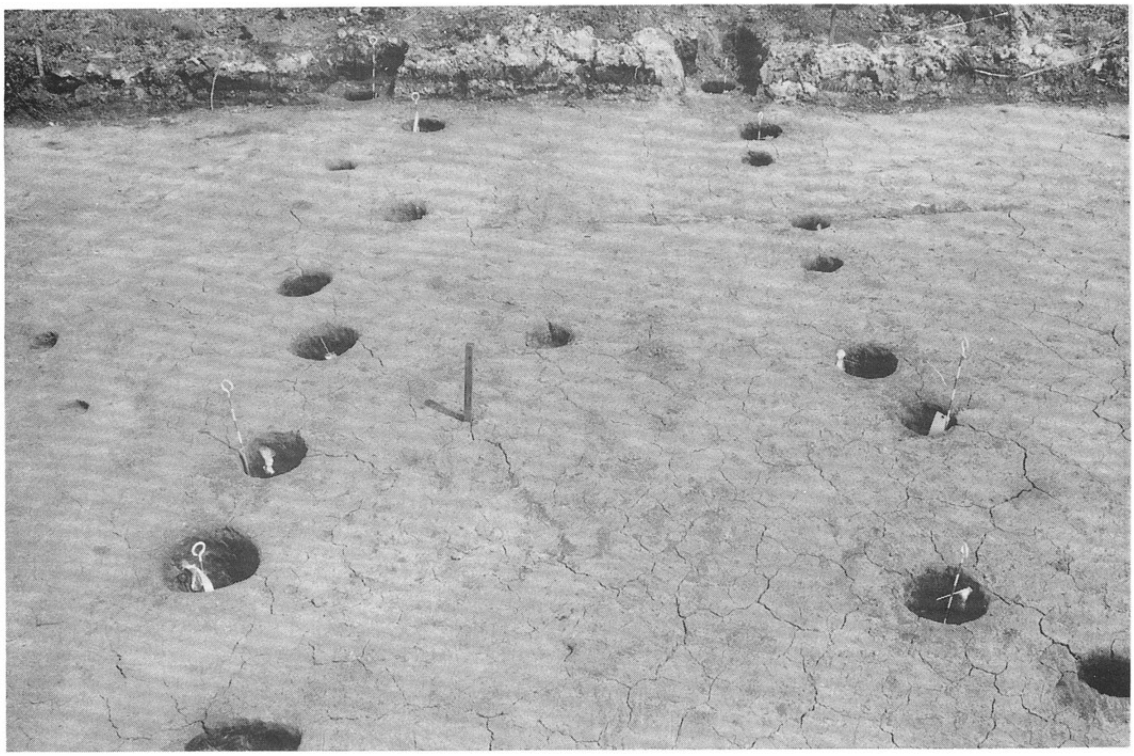


写真83　51・52号掘立柱建物址

写真84　Ⅶ　地　区

写真85　遺構確認状況

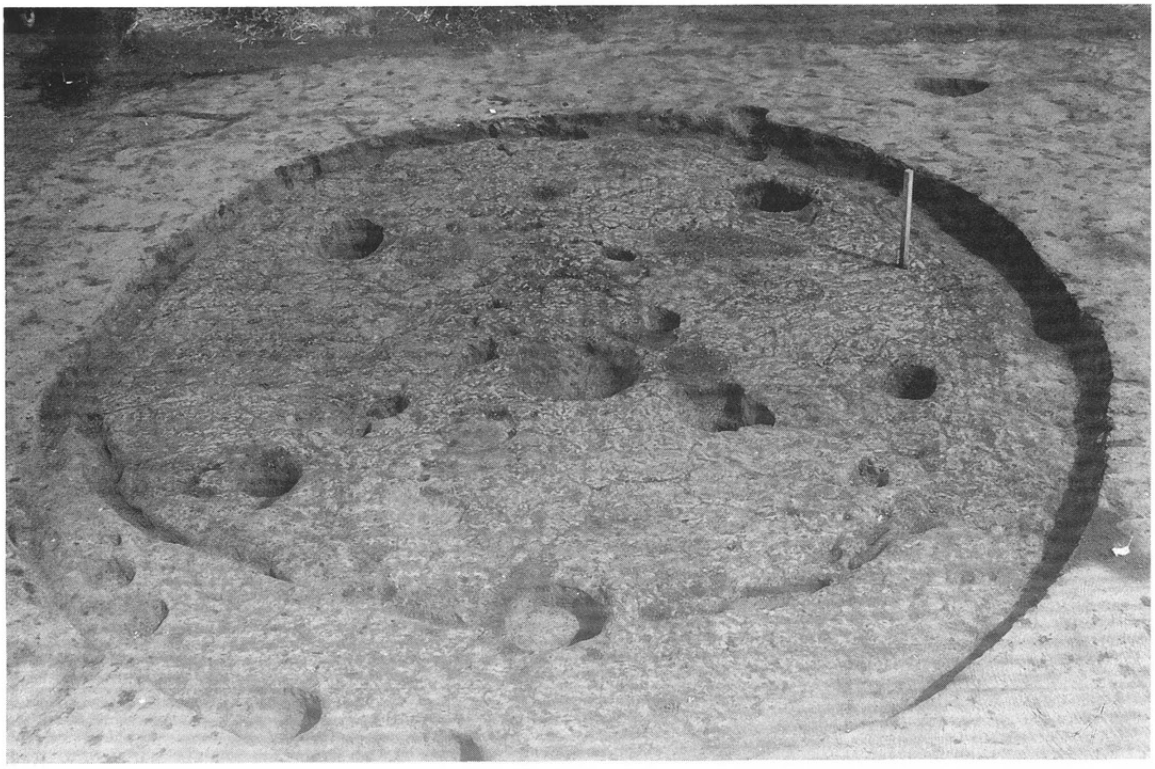


写真86　26号竪穴住居址

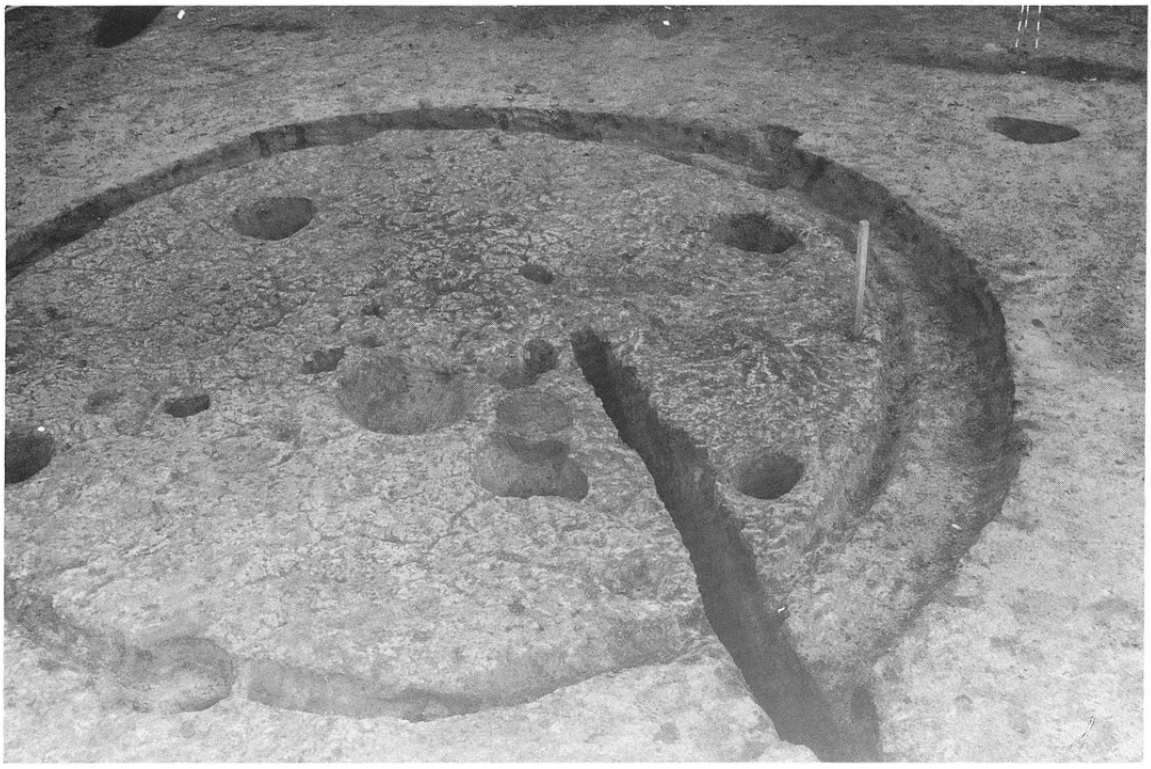


写真87　26号竪穴住居址及び121号溝状土広

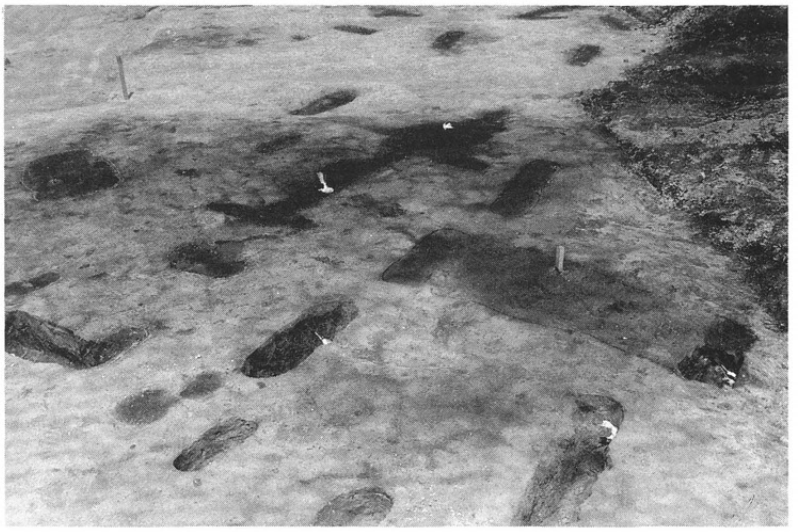


写真88　木　棺　墓

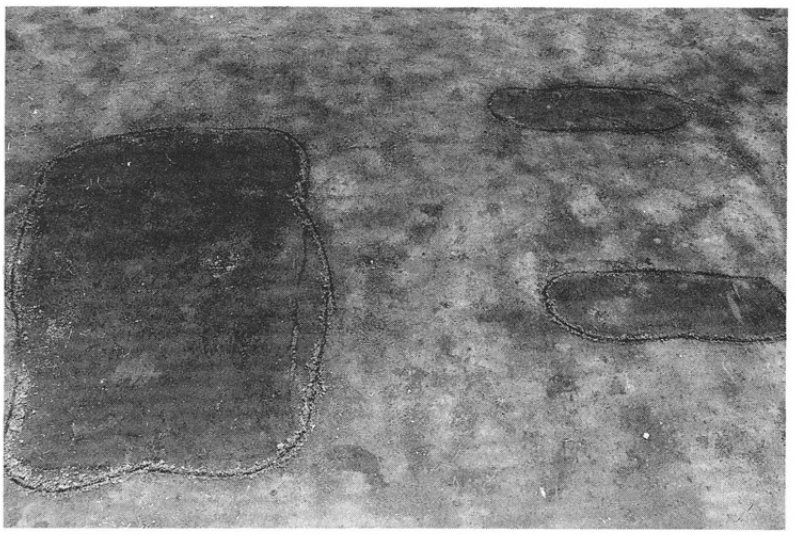


写真89　7・8号木棺墓

写真90　木棺墓全景